Ⅳ　菱　木　下　遺　跡

Ⅳ 菱 木 下 遺 跡

第1章 第 Ⅰ 調 査 区

第1節 は じ め に

菱木下遺跡は、堺市菱木に所在する、丁度、万崎池遺跡と西浦橋遺跡とのあいだに位置する遺跡である。本遺跡の調査は、昭和55年の夏以来実施されてきたが、全調査区を大きく第Ⅰ調査区、第Ⅱ調査区、第Ⅲ調査区の三区に分けて、発掘調査をすすめてきた。

ここで最初に紹介する第Ⅰ調査区は、菱木下遺跡全体の中では、もっとも西側部分に位置しており、標高24.3～22.8mの、台地上に立地する遺跡である（図版22）。第Ⅰ調査区のすぐ西隣には、西浦橋遺跡が所在しているが、その遺跡の東端部は、本来、菱木下遺跡の範疇に属すべきものである。

第Ⅰ調査区の全体面積は、約 2,000㎡であるが、調査の事実経過から言えば、先ず第Ⅰ調査区の東南端部分のA区（約120㎡）から調査に着手し、順次、西方にむかって、B区（約670㎡）、C区（約280㎡）そして、D区（約880㎡）へと調査をすすめた。A区の調査は、昭和56年5月14日から7月4日まで、B・C区の調査は、同年9月8日から11月7日まで、そしてD区の調査は、同年11月9日から翌昭和57年3月5日までの期間、実施された。

その結果、調査区全体にわたって、弥生時代中期に属する竪穴住居址4棟や、方形周溝墓7基以上、他に周溝墓外土壙墓や遺物廃棄用土壙、溝などの、弥生時代第Ⅱ、第Ⅲ様式を中心とする時期の遺構群や、他に古墳時代後期、或いはそれ以後の竪穴住居址2棟や、倉庫をも含む掘立柱建物約20棟、土壙墓群、溝などの存在も明確になった。更に、それらより新しい時期の遺構として、中・近世における天水を貯えることを目的としたと考えられる数基の大土壙や、古道の検出もおこなわれた（第1図）。

本稿では、現地調査時点での、A区～D区といった小調査区制を便宜的に一度、完全にとりはずし、第Ⅰ調査区全体をできるだけ総括的に把えるように努力した。従って、遺構番号も、第Ⅰ調査区全体をひとつのまとまりとみなして、西端から東の方にむかって、統一的にうちなおしてある。

第2節 微地形と層序

先ず最初に、菱木下遺跡第Ⅰ調査区における、地形と層序について簡単に説明しておきたい。菱木下遺跡第Ⅰ調査区は、調査前の地形状況から言えば、若干の傾斜はあるとはいうものの、全

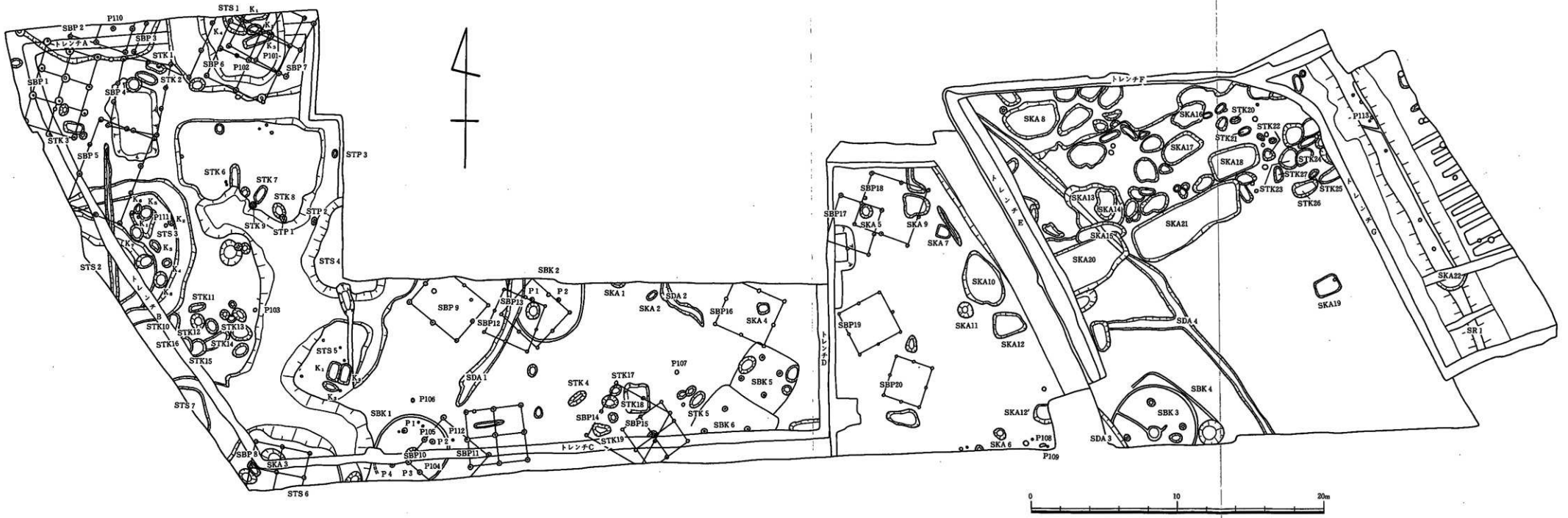
体的には、一面、フラットな印象の強い地形状況であった。ちなみに、傾斜の最もはげしいと思われる調査区西端にして、南北30mの区間で、僅かに、30cm程の比高しかなく（耕作土表面のレヴェルは、南端で標高約24.03m、北端で23.72mである）、他方、調査区の東端に至っては、南北28mの区間で、両者間の比高は殆どなく（南端で24.58m、北端で24.57mをはかる）、このように現地形は殆んど平坦な様相を呈しているといってよい。

しかし、今述べたような地形のあり方は、本来のかたちをそのままにとどめ、現出しているというわけでは無論なく、旧地形のあり方は、以下にのべるように、発掘調査の過程を経て、現況とは全く異った実相を提示してくれるものとなるのである。

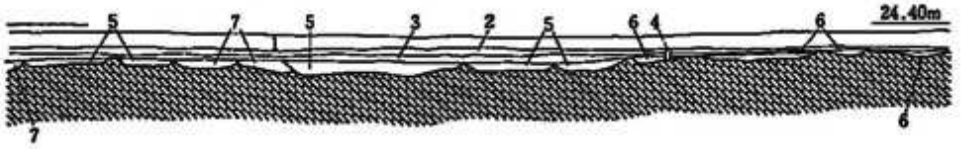
菱木下遺跡第Ⅰ調査区の旧地形の復元と層序の観察のため、調査区内に合計７本の主要なトレンチを設定し、各々をトレンチA、トレンチB、トレンチC、トレンチD、トレンチE、トレンチF、トレンチGと名付けたが、各トレンチの層序関係は、層の厚さこそ違え、基本的には同一の様相を呈している。たとえばトレンチFを例にとれば、先ず耕作土があってその下に灰褐色土層（第１包含層）があり、更にその下に灰茶色土層（第２包含層）があって、その下に黄色土層があるという、基本的な層序関係がみられるのである（第２図）。そして、これらの土層は、耕作土、灰褐色土層、灰茶色土層の何れとも遺物包含層であり、前二者から主として、伊万里焼、唐津焼などの近世陶磁器片や湊焼の甕、炮烙、瓦質羽釜等の遺物が出土するのに対し、後者からは、少量の瓦器片、土師器片のほかに、大量の須恵器の蓋坏、壺、甕、高坏、器台等の破片類が出土している（第28図、第29図参照）。そして、これらの包含層の下に、一部シルト質の黄色土層が確認されるのであるが、この黄色土層の上面において、先程略述した各時期の遺構群が顕著に確認されるのである（以下、黄色土層部分は、スクリーントーンを貼付して示してある）。

さて、この黄色土層が、果して無遺物層であるのかどうかの断定には慎重さを要するが、トレンチEやトレンチGの断面観察の際、この黄色シルト層直下にて、黄褐色や青黄色の砂岩質の地層が確認されていることや、他のトレンチAやトレンチB、C、D、Fにおいて、この黄色土層を掘りさげていく過程の中で、いずれのトレンチからも、一片の遺物も検出しえなかったという事実から推して、第Ⅰ調査区における菱木下遺跡は、目下のところ、沖積層の上にではなく洪積台地上に立地している可能性がある。但し、現時点では確言はできない。

さて、以上の事柄をふまえて、この菱木下遺跡の地域に、人々が定着しはじめた当初の古環境を復元しようとするならば、それはいったい、どのようなものとなるであろうか。この地域における人々の定住生活が、遺構、遺物の一括関係の中ではっきりと把握できるようになるのは、弥生時代中期（Ⅱ様式段階）以後のことであるが、当時の地形は現在とは異なり、全般的に、単純に平坦面を形成していたのではなく、むしろ、平坦面と、その平坦面がなだらかに下降しはじめる部分との、言わば台地上の縁辺部付近であったことが知られるのである。そして、検出された竪穴住居址や方形周溝墓が、後世になって削平をうけているため、当初の厳密な比高を把握することは難しいものの、大勢的に言って、遺構面直上のレヴェルが、西南端で標高約 23.72m、西


トレンチA
トレンチB
トレンチC
トレンチD
トレンチE
トレンチF
トレンチG
SBP 1
SBP 2
SBP 3
SBP 4
SBP 5
SBP 6
SBP 7
SBP 8
SBP 9
SBP10
SBP11
SBP12
SBP13
SBP14
SBP15
SBP16
SBP17
SBP18
SBP19
SBP20
STK 1
STK 2
STK 3
STK 4
STK 5
STK 6
STK 7
STK 8
STK 9
STK10
STK11
STK12
STK13
STK14
STK15
STK16
STK17
STK18
STK19
STK20
STK21
STK22
STK23
STK24
STK25
STK26
STK27
STS 1
STS 2
STS 3
STS 4
STS 5
STS 6
STS 7
STP 1
STP 2
STP 3
SBK 1
SBK 2
SBK 3
SBK 4
SBK 5
SBK 6
SDA 1
SDA 2
SDA 3
SDA 4
SKA 1
SKA 2
SKA 3
SKA 4
SKA 5
SKA 6
SKA 7
SKA 8
SKA 9
SKA10
SKA11
SKA12
SKA12'
SKA13
SKA14
SKA15
SKA16
SKA17
SKA18
SKA19
SKA20
SKA21
SKA22
SR 1
P1
P2
P3
P4
P101
P102
P103
P104
P105
P106
P107
P108
P109
P110
P111
P112
P113
0
10
20m

第1図 遺構平面略図



1．耕作土　4．灰色土　7．褐色土
2．灰褐色土　5．茶灰褐色土
3．灰茶色土　6．灰黄褐色土

第2図 トレンチF断面図

北端で23.18m、また、その測点より東へ80m～90m離れた東南端でのレヴェルが23.90m、東北端でのレヴェルが 23.63mを測ることをみるならば、地勢は基本的には、南高北低、東高西低のかたちをとっていることが理解されるのである。言い換えるならば、調査区南端では殆んど平坦であった遺構面は、北に向かうにつれて急速におちこみはじめ、特に調査区西北端部分での傾斜は、他の部分に比して著しいものがあることを知ることができるのである。これによって、調査区の北方に、谷地形を想定することも可能となろうかと思う。菱木下遺跡の微地形および層序は、以上の如くである。

第3節 遺　　構

1 縄文時代以前の遺構

菱木下遺跡第Ⅰ調査区の範囲内においては、縄文時代もしくは縄文時代以前に属すると思われる遺構及び遺物は、黄色土面直上に至る迄の調査過程においては、いっさい検出されなかった。

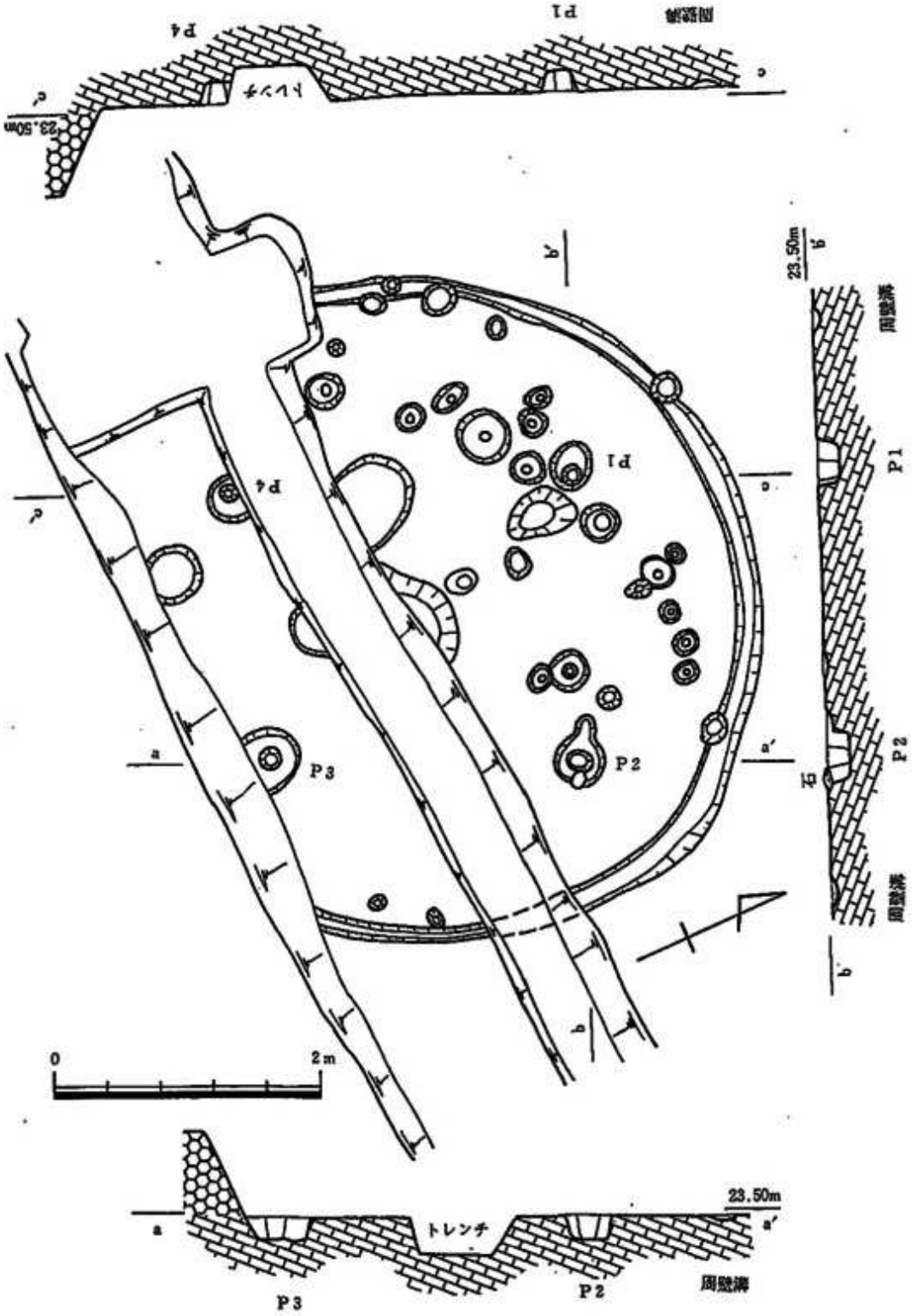
2 弥生時代の遺構

第Ⅰ調査区において、顕著な仕方で遺構が確認されるのは、弥生時代中期以降である。遺構全体図（第1図）が示すように、調査区内の西端部分には少なくとも7基以上の方形周溝墓（ＳＴＳ1～ＳＴＳ7）が存在し、またその東側には、点在するかたちで、4棟の竪穴住居址（ＳＢＫ1～ＳＢＫ4）が確認されている。その他、弥生時代の土壙、ピット、溝なども検出されている。以下、各遺構について、説明を加えていく。

A 竪穴住居址

ＳＢＫ1（第3図；図版23） 竪穴住居址ＳＢＫ1は、第Ⅰ調査区の竪穴住居址の中で、最も西側に位置する住居址である。平面プランは、第3図が示すように、直径約5.00mをはかる円形を呈しており、幅12～28cm前後、深さ8cmほどの周壁溝を有している。主柱穴は4個であり、柱間寸法は、北西端のピットを基準にして、東西約2.16m、南北約2.56mの規模である。住居址のほぼ中央には、長径92cm、短径28cm以上、深さ26cmの、ほぼ楕円状の炉穴があり、炉穴底部には、厚さ6cmほどの炭化物が、層をなして堆積していた。排水溝は検出されなかった。

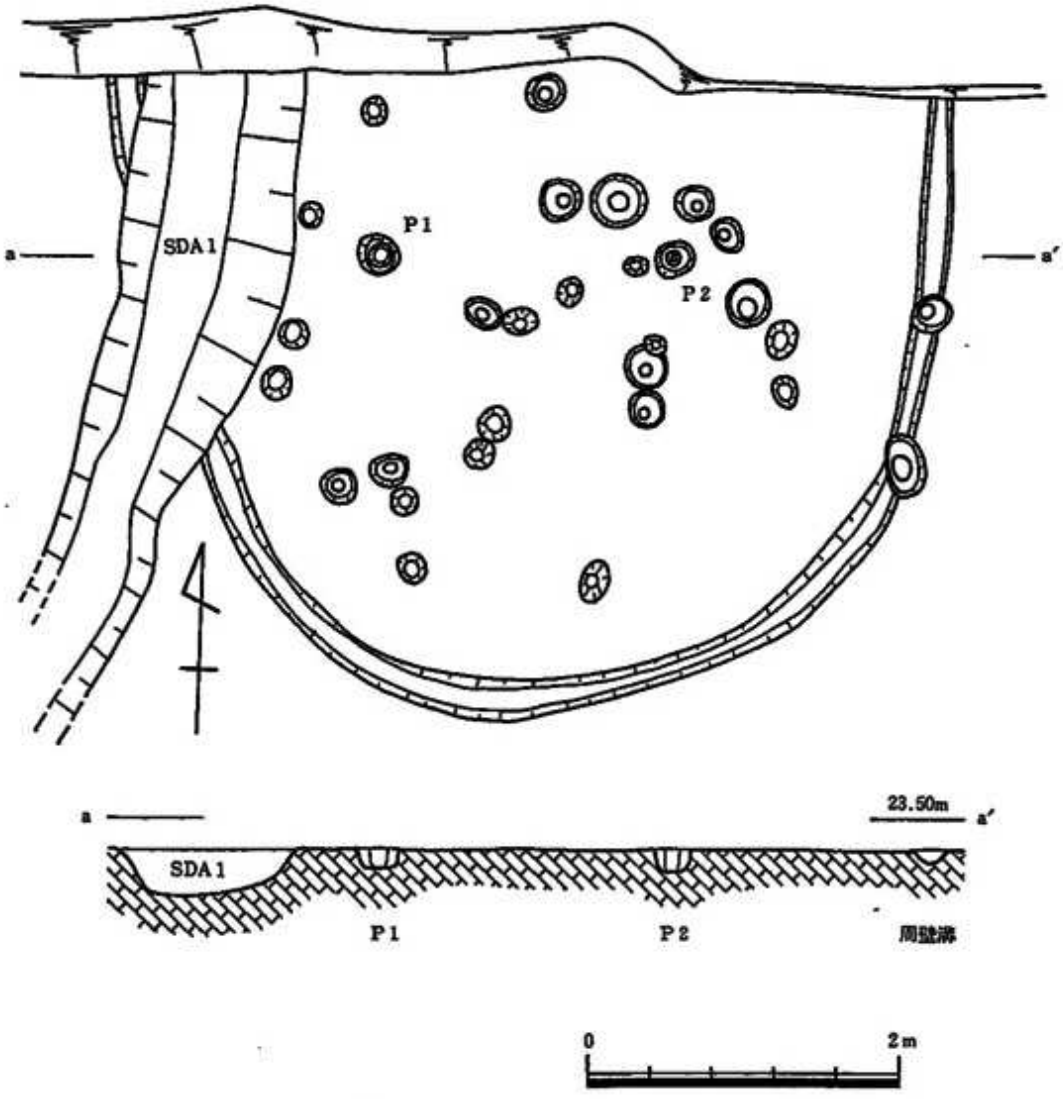
出土遺物としては、畿内第Ⅱ様式の新段階もしくは第Ⅲ様式の古段階に属する壺形土器の口縁部2点（うち、1点は炉穴内より出土）、壺形土器の胴部片6点、甕形土器の胴部片1点、鉢形



第3図　ＳＢＫ１平面図・断面図

土器の口縁部１点、あわせて10点の土器片と、和泉砂岩でできた砥石１点、緑色片岩製の石庖丁の未製品１点、同じく紀伊産の石材でつくられた調整石器１点、そしてサヌカイト製の石鏃１点などの石器および石製品、更にそれに伴うチップス等、多数を検出することができた（第30・49・51図；図版158上、168上）。

ＳＢＫ２（第４図；図版24上）　竪穴住居址ＳＢＫ２は、今述べたＳＢＫ１より、北東、方向に約14.4m距離をおいたところで検出されている。平面形は楕円形であり、プランの北半分が未調査区に属しているため正確な数値はえられないが、長径5.76m以上、短径5.36m前後の規模であると考えられる。周壁溝の幅は、12～26cm、深さは８cmほどである。主柱穴の数は不明であるが、東西柱間寸法1.88m前後の、４本柱の建物である可能性がある。炉跡については、住居址内部ではそれらしい遺構は検出されなかったが、この竪穴住居址のすぐ東側 2.4mのところに、長



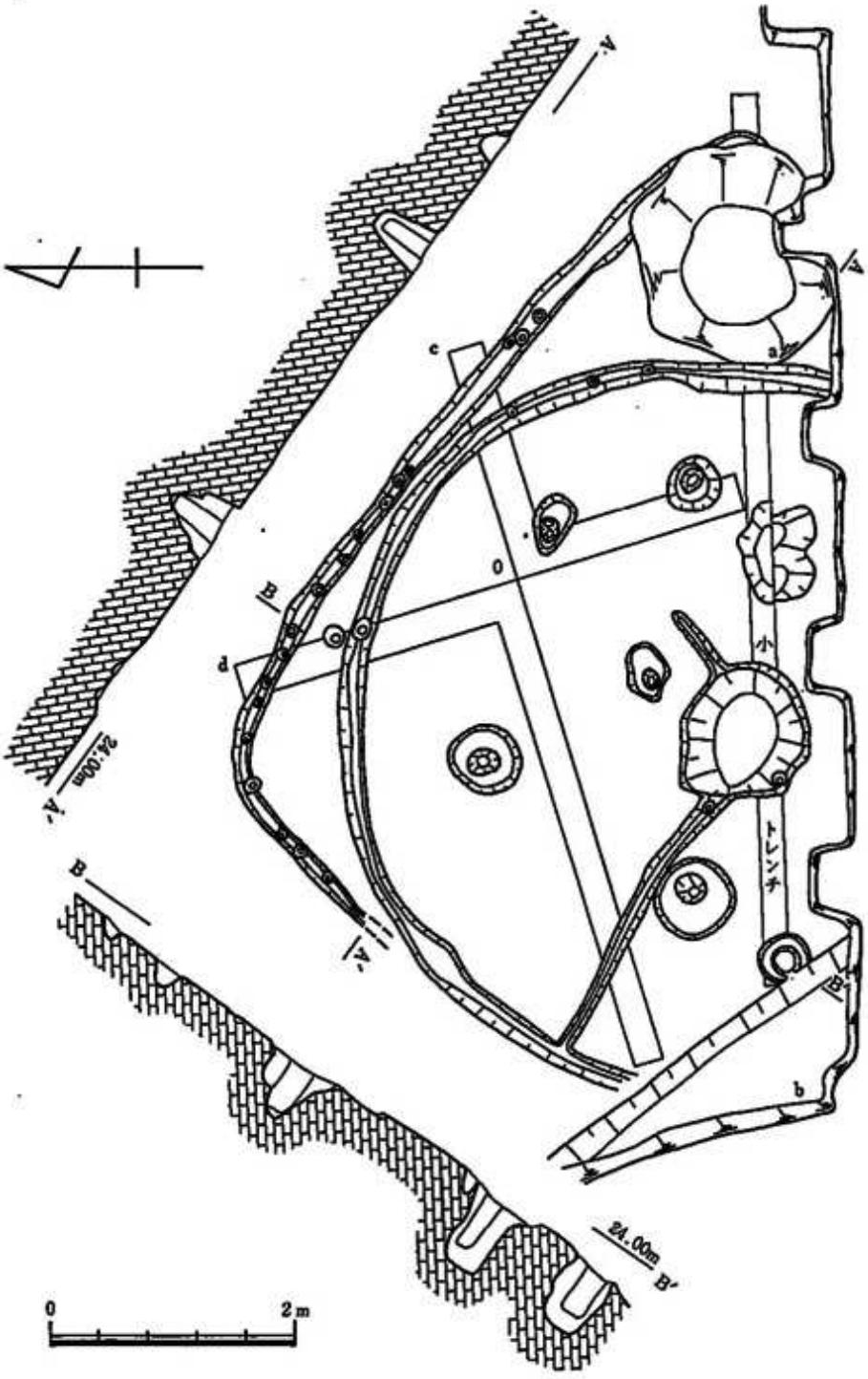
第４図　ＳＢＫ２平面図・断面図

径 104cm、短径48cm、深さ40cmほどの、焼土を含む楕円状の土壙ＳＫＡ１が存在しており、しかもこの土壙から、弥生時代の甕形土器の底部片や壺形土器の破片などが出土しているので、或いはこの焼土壙が、屋外炉であることも考えられる。

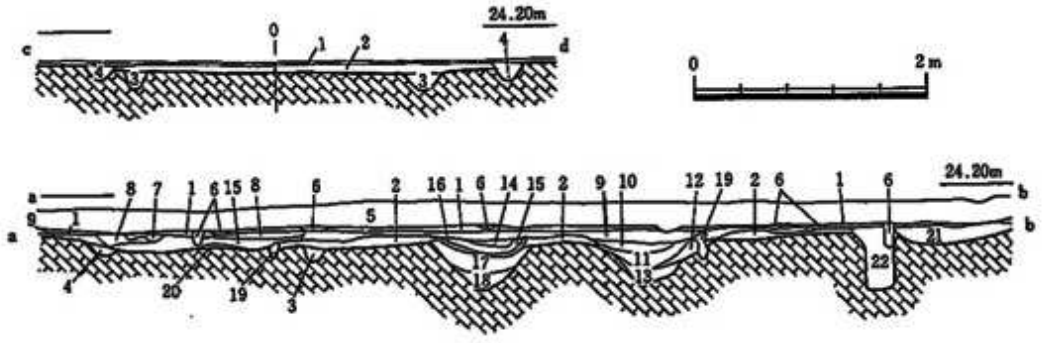
この竪穴住居址ＳＢＫ２からの出土遺物は、極めて僅少であり、明確に時期のおさえられる遺物としては、壺形土器の口縁部を１点挙げうるのみである。石器は、全く出土しなかった。但し、幸いなことに、この竪穴住居址をきる溝状遺構ＳＤＡ１が検出されており、このＳＤＡ１内から若干の遺物が出土しているので、その遺物の時期を確定することによって、竪穴住居址の相対的な年代的位置づけが可能となる。すなわち、ＳＤＡ１は、第Ⅱ様式に属する壺形土器の口縁部２点、甕形土器の口縁部１点、他に小破片14点を出土しており、この時期より新しい遺物は、いっさい含んでいない。これによって、ＳＢＫ２の時期は、畿内第Ⅱ様式の時期に並行していると考えて、まず大過ないと思われる（第30図；図版158下、159上）。

ＳＢＫ３（第５・６図；図版24下）　この竪穴住居址は、ＳＢＫ１の東方約50.8m付近で、検出されている。平面形は円形であり、直径約6.00mをはかる。主柱穴の数は４個であると考えられ、そのうちの３個が検出されている。柱間寸法は、東西約2.88m、南北約2.92mである。周壁溝の幅は、14～28cm前後であり、深さは、浅いところで４cm前後、深いところで20cm前後残存している。炉跡は、たてもののほぼ中央部分に所在しており、長径120cm、短径100cm、深さ36cmほどの、底部に炭化物の層を含む土壙がそれである。

特に注意がひかれるのは、この中央土壙と周壁溝とをつなぐ、１本の小溝の存在である。こういった小溝の検出例は、今までにも多数報告されているが、この小溝の機能をどう評価するかについては、これを「排湿溝」であるとする見方と、「間仕切り溝」であるとする見方との、大きく２つの見解がある。先ず前者に関係した考説を紹介すると、昭和43年から44年にかけて南河内郡河南町所在の東山遺跡が調査されたが、その担当者である菅原正明氏は、昭和54年３月大阪府教育委員会刊「東山遺跡」第Ⅲ章の中で、竪穴住居の下部構造、とりわけ竪穴住居の防湿方法を論ずるにあたって、排水溝を有する竪穴住居には、「炉穴より排水溝が掘られている」ａ型と、「壁溝より排水溝が掘られている」ｂ型との２類型があることを指摘し、続いて「排水溝というのは、炉穴あるいは壁溝より斜面に向けて掘られた幅が狭く浅い溝であり、壁溝とともに竪穴住居内の水を外に導き出す役目をしていた（傍点筆者）。」と述べて、炉穴より周壁溝にむかう小溝を、明確に排湿的機能を有する小溝として把えている。（同様に、昭和43年に、和泉市所在の観音寺山弥生集落遺跡の発掘調査に従事した、伊藤勇輔氏も「間仕切り説」の可能性を留保しつつも、「また炉から竪穴外へ掘られた溝は『間仕切り』説も有力視されるが、必ず斜面の低い方に掘られており、溝のない場合は炉の周囲に盛り土をしている点などから、観音寺山集落でみる限りは排湿を主とした目的と理解できる。」と述べて、排湿溝説の立場を擁護している。）他方、石野博信氏は「岸和田市史」第５章遺跡各説Ｐ.159の中でも紹介されているように、叙上の説とは異なる「間仕切り」説の立場をとっている。



第5図　ＳＢＫ３・４平面図・断面図



1．赤褐色土
2．黄灰褐色土
3．黄茶色土
4．黄茶灰色土
5．耕作土(暗灰色土)
6．灰色砂質土
7．淡灰色砂質土
8．紫灰色土
9．灰茶褐色土
10．淡灰茶褐色土
11．淡黄灰褐色土
12．黄灰茶色土
13．灰黄色土
14．赤灰色土(弥生式土器出土)
15．焼土(灰まじり)
16．黄色粘土帯
17．淡黄灰茶色土
18．淡灰黄色土(サヌカイト剥片出土)
19．灰茶色土
20．灰白色砂質土(須恵器片出土)
21．褐灰色土
22．黄褐色土

第6図　ＳＢＫ３・４小トレンチ断面図

では、今扱っている竪穴住居址ＳＢＫ３の屋内小溝については、いずれの機能を考えればよいのであろうか。たしかにＳＢＫ３における屋内小溝の壁溝にむかうその方向は、他の遺跡の調査例とも一致して、地形の低くなる方向に伸びており、そのことだけを考えれば、同じく排湿的機能を想定してもよいように思われる。しかし一方において、排湿もしくは排水だけをその唯一の機能と判断するならば、今度は①周壁溝から屋外にむけての排水溝が検出されていないことの意味であるとか（滞水、溢水の問題など）、②屋内でもう１本見つかっている小溝が、周壁溝まで到達せず中途までしか開削されていないこと、しかも小溝端部のたちあがりは急激に上昇し完結しており、後世の削平によるものではないことが明らかであること、③同時にＳＢＫ４建築時には、その小溝は完全に封鎖されていたことが明白であること、そして、④その小溝の傾斜が、周壁溝にむかってではなく、逆に中央炉穴にむかってみられる点など、単に排湿的機能を有する小溝として評価するには素朴に疑問として残る問題もあるのである。従って、竪穴住居址ＳＢＫ３における屋内小溝については、石野氏の言われる「間仕切り」説の成立の可能性も今なお残しておくべきであり、いちがいに否定しさるべきではないと考える。なお、この中央土壙の 140cmほど東寄りのところに、長径84cm、短径56cm、深さ38cmを測る、もうひとつ別の、焼土の入った土壙が検出されているが、現在のところ、これは副次炉であると考えている。

さて、この竪穴住居址ＳＢＫ３から出土した遺物としては、先ず、黄色の床面直上から出土した何点かの土器をあげることができる。それらの中には、壺形土器の口縁部片２点、胴部片10点、底部片２点、また甕形土器の胴部片１点、そして底部片１点などが含まれているが、それらの遺物は、おおむね、畿内第Ⅲ様式に属するものである。また、土器以外に石器類が検出されているが、床面直上から石鏃４点、石錐１点、不定形石器１点、周壁溝から石小刀１点、剥片２点（使用痕のあるもの１点と無いもの１点）、そして屋内小溝から剥片２点が出土している。（第30・

49図；図版158下、168上）。また、周壁溝の中から遺物が検出されることは、東山遺跡における竪穴住居址の場合と同じく、壁溝に壁板が立っておらず、壁溝が開いていた可能性を示唆している。

なお、この竪穴住居址ＳＢＫ３に関しひとつ補足しておくべき事柄は、この住居址自体はその後、火災か何かで消失してしまったらしいということである。検出当時、黄色の床面直上には、円形プランの範囲内において、かなりの量の炭化物が散乱していたが、その中には木目を今なお確認しうる程の、板状の薄い炭化材なども含まれていた。そして、周壁溝や屋内小溝の中からも、かなりの量の灰や炭化物が検出されることとなった。

ところで、この竪穴住居址ＳＢＫ３の焼失後は、それまでの住人は生活の継続を、どこでおこなおうとしたのであろうか。彼ら３号住居を失った人々は、その後も居住場所を移さないで、同じ場所で竪穴住居のたてかえを行っている。但し、消失前と全く同じものにたてかえるというのではなくて、以前の柱穴を再利用しながらも、少しく居住空間を拡大する工夫をして、すなわち、平面プランを円形のものから隅丸方形のものへと更新して、再建したのである。その結果、あらたにつくられた竪穴住居が、次に紹介するＳＢＫ４である。

ＳＢＫ４（第５・６図；図版24下）　この住居址は、ＳＢＫ３と同じ場所に、平面形態を変えつつも、主柱穴を共有し、重複するかたちで存在する。平面形は、一辺約 7.2mをはかる隅丸方形のかたちであり、周壁溝は幅８～28cm、深さは16cmをはかる。床面はすでに削平されており、住居内部で確認された構造をさし示す、主な遺構といえば、それは、ＳＢＫ３で機能を果していた４本柱のうちの３個所の主柱穴と、中央炉、そして副次炉である。但し、副次炉は、ＳＢＫ３の時期には、38cm前後も深さを有していたにも拘らず、ＳＢＫ４の時期になると、それが炭化物や焼土や灰をもって一度埋められ、その後に再度、レンズ状に掘りくぼめて、厚さ４～５cmの黄色の粘土帯をはりつけたあと、炉として再利用しているため、副次炉の深さは15cmくらいに浅くなっていることに注意がひかれる。ピットに関して言えば、掘り方の径は、小さいもので直径40cm、大きいものになると直径約60cmをはかり、深さも約48～68cmと、比較的良い残存状態を示している。柱痕の直径は、いずれも16～20cmの範囲におさまるようである。

さて、ＳＢＫ４からの出土遺物であるが、先程述べたように、床面はすでに削平されていたために、床面直上の遺物というものは提示しえない。但し、ＳＢＫ４の中央炉と副次炉からは若干の遺物が出土しているので報告しておく。

中央土壙から出土した遺物は、土器片２点、サヌカイトのチップ６点である。土器は甕用の蓋形土器の破片と甕形土器の底部片であり、第Ⅱ様式に属するものと思われる。一方、副次炉から出土している遺物は、すべてサヌカイト製の石器関係遺物ばかりであり、その内訳は、石鏃１点、不定形石器１点、剥片２点、チップ７点である。

以上が、菱木下遺跡第Ⅰ調査区における竪穴住居址４棟に関する説明であるが、今までのところを整理すると、下の表のようにまとめることができよう。

第1表 弥生時代の竪穴住居址

竪穴住居址番号	平面形態	周壁溝	主柱穴	柱間寸法	炉	出土遺物	時期	備考
SBK1	円形（直径5m）	幅 12～28cm 深さ 8cm	4	2.16m × 2.56m	有 (1)	壺形土器の口縁部 甕形土器の胴部片 石鏃、石庖丁、砥石など	第Ⅱ～第Ⅲ様式	
SBK2	楕円形（5.76m×5.36m）以上	幅 12～26cm 深さ 8cm	4？	1.88m × ？m	無	壺形土器の口縁部 石器類なし	第Ⅱ様式	Ⅱ様式時の溝状遺構（SDA1）により、きられている
SBK3	円形（直径6m）	幅 14～28cm 深さ 4～20cm	4	2.88m × 2.92m	有 (2)	壺形土器口縁部、胴部片、底部片 甕形土器の胴部片、底部片 石鏃、石錐、石小刀等出土	第Ⅲ様式	焼失家屋
SBK4	隅丸方形（一辺 7.2m）	幅 8～28cm 深さ 16cm	4	2.88m × 2.92m	有 (2)	甕用壺形土器破片 甕形土器底部片	第Ⅲ様式	床面、削平さる

さて、この表からうかがえることは、菱木下遺跡第Ⅰ調査区における竪穴住居址は、全般的に言って、弥生時代中期、殊に畿内第Ⅱ様式から第Ⅲ様式の時期にかけてのたてものであるということである。SBK1およびSBK2は、ともに第Ⅱ様式の要素を具有するが、Ⅱ様式内部での新旧関係を論ずるならば、出土土器の比較によって、SBK2の方がSBK1よりは古い要素を呈していることが明らかであり、従って、4棟の竪穴住居址の変遷の順序は、一応、SBK2→SBK1→SBK3→SBK4の順序で把えてよいのではないかと考えている。プランに関して言えば、Ⅱ様式段階では直径5m代でしかなかった住居の規模がⅢ様式段階では一辺6～7m代にまで大型化していく傾向（Ⅲ様式段階では、隅丸方形のプランが登場し、円形プランからのいっそうの拡張がみられるようになる）をみせ、また炉に関しても、Ⅱ様式段階では、先ず屋内炉のない段階からはじまって、屋内炉が住居中央に1ヶ所だけ設けられる段階、更にⅢ様式の時期に至って中央炉1ヶ所だけではなく、それに加えて副次炉が設けられていく段階などを、菱木下遺跡第Ⅰ調査区内の竪穴住居址の変遷をみることによって、窺いしることができたのである。

B 溝状遺構

弥生時代に機能していた溝は、第Ⅰ調査区においては2本、検出されている。SDA1とSDA2とが、それである。

SDA1（第7・30図；図版24上） SDA1は、SBK1の中心部から、東北方向に約4～5m距離をおいたところからはじまり、弧状を描きながら北の方向へおちていく、幅68～112cmほどの溝である。溝の深さは、浅いところで12cm、深いところで30cm前後を測る。また、この溝は、先にもふれたように、SBK2をきる溝であり、溝内からの出土遺物は、壺形土器、甕形土器ともに、第Ⅱ様式に属するものであるが、方形周溝墓STS4の東側周溝との連続性については、目下のところ不明である（図版159上）。

SDA2 もう一本のSDA2は、SDA1から、今回の調査区北端の壁に沿って、東に約10mほど寄ったところに位置する溝である（第1図参照）。溝は、地形の傾斜に沿って西北方向に掘られており、溝幅38～70cm、深さ22cmを測る。溝内からは、畿内第Ⅲ様式に属すると思われる

壺形土器の破片３点（胴部に櫛描直線文をもつものや、他に河内系の胎土をもつものがある）や甕形土器の破片１点（紀州系の胎土を有する）が出土している（図版159下）。溝の機能は不明である。

Ｃ　ピット

菱木下遺跡第Ⅰ調査区の遺構面の精査に伴って、竪穴住居を構成する主柱穴以外にも、数多くのピットが検出されている。但し、当然のことながら、すべてのピットに遺物が混入しているというわけではなく、無遺物であるピットも、決して少なくはない。また、例えば、掘立柱建物であるＳＢＰ１の、幾つかのピットの例が示すように、ピット内部から弥生時代の遺物片が出土するとしても、それが掘りかたの中からの検出であり、しかも須恵器片とともに伴出する場合もあるので、こういった場合はそれらを弥生時代のピットとして受容することは、勿論できない。従って、この意味での弥生時代固有のピットの析出は、きわめて限定されたものとなってこざるを得ない。

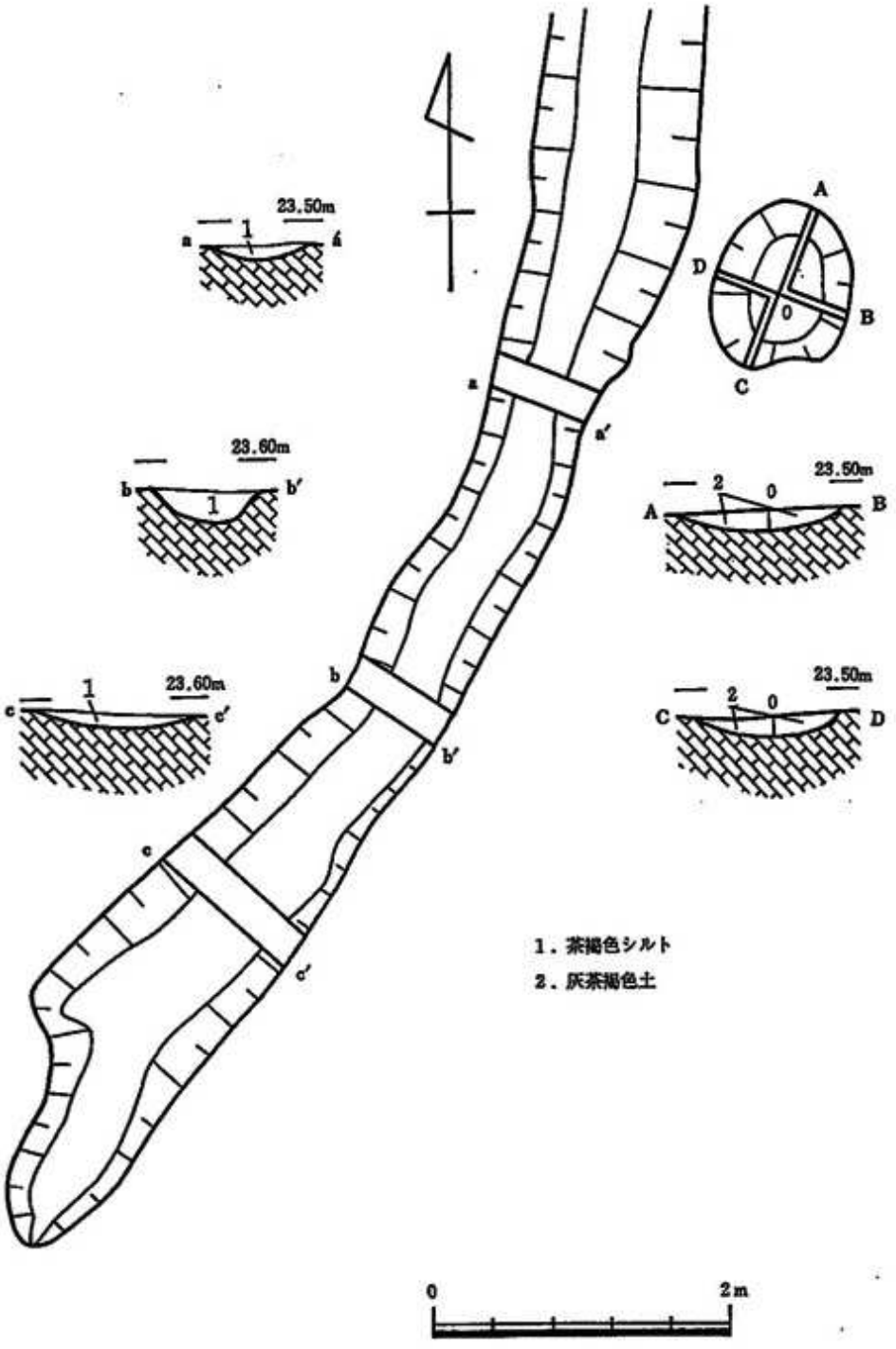
検出されたピットのうち、弥生時代の遺物のみを含み、しかも、弥生時代の竪穴住居址であるＳＢＫ１やＳＢＫ２などの、主柱穴内部の埋土の色調（暗褐色）に近似したピットはＰ101から108までの８ケ所である（第１図参照）。このうち、時期を把握しうるピットは、Ｐ103とＰ108の２ケ所のみであって、他はすべて時期不明の細片を有するピットである。前者は、直径約24～30cm、深さ８cmをはかるピットであり、その中からは畿内第Ⅱ様式に属する壺形土器の口縁部が出土している（第39図）。ピット内部にて柱痕が確認されているので、壺棺墓の可能性は考えることはできない。他方、Ｐ108の方は、直径16～20cm、深さ５cm程のピットであり、畿内第Ⅲ様式に属する壺形土器の胴部片を出土している。あるいは、Ｐ109（直径18～20cm、深さ５cm）などと共に、簡易な倉庫用建物を構成するピットとなりうるかもしれないが、不明である。

なお、他の、弥生時代に所属したかもしれぬ、無遺物のピット群については、これ以上は言及しえない。

Ｄ　土壙

この項で扱う土壙というのは、人間の居住もしくは生活に直接かかわって機能を果していた、人為的な土壙のことであり、具体的には焼土や灰あるいは炭化物を伴う土壙や、壊れた土器などの生活廃棄物を処理するための土壙のことを意味しており、本稿ではＳＫＡの記号であらわしている遺構である。従って、死者を葬った方形周溝墓の主体部（ＳＴＳ－Ｋ）や土壙墓（ＳＴＫ）などとは区別されるべきものである。

ＳＫＡ１～ＳＫＡ７　先ず、炭化物や灰を伴う土壙であるが、調査区全体において、合計７基ほど確認されている。但し、これらのうち、明確に弥生時代の遺物を伴うのは、先程、竪穴住居址ＳＢＫ２のところでふれたＳＫＡ１のみであり、ＳＫＡ２、ＳＫＡ３、ＳＫＡ４（第８図）、ＳＫＡ５（図版34下）、ＳＫＡ６の５基の土壙は、底部に炭化物と灰の層をもつだけの無遺物の土壙であり（とりわけ、ＳＫＡ１とＳＫＡ２には焼土が多い）、従って所属する時代の不分明な



第7図　ＳＤＡ１及び隣接土壙平面図・断面図

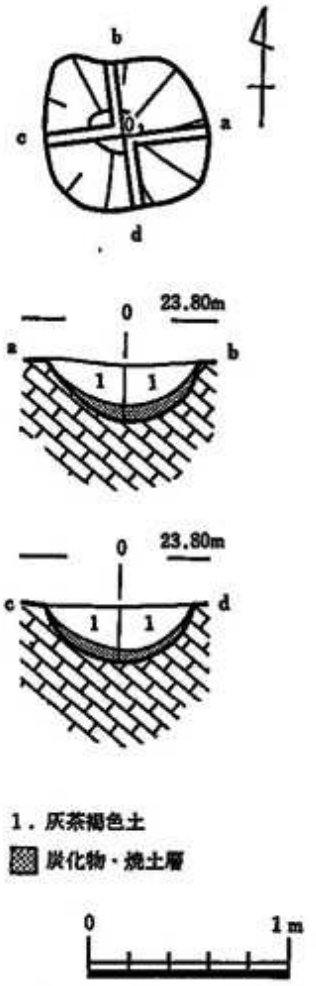
土壙である。但し、ＳＫＡ７の土壙は、須恵器の坏や甕の破片など、古墳時代後期から奈良時代にかけての土壙であり、本来この項で扱うべき、弥生時代に属する土壙ではない。７基の土壙の内容を整理すると、下表の如くなる。

このうち、明確に弥生時代に属しているといえるのは、ＳＫＡ１だけであるが、その機能は、恐らく屋外炉的なものと把えてよいと思う。ＳＫＡ２に関しても、同様の機能を付してよいかと思うが、詳細な機能は、他の土壙をも含め、不明である。

ＳＫＡ８　弥生時代の土壙のうち、もうひとつ別の機能を有していたと考えられる土壙は、ＳＫＡ８である。平面形は、不整楕円であり、長径3.96m、短径2.32m、深さ14cmを測る。そしてこの土壙の中からは、壺形土器や甕形土器、針形土器など、第Ⅲ様式に属すると思われる破片が20片近く出土したので、この土壙を生活廃棄物を投棄するための土壙として把えてよいと思う。恐らくはＳＢＫ３乃至はＳＢＫ４に居住した人々の生活痕跡と考えられる。

Ｅ　方形周溝墓、土壙墓および土器棺墓

さて、今までのところでは、弥生時代の人間の日常活動そのものにかかわる遺構、たとえば、竪穴住居址や溝、ピット、土壙などに関連して、具体的に説明をおこなってきたのであるが、続いてこの項では、人間の死に随伴する遺構、言いかえると方形周溝



第８図　ＳＫＡ４平面図・断面図

第２表　焼土・炭化物共伴土壙

土壙番号	平面形態	長径×短径(cm)	深さ(cm)	出土遺物	備考
ＳＫＡ１	楕円	104 × 48	40	弥生 甕形土器底部片１ 壺形土器破片１	炭化物と灰まじりの焼土多し
ＳＫＡ２	長楕円	88 × 48	9	なし	炭化物と灰まじりの焼土多し
ＳＫＡ３	不整楕円	150×80以上	21	なし	炭化物と灰、土壙底部に薄く堆積
ＳＫＡ４	隅丸方形	84 × 76	33	なし	炭化物と灰、土壙底部に薄く堆積
ＳＫＡ５	円形	88 × 88	11	なし	炭化物と灰、２～４cm前後堆積
ＳＫＡ６	不整形	84 × 66	29	なし	炭化物と灰、10cm前後堆積
ＳＫＡ７	不整隅丸方形	94 × 88	12	須恵器　坏破片８ 甕破片９ 高坏破片１	炭化物と灰、４cm前後堆積

墓（ＳＴＳ）や土壙墓（ＳＴＫ）、土器棺墓（ＳＴＰ）といった、言わば埋葬にかかわる遺構について、説明を加えることとする。なお、菱木下遺跡第Ｉ調査区において、弥生時代に属する方形周溝墓は、少なくとも合計７基以上、土壙墓は４基以上、そして土器棺墓は２基以上、確認されている。

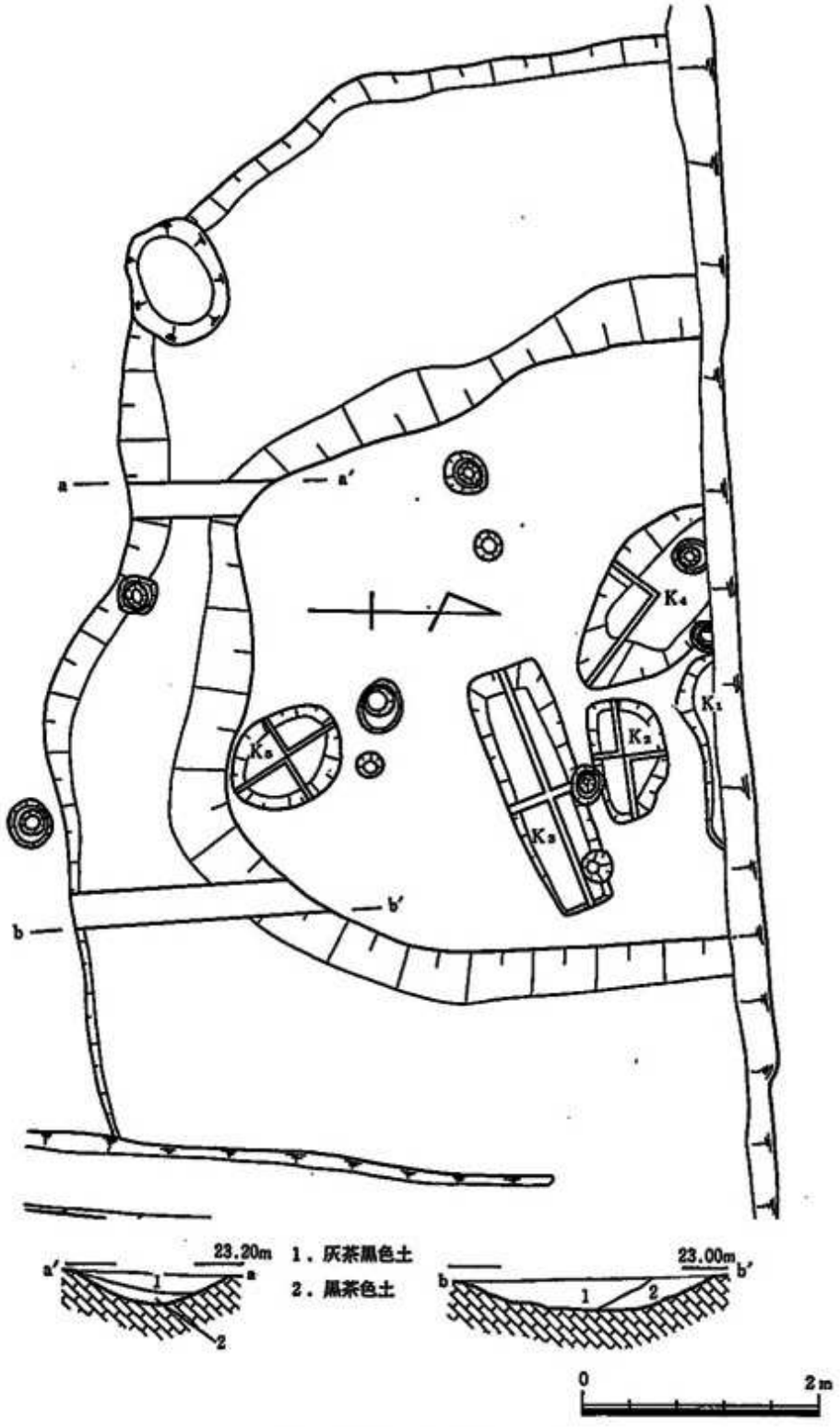
方形周溝墓　（ＳＴＳ１～ＳＴＳ７）

さて、方形周溝墓群が検出されるのは、菱木下遺跡第Ｉ調査区のもっとも西端の部分においてである。丁度、丘陵の縁辺部に築かれており、一定地域にかなりまとまって造営されたようである。方形周溝墓の分布する範囲については、今回の調査で、南北30m以上、東西50m前後の範囲に及ぶものと推測される。一応、現時点での検出数は、合計７基ということであるが、たとえばＳＴＳ１のすぐ西側で検出されている溝状遺構なども、溝の屈曲状況や出土遺物などから考えて、将来、残りの部分の調査の進行に伴って、方形周溝墓と判断される可能性をもつものである。いずれにしても、墓域の南北への伸びは、更に拡がる筈である。一方、東西の範囲に関しては、西接する西浦橋遺跡の東端部において２基の方形周溝墓が確認されているので、これによって、方形周溝墓群の西限を知ることができ、また、菱木下遺跡におけるＳＴＳ４もしくはＳＴＳ５の確認によって、その東限を知ることができる。

さて、これら方形周溝墓群の全体を概観するのに、平面形態は、基本的には隅丸方形もしくは隅丸長方形の方台部のまわりを、溝がめぐるというかたちが多い。平面の形態が完全に把握できるのは、方形周溝墓域の東端にあるＳＴＳ５だけであって、他は部分的にしか検出されていないので確言はできないが、しかし、恐らく方台部の一辺の長さは、４～６ｍ前後をはかるものが多く、また、周溝のスタイルについて言えば、個別的には、周溝が全周するものと全周しないもの（ＳＴＳ５は後者であって、ブリッジを有する）との２種、また、隣接する他の周溝墓との関係においては、独立的に存在し、単独の固有溝をもつもの、より厳密には、その可能性をもつもの（ＳＴＳ１、ＳＴＳ２など）と、そうではなくて、隣の周溝とまりあい関係をもち、言わば、結果的に共有溝をもつに至ったにみえる周溝墓との２種が存在するように考えられる。以下、おのおのの方形周溝墓について説明を加えていくこととする。

ＳＴＳ１（第９・10図；図版25）　方形周溝墓ＳＴＳ１は、調査区西北端に位置する、恐らくは単独溝を有する周溝墓である（第９図）。方台部の形態は隅丸方形、大きさは、5.04m×3.84m以上をはかり、周溝幅は、狭いところで96cm前後、広いところで 310cm前後、そして深さは、26～28cmをはかる。また、北壁断面の観察からわかるように、１号墓は、平坦な黄色土面上に、少なくとも厚さ40cm以上の盛土を施して築成されており、主体部は、この盛土部において（一部、黄色土層の中まで掘りこんで）つくられている（第10図上；図版25）。主体部は、検出された方台部の範囲内で、合計５基確認されており、実際の数は、これを更に上回る筈であるが、検出分についてはその内容を表の如くに、まとめることができる。

なお、出土遺物に関しては、周溝内の下層から大量の土器片が出土しており、これによってこ



第9図　ＳＴＳ１平面図・断面図

第3表　1号周溝墓の主体部墓壙

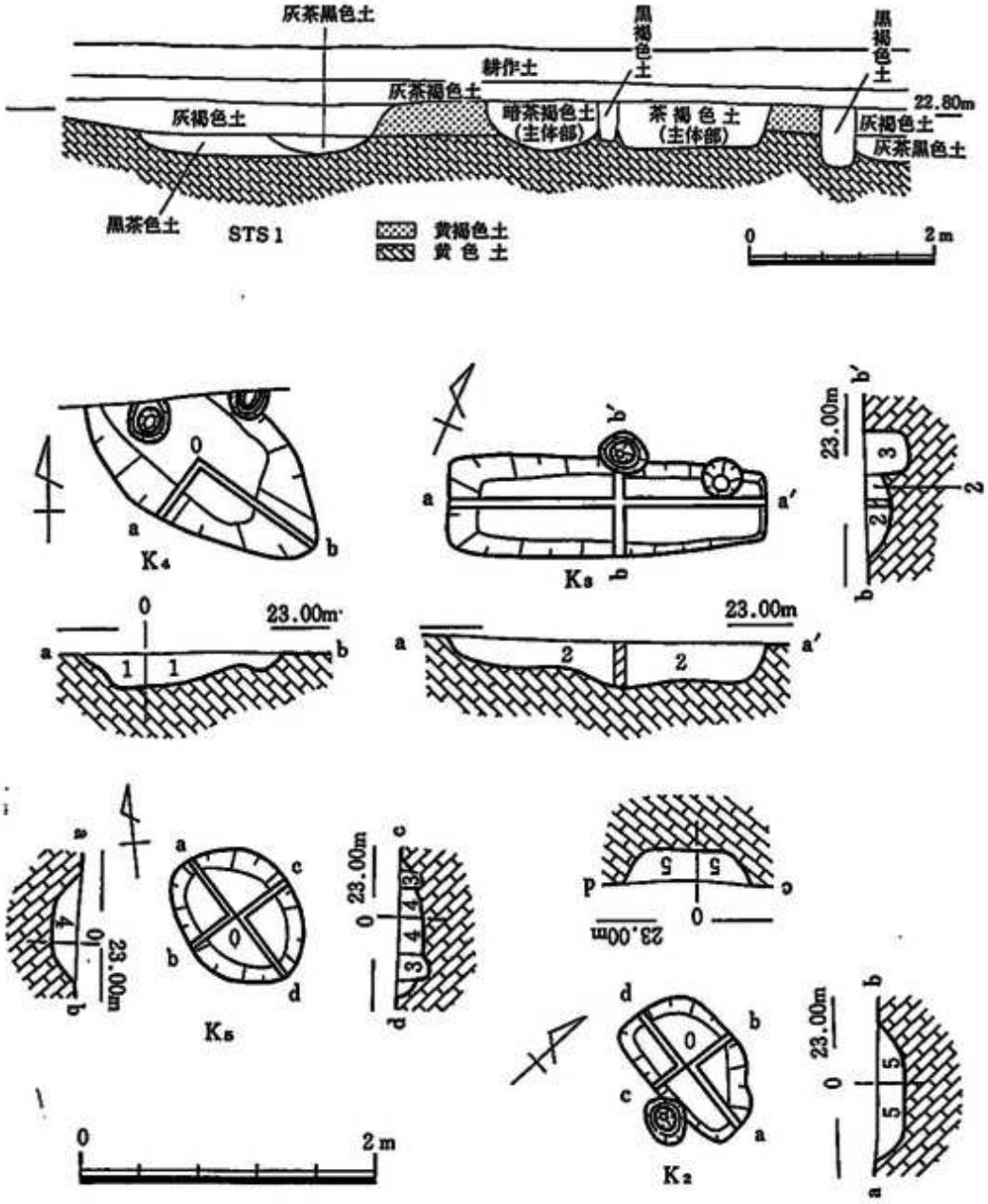
主体部番号	平面形態	長径×短径(cm)	深さ(cm)	出土遺物	備考
STS1 K_1	不整楕円	168×32以上	48	なし	
K_2	不整形	104 × 64	50	なし	
K_3	長方形	216 × 66	56	壺形土器口縁（Ⅱ）	
K_4	長楕円	160以上×100	56	壺形土器口縁（Ⅱ）	
K_5	楕円	104 × 80	52	なし	

の周溝墓の時期は、畿内第Ⅱ様式の時期に位置づけることができる。遺物の内訳としては、壺形土器の口縁部14、胴部片28、底部片12、甕形土器の口縁部1、胴部片1、底部片4、壺形土器であるのか甕形土器であるのか不分明なもの193点、うち紀州系の胎土を有するもの6点（図版163下）、ミニチュア土器1点、合計 254点を数えた。また、土器以外の出土遺物として、石器も周溝下層から出土しているが、その中には、緑色片岩製の石庖丁1点、サヌカイト製の石錐1点、不定形石器2点のほか、剥片4点（うち、使用痕のあるもの1点）、チップ5点などが含まれている（第31・32・37・50図；図版160上、168下、169上）。

STS2（第11・12図；図版26）　方形周溝墓STS2は、STS1の西南方向、約15mのところで検出された。これも、STS1と同じく、単独溝を有する周溝墓であると思われ、方台部の全体は検出されていないが、やや不整な隅丸方形で、少なくとも3.68m×3.84m以上の規模をもつものと推測される（第11図；図版26）。また、周溝そのものは、幅82～ 172cm、深さ18～32cm前後をはかり、西壁断面図が示すように、STS3との関連において、切りあいを有している（第12図）。盛土の部分は、すでに削平をうけており、調査した範囲内では、主体部は検出されなかった。なお、周溝内の土壙K_1（径124cm×84cm、深さ30cm）は、遺物こそ伴出しなかったけれども、土壙内埋土の暗褐色の色調から、弥生時代の墓壙とみてよいと思う。

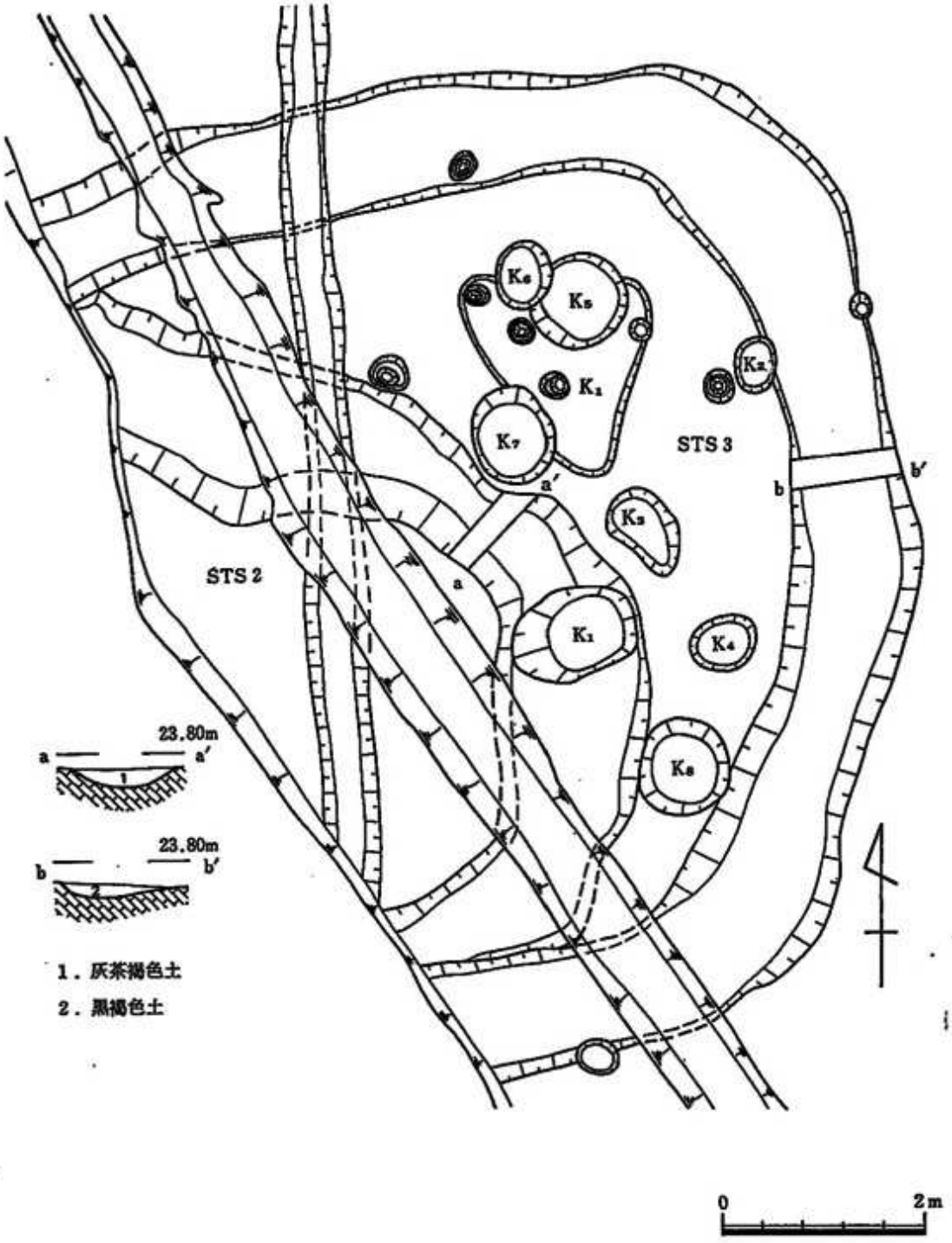
周溝内からは、第Ⅱ様式に属すると思われる壺形土器の口縁部1点、胴部片8点、底部片2点、甕形土器の胴部片2点の、合計13点以上の土器片が出土した。また、石器類および石製品としては、和泉砂岩製の砥石1点、他にサヌカイトの剥片が2点出土している（第33・37図；図版160下）。

STS3（第11・12図；図版26）　STS3は、STS2と同じ調査区の西端部に位置する。平面的には、STS3の周溝が、STS2の周溝をきるかたちになっており、先程みたように断面観察からも同様の結論を得ることができる（第12図参照）。周溝墓そのものの規模は、隅丸方形をした方台部プランの屈曲の状態などから、3号墓の方が、2号墓に比してはるかに大きく、観察できる部分だけでも方台部の大きさは、6.42m以上×7.44m以上、また、溝幅は、92cm～152cm、溝の深さは、16～28cmを測る。盛土は2号墓と同じく、削平されていて観察できない。また、方台内部において、合計8基の土壙（K_1 ～K_8 ）が検出されているが、勿論、これらの土壙のすべてが3号墓の主体部を構成しているというわけでない。生憎、K_1 からK_7 までの土壙は、

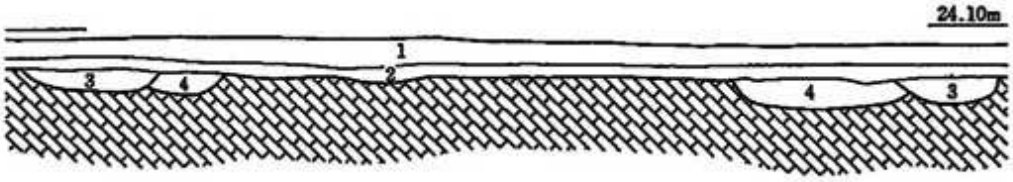


1．灰黄色土
2．黄灰色土
3．茶褐色土
4．黄褐色土
5．灰茶褐色砂礫土

第10図　ＳＴＳ１集成断面図及び主体部平面図・断面図



第11図　ＳＴＳ２・３平面図・断面図



1．耕作土　3．黒褐色土（3号周溝）
2．灰褐色土　4．灰茶褐色土（2号周溝）

第12図　ＳＴＳ２・３周溝切りあい断面図

全く遺物を伴わない土壙であり、K_8 のみが、須恵器の壺の破片を出土したのであるが、ただ土壙内部の埋土の比較検討によって、弥生時代に所属すると思われる墓壙を抽出することができる。すなわち、その方法に従えば、K_1、K_2、K_3、K_4 の４基は暗褐色土を伴う土壙であり、また、K_5、K_6、K_7、K_8 の４基は灰茶褐色土および須恵器片を伴う土壙であって、他の弥生時代遺物を伴う土壙との比較によって、前者の４基を、一応、弥生時代に属する土壙と認めることができる。主体部と考えられる４基の土壙の内容を要約すれば、下記の如くになる。

第４表　３号周溝墓の主体部墓壙

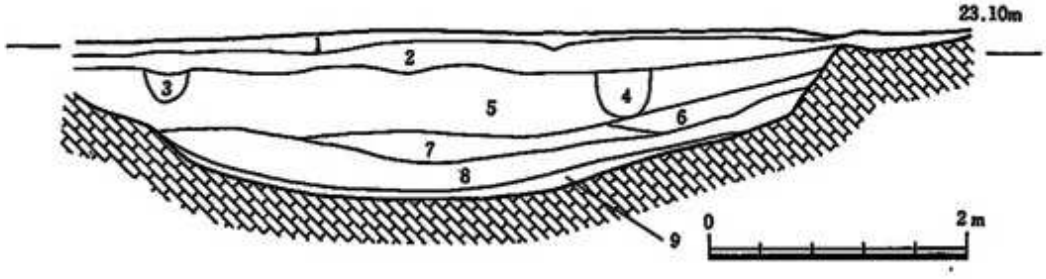
主体番号	平面形態	長径×短径(cm)	深さ(cm)	出土遺物	備考
ＳＴＳ３ K_1	隅丸三角形	200 × 148	12	なし	
K_2	楕円	56 × 41	12	なし	
K_3	不整楕円	92 × 56	11	なし	
K_4	楕円	68 × 56	8	なし	

さて、このＳＴＳ３の時期を決定する資料であるが、周溝内から、畿内第Ⅲ様式に属する遺物が出土している。壺形土器の口縁部３点、胴部11点、底部５点、また甕形土器の口縁部１点、頸部１点、底部１点、ほかに壺形土器か甕形土器かの峻別のつけがたい細片が、約30片採集されている（第33・37図；図版160下）。なお、石器類は１点も検出されなかった。

ＳＴＳ４（第13図；図版28上）　方形周溝墓ＳＴＳ４は、いま述べたＳＴＳ３のほぼ中央部から、東へ約15mほど寄ったところに位置している。この周溝墓は、隅丸長方形のプランを有し、方台部の径が、5.60m×4.40m前後をはかり、溝は単独溝ではなく、ＳＴＳ５の北側の周溝と、きりあい関係をもっている。断面観察からは、４号墓の方が５号墓より新しく見える。溝幅は、狭いところで1.56m、広いところで６m近くあり、特にＳＴＳ４の周溝が東北方向にむかって東壁にあたる部分では、特に幅広く、しかも深くなっている（第13図；図版28上）。溝の深さは、そこでは約 120cmをはかる。一方、ＳＴＳ４の西南部付近では、周溝の深さは僅かに10cm程しかなく、そこが陸橋部であることも考えられる。

また、方台部西側付近で、壺用蓋形土器の破片１点と土器の細片２点が出土しているが、はたして主体部墓壙に伴う遺物であるかどうかは不明である。

なお、この４号墓の周溝は、すぐ南側にあるＳＴＳ５の周溝をきって存在しており、周溝内か



1．灰黄色土　　4．茶灰色土　　7．淡黄褐灰色砂質土
2．灰茶色土　　5．黒褐色土　　8．青褐灰色砂質土
3．茶褐色土　　6．灰赤褐色土　　9．灰褐色砂質土

第13図　ＳＴＳ４周溝東壁断面図

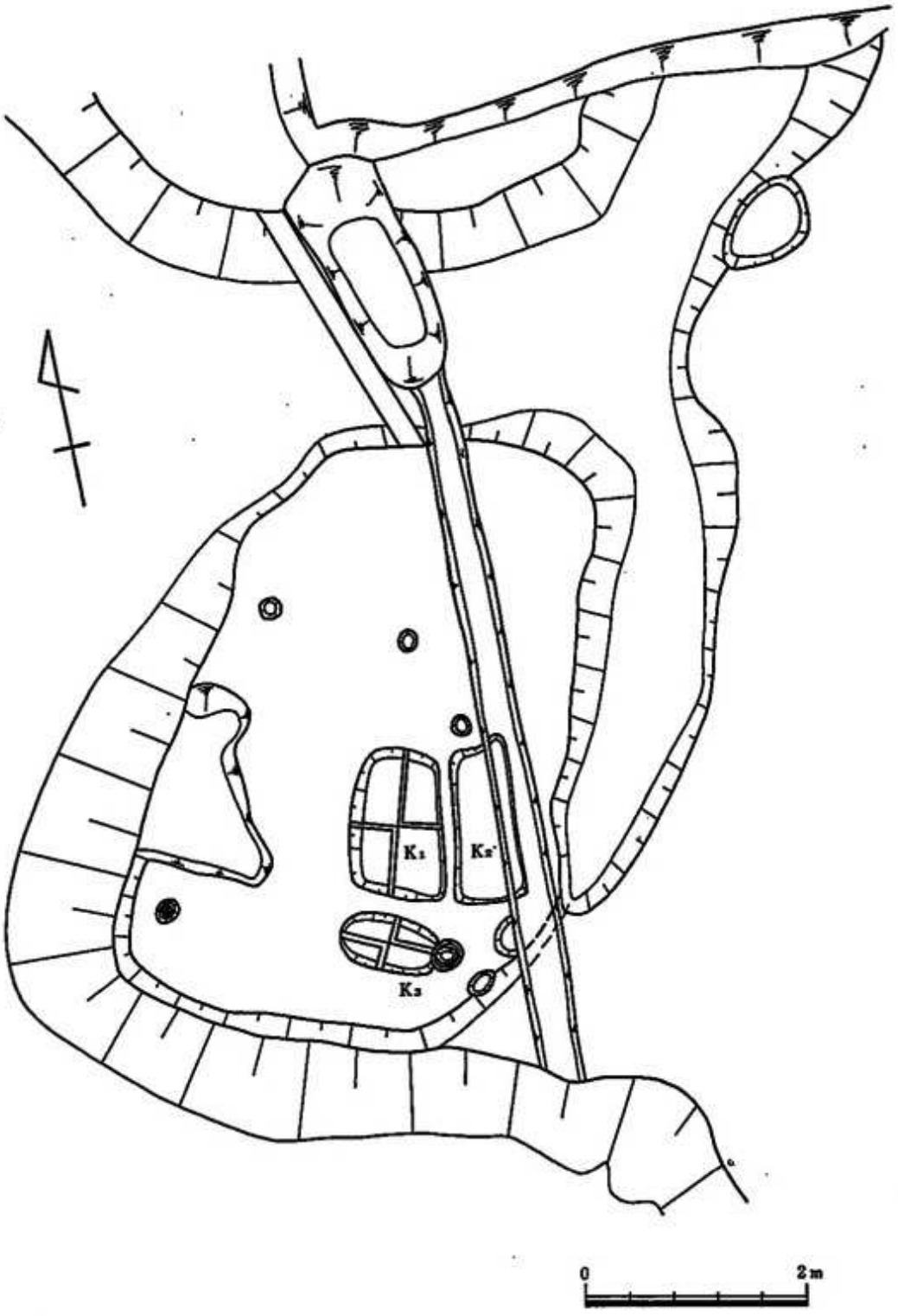
らは、畿内第Ⅱ様式に属する土器および石器が出土している。土器の内訳としては、壺形土器ののの口縁部７点、胴部片14点、底部片６点、甕形土器の口縁部３点、胴部片１点、底部片３点、鉢形土器片２点、高坏形土器脚台部１点の合計37点以上を出土している。また石器類としては、石鏃１点、石匙状石器１点、石庖丁１点、不定形石器３点、ハンマーストーン１点、凹み石１点、剝片４点（うち使用痕のあるもの２点）、チップ５点などが、周溝内下層より検出されている（第34・37・50図；図版161上、168下、169上）。他方、同じ周溝内下層の西側部分で壺棺が検出されたのであるが、これについては、のちほど、土器棺墓の項でふれることにする。

ＳＴＳ５（第14・15図；図版27）　今述べた方形周溝墓ＳＴＳ４と周溝のきりあい関係を有し、相対的により古い時期におかれる周溝墓が、方形周溝墓ＳＴＳ５である。この方形周溝墓は、第Ⅰ調査区で検出された方形周溝墓のうちでは、唯一、全貌の把握できた周溝墓であるが、方台部の平面形態は、１辺約5.36m×3.84mの隅丸長方形のかたちをなしており、周溝は全周しないで、方台部の東南部分で、幅 1.6mほどにわたってきれている。陸橋部とみなしてよいと思う。周溝それ自体の幅は、方台部の東側部分で約 120cm、西側部分で380～420cm前後をはかる。溝の深さについていえば、５号墓の周溝北側から西側にかけての部分がもっとも浅く10cm内外、西南部から南側部分がもっとも深くて、60～80cmの深さがある。切りあい部分からの観察によると６号墓より古い（第15図）。

主体部を構成する土壙は、方台部内において合計３基確認されている。盛土部分がすでに削平されていたため、土壙の深さは当初のままではないが、主体部のおもな内容をまとめると、下記の通りである。

第５表　５号周溝墓の主体部墓壙

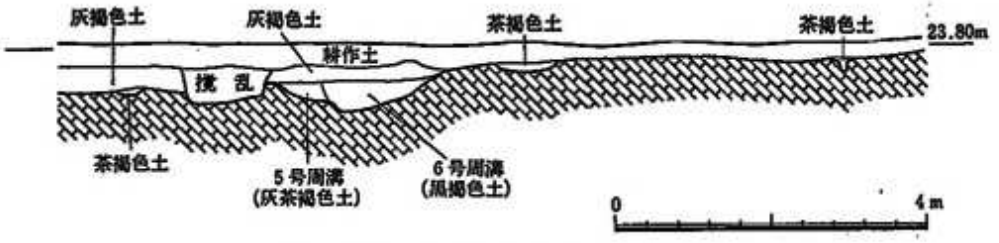
主体番号	平面形態	長径×短径(cm)	深さ(cm)	出土遺物	備考
ＳＴＳ５ K_1	隅丸長方形	134 × 84	14	なし	
K_2	隅丸長方形	140 × 56	12	なし	
K_3	楕円	92 × 52	12	なし	



第14図　ＳＴＳ５平面図

さて、このように主体部の中からは、伴出遺物を検出することができなかったが、周溝内からは、畿内第Ⅱ様式に属すると思われる土器片や、若干の石器類が出土している。出土土器の内訳としては、壺形土器の口縁部３点、胴部片５点、底部片２点、甕用蓋形土器２点、甕形土器の胴部片１点など合計13点を挙げることができるが、その他に、壺か甕かの判別のしがたい土器片が62点、検出されている（第33・37・38図；図版161下）。一方、石器類、石製品としては、石鏃１点、砥石１点、ハンマーストーン１点、不定形石器１点のほか、剝片４点、チップ12点等が出土している（第51図）。

ＳＴＳ６（第１図および第15図参照）　方形周溝墓ＳＴＳ６は、今述べた方形周溝墓ＳＴＳ５のすぐ南側で検出された周溝墓である。ＳＴＳ５との新旧関係について言えば、溝のきりあい断面の観察から、ＳＴＳ６の方がＳＴＳ５の周溝をきっており、相対的により新しいことがわかる（第15図）。方台部のプランは隅丸方形に近いかたちをしており、少なくとも１辺7.68m×3.36m以上の大きさをもつ周溝墓と考えられる。周溝の幅は、1.76m～４m前後であり、深さは、40cm～78cmを測る。



第15図　ＳＴＳ５・６周溝南壁切りあい断面図

主体部に関しては、弥生時代の遺物を伴出しているわけではないが、方台部上に、ＳＫＡ３をのぞいて、３基の土壙が検出されており、これら３基の土壙は、他の土壙との埋土比較から、弥生時代に属する墓壙であると考えられる。各土壙の大きさ、深さは以下の通りである。

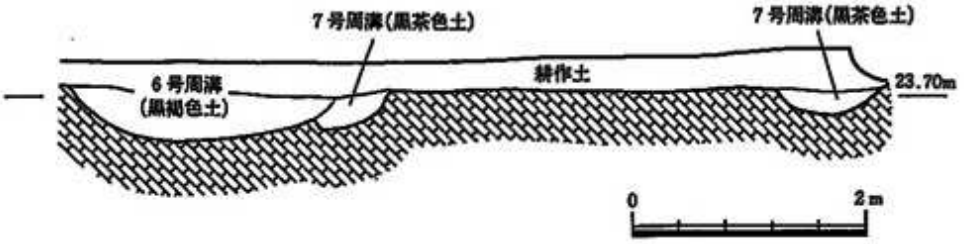
第６表　６号周溝墓の主体部墓壙

主体番号	平面形態	長径×短径(cm)	深さ(cm)	出土遺物	備考
ＳＴＳ６ K_1	楕円	108 × 76	13	なし	
K_2	楕円	104 × 56	15	なし	
K_3	楕円	60以上×84	18	なし	

周溝内からは、畿内第Ⅲ様式に属する土器が検出されている。壺形土器の口縁部12点、胴部片10点、底部片14点、壺用蓋形土器１点、甕形土器１点、甕形土器の口縁部３点、鉢形土器１点、水差形土器１点、その他、壺か甕かの判別のつきがたいもの92点をあわせ、合計 135点が出土した。また石器関係では、不定形石器３点のほか、剝片６点、チップ11点を数えることができた（第35・38・50図；図版162上、163上、168下）。

ＳＴＳ７（第１図および第16図参照）　確認された方形周溝墓のうち、最後に挙げうるのは、

調査区西南端に位置する７号周溝墓である。方台部の形態は、ほぼ隅丸方形のかたちをしているが、１辺2.60m以上×1.40m以上の規模を有するものと思われる。溝幅は、88～ 276cm前後であり、深さは20～28cmを測り、調査区西壁断面の観察によって、７号墓周溝は６号墓周溝によってきられていることがわかる（第16図）。主体部は、調査した範囲内においては検出されなかった。



第16図　ＳＴＳ６・７周溝切りあい断面図

周溝内からは、畿内第Ⅱ様式に属する壺形土器の口縁部３点、胴部片10点、底部片３点、甕形土器の口縁部３点が出土し、他に壺か甕かの判別のつけがたいもの15点を加えると、合計34点の土器片を検出した。これらのうちには、紀州系の土器片１点が、含まれている。なお、石器関係では、使用痕のある剝片が１点、検出されただけである（第35・38図；図版163上）。

以上が、菱木下遺跡第Ⅰ調査区における方形周溝墓についての大要であるが、方形周溝墓築成の過程を復元する意味で今までの報告を整理すると、下表のようにまとめることができる。

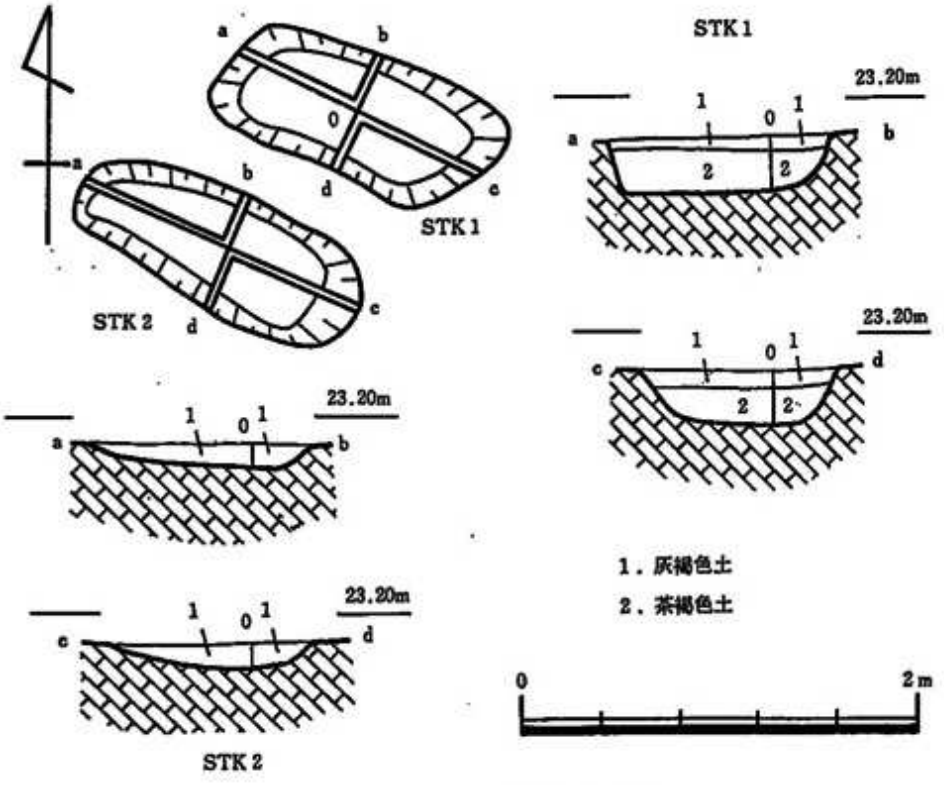
第7表　方形周溝墓一覧表

周溝墓名	方台部の形態	方台部の規模（長径×短径m）	周溝の形態	周溝の幅（cm）	周溝の深さ（cm）	主体部数	時期（様式）
ＳＴＳ１	隅丸方形	5.04 × 3.84	単独溝	96～310	26～ 28	5	Ⅱ
ＳＴＳ２	隅丸方形	3.68 × 3.84	単独溝	82～172	18～ 32	不明	Ⅱ
ＳＴＳ３	隅丸方形	6.42 × 7.44	単独溝（但し、きりあいを有す）	92～152	16～ 28	4	Ⅲ
ＳＴＳ４	隅丸長方形	5.60 × 4.40	共有溝	156～600	10～120	不明	Ⅲ
ＳＴＳ５	隅丸長方形	5.36 × 3.84	共有溝（陸橋部あり）	120～420	10～ 80	3	Ⅱ
ＳＴＳ６	隅丸方形	7.68 × 3.36	共有溝	176～400	40～ 78	3	Ⅲ
ＳＴＳ７	隅丸方形	2.60 × 1.40	共有溝	88～276	20～ 28	不明	Ⅱ

すなわち、これら７基の方形周溝墓のうち、第Ⅱ様式に属する方形周溝墓は、１号墓、２号墓、５号墓、７号墓の４基であり、一方第Ⅲ様式に属する方形周溝墓は、３号墓、４号墓、６号墓の３基ということになる。第Ⅱ様式に属する各周溝墓の新旧関係については、出土遺物の比較によって、５号墓→７号墓→２号墓→１号墓の順序で、また、第Ⅲ様式に属する周溝墓に関しては、６号墓→３号墓→４号墓の順序で構築されていったものと考えられる。このことは、方形周溝墓

の築成が、先ず居住空間の西側の高位部分からはじめられ、それが西方なら西方への特定方向に一方的にのびていくのではなく、一定範囲内で、丁度時計まわりのサークルを描くようなかたちで、循環的になされていったことを示しているように思われる。また、各々の方形周溝墓は、検出された主体部の構成内容から、先ず通常の「家族墓」とみてよいと思うが、第Ⅱ様式の時期から第Ⅲ様式の時期に移行するに伴って、周溝墓の方台部が徐々に大型化していく傾向は、恐らく、世帯規模の増大を反映するものであり、丁度この時期に竪穴住居址の平面形態が、円形もしくは楕円形のプランから隅丸方形のプランへと推移しつつ、その居住空間を次第に拡張していく傾向と、軌を一にするものと思われる。なお、ＳＴＳ１の西方にも周溝状遺構が存在し、第Ⅱ様式の土器が17点ほど出土しており（第36図）、しかも、方台部の一部らしきものもひっかかってはいるのであるが、周溝墓の確証がないので、本稿では溝状遺構ＳＴＳ８と仮称しておく。今後の精査に期待したい。

土壙墓　茨木下遺跡第Ⅰ調査区における墳墓関係の遺構として、方形周溝墓以外に、土壙墓を挙げることができる。弥生時代の土壙墓と思われるものは、少なくとも５基確認されている。そのうちの２基は、ＳＴＳ１のすぐ西側にあって、互いに方位を同じくして相並ぶＳＴＫ１およびＳＴＫ２であり、また他の１つは、ＳＴＫ２の西南方向約６ｍの所に位置するＳＴＫ３である。更に、ＳＢＫ１の東北東方向12mのところで検出されるのが、ＳＴＫ４であり、その更に東方約



第17図　ＳＴＫ１・２平面図・断面図

8.4mのところで検出されたのが、ＳＴＫ５である。

これら５基の土壙のうち、明確に弥生時代の遺物を伴出したのは、ＳＴＫ１とＳＴＫ５の２基の土壙（第17・39図；図版29下）のみである。他の３基の土壙については、土壙中の埋土の比較によって、それを弥生時代中期に所属するものと判断した。以下、検出された５基の土壙墓について、要点を整理すると下表のようになる。

第8表 周溝墓外土壙墓一覧表

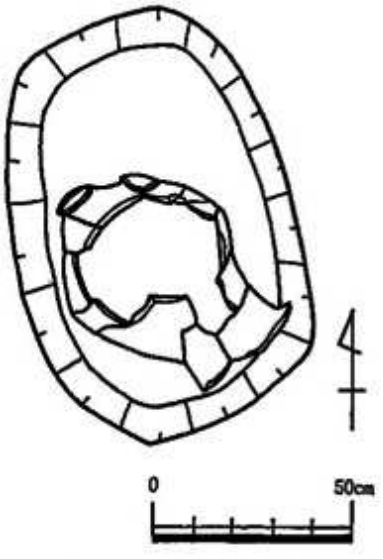
土壙番号	平面形態	長径×短径(cm)	深さ(cm)	出土遺物	備考
ＳＴＫ１	隅丸平行四辺形	140 × 64	28	壺形土器口縁部１ 胴部	Ⅱ様式
ＳＴＫ２	不整楕円	156 × 62	12	なし	
ＳＴＫ３	隅丸平行四辺形	132 × 64	14	なし	
ＳＴＫ４	不整楕円	144 × 68	28	なし	
ＳＴＫ５	楕円	136 × 76	20	壺形土器口縁部	Ⅲ様式

各土壙内の被葬者の性別などは不明であるが、ＳＴＫ１およびＳＴＫ２は、被葬者が夫婦である可能性を有している。土壙墓の全体的な動きとしては、竪穴住居址の移動、変遷の場合と同様、調査した範囲の中では、西から東への動きが可能である。

土器棺墓　土器棺墓と呼びうるものは、確実なもので合計２基確認されている。１基は、方形周溝墓ＳＴＳ４の西側周溝を隔てた遺構面直上で検出されたＳＴＰ１であり、他の１基は、ＳＴＳ４の西側周溝内（下層掘りかた内）で検出されたＳＴＰ２である。

ＳＴＰ１は、長径48cm、短径40cm、深さ５cmほどの楕円状土壙の中にすえられた土器棺であり、土器は壺形土器であって、底部片が土壙内西北部に、胴部片が土壙内中央部から東南部にかけて散乱していた。畿内第Ⅱ様式に属する土器と思われる。

一方、ＳＴＰ２は、４号周溝墓の周溝西側の下層において検出された土器棺墓（第18図）であり、長径53cm、短径35cmの楕円状土壙の中に、壺形土器が底部を西北方向、口縁部を東南方向に配して横たえられていた。土壙底部は、僅かに 2.7cmほど残存していただけであるが、４号周溝墓の周溝内で或る程度の堆積が進行したあと、その堆積層の上面からほりこんで、ＳＴＰ２がつくられたと思われる。この壺棺自体の時期については、畿内第Ⅲ様式の中でも、古い段階に位置づけることができると思う（第34図―２；図版28下、29上）。



第18図　ＳＴＰ２平面図

もう１基、４号墓周溝内北側において、ＳＴＰ２と同様の小土壙が検出されている。この小土壙の長径は50cm、短

径は28cm、深さは 2.8cmほどであるが、しかし、土器そのものは、その後、何らかの力でより下流の方へ流されていったらしく、原位置では確認することができなかった。恐らく、土器棺墓の可能性がある。また、6号方形周溝墓の周溝北側の部分においても、甕棺墓と思われる土壙状落ちこみが一基検出されており、内部から甕形土器が出土している（ＳＴＰ３と呼称する）。

F　小結

以上、菱木下遺跡第Ⅰ調査区における、弥生時代関係の遺構について、竪穴住居址から始めて、溝やピット、土壙、方形周溝墓、土壙墓、土器棺墓等について説明を加えてきた。ここで、ひとまず弥生時代関係について、若干のまとめをしておきたい。

遺跡の調査内容から明らかなように、菱木下遺跡第Ⅰ調査区の丘陵の高台もしくは縁辺部分に人々が居住しはじめたのは、弥生時代中期、第Ⅱ様式の時期に入ってからのことである。勿論、当初から、多数の人々が一気にこの地に居住しはじめたとは考えがたいが、ともかくも、人々はこの地に定着し、円形のプランをもつ竪穴住居を構築し、そこに居住して生活を営みはじめた。日常の生業は、主として農耕と狩猟、採集によって成りたっており、そのことは主に、検出された石鏃、石庖丁、石匙などから裏づけられる。石器そのものの製作も、早くから住居内部でもおこなわれていたようであり、散乱したチップスは、そのことの証左である。石器や石製品の原材料の中には、和泉砂岩のほか、サヌカイトや緑色片岩などがみられるが、日常の流通圏が単に泉州内部にとどまらず、広く、河内や紀伊の方面にまで及んでいたことを示している。そして、このことは、出土土器の地域性とも軌を一にした現象である。

今回の調査で、居住範囲や墓域の全体を完全に単位として掌握しきったというわけではないが、それにしても、少なくとも２～３世帯以上の人々が、日常的にこの地で共同生活を営んでいたものと考えられる。また、今回の調査範囲の中では、明確に弥生時代の倉庫跡と判断できるものは確認されなかったが、そのことは、本当は倉庫は存在しているのであるけれども単に検出されていないだけのことであるのか、それとも、余剰生産物を蓄えるには、まだまだ、生産力がこの段階では十分に発展しておらず、せいぜい屋内備蓄が精一杯で、倉庫と呼ぶにふさわしい構築物を未だ建てうる状況ではなかったことの証左なのか決しがたいが、案外、後者の可能性も高いのではないかと思料される。

また、このことと関連して墓制に関してみるのに、方形周溝墓そのものの性格について言えば、それは基本的には「家族墓」的性格を有するものであり、換言すれば１基１基が「親族共同体」の構成単位であると把えてよいのではないかと考えている。（たとえば、５号墓などに関していえば、墓壙は合計３基確認されているが、その内容を、「一組の夫婦と一人の子供」というように想定してもよいのではないかと考えている）。そして、第Ⅰ調査区においては、周溝墓方台部内において、通常、３～５体前後、複数埋葬されるのが、一般的傾向であるようにみうけられる。

ただ、ここで問題となるのは、方形周溝墓の方台部外において検出される「土壙墓」（ＳＴＫ１～５）や「土器棺墓」（ＳＴＰ１～３）の性格が本質的に何であるのかという点である。特に

後者に関しては、ＳＴＰ１のように、他の「土壙墓」と同じように黄色の遺構面上で検出されるものと、ＳＴＰ２、ＳＴＰ３のように周溝内部で検出されるものとの二種があり、いったいこれらの相違が何に基ずいて生じているのか、それを明らかにすることは重要な課題のひとつであろうかと思われる。

先ず、周溝墓外に葬られている、少なくとも５基の土壙墓の被葬者については、一方では、これらを被征服者、あるいは奴婢の類として把える見方もあるかもしれないが、そのようである可能性を完全に否定することはできないにしても、同時に方形周溝墓の被葬者たちとは血縁的には全く無関係の、他の血縁集団から移動もしくは移住してきた被征服者や奴婢でない人々を、被葬者として想定してもよいと考えている。恐らくＳＴＫ１およびＳＴＫ２の２基の相並ぶ土壙は、外部集団からやってきた「夫婦者」の墓であり、他のＳＴＫ３、ＳＴＫ４、ＳＴＫ５の３基の土壙などは、単身でやってきた人々の墓壙であると思われる。そしてここでいう「外部集団」とは、近い場合には同じ泉州地域における隣接の共同体を考えればよいであろうし、またそうでない場合には、出土土器や伴出石器の地域的特性に照らして、河内や紀伊の方面からの移住者を想定することも可能であろう。先にもふれたように遺物を伴出した「土壙墓」は、ＳＴＫ１およびＳＴＫ５の２基のみであったが、いずれもが褐色の、胎土に長石や角閃石、金雲母などを含む「河内系」の土器を出土していることは、注目に値する。

他方、土器棺墓についてであるが、ＳＴＰ１のように、通常の方台部上において小土壙が穿たれて、そこに土器棺が埋置される場合と、ＳＴＰ２或いはＳＴＰ３の場合のように、周溝内に小土壙が掘られて、そこに土器棺が埋置される場合とでは、いったい両者間のどんな差異が起因しているというのであろうか。私は、これら土器棺墓の二様の在り方については、周溝墓外の土壙のあり方とは、明確に一線をひいて区別する必要があると考えている。何故なら、たとえその埋葬が方台部ではなく、周溝内においてなされるとしても、それは意識においては、厳然と、方形周溝墓内での葬送として意識されているのであり、その点、方形周溝墓外での葬送とは区別して考えられていたと把えるからである。恐らく、土器棺墓の示す二種の様相は、主体部における中心的被葬者との、近親関係の度合に基ずく差異のあらわれであり、溝内における被葬者の位置は、方台部内における被葬者の位置に比して、同じ「親族共同体」の中に包摂されてはいるものの、より二次的、或いは副次的位置におかれていたことの証左ではなかろうか。特に４号墓の周溝内被葬者に関連しては、この点、より複雑な家族構造のもとに身をおいていた可能性もありうる。小児の死因は果たして何だったのか、病死だったのか、それともまびきによる死だったのか、知る手だてはない。

いずれにせよ、菱木下遺跡における墓制は、方形周溝墓を中心とする血縁関係を基調とした、「家族墓」的性格の非常に強い墓制であったことがわかる。そして、周溝墓の内容の相互比較を通して、畿内第Ⅱ様式から第Ⅲ様式の時期にかけては、未だ共同体内部での階級分化が十二分に進展していなかったこと、また、「外来集団」に対しても、たしかに彼らに対して墓制上の制約

（すなわち、外来集団は、特定家族の周溝墓内には埋葬されないという、半ば当然の制約）がありはしたものの、しかし、そのことは、直ちに「奴隷制」下における、深刻な非人間的規制の存在を意味するものではなかったこと、そしてそういった事柄は、例えば方形周墓内の墓壙ＳＴＳ１のK₃、K₄と、周溝墓外の土壙墓ＳＴＫ１、ＳＴＫ２との実相上の比較によって、両者間に埋葬上の本質的な相違がみられないことなどからも明らかであるといった諸点を見てきた次第である。このようにして第Ⅱ、第Ⅲ様式の時点では、この地においては階級社会は未発達であり、原始共同体がひきつづき、維持され存続していたさまを知ることができたのである。しかし、その後、（すなわち、畿内第Ⅲ様式の時期を最後にして）、泉北台地に住んでいた人々は、何らかの内因あるいは外因に動かされて、突如として、この地域を生活の場としては放棄することになる。そして、以後、古墳時代後期に至るまで、人々はこの地を再び、居住空間としては活用しなかったようである。畿内第Ⅳ様式・第Ⅴ様式の時期には、この地では集落が廃絶しているが、同時期に和泉市所在の観音寺山遺跡や慈の池遺跡では、大規模な集落が突然、高地に出現してくるので、これら高地性集落の前史を考える上で、当該遺跡は貴重な存在であるということができよう。

3　古墳時代及びそれ以後の遺構

弥生時代より数世紀を経たのち、再び人々が泉北台地上の菱木下付近を居住の地と選定するようになるのは、古墳時代も後期以降のことである。そしてそのことは、方形周溝墓周溝内の最上層から検出される遺物（第40・41・42図）の内容や、遺構面直上から検出される遺物（第43・44図；図版164）、更には確認された遺構内容それ自体の検討によって明らかとなる。出土した遺物の具体的内容については、のちほど遺物篇の中で詳述したいと考えているが、本項においては、この菱木下の地域において、古墳時代以降、人々の生活が、再びどのように展開されていったのか、その過程を追いかけていくことにしたい。先ず、居住に関する項目から始めていきたい。

A　竪穴住居址

人々が再び、泉北台地上の菱木下の地域に居住空間を求めるようになるのは、再三、繰り返すように、古墳時以後期、それも紀元後６世紀後半以降のことと思われる。この頃、調査区西端部に群在していた方形周溝墓の周溝自体は、断面観察から明らかなように、未だ完全に埋まりきっていたというわけではなく、ＳＴＳ１、ＳＴＳ４、ＳＴＳ５、ＳＴＳ６などの周溝最上層の遺物が示すように、６世紀後半からそののち８世紀前後にかけて、すなわち極めて緩慢な仕方で、徐々に埋もれていったことが看取される。このことは、すなわち、６世紀後半以降８世紀の時代にかけて、方形周溝墓群の密集した部分は、居住域とするには未だ不適当であった実情を示しており、そのことと関連して、この地域における古墳時代最初の建築物（竪穴住居）は、いずれも方形周溝墓の分布域、或いは墓域よりはずっと東方に離れた位置（言わば、弥生時代の西端の住居址であるＳＢＫ１より、更に東北東方向に約25mほど寄った付近）に構築されている。構造は、隅丸方形のプランをもつ竪穴住居址であり、少しく規模の異なる２棟の竪穴住居址が、互いに切

りあい関係を有するかたちで検出されている。

ＳＢＫ５（第19図；図版30）　菱木下遺跡における古墳時代最初の住居址は、竪穴住居址ＳＢＫ５である（第19図）。一辺約4.08m前後の隅丸方形のプランであるが、かなり、削平をうけた状態で検出されたため、掘りかた底面までの深さは、最も深いところでも、僅かに16～20cm程度、浅いところでは僅かに５～６cm程度を留めているにすぎなかった。周壁溝や排湿溝、あるいは、間仕切り溝などは確認されなかったが、主柱穴は４個所で確認されており、東西の心々距離は、約1.84m～1.92m、南北の心々距離は、約2.00m～2.04mを測った。屋内においては、炉跡もしくはカマド跡と判断されるような遺構は全く検出されなかったが、或いは土壙の項で扱った炭化物と灰を伴う、ＳＫＡ４などがそのような機能を果していたのかもしれない。住居址内部には３基の土壙（K_1、K_2、K_3）が存在しているが、ここれらの土壙からも、焼土や灰、炭化物などは、一切検出されていない。或いは、K_1、K_3 からは遺物の出土がみられなかったが、K_2 からは、壺や坏身が出土しているので、むしろ、貯蔵具や食器などの日常雑器類を一定場所に集めるための、言わばそれらを整理整頓する「保管場所」的な機能を有した土壙ではなかったかとも考えられる。検出された３基の、屋内土壙の形態、規模は、下表の通りである。

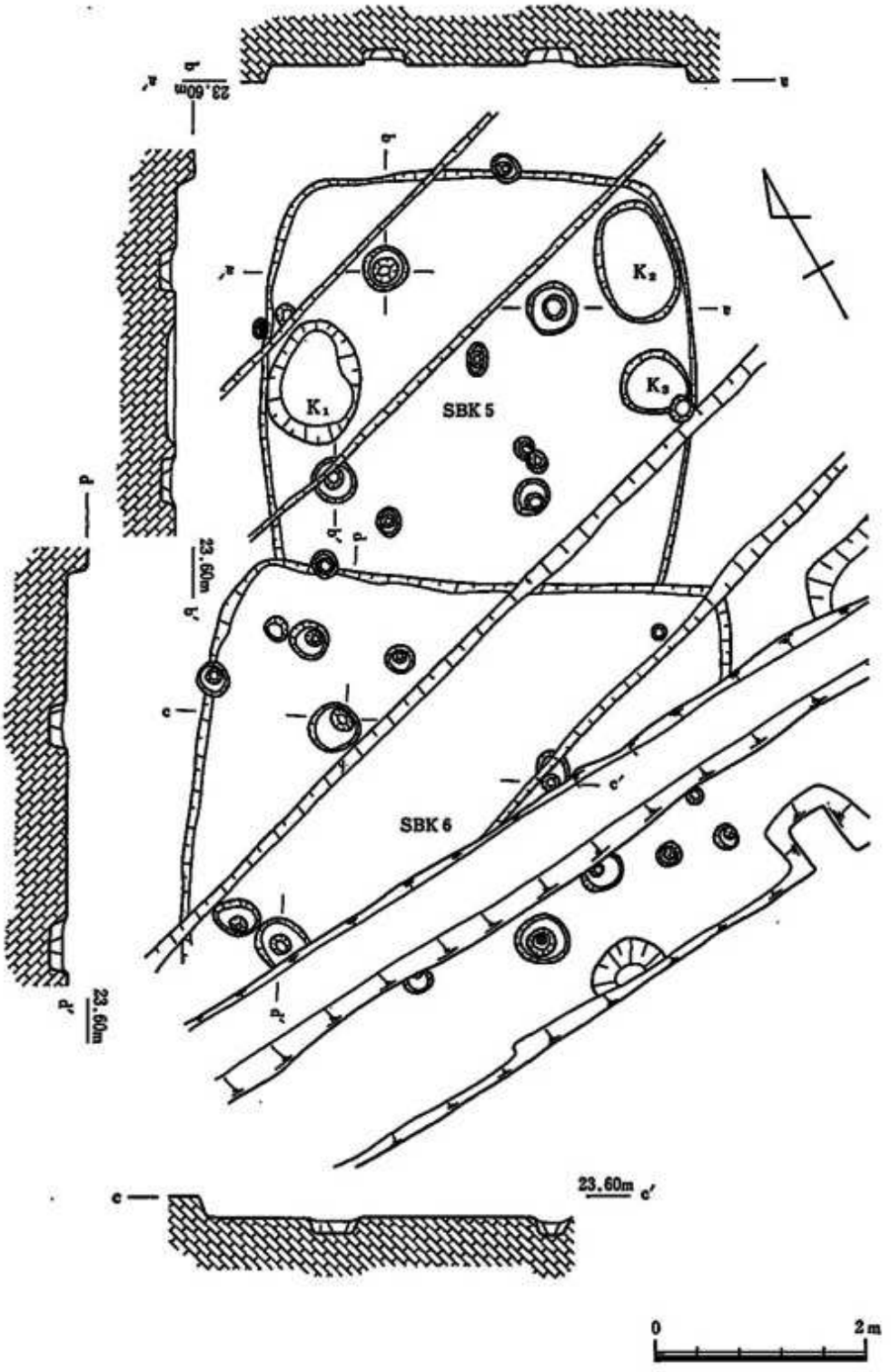
第９表　竪穴住居址内土壙一覧

屋内土壙番号	平面形態	長径×短径(cm)	深さ(cm)	出土遺物	備考
ＳＢＫ５ K_1	不整楕円	112 × 88	12	なし	
K_2	楕円	116 × 76	12	坏身、壺	
K_3	不整円	64 × 62	7	なし	

古墳時代後期に属する竪穴住居址ＳＢＫ５からは、比較的多くの須恵器類が出土している。その内訳を紹介すると、坏蓋４、坏身６、直口壺１、短頸壺１、大形甕３、小形甕１、高坏２、筒形器台１の合計19点の遺物内容であり、６世紀後半（Ⅱ期の４～５段階）のものを主流にしている（第45図；図版165上）。他に土師器片も２、３点検出されたのであるが、器種はわからなかった。（うち２点は、先にのべたように、屋内K_2 から出土したものである）

ＳＢＫ６（第19図；図版30）　今述べた竪穴住居址ＳＢＫ５を、一部分きるかたちで、そのすぐ南寄りの位置において検出されたのが、ＳＢＫ６である。ＳＢＫ５と、方位をほぼ同じくしているが、規模は少し大型化する傾向をみせている。プランは、隅丸方形をしており、一辺の長さは、ＳＢＫ５に比して、１m程拡張されて、約5.00mをはかる。ＳＢＫ５と同じく、削平をうけているため、遺構の残存状態はさ程良くはなく、深いところでも、掘り方底部まで20cmほどしか残っていなかった。主柱穴は４個所であり、住居址南半分の撹乱をうけたあと整地されたと思われる部分を除いては、炉跡或いはカマド跡と思われる痕跡を見いだすことはできなかった。

竪穴住居址ＳＢＫ６から出土した遺物の内容は、ＳＢＫ５の出土遺物より若干、新しい時代的様相を呈しているが、その器種構成は、坏蓋６、坏身９、塊１、広口壺１、台付壺１、大形甕３、高坏11（長脚２段スカシのもの３、短脚のもの８）、器台１点であり、合計33点の遺物が出土し



第19図　ＳＢＫ５・６平面図・断面図

ている（第46図；図版165下、166上）。いずれも、6世紀末葉から7世紀初頭頃におかれるものである。一方、土師器は1点も出土しなかった。

第10表　竪穴住居址内出土土器比較表

出土土器／竪穴住居址	須恵器												計
	坏蓋	坏身	椀	直口壺	短頸壺	広口壺	台付壺	大形甕	小形甕	高坏（長脚）	高坏（短脚）	器台	
SBK5	4	6	—	1	1	—	—	3	1	1	1	1	19
SBK6	6	9	1	—	—	1	1	3	—	3	8	1	33

さて、SBK5とSBK6の両者を比較することによって明らかとなるのは、竪穴住居址自体の居住空間が一層拡張されていく傾向をみせること（面積的には約1.56倍の大きさにたてかえられたこと）と、住居址内で使用された器数が同じような比率で、増加している（単純計算でも、約1.74倍にふくれている）という点である。特に、器種別の数量比較に関しては、坏身、坏蓋、および高坏（短脚）の増加が目立っている。平面プランの拡大といい、住居址内部の器数の増大といい、6世紀後半から7世紀代初頭にかけての、当地域における生産力の発展や世帯構成人員の増加を示唆しているようである。

B　掘立柱建物　（第20・21・22図；図版31）

古墳時代およびそれ以後の居住空間として、今挙げた2棟の竪穴住居址以外に、多数の掘立柱建物が検出されている。現時点で復元しえた掘立柱建物の棟数は、可能性のあるものも含め、約20棟である。検出された掘立柱建物の大要を、調査区の西から東にむかって順にまとめると、第11表のようになる。

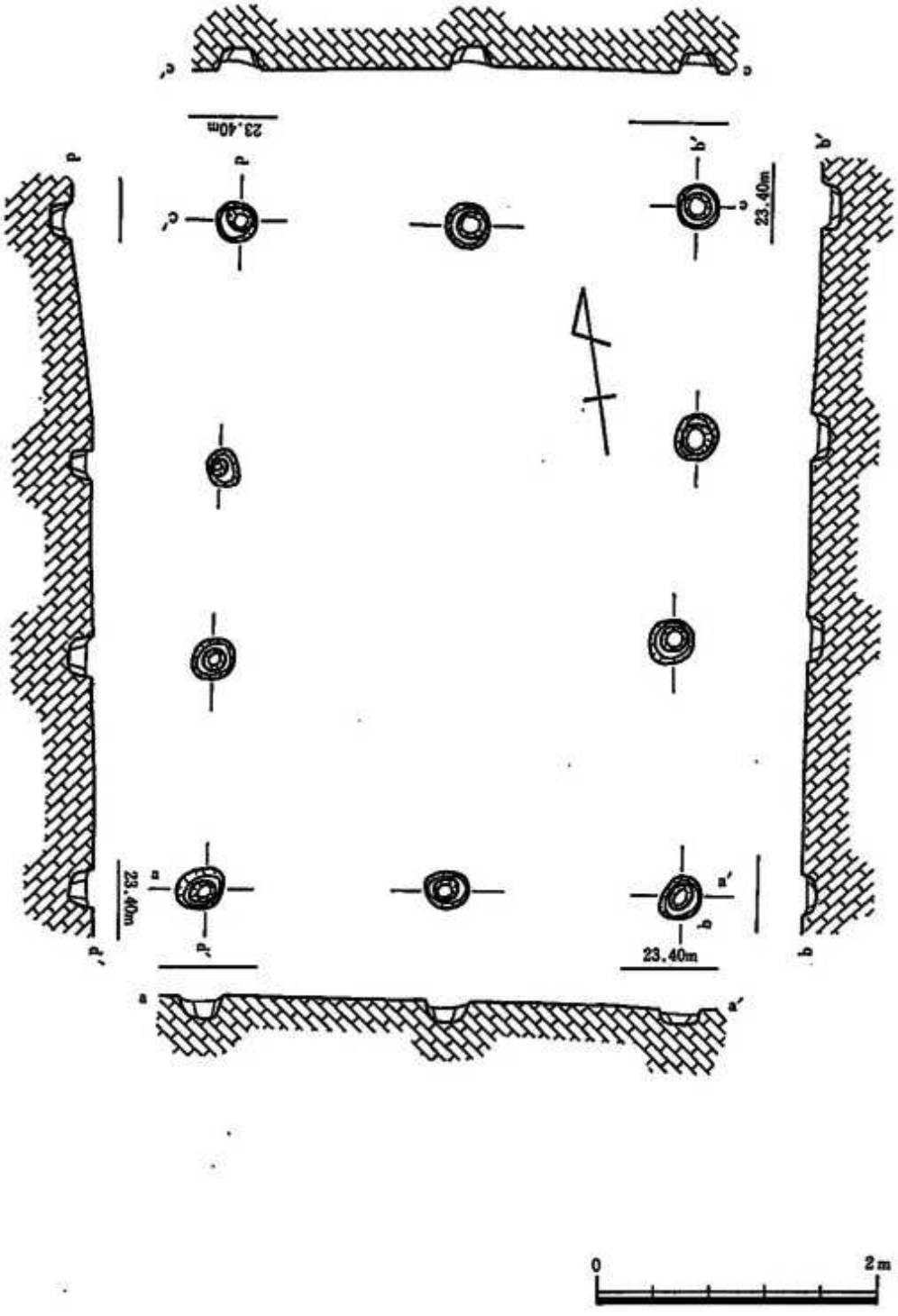
第11表からもわかるように、検出された20棟の掘立柱建物のうち、ピット内より遺物を出土したものは、SBP1、SBP2、SBP6、SBP9、SBP10、SBP11、SBP15の合計7棟である。出土した遺物は、すべて須恵器片であり、器種としては、坏、甕、高坏などをあげることができるが、いずれも小破片である。時期のある程度判断できるものと、そうでないものとがあるが、まず事実関係から先に述べるならば、SBP1のピットからは、須恵器の坏や甕（内面に青海波文のタタキあり）の破片、SBP2のピットからは坏身片、SBP6のピットからは高坏片、SBP9のピットからは甕破片、SBP10のピットからは高坏片、SBP11のピットからは坏身片と坏蓋片、そしてSBP15のピットからは、須恵器の甕破片に加えて土師器の甕破片などが出土している。遺物は、すべて、ピットのほりかたの中からの出土であるが、個別的に遺物それ自体の時期をみていく限り、SBP1、SBP2からの出土遺物は6世紀後半～末葉、SBP6からの遺物は6世紀末葉、SBP9、SBP10は7世紀初頭、SBP11は6世紀中葉～後半、SBP15は8世紀頃のものと判断してよいと思われる（第39図）。但し、ここで注意を要するのは、掘りかたの中で検出される遺物の時期をもって、それを即掘立柱建物の構築年代とすることは必ずしもできない場合があるという点である。すなわち、今述べたように、SBP1、SBP2、SBP6の3棟の建物のピットは、確かに単独固有に6世紀代の遺物を出土してはいる

第11表 掘立柱建物一覧表

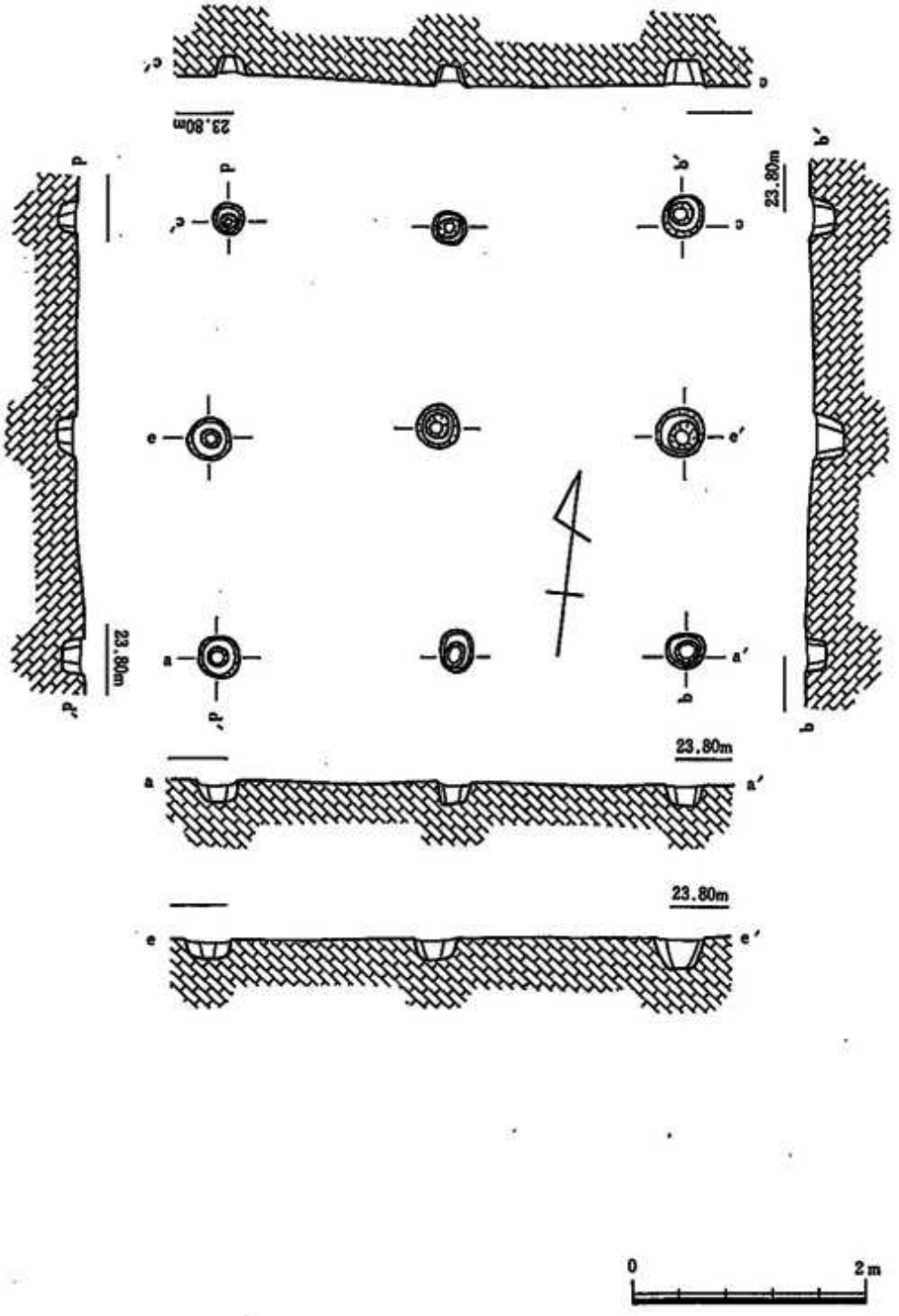
掘立柱建物番号	規模	柱間距離(m)	軸角	機能	備考
SBP1	2K × 3K	3.92 × 5.68	N−16.0°−E	倉庫	ピットより、6C代の坏、甕出土 但し、周溝をきるので8C以後
SBP2	2K×1K以上	3.92×2.32以上	N−16.0°−E	(不明)	ピットより、6C代の坏身出土 但し、周溝をきるので8C以後
SBP3	2K×2K以上	4.16 × 4.56	N−24.0°−E	住居	遺物なし 但し、周溝との切りあいから8C以後
SBP4	2K × 3K	3.76 × 4.80	N−10.5°−E	住居	遺物なし 但し、周溝との切りあいから8C以後
SBP5	2K × 3K	3.84 × 6.24	N−21.5°−E	住居	遺物なし
SBP6	2K × 3K	4.32 × 6.40	N−24.0°−E	倉庫	ピットより6C代の高坏出土 但し、周溝をきるので8C以後
SBP7	2K×2K以上	4.56 × 4.56	N−29.0°−E	倉庫	遺物なし 但し、周溝をきるので8C以後
SBP8	2K×1K以上	3.76 × 3.20	N−10.5°−E	倉庫	遺物なし 軸角SBP4と近似
SBP9	2K × 2K	4.16 × 3.28	N−39.5°−E	住居	ピットより、7C代の甕出土
SBP10	2K × 2K	4.08 × 3.92	N−39.5°−E	不明	ピットより、7C代の無蓋高坏出土
SBP11	2K × 2K	3.84 × 3.84	N− 6.5°−W	倉庫	ピットより、6C後半の坏身、坏蓋出土
SBP12	2K × 2K	3.20 × 3.20	N−24.0°−E	住居	遺物なし 軸角SBP3、SBP6と近似
SBP13	2K × 2K	3.76 × 3.28	N−41.5°−E	住居	遺物なし
SBP14	2K × 2K	4.24 × 4.24	N−29.0°−E	住居	遺物なし 軸角SBP7と近似
SBP15	2K × 2K	3.28 × 3.28	N−36.0°−W	倉庫	ピットより、8C代の甕破片 土師器甕破片出土
SBP16	2K × 2K	3.68 × 3.28	N−24.0°−E	住居	遺物なし 軸角SBP3、SBP6と近似
SBP17	2K × 2K	3.12 × 3.12	N−19.0°−E	不明	遺物なし
SBP18	2K × 2K	4.06 × 3.76	N−19.0°−E	住居	遺物なし
SBP19	2K × 2K	3.20 × 3.12	N−29.0°−W	住居	遺物なし
SBP20	2K × 2K	2.80 × 2.64	N−19.5°−E	住居	遺物なし

が、しかし、これらの建物は、遺構平面略図が示す如く、方形周溝墓STS1の周溝およびその西側に隣接する周溝状遺構の上層から掘りこんで構築されたものであり、しかもそれらの周溝もしくは周溝状遺構の上層からは、6世紀中葉以降の遺物や7世紀末葉から8世紀代にかけての遺物等が多数出土しているので、結局、これら3棟の掘立柱建物は全て8世紀代以後の構築物として把える必要があるということである。他方、SBP3、SBP4（第20図）、SBP7の3棟の建物に関しては、これらの構築物のピットから遺物は一片も検出されはしなかったものの、これらの建物が、SBP1、SBP2、SBP6の場合と同様、周溝もしくは周溝状遺構をきって構築されているという同一の理由に依り、これらの建物の時期については、それを8世紀代以降に求めてよいかと思われる。そして、他のSBP9、SBP10、SBP11（第21図；図版31上）、SBP15の4棟の建物の時期に関しては、強力な反証もないので一応、出土遺物に近似する時期をあててよいと考えている。

次に、ひとつの試みとして、建物の軸角にも注目しておきたい。上述の合計20棟の建物を、軸

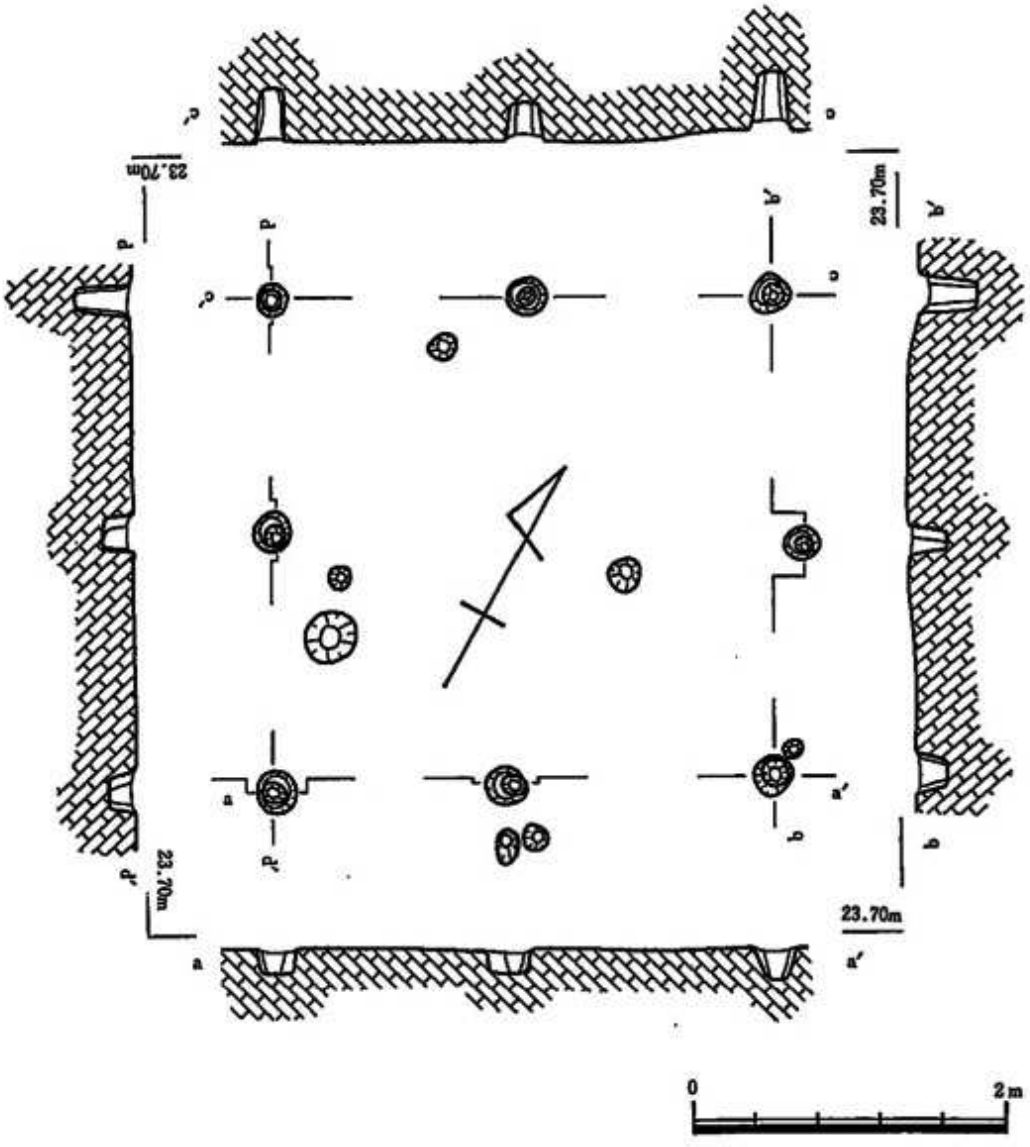


第20図　ＳＢＰ４平面図・断面図



第21図　ＳＢＰ11平面図・断面図

角の異同性によって分類すれば、大きく12種に分類できる。先ず座標北より西に振れているものから探すと、N—36.0°—Wの振れをもつＳＢＰ15(1)、N—29.0°—Wのふれをもつ ＳＢＰ19(1)、N—6.5°—WのＳＢＰ11(1)の計３棟、次に座標北より東への振れをもつものとして、N—10.5°—EのＳＢＰ４並びにＳＢＰ８(2)、N—16.0°—EのＳＢＰ１とＳＢＰ２(2)、N—19.0°—EのＳＢＰ17とＳＢＰ18(2)、N—19.5°—EのＳＢＰ20(1)、N—21.5°—EのＳＢＰ５(1)、N—24.0°—EのＳＢＰ３、ＳＢＰ６、ＳＢＰ12、ＳＢＰ16(4)、N—29.0°—EのＳＢＰ７とＳＢＰ14(2)、N—39.5°—EのＳＢＰ９とＳＢＰ10(2)、N—41.5°—EのＳＢＰ13(1)の17棟、合計20棟となる。もし仮に、軸角の共通性が建物の同時代性を反映するものであると仮定できるのであれば、遺物を出土していない他の建物の時期についても、遺物を出土している同一軸角を有する別の建物から



第22図　ＳＢＰ19平面図・断面図

ある程度の類推が可能となる。すなわち、ＳＢＰ８はＳＢＰ４の軸角と同値であり、また、ＳＢＰ12、ＳＢＰ16はＳＢＰ３、ＳＢＰ６の軸角と共通、一方、ＳＢＰ14はＳＢＰ７の軸角と共通、同値であり、いずれも８世紀以後の建物である可能性が強い。（但し、ＳＢＰ14などは、ＳＢＫ５、ＳＢＫ６とのグルーピングも考ええられ、ここに軸角のみを中心にすえて、建物の時期分類をする場合の問題点が露呈される。しかし、一方では竪穴住居と掘立柱建物を同一に論じることに問題があるとの反論も生起しうる。）

ＳＢＰ５、ＳＢＰ13、ＳＢＰ17、ＳＢＰ18、ＳＢＰ19（第22図；図版31下）、ＳＢＰ20の６棟の建物に関しては、その構築時期を決定するための直接的な資料は勿論、間接的な情報にすら十分恵まれていない。ただ、軸角の近似性だけに着目すれば、ＳＢＰ５はＳＢＰ３、ＳＢＰ６、ＳＢＰ12、ＳＢＰ16などの８世紀代の掘立柱建物の軸角に最も近いことがわかるし、一方、ＳＢＰ13などは、ＳＢＰ９、ＳＢＰ10の軸角に近似しており、７世紀前半の建物である可能性もある。ＳＢＰ17、ＳＢＰ18、ＳＢＰ20の掘立柱建物に関しては、これも時代を決定しうる明確な情報はないのであるが、強いて言うならば、軸角19°前後であって、他の８世紀代およびそれ以降の掘立柱建物の軸角に包摂されているといえる。他方、ＳＢＰ19は、軸角N—29.0°—Wであって、後述する、ＳＫＡ16、ＳＫＡ20などと同様の、中世遺構の方位を有しており、それによって中世の時期であると決定しうるかもしれないが、この方法は、全般的に極めて冒険にすぎており、危険度が高いと思われる。確実と思われるものだけをおさえ、あとは不明というしかない。

さて以上が、菱木下遺跡第Ｉ調査区における検出された掘立柱建物合計20棟の大筋であるが、これら建物群の全体を概括的にみてわかることは、弥生時代中期後葉以後、一時、定住生活圏としては放棄されていたこの土地が、再び６世紀後半（古墳時代後期）以降、人々の生活の場として息づき始めるということである。そして、この際、建物の地域の選定に関し若干の問題点が存在しており、それは、人々が古墳時代後期に至ってこの地に再び定着しはじめた頃、この台地上西側縁辺に点在していた方形周溝墓の周溝は完全に埋まりきっておらず、（周溝上層遺物が示しているように、６世紀中葉から８世紀の長期にわたって、非常に緩やかな仕方で周溝は閉じていくので）周溝墓域の地盤は、きわめて不安定であったということである。従って、当地域における古墳時代後期以降における建物の新設は、当然の事ながら、地盤の未だ安定していない方形周溝墓の周溝域を避けて、より東側の、地盤の比較的安定した台地上の高所から始められたということになる。

そして、このことと関連して、軸角による年代推定の方法ではなく、出土した遺物による直接的な方法でみる限り、ＳＢＫ５、ＳＢＫ６の隅丸方形竪穴住居址、およびＳＢＰ９、ＳＢＰ10、ＳＢＰ11の掘立柱建物など、６世紀から７世紀代にかけての、言わば泉北台地上における古墳時代後期以降の比較的早い時期の建物は、先ず調査区中央部分の地盤の安定した地域に建てられはじめ、遺構区西北端部分には調査区西側の方形周溝墓域の周溝がほぼ完全に埋まったあと（それは８世紀代のことである）で、掘立柱建物が進出してくることになるのである。殊にＳＢＰ１の

掘立柱建物付近では、地盤が脆弱であったためか、整地のため、直径4～5cm前後の礫が多数、敷かれていた点に注意がひかれた。

なお、居住そのものに必要な住居と、生活資産の備蓄のために必要な倉庫との組み合わせ、もしくは対応関係については、竪穴住居址ＳＢＫ５およびＳＢＫ６に関しては、先程ふれたようにＳＢＰ14とのグルーピングが可能であるかもしれない。他の掘立柱建物19棟に関しては、軸角を基準とする方法で住居と倉庫の単位析出を試みる、たとえば、ＳＢＰ４（住）とＳＢＰ８（倉）、ＳＢＰ３（住）、ＳＢＰ12（住）、ＳＢＰ16（住）とＳＢＰ６（倉）、ＳＢＰ14（住）とＳＢＰ７（倉）をそれぞれひとつのユニットとして把えることが仮に正しい操作であるにしても、トータルなかたちで、住居１棟に対してほぼ同じ大きさを有する倉庫１棟の対応というのは、恐らく後者の方の比重が大きすぎるから、今回の調査域より外側の未調査区域の部分において、他の住居址群が横たわっている可能性も否定することはできない。調査区の西接区である西浦橋遺跡から、13～14棟前後の竪穴住居址が検出されているが、時期は５世紀後半から６世紀後半頃にかけての遺構であると判断されている。２間×２間の倉庫も１棟だけ付随しているが、時期は今述べた竪穴住居址の時代の一時期に対応するものであると報告されている。従って、これらの事実から想定されることは、先ず６世紀代の人々の生活圏に関して言えば、人々は先ず５世紀後半に西浦橋の領域に定着しはじめ、その後、６世紀後半乃至は末葉の時期に至って、何らかの理由でそのテリトリイを捨てて、菱木の台地上に移動してきたか、或いは現時点では未確認であるが、既に５世紀中頃には台地上にも生活居住域が開けており、一時期、西浦橋遺跡の居住域と併行して営まれていたが、やがてそれが、６世紀末葉に至って、台地上の生活圏に吸収されていくことになったか、いずれかの経緯を考えることができる。殊に、８世紀代の生活空間としては、西浦橋遺跡において、その時期に相当する遺構の検出がなされていないために、人々の居住域は台地上に集中していた可能性も大きい。これらの問題の解決については、今後の調査に委ねることにする。

C　溝状遺構

古墳時代もしくはそれ以後に属する溝状遺構としては、ＳＤＡ３、ＳＤＡ４の２本の溝を挙げることができる。

ＳＤＡ３　ＳＤＡ３は、掘立柱建物ＳＢＰ20の東方約10m付近を、座標北に対して、おおよそN－32°－Wの振れで、東南方向から西北方向にむかって流れていく人工水路である（第１図参照）。丁度、この旧流路の流れに沿って、現代の水路が走っているので、旧流路の中央部分は、殆んど破壊を被っているものと思われるが、しかしそれでも、調査区の北端付近と南端付近においては、このＳＤＡ３の西肩、東肩をそれぞれ確認することができる。このＳＤＡ３の幅は約110cm内外、深さは、ＳＢＫ３の南壁断面の観察などから、おおよそ20cm前後と考えられる。

このＳＤＡ３の中から若干の遺物が出土しているが、その内容としては、サヌカイト製の石槍１点（第50図）や須恵器片３点、瓦器片５点などが挙げられる。須恵器片の中には、坏蓋や器台

の破片が出土しているが、これらの遺物の年代は、ほぼ6世紀末葉以降、7～8世紀頃のものと思われる。他に、瓦器片も出土しているが、すべて瓦器椀の小破片であり、その中に高台部分の破片などは検出しえなかった。また、ロクリングを受けているため、暗文のようすなども十分に把握しえなかった。なお、サヌカイト製の石槍については、この遺物自体は、弥生時代の製品であると思われるが、但し、出土した層位が、ＳＤＡ３の最上層部分であって、瓦器片出土の層位よりも相対的に新しい位置から出土しているために、ＳＤＡ３が開削され、その溝が徐々に埋まってやがて機能を失いかけた頃に、ＳＢＫ３乃至は４の部分的削平が進行して、そのおり、この石槍片がＳＤＡ３内上層に混入したものと考えられる。いずれにせよ、この溝状遺構ＳＤＡ３は、早くても、6世紀末葉ないし7世紀頃に開削され、その後機能しつづけて、中世のある時期まで、一定程度の機能を果たしていたものと考えられる。なお、現代においてもこの水路はヒューム管をいれて生きつづけており、中・近世の期間を経過したあと今日に至るまでの、水路の保守性、定着性といったものを感じさせる。

ＳＤＡ４（第23図；図版32、33）　古墳時代もしくはそれ以後に属すると思われる溝状遺構が、もう一本、調査区内を走っている。丁度、弥生時代の竪穴住居址ＳＢＫ４の東側 2.8m付近のところを、東南の方向から西北の方向へむかって流れていく流路である。溝の幅は狭いところで42cm前後、広いところでは約 100cm程の幅がある。溝の深さに関しても、残存状態はきわめてよく、深いところで33cm前後、浅いところでも18cm前後の深さを測った。このＳＤＡ４は、先程のＳＤＡ３とは異なり、数多くの遺物を内包していたが、主として、溝内の２ヶ所において、遺物の集中がみられた（図版33）。そのうちのひとつの状況が第23図に示した通りである。出土した土器は、すべて須恵器片のみであり、土師器片や瓦器片は含まなかった（図版166下、167）。出土した須恵器の破片数は合計 132片を数えたが、器種構成としては、圧倒的に甕と坏蓋、坏身の比率が大きく、前者は70片、後者は51片を数えた。一方、壺（長頸、短頸を含む）、瓶、高坏、鉢などの出土もみられはしたが、その出土点数は少なく、長頸壺、短頸壺、瓶、鉢はそれぞれ１点だけの出土、高坏にしても、僅かに６点を数えるのみであった（第48図）。これらの出土遺物から推す限り、溝の機能した時期は、６世紀中葉ないしは後半から８世紀代の頃までと判断される。他に石製品として、凹み石も出土している（第51図；図版169下）。そして、このＳＤＡ４を境界として、その西側に住居址群が、他方東側に土壙墓群が集中して存在する事実から、このＳＤＡ４に対して、単に導水的機能だけでなく、基本的には、居住区と墓域との区画溝的な意味を付与してもよいかと思われる。

Ｄ　ピット

古墳時代以後の時期に属するピットに関しては、その性格の明確な幾つかについては、すでにＢ　掘立柱建物の項の中で論じたとおりである。調査区全体にわたって、多数のピットが検出されてはいる（第１図参照）ものの、その中で遺物を共伴するものは極めて少なく、ましてや、それら遺物片のうちで、時代性を明確に示しているものと言えば、僅かに４・５点のみである。

それらのうちの幾つかを紹介すると、それらはすべて須恵器片であるが、1号周溝墓の西側のＰ110からは、高坏の脚台部、3号周溝墓東側のＰ111からは坏身片および高坏片、ＳＢＫ1のすぐ東側にあるＰ112からは器台口縁部の破片、そして、調査区東端の道路状遺構上のＰ113からは、唐津焼と思われる近世陶磁器片と素焼の炮烙片とが出土している（第39図）。しかし、ピットの性格自体がどのようなものであるかについては、詳細は不明である。

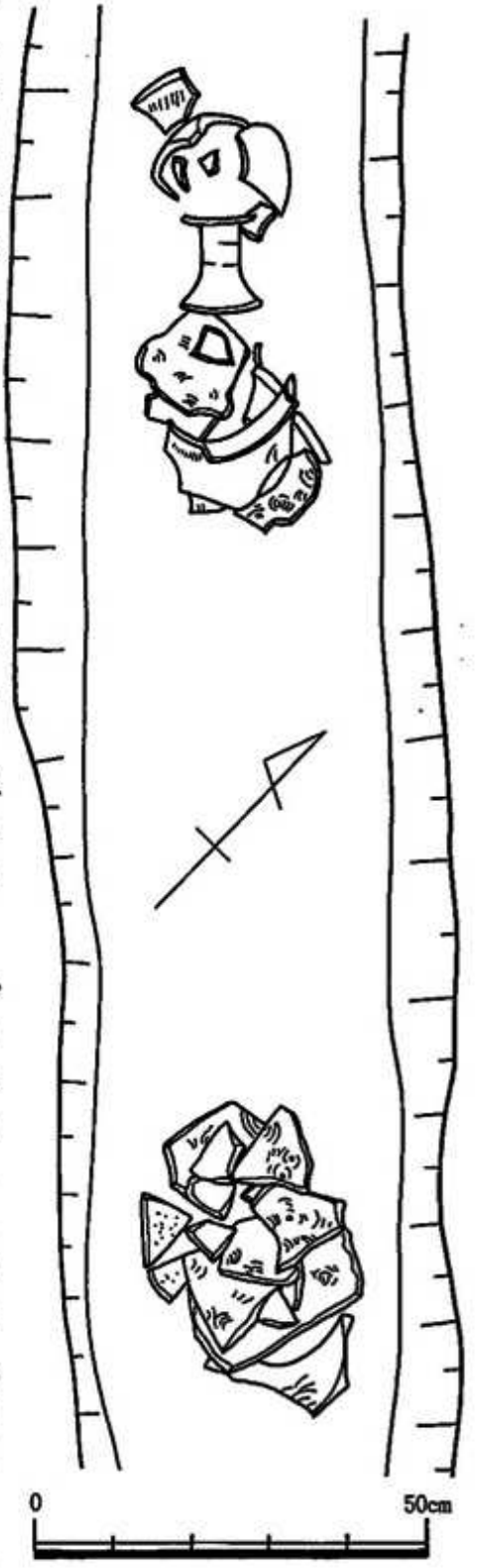
Ｅ　土壙および土壙墓（図版32）

古墳時代以後の土壙は、調査区の西端部と中央部、そして東端部の、大きくわけて3ヶ所において集中してみられる。この時期に所属する土壙は約35基を数えるが、それぞれが保有した機能は、大別して三種類に分類してよいように思われる。すなわち、一応の案として挙げれば①ＳＫＡ9～ＳＫＡ19の土壙が示すような、生活遺物廃棄用と思われる中型土壙、②ＳＫＡ20、ＳＫＡ21のような、大形隅丸長方形の平面形をもつ貯水槽的機能を有したと思われる土壙、そして、③ＳＴＫ6からＳＴＫ27に至る20基内外の土壙墓群である。

土壙の内容を表にまとめると、第12表のようになる。

土壙（第24・25図；図版35上）　先ず、ＳＫＡ9からＳＫＡ21までの13基の土壙群を通観するのに、5基の土壙は遺物を伴なわないが、他の8基は遺物を伴出している。検出された遺物の主な内容は、欄内にまとめた通りであるが、それに依拠して時期を想定するとＳＫＡ9、ＳＫＡ10（図版35）、ＳＫＡ12などは、中世に属する土壙であると考えられる。ＳＫＡ11は遺物の伴出をみなかったが、土壙の埋土の様子からすると、それは淡灰色の粘質土が入っていて、ＳＫＡ7の色調に比較的類似しており、古墳時代後期から奈良時代にかけての土壙である可能性もある（第24図）。

ＳＫＡ13、ＳＫＡ14、ＳＫＡ15の3基の土壙に関しては、最後のＳＫＡ15だけが遺物を出土しているが、



第23図　ＳＤＡ4遺物出土状況

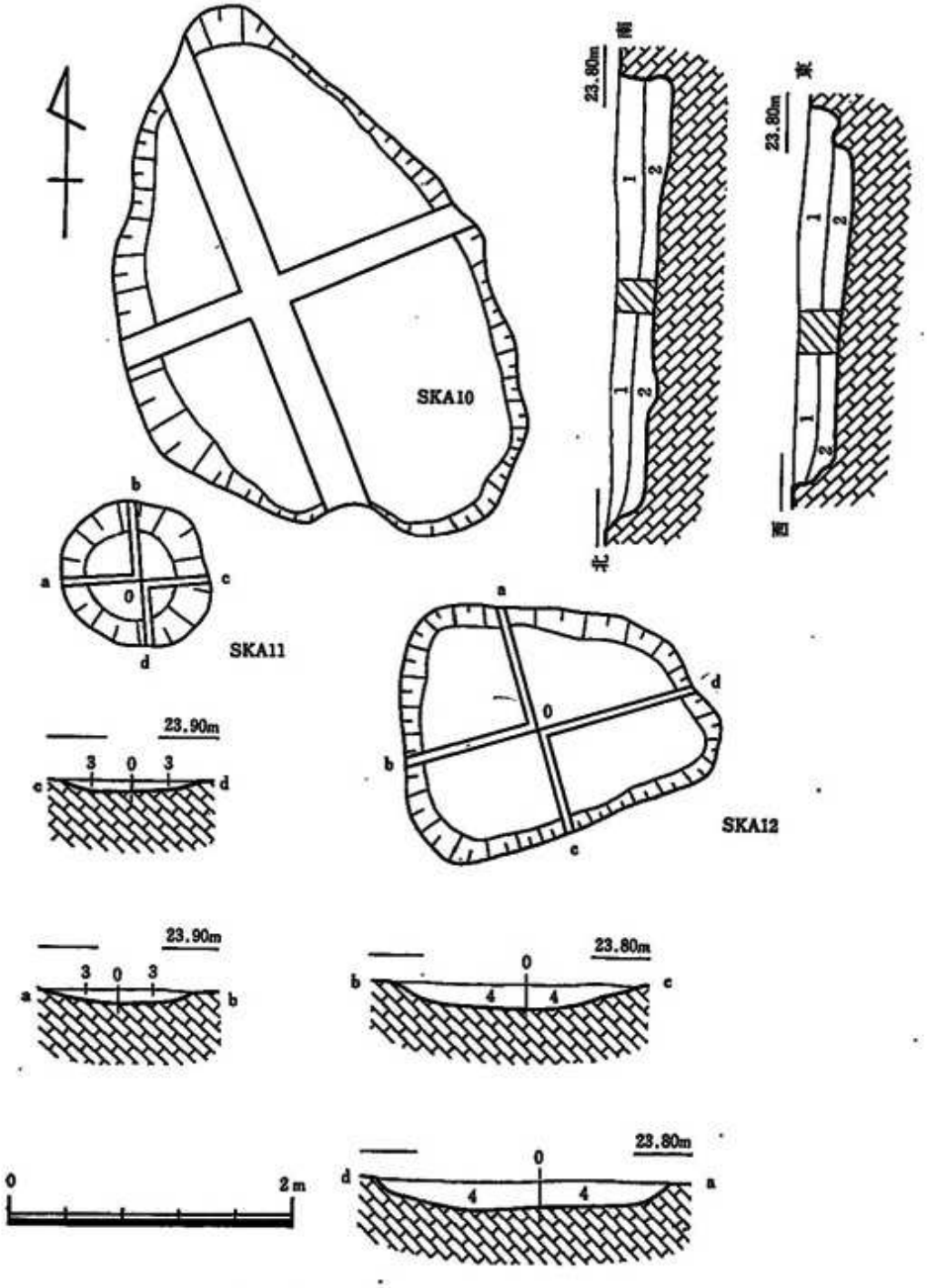
第12表 土 壙 一 覧 表

土壙番号	平面形態	長径×短径(cm)	深さ(cm)	出 土 遺 物	備 考
SKA9	不 整 形	191 × 160	10	土師器片 須恵器片（坏、甕） 瓦器片	中世
SKA10	不整楕円形	407 × 270	37	土師器片 須恵器片（坏、壺、甕、高坏） 瓦器片、青磁碗	
SKA11	円 形	110 × 106	9	な し	古墳時代後期 ～奈良時代？
SKA12	隅丸方形	226 × 179	18	須恵器片（坏、壺、甕） 須恵質瓦、瓦器	中世
SKA13	不 整 形	440 × 367	32	な し	SDA4より新しく SKA14より古い。 奈良～中世
SKA14	不整楕円形	224 × 129	32以上	な し	SKA13より相対的に新しい。
SKA15	長楕円形	346 × 160	19以上	須恵器片（坏、甕、高坏）	SKA13より新しく SKA20より古い。 奈良～中世。
SKA16	不整楕円形	266 × 152	14	な し	中世
SKA17	不 整 形	282 × 163	15	弥生式土器片（壺） 須恵器片（坏、壺、甕、高坏） 瓦器片	中世
SKA18	隅丸長台形	346 × 184	20	弥生式土器片 土師器片、須恵器片（坏） 瓦質土器、瓦	中世
SKA19	隅丸方形	166 × 124	8	な し	中世
SKA20	隅丸長方形	453 × 306	33	須恵器片（坏、壺、甕） 須恵質瓦、瓦器、砥石 瓦質土器、瓦、土師器片	中～近世
SKA21	隅丸長方形	819 × 283	41	須恵器（坏身、高台付き坏、壺、器台）、瓦器、瓦質土器、青磁、信楽焼甕、羽釜、瓦、石鍋	中～近世
SKA22	楕 円 形	224 × 80	38	土師質羽釜	近世

その出土している須恵器片は主として、坏、甕、高坏の破片である。一方、土壙SKA13がSKA14によってきられていること、SKA14はSKA15にきられていること、またSKA15はSKA20によってきられていること、更に、SDA4がSKA13によってきられていることなどのきりあい関係を総合するならSDA4、SKA15、SKA20各々からの出土遺物が、比較的明確な時代性を有しているので、それらを考慮にいれる時、SKA13、SKA14の所属の年代は、おおよそ奈良時代以降中世を含む時期の土壙とみてよいと思われる（第25図）。

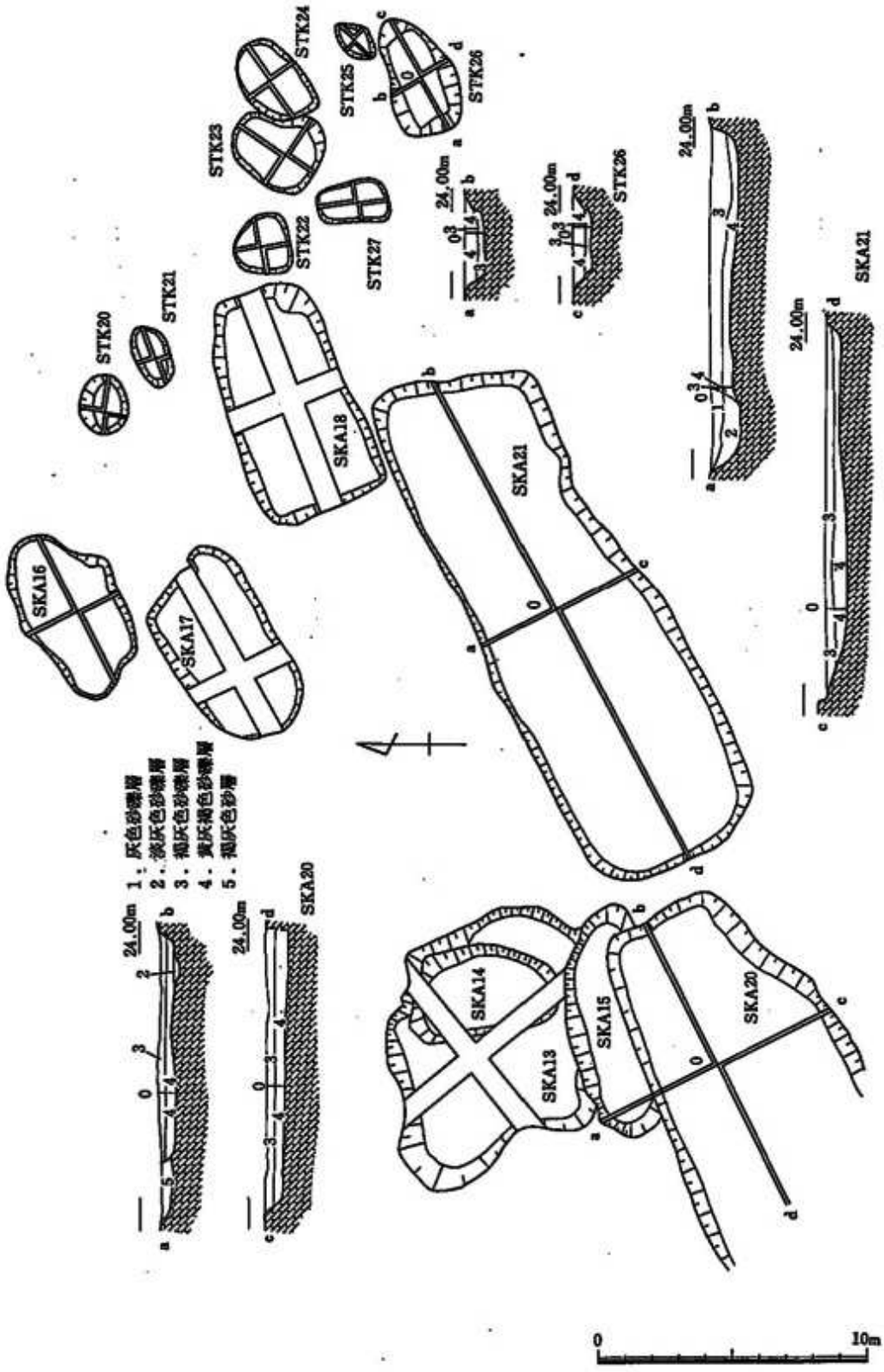
一方、SKA16、SKA17、SKA18、SKA19の4基の土壙のうち、遺物を伴出したものは、SKA17、SKA18の2基に限られるが、新しい要素として、瓦器や瓦質土器を含む土壙であり、中世土壙とみなして大過ないと思う。

SKA20、SKA21の2基の土壙は、今まで述べた如何なる土壙よりも規模において大きく、深さも、一層深いものとなっている。出土遺物も圧倒的に多く、他の土壙からの出土遺物が、せいぜい10点以内におさまるものが多いのに対し、SKA20は62点以上、SKA21は 844点以上の



1．黄褐色粘質土　　3．濁灰茶色砂質粘土
2．茶灰色砂質土　　4．茶灰色粘質土

第24図　ＳＫＡ10～12平面図・断面図

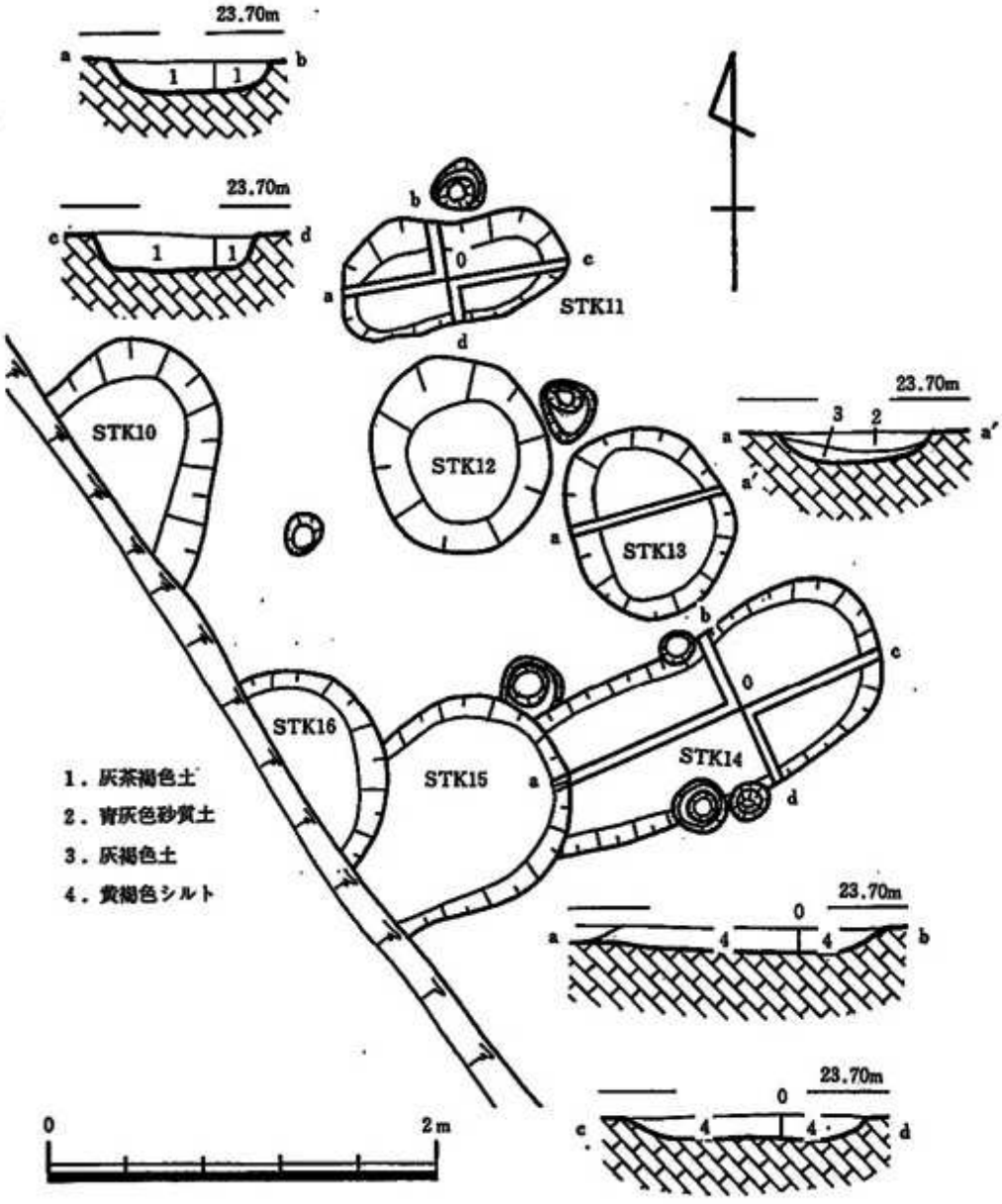


第25図　ＳＫＡ13～18・20・21及びＳＴＫ20～25平面図・断面図

破片を出土している。前者の内訳としては、土師器片５点、須恵器片49点、瓦器片２点、瓦質土器片１点、瓦２点、陶磁器片３点を挙げることができるし、後者の内訳としては、弥生式土器片２点、土師器片34点、須恵器片 743点、瓦器片11点、瓦質土器片７点、瓦15点、青磁片２点、擂鉢片４点、陶磁器片25点、炮烙１点を指摘することができる（第47図）。他に各々の土壙から石製品として、砥石や石鍋の破片も出土している（第51図；図版 169 下）。これら２基の土壙は、いずれも30～40cm前後の深さをもち、しかも土壙側壁面が少しくオーバーハングする傾向をもつので、これらの土壙は他の土壙とは性格を異にして、溜水的機能もしくは貯水槽的機能を有する土壙であったと考えられ、その機能が停止したあと、土器類が投棄されていったものと思われる。時期は中～近世の土壙である。なお、ＳＫＡ22に関しては、次項のＦ　古道の中でのべることとする。

土壙墓（第26図；図版34上）　さて、次に今までの土壙とは性格を異にする、土壙墓すなわちＳＴＫの幾つかについて、その内容を説明することにしたい。ＳＴＫ６からＳＴＫ27まで、古墳時代もしくはそれ以後に属すると思われる土壙墓は合計22基を数えるが、その分布域は主として４群に分けることができる。すなわち第Ⅰ群はＳＴＫ６からＳＴＫ９までの４基であり、第Ⅱ群はＳＴＫ10からＳＴＫ16までの７基（第26図）、第Ⅲ群はＳＴＫ17からＳＴＫ19までの３基、そして第Ⅳ群はＳＴＫ20からＳＴＫ27までの８基である。土壙の規模は、大きいもので、長辺×短辺の長さが185cm×101cm前後、小さいもので42cm×40cm前後、また残存する深さも40cmくらいのものから５cm程度のものまで様々である。恐らく被葬者の内訳はきわめて広汎であり、成人葬から幼児葬まで各層含まれているものと考えられるが、埋葬の形態としては、ＳＴＫ26のような、方形の掘りこみを有し、木棺直葬を行なったと思われる「伸展葬」の形式（図版34上。但し、他に木棺を伴なわぬ単なる土壙内伸展葬もあり、当該遺跡では、むしろ、後者の方が一般的である）と、ＳＴＫ23のような、たとえ長辺の長さは短かくても、横幅の幾分広い「屈葬」の形式との両方の形態を考えることができる。

さてＳＴＫ６からＳＴＫ９までの第Ⅰ群に関しては、明確な遺物の伴出例がなく、時代の同定を試みることはむずかしいが、埋土の比較という点からいうと、弥生時代に所属する可能性もある。ＳＴＰ１が近接していることも、その点の示唆となるかもしれぬ。ＳＴＫ10からＳＴＫ16の第Ⅱ群の７基の土壙に関しては、ＳＴＫ10（Ⅳ期の須恵器片出土）、ＳＴＫ13（Ⅱ期の須恵器片出土）、ＳＴＫ14（土師器片出土）、ＳＴＫ15（Ⅳ期の須恵器片出土）の４基の土壙が遺物を出土しているが、それらの出土遺物は、混入物と考えられる若干の弥生式土器片を除外すれば第Ⅱ期から第Ⅳ期を含む時期の須恵器片が中心であって、古墳時代後期、或いは奈良時代以後の土壙墓であると考えられる。第Ⅲ群のＳＴＫ17、ＳＴＫ18、ＳＴＫ19の３基の土壙に関しては、ＳＴＫ17から混入遺物である紀州系の弥生式土器片が、そして、ＳＴＫ18からは土師器甕の口縁部や須恵器の坏片（Ⅳ期）が出土している。一方、ＳＴＫの19からは、遺物の出土はみられなかったが、埋土の近似性から、この土壙を含め、３基とも古墳時代後期ないしは奈良時代前後の土壙と



第26図　ＳＴＫ10～16平面図・断面図

考えられる（第39図）。第Ⅳ群のＳＴＫ20からＳＴＫ27までの８基の土壙に関しては、先程述べた方形のほりこみをもつＳＴＫ26が、ただ１基須恵器片を出したのみであるが、埋土比較からは、それらは第Ⅰ群、第Ⅱ群、第Ⅲ群のいずれとも異っており、中世土壙墓群の可能性がある。叙上の部分をまとめると、第13表のようになる。

以上が、古墳時代およびそれ以降における、土壙および土壙墓群に関する説明である。

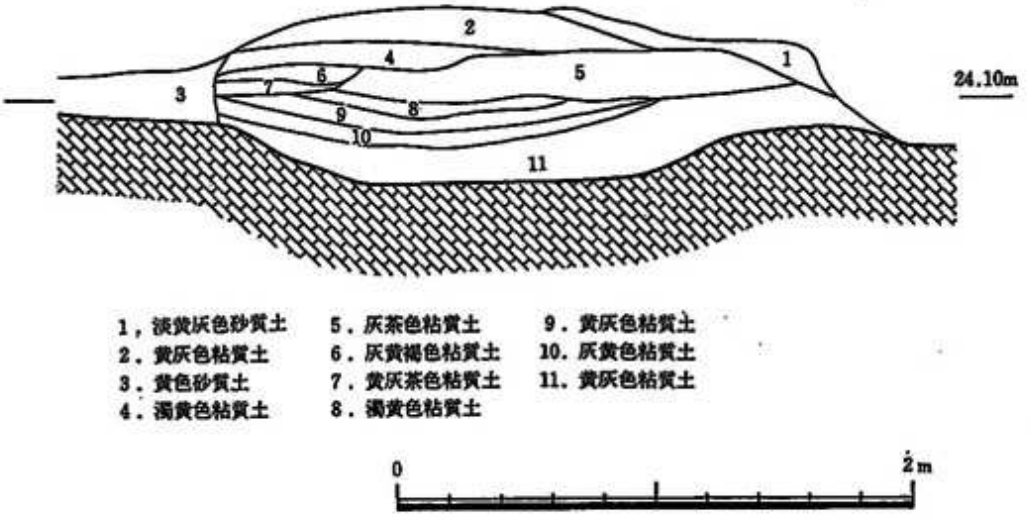
Ｆ　古道　（第27図；図版35下）

菱木下遺跡第Ⅰ調査区における遺構のうち、最後にもうひとつだけ触れておく必要があるのは、第Ⅰ調査区東端において検出された、古道の遺構である。道幅約 3.5mをはかり、遺構区東南方

第13表 土 壙 墓 一 覧 表

	土壙番号	平面形態	長径×短径(cm)	深さ(cm)	出 土 遺 物	備 考
第Ⅰ群	STK6	不整長楕円形	155以上×76	8	な し	以下の4基は埋土より弥生時代の土壙墓の可能性がある。
	STK7	短楕円形	61 × 53	6	な し	同 上
	STK8	不整長方形	119 × 65	5	な し	同 上
	STK9	正 円 形	42 × 40	9	な し	同 上
第Ⅱ群	STK10	不整楕円形	84以上×101	10	弥生式土器片（壺） 須恵器片（甕・坏）	以下、STK10～STK16まで密集。古墳時代後期或いは奈良時代以後。
	STK11	不整隅丸長方形	114 × 60	18	な し	STK10の埋土に酷似。
	STK12	円 形	102 × 94	19	な し	同 上
	STK13	不整楕円形	101 × 83	15	弥生式土器片 須恵器片（甕）	
	STK14	長楕円形	177以上×86	12	土師器片	
	STK15	長楕円形	121以上×103	15	須恵器片（坏身）	切り合いによりSTK14より新しい。
	STK16	円 形	113以上×52以上	13	な し	切り合いによりSTK15より新しい。
第Ⅲ群	STK17	不整円形	86 × 70	40	弥生式土器片（紀州系）但し、混入遺物	以下、STK17～STK19まで密集古墳時代後期～奈良時代前後
	STK18	不整楕円形	106 × 82	13	土師器片 須恵器片	埋土はSTK17に近似。
	STK19	不整楕円形	136 × 78	26	な し	埋土はSTK18に近似。
第Ⅳ群	STK20	楕円形	88 × 70	8	な し	以下、STK20～STK27まで密集。中世。
	STK21	楕円形	94 × 50	12	な し	埋土はSTK20に酷似。
	STK22	不整隅丸三角形	88 × 84	7	な し	同 上
	STK23	隅丸台形	136 × 118	14	な し	同 上
	STK24	不整楕円形	133 × 90	11	な し	同 上
	STK25	不整菱形	73 × 46	7	な し	同 上
	STK26	不整楕円形	185 × 101	21	須恵器片（壺、甕）	方形の掘りこみあり。
	STK27	隅丸長方形	105 × 58	8	な し	埋土はSTK20に酷似。

向から西北方向へと伸びている遺構である。その南側部分での断面は、第27図に示した通りである。この遺構をきって、幾つかのピットが営なまれているが、特にピット113からは、近世陶磁器である唐津焼や、近世の硬質土師器である炮烙などが出土している。また、古道上面からほりこまれたＳＫＡ22の中からは、土師質の羽釜が出土している（第39図）が、このことは、古道の淵源が比較的古く、中世にまでさかのぼる可能性を示している。そして以来、近世後期まで機能していたことはたしかである。



第27図　ＳＲ１（古道）断面図

Ｇ　小結

以上、古墳時代およびそれ以後の遺構について、その大要をみてきたわけであるが、今まで説明してきた通り、弥生時代中期以後、とりわけ弥生第Ⅲ様式の段階以後、生活圏として一時放棄されていたこの菱木下付近一帯が、再び生活の舞台として息づき始めるのは、６世紀後半以後のことである。人々の移動は当初から大々的なものではなく、その定住の過程はきわめて緩慢なものであったが、人々は先ずこの地に伝統的な形式の竪穴住居をたて、農耕を中心とする生活をはじめた。この時期は、すでに日常生活具としては、須恵器が中心を占めており、中には焼成不良で歪みをもった須恵器なども日常生活の中では使用されていたことがわかるが、２棟の重複して検出された隅丸方形の竪穴住居址の規模やその中から出土した日常雑器類を比較してみるだけでも、当時の急速な世帯人員の増加の傾向や、農業生産力の発展、食生活の向上などの様相を容易に類推することができる。続く掘立柱建物自体の急増や、建物全体の中に占める倉庫的機能をもった建物の比率が高いことも、当時の発展ぶりを彷彿とさせている。恐らく、その背景には、農業生産技術の進歩向上や、灌漑水利の整備の進捗など、さまざまな要素が横たわっていたものと思われる。以後、人々はこの地を定住の地として固定したようであり、墓地も居住空間に比較的隣接したかたちで、この地域にみいだされることになる。

中世、近世にかけても、人々の生活圏の中心が多少移動することはありえても、生活形態その

ものが、大きく変容するということはなかったようである。たしかに、古墳時代後期から奈良時代前後の時期にかけての居住域あるいは墓域の中心は、菱木下遺跡の第Ⅰ調査区の中でも、特に西半部に集中していたが、中世、近世の時期に至っての居住域、墓域の中心はこの地区には所在せず、より東方に移動したものと思われる。但し、この地区における共同体の生産基盤自体は、時代をこえて農業を基軸にするものであり、その保守的固定性は否めない事実である。灌漑用の水路や貯水槽的機能をもつ土壙などは、そのことを裏づけている。

今回の調査では、弥生時代以降の生産空間が未だ明らかにされなかったので、この点の追究を今後の課題のひとつとしたい。

第４節　遺　　物

遺構に関する大要は上述した通りであるが、次に発掘調査の結果出土した遺物について、若干の説明を加えることとする。なお、図に掲載した各遺物実測図に関しては、巻末に簡単な遺物観察表を示してあるので、それを参照されたい。

１　トレンチ及び包含層内出土遺物

先ず、トレンチ内出土遺物であるが、合計16点を抽出して図化した（第28図）。１と６は、第Ⅰ調査区西端の南北トレンチ（トレンチB）から出土した遺物であり、２～５は北端の東西トレンチ（トレンチF）から、また７～16は、南端の東西トレンチ（トレンチC）から出土した遺物である。勿論、実際の発掘調査のプロセスの中では、耕作土や床土部分から、伊万里焼、唐津焼などの陶磁器片や、擂鉢片、炮烙片、泥めんこ、陶器製灯明具、青磁片、瓦器片など、近世から中世にかけての各種遺物類が出土しているが、しかしながら、出土遺物の中で圧倒的に多いのは、やはり須恵器類である。むろん、土師器類も出土することはするが点数はきわめて少なく、全体量の６％程度である。須恵器類の器種としては、坏身、坏蓋、甕、高坏、器台など、また土師器類の器種としては皿をあげることができるが、これらトレンチ内出土遺物の示す主要な年代としては、６世紀後葉以後７世紀代を中心にしながら、８世紀くらいまでの時期を考えることができると思う。

続いて包含層内からの出土遺物であるが、図では合計22点を掲載した（第29図）。図は、層位的に大きく二段に分けられるべきであり、第29図の１～９までが、灰褐色を呈する第１包含層からの出土遺物、そして10～22までが、灰茶色を呈する第２包含層からの出土遺物である。これら２枚の包含層は、「遺構」の節でも述べたように、耕作土下において検出される包含層であり、上層を第１包含層、下層を第２包含層としている。全般的に、包含層の厚さは南に薄く北に厚くなっており、場所によっては後世の削平によるためか、第２包含層が殆んど痕跡をとどめないで、黄色シルトの遺構面直上に、即第１包含層がのっているところもある。第１包含層からの出土遺物も第２包含層からの出土遺物も、いずれも須恵器類をその中心的遺物とするが、前者の器種としては、坏身、坏蓋、甕（小形を含む）、壺、擂鉢、高坏などを、そして後者の器種としては、

坏身、壺、甕、高坏などを挙げることができる。また、個々の遺物を比較すると明らかであるが、包含層下層の遺物が包含層上層の遺物よりも必ずしも古い様相を呈しているというわけではなく、このことにより、この地が自然堆積の単純な繰りかえしによってはなく、数度にわたる土地開発の結果、形成された地域であることを示している。出土する遺物が須恵器類を圧倒的中心にすえながらも、第1包含層からも第2包含層からもごく少量であるとは言え、瓦器類が検出されていることはこのことを裏づけている。

2　弥生時代の出土遺物

A　遺構面直上出土遺物

菱木下遺跡第1調査区における遺構面とは、2枚の包含層を除去したあとの、黄色シルト層上面で検出される遺構面のことを指しているが、この面で、弥生時代や古墳時代後期から奈良時代、そして中世から近世に至る各時代の遺構が検出されたことは、前節の「遺構」のところで説明した通りである。

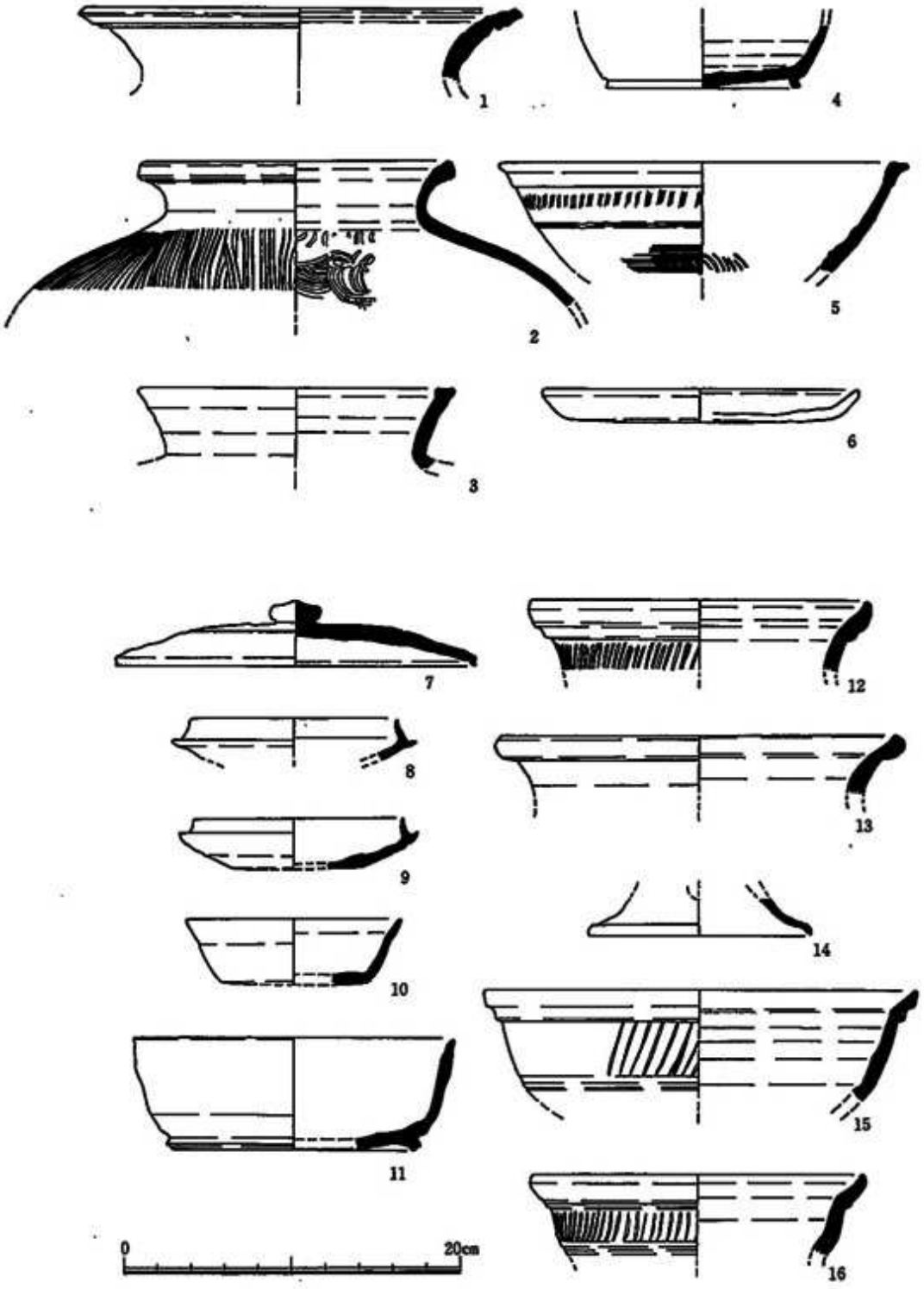
弥生時代に所属する遺物は、竪穴住居址の内部からとか、検出された方形周溝墓の周溝内、或いは土壙およびピットの中、更には溝の中からということであれば、全体的にかなりの数量、出土しているが、これら遺構外の、直接、人間の開削の手の加わっていない黄色シルト層上面の部分においては、後述するように須恵器類は多数検出しえても、弥生時代に関連する遺物は殆んど見いだされなかったというのが実情である。言わば、弥生時代の生活面は、いつの時点にてか、最終的には、きわめて綺麗な、或いは遺物の散布率の低い状態にされていたことがわかるのである。

続いて、弥生時代の遺構内遺物について、若干の説明を加えていくことにする。

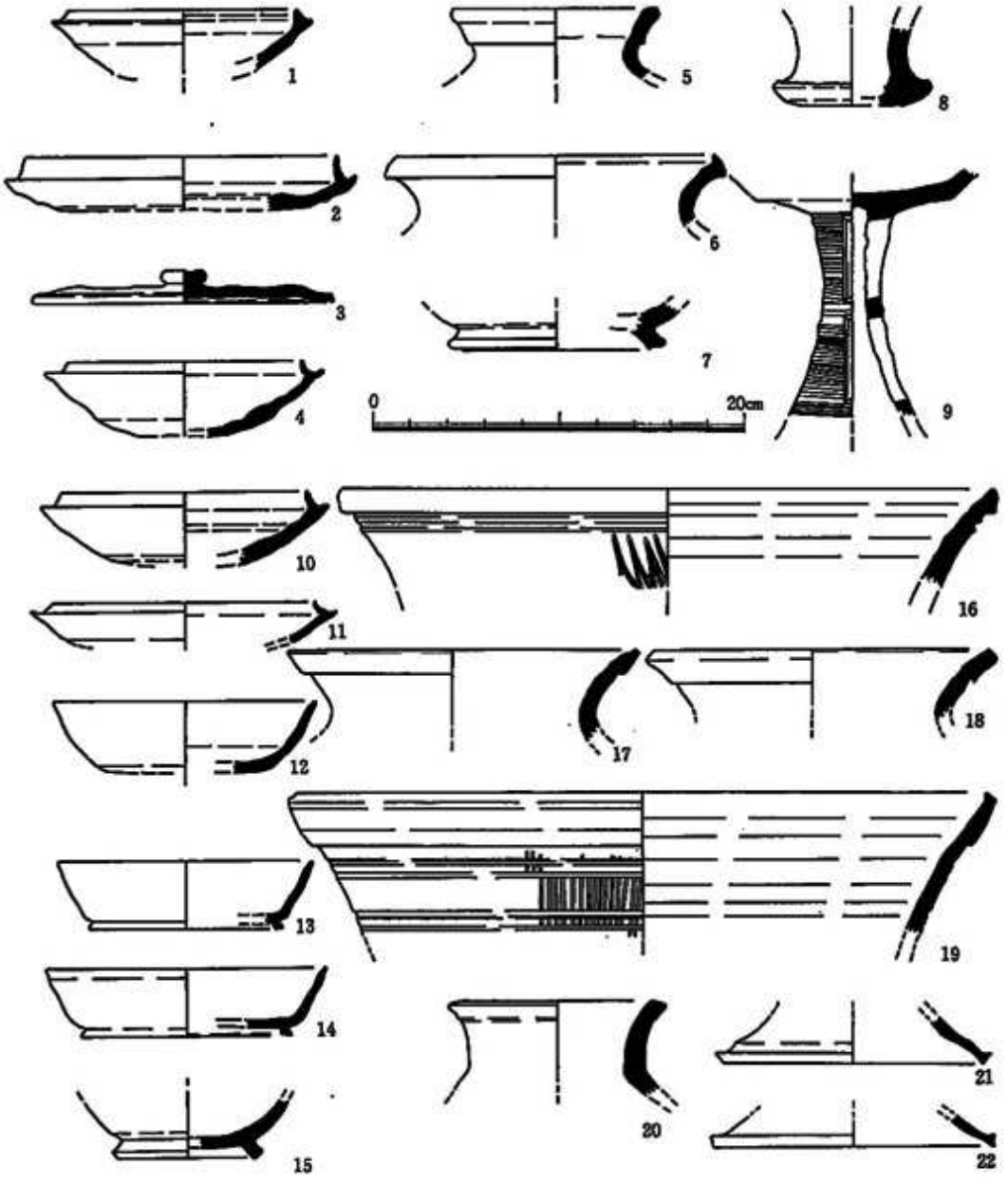
B　竪穴住居址内出土遺物　（第30・38・49・51図；図版158、159上、168上、169）

弥生時代に属する竪穴住居址は、今回の第Ⅰ調査区の発掘では、合計4棟検出されている。うち1～3が1号住居址に伴う遺物であり、4～7が2号住居址に、8、9が3号住居址に伴う遺物である。但し厳密に言えば、4～7の出土遺物というのは2号住居址の床面から検出された遺物でなく、この2号住居址の西側部分をきる溝状遺構ＳＤＡ1の内部より出土した遺物であって、言わばこの溝内出土遺物の時期を知ることによって、2号住居址は相対的には溝状遺構の時期よりは古いということを言わんがための資料である。なお、4号住居址については、これは床面がすでに削平を受けていたために、周壁溝底部をも含めて伴出する遺物というのはなかった。

ＳＢＫ1、2内出土土器　1号住居址から出土した1～3の遺物、すなわち壺形土器や鉢形土器は、「遺構」の節でも述べたように、畿内第Ⅱ様式に属するものである。一方、2号住居址の相対的年代を知る手がかりとなるＳＤＡ1からの4～7の壺形土器、甕形土器も、同じく第Ⅱ様式に属するものである（図版159上）。同じ畿内第Ⅱ様式の範疇に属する土器ではあるが、共通の器種である壺形土器に着目すると、その口縁端部において若干の形態の相異を見いだすことができる。それをタイプ別に分けると大きくＡタイプとＢタイプの2つに、更に細分すれば、A_1、

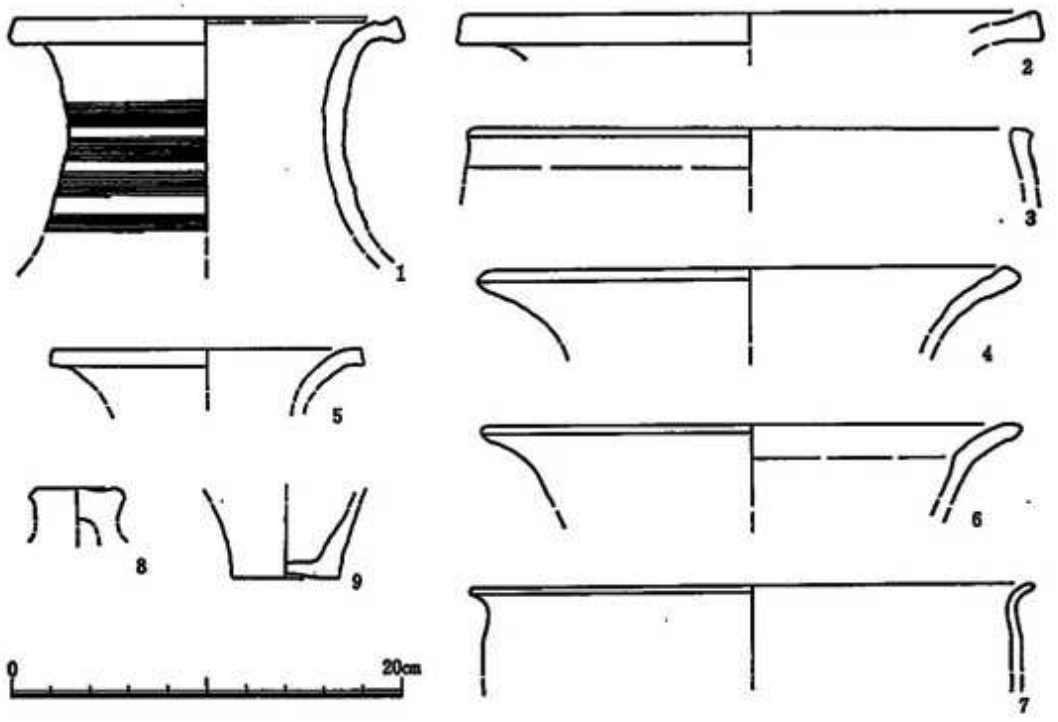


第28図 トレンチ内出土土器



第29図　第１・第２包含層内出土土器

A_2、B_1、B_2、B_3、の５種に分類できると考えられる。先ずAのタイプは、口縁部がやや外反しながら斜方にのびていくものであり、そのうちA_1というのは、端部がやや尖りぎみにではあるが、丸くつまみだすようなかたちにおさめられているもの、第30図の(6)であり、A_2というのは端部が一定の面をもっておさまるかたちのもの、(4)である。Bのタイプは、口縁部が外反しつつ、最終的にはほぼ水平方向にむかおうとする種類のものであり、いずれも端面を有するものであるが、B_1というのは端部の断面が長方形に近い矩形を呈するもの(5)、B_2というのは断面が等脚台形状に開くもの(2)、B_3というのは、口縁端部の上方へのつまみだしがやや著しくな



第30図　ＳＢＫ１～３内出土土器（ＳＤＡ１内出土土器を含む）

り、端部外面が幾分広くなっていく傾向を示すもの(1)である。やがて、畿内第Ⅲ様式の段階になると、口縁端部が水平方向もしくは下方向に向かう傾向を示し、口縁部の外端面も面幅を広くしていく様相を強くしてゆくので、(1)の遺物などは、櫛描き直線文間にヘラミガキのないこととも相俟って、畿内第Ⅲ様式の形態的特徴に大分と近づいた時期の遺物と考えられる。遺構篇の中でも論じたように１号住居址と２号住居址との比較において、同じ第Ⅱ様式の土器を出土しているとは言え、２号住居址の方を相対的には１号住居址より古い時期の建物として把えた論拠は、今述べた理由によっている。なお、拓影図第38図の(15)、(16)に掲載した遺物は、いずれも１号住居址の内部より出土した遺物であるが、(15)の遺物には扇形文、そして(16)の遺物には竹管文が認められる。

ＳＢＫ１出土石器・石製品（第49・51図；図版168上、169）　弥生時代の竪穴住居址ＳＢＫ１の床面から出土した石鏃は、第49図の(8)に図示した通り、平基無茎式の三角形鏃である。また、石庖丁１点は同図(9)、砥石１点は第51図の(1)に示したとおりである。材質は各々、石鏃はサヌカイト、石庖丁は緑色片岩、砥石は砂岩製である。

ＳＢＫ３、４内出土土器　第30図の(8)、(9)の遺物は、重複する２棟の住居のうち３号住居址より出土した遺物であるが、器壁の厚さがかなり異っており、一応、(8)の方を蓋形土器の一部、他方、(9)の方を甕形土器の底部片というように理解している。特に底部器壁の厚さからみて第Ⅱ様式の土器とはみなし難く、むしろ方形周溝墓の周溝内出土遺物との関連などから考えてみても、第Ⅲ様式の段階に所属するものと考えられる。

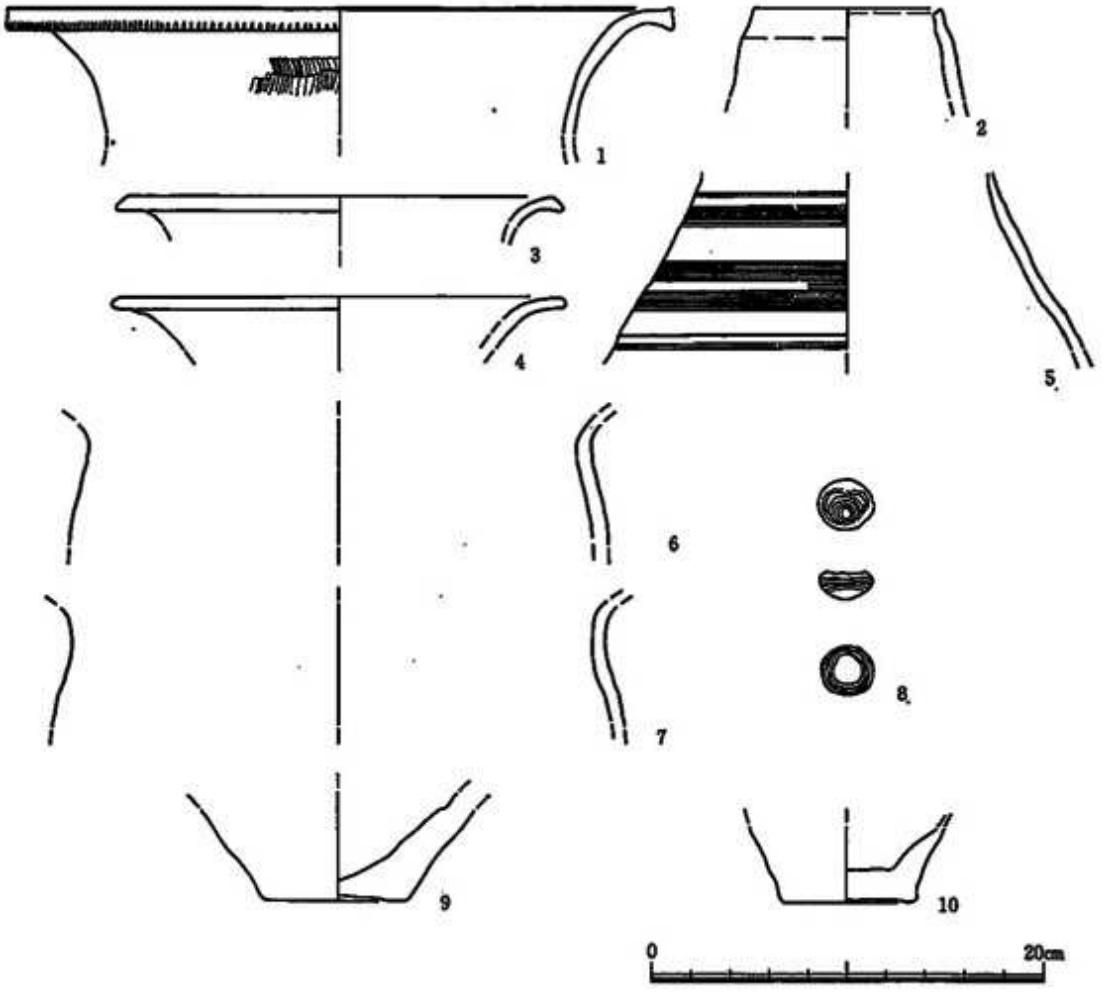
ＳＢＫ３出土石器（第49図；図版168上）　ＳＢＫ３から検出された石鏃は、第49図の１～４に示した通りであるが、柳葉形鏃をも含めて、１号住居址の時期のものに比して、少しく大型化する傾向を有す。不定形石器１点は、同図の(5)、石小刀１点は同図の(6)、石錐１点は同図の(7)に掲載した通りであるが、いずれもサヌカイト製である。

Ｃ．方形周溝墓周溝内下層、中層出土遺物

第Ⅰ調査区西端部分において、最低７基の方形周溝墓群、そして西北端部分で方形周溝墓の可能性を有する周溝状遺構１基の合計８基が検出されているが、それぞれの周溝もしくは溝内の下層もしくは中層から、多数の弥生式土器の破片が出土している。以下、その点に関して説明を加えていくことにする。

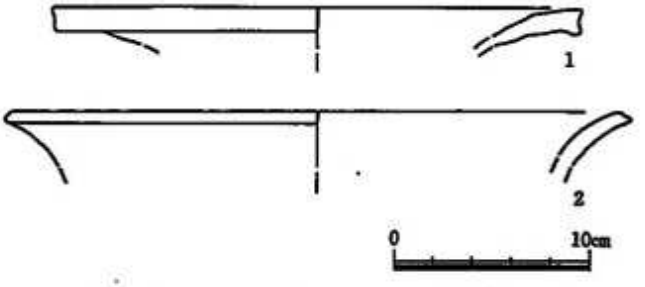
ＳＴＳ１周溝内出土土器（第31図；図版160上）　第Ⅰ調査区西北端に位置するＳＴＳ１、すなわち１号方形周溝墓の周溝内からは、約 250点前後の土器片が出土しているが、その中で、比較的、時期を判定しやすい遺物として掲げたのが、第31図である。器種としては、壺形土器、甕形土器が圧倒的多数を占めているが、他にこの調査区では唯一の発見であるミニチュア土器なども出土している。遺物そのものは、基本的には畿内第Ⅱ様式に所属しているが、層位的には(1)、(2)、(5)、(6)、(7)、(8)の６点が中層から、(3)、(4)、(9)、(10)の４点が下層から検出されたものである。これら出土遺物の年代は、基本的には畿内第Ⅱ様式の範疇に属するものであるが、その型式は、竪穴住居址内出土遺物の項で述べたところに近い。すなわち、下層から出土している(3)、(4)の遺物などは、先程のⅡ様式土器のタイプＡの系列に属するものであり、他方、(1)の遺物は、タイプＢの系列に属するものである。そして、遺物の検出状況に関連して、周溝下層からの出土遺物と周溝中層からの出土遺物とを比較することによって、特に壺形土器の口縁部の形態比較によって、タイプＡからタイプＢへの型式変遷を追認することも可能である。大雑把に言えば今述べた通りであるが、但し厳密に言えば竪穴住居址からの出土遺物に比して全般的に器壁が薄いこと、また、(4)などの遺物に関連して、たとえそれをタイプＡの範疇にいれて把えるとしても、この段階では、口縁端部の伸びの方向が、斜方にというよりは大方、水平的に伸びてきており、同じ第Ⅱ様式の段階の中でも新しい相に位置しているものと思われることに注意を喚起しておきたい。なお、(2)の遺物に関しては、これを池上遺跡でいう、Ⅱ様式の無頸壺形土器Ａ（ＰＬ68―21）に近似したものとみなしている。

ＳＴＳ１主体部内出土土器（第32図）　１号方形周溝墓の方台部分からは、合計５基の墓壙（K_1 ～K_5）が検出されているが、うち、土器片を共伴したのは、K_2、K_5 の２基の墓壙である。主体部の平面形態は、K_2 が不整形、K_5 が楕円形のプランを呈しているが、いずれからも、畿内第Ⅱ様式の壺形土器の小破片が僅かながら出土している。図中の(1)が、主体部K_2 より出土した遺物であり、(2)の方がK_5 より出土した遺物である。前者は、タイプＢの中でも、口縁端部が垂下する、言わば第Ⅱ様式のB_4 に分類されるものであり、他方、後者は、タイプＡの中でも、A_2に属するものである。土器の型式から言えば、後者の不整形のプランをもつ主体部K_2



第31図　ＳＴＳ１周溝内出土土器

の方が、前者の楕円形のプランをもつK_4 主体部より古い時期に相当するものであり、そのことは、K_2 自体の軸角が、ほぼ、１号墓の方台部方向の軸に合致しているのに対し、他方、K_4 の方は、１号周溝墓自体の向きを殆んど意識せずに開削されている事実とも対応しているように思われる。



第32図　ＳＴＳ１主体部（K_2、K_5）内出土土器

ＳＴＳ１周溝内出土石器（第50図；図版168下、169上）　方形周溝墓の周溝内からの出土遺物のうち、１号墓（ＳＴＳ１）周溝内の下層から出土した石庖丁は、第50図の(1)の通りである。不定形石器は２点検出されているが、そのうちの１点は同図の(3)に示したとおりである。また、周溝の中層からは、同図の(2)に示したような３号住居址から出土したものとはタイプの異なる石

錐が1点出土している。

以上、周溝内からの出土遺物と主体部からの出土遺物とをあわせ勘案する時、1号方形周溝墓は、おおよそ第Ⅱ様式の段階に造営され、第Ⅲ様式の新段階まで埋葬施設として機能し、その後は完全に廃棄されていったもののようである。

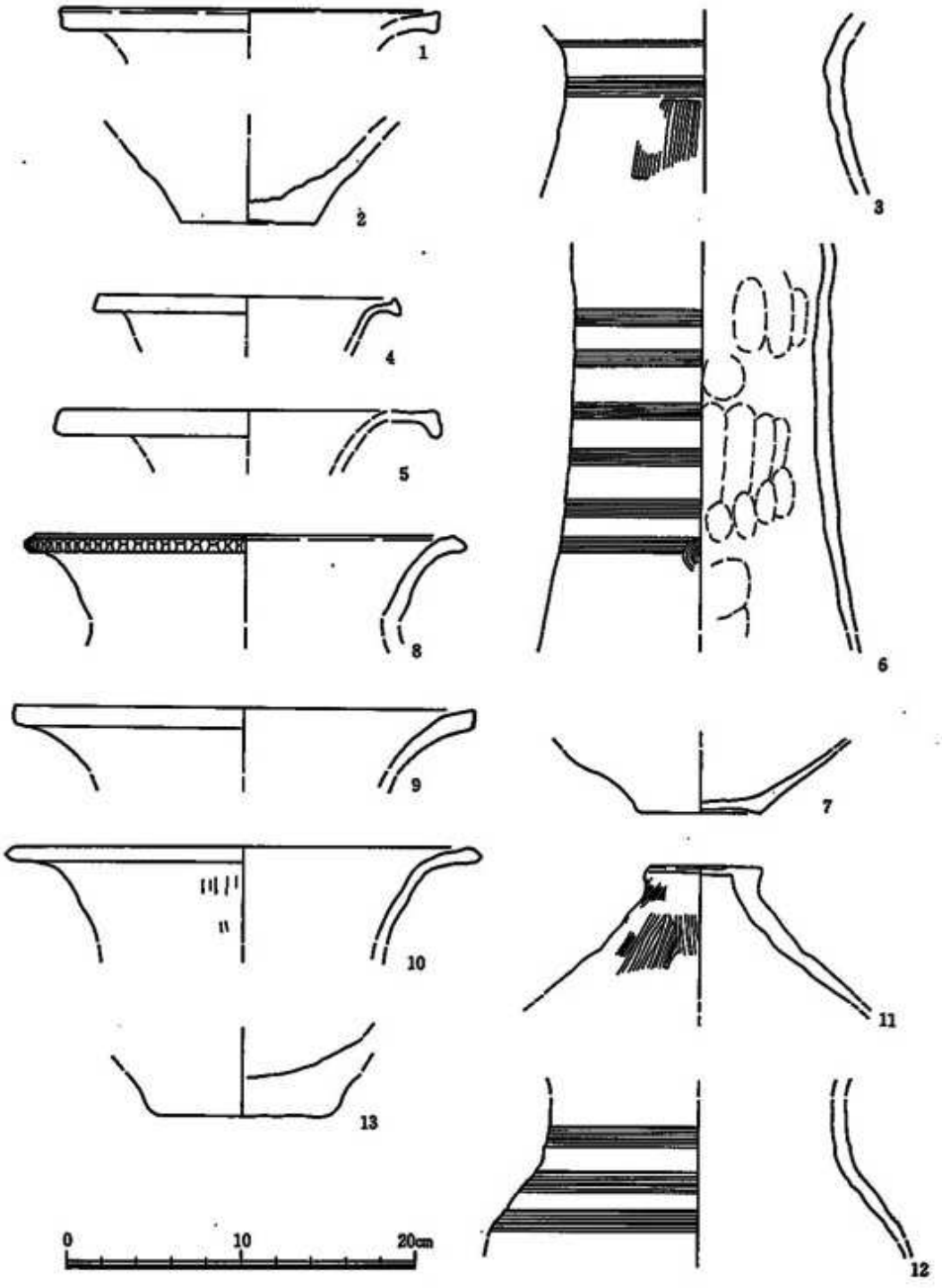
ＳＴＳ２周溝内出土土器（第33図；図版160下、161下）　2号方形周溝墓は、第Ⅰ調査区の最も西端で、その東半部分だけが検出された方形周溝墓である（西半部分は、堺市道下に眠る）が、削平された周溝内から13点前後の土器が出土しており、それらの遺物の検討によって2号方形周溝墓の時期を、おおよそ知ることができる。第33図の、(1)、(2)、(3)、(6)の遺物がそれである。

掲載した図のうち(1)の図は、壺形土器の口縁部であるが、これは今まで述べた型式の中で、第Ⅱ様式のB_2のタイプの中におさまるものである。(2)は、壺形土器の底部、(3)、(6)は同じく壺形土器の胴部片である。(3)の場合、不揃いの櫛描直線文の端部に、一部「末端扇形文」がみられるのが目立った特徴である。いずれも第Ⅱ様式の典型的な土器ということができる。なお、方台部内で、主体部と思われる墓壙K_1が検出されているが、遺物は伴出していない。

ＳＴＳ２周溝内出土石製品（図版169下－8）　なお、2号周溝墓周溝内からは、和泉砂岩製の砥石が1点出土している。

ＳＴＳ３周溝内出土土器（第33図；図版160下）　3号方形周溝墓の周溝内からは、約50点近くの弥生式土器の破片が出土しているが、圧倒的に細片が多い。そして、一定程度、この3号周溝墓の時期を知るための資料として選択しえたのが、第33図の、(4)、(5)、(7)の遺物である。いずれも畿内第Ⅲ様式に属するが、とりわけ、壺形土器である(4)と(5)の遺物に関しては、これを2つのタイプに分けることができる。先ず、(4)の方は、器壁そのものはⅡ様式のそれと比較して幾らか薄くはなっているが、口縁端部が外反しつつ、短かく水平化し、しかもその外端部がⅡ様式のB_3の傾向を更に発展させて、端面が上下につまみだされるかたちをとるものである。そして、その拡げられた端面が、ほぼ垂直方向に伸びるものを第Ⅲ様式のA_1タイプ、端面が少し内傾化するものをA_2タイプと呼んでいるので、(4)は第Ⅲ様式のA_2タイプということになる。他方、(5)の方は、壺形土器の口縁部が外反しつつ水平化し、その端部で口縁が垂下して、施文可能な端面を形成するタイプのものである。垂下部先端のシャープなものをB_1タイプ、鈍いものをB_2タイプと呼んでいるので、(5)はB_2のタイプである。但し、この系統は同じく口縁端部の垂下する第Ⅱ様式のB_4のタイプとは明らかに流れを異にするものであり、この二つの型式の間には、明確な一線がひかれるものと思われる。その他、器壁の薄い、(7)の壺形土器底部も同じく、第Ⅲ様式に属する遺物である。以上のことから、3号方形周溝墓の時期は、第Ⅲ様式の段階に相当するとみてよいと思われる。他方、3号周溝墓の方台部において、4基の墓壙と思われる土壙が検出されているが、これらの土壙からは遺物は検出されなかった。また、周溝内からの石器・石製品の出土もみられなかった。

ＳＴＳ４周溝内出土土器（第34図；図版161上）　4号方形周溝墓の周溝内からは、約40点前

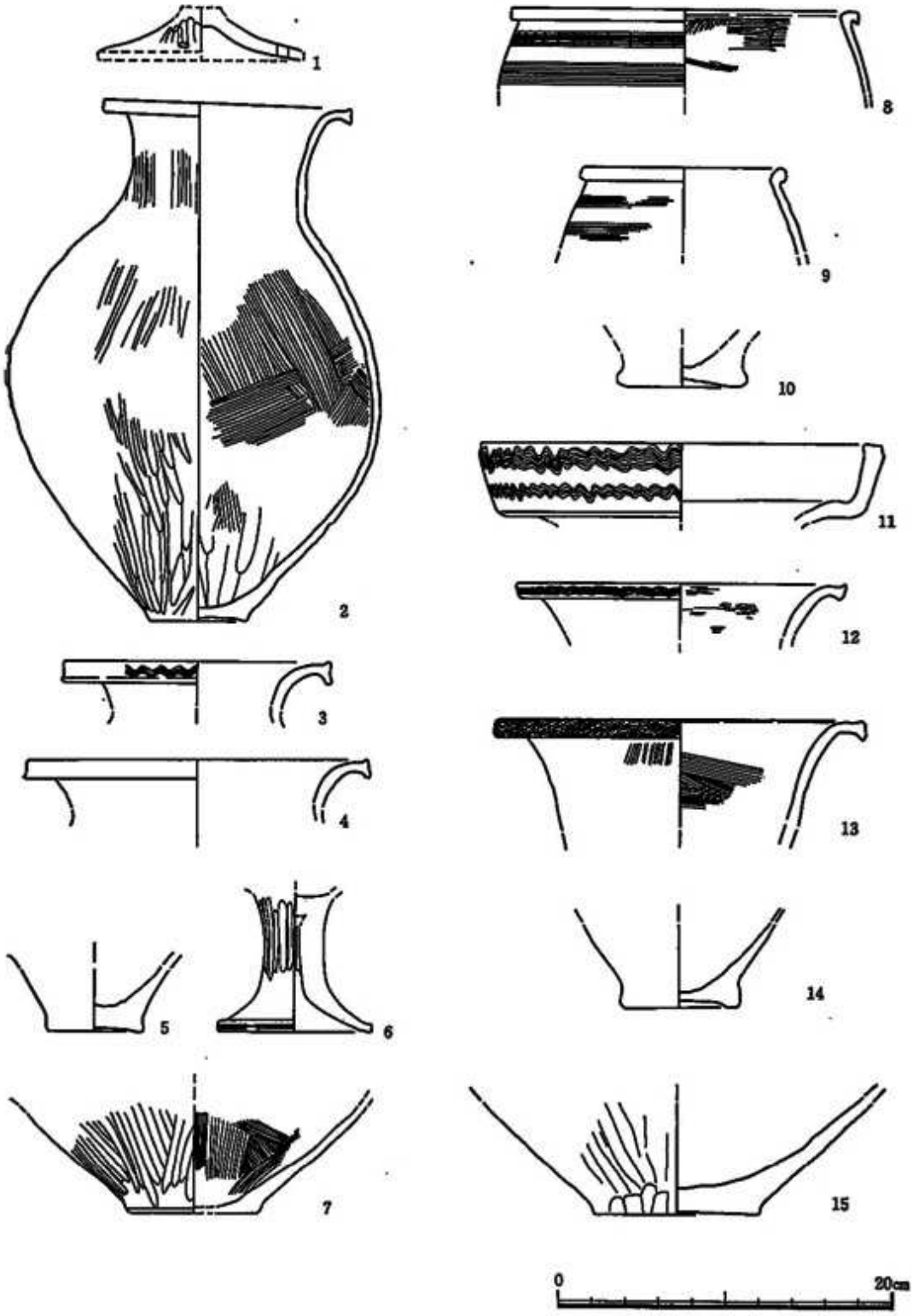


第33図　ＳＴＳ２・３・５周溝内出土土器

後の土器片が出土している。第34図の1および3～15の実測図がそれら出土遺物のうちの主なものであるが、うち(1)および(5)～(7)の遺物は周溝内の下層から出土したもの、他方、(3)、(4)ならびに(8)～(15)の遺物は、周溝内中層から出土したものである。器種としては、壺用蓋形土器、壺形土器、高坏形土器、鉢形土器など各種が出土しているが、土器の年代は、おおむね畿内第Ⅱ様式の新しい段階から第Ⅲ様式の段階に所属するものであると思われる。

次に、土器の型式に注目するならば、先ず壺形土器の口縁部は、大きく4つの類型にわけることができる。すなわち、先ず＜1＞口縁端部が上下につまみだされる第Ⅲ様式A類（うち端面が垂直方向にのびるものをA_1、端面が少し内傾化するものをA_2類と呼ぶ）、続いて、＜2＞口縁部が上方へのつまみだしを伴なわずに、下方へのみ垂下するB類（その垂下断面のきわめてシャープなものをB_1、丸く鈍いものをB_2類と呼ぶ）、また、＜3＞口縁端部が下方への垂下を殆んどみないで、上方へ短かくつまみだされる傾向をもつC類（つまみだしの内面に稜をもつものをC_1、稜をもたないものをC_2類とする）、そして、＜4＞口縁端部が外反後、垂直にたちあがって幅広い外端面を構成するD類との大きく4つのタイプに分けることができる。たとえば、4号方形周溝墓の溝内出土遺物のうち第Ⅲ様式のA類に属する遺物は、(3)＜A_1＞、と(4)＜A_2＞、B類に属する遺物は(13)＜B_2＞、C類に属する遺物は(12)＜C_2＞、そしてD類に属する遺物は(11)＜D＞であるとの意味である。これらA類からD類にいたる遺物は、いずれも周溝内中層遺物としてとりあげられたものであるが、これら遺物の共存関係は、或る特定の時点における土器の使用の並存関係を示しているというよりも（勿論、各型式には、それぞれの消長の歴史があり、それらが互いに部分部分で重なりあうということは認めなければならないのであるが）、周溝が開削されて以来、それが十全に機能し、その後、やがて周溝が廃絶していくその過程そのものを反映しているとみた方がよい。すなわち、壺形土器のうちでも、(12)のようにⅡ様式的な要素を今なおとどめている古いタイプのものと、(11)のようにⅢ様式の中でも新しい要素をもつ遺物が共伴するという事実は、周溝が機能しはじめてから、その機能が停止するまでの時間的な幅を示唆するものであると考えられる。

鉢形土器の観察からも、この点は首肯される。すなわち、(8)と(9)の2つの鉢形土器の口縁部の形態は互いに異っており、前者は口縁端部が水平に屈曲して、すぐに垂下するタイプのもの（A_1）であり、後者は口縁端部が短かく斜方に伸びて丸くおさまるタイプのもの（B_1）である。これらは第Ⅲ様式に属する遺物であるが、特に(9)の遺物は、第Ⅲ様式の中でも新しい段階に位置するものである（「池上」図版83の13など参照）。他方、(6)の高坏形土器や(7)の壺形土器などには、外面に丁寧なヘラミガキによる調整痕が残されており、これらは第Ⅲ様式の中で古い段階か、或いは第Ⅱ様式の中でも、新しい段階に帰属する遺物とみることができる。なお、4号方形周溝墓の方台部において、壺用蓋形土器の小破片など3点ほど遺物が出土しているが、いずれも細片であって個別的には時期を決しがたい。この場合、これらの土器は供献的性格を有する土器というよりは、壺棺或いは甕棺のような埋葬に関わる土器と考えた方がよいように思われる。未調査



第34図　ＳＴＳ４周溝内出土土器

部分における主体部の検出が期待される。

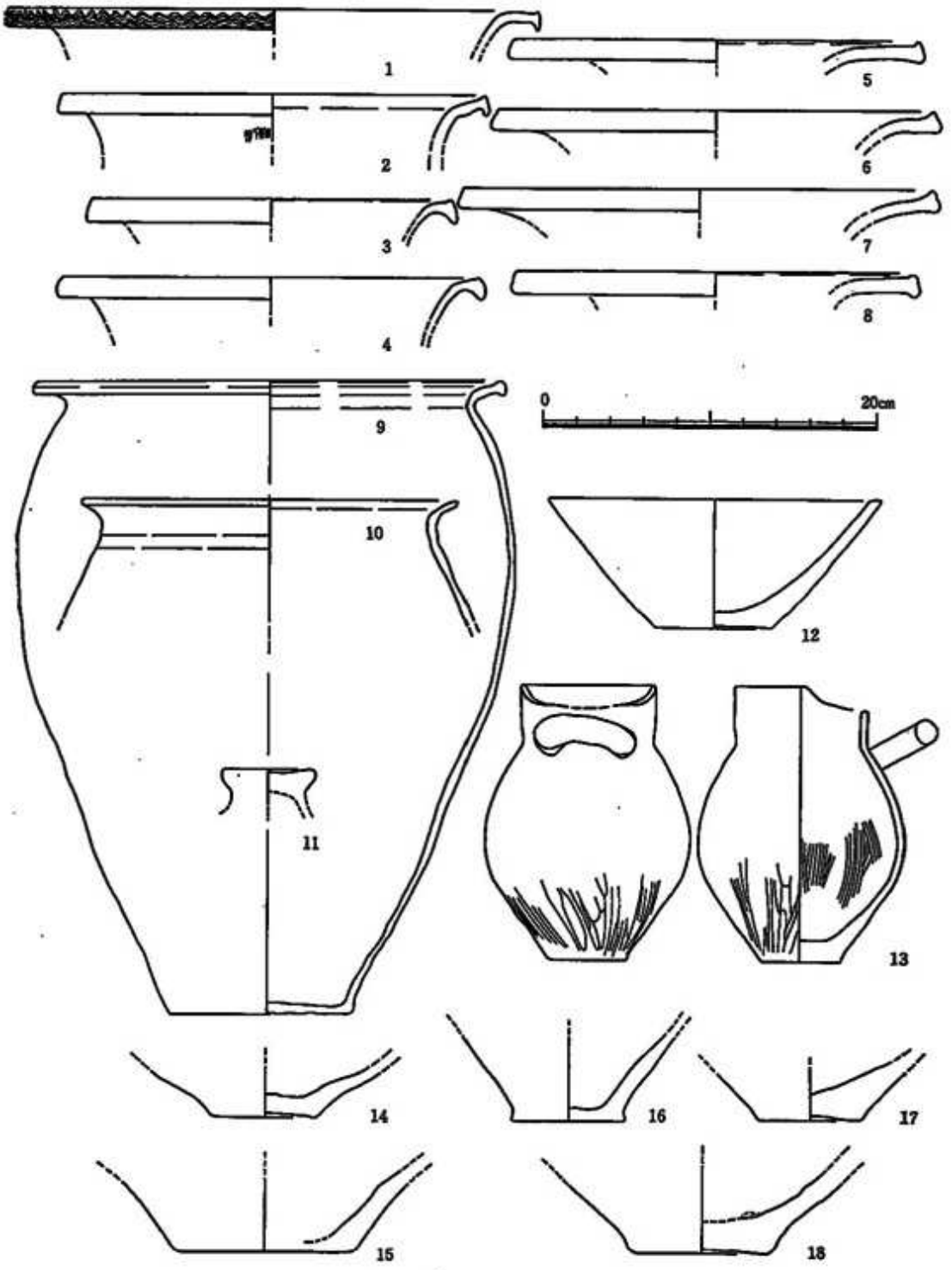
ＳＴＳ４周溝内出土石器（第50図；図版168下、169）　４号墓の周溝内からは、ハンマーストーンなども出土しているが、その他に周溝の下層から、第50図の(7)に示したような石匙や、同図の(6)にある使用痕のある剝片、同図の(5)にある不定形石器、そして、中層からは、同図の(8)に図化した他のものよりか少しこぶりな石庖丁が出土している。いずれにせよ、４号方形周溝墓の盛行期は、第Ⅱ様式の時代ということができる。

ＳＴＳ５周溝内出土土器（第33図；図版161下）　４号方形周溝墓と隣接し、４号方形周溝墓よりも先に営造されていたと考えられる方形周溝墓が、５号方形周溝墓である。５号方形周溝墓の周溝内からは、約70点前後の土器片が出土しているが、そのうちの主なものは、第33図の８～13の遺物である。うち、(11)の甕用蓋形土器と(12)の不揃いの櫛描き直線文を有する壺形土器との２点が周溝中層より出土した遺物であり、他の(8)～(10)、(13)などの４点の遺物は周溝下層より出土した遺物である。いずれも第Ⅱ様式の範疇に属するものであり、(8)、(10)などの遺物は、壺形土器第Ⅱ様式のA_2、(9)の遺物はB_1のタイプに属するものである。但し、本周溝内からは、口縁部端面が上下もしくは上方に拡張されて、端部断面が台形状を呈するB_2、B_3のタイプは確認されなかったことにも、注意を払っておきたい。このことは、この５号周溝墓が、Ⅱ様式の中でも比較的古い段階に位置していることを示唆していると考えられる。

また、５号方形周溝墓方台部内において、３基の墓壙状遺構が検出されているが、他の主体部と同様、共伴遺物はなかった。

ＳＴＳ５周溝内出土石器（第51図）　なお、５号墓の周溝内下層から出土した砥石は、第51図の(4)の通りであり、かなりの大型品である。第Ⅱ様式並行期のものと考えられる。

ＳＴＳ６周溝内出土土器（第35図；図版162、163上）　６号方形周溝墓の周溝内からも、約90点前後の弥生式土器片が出土している。第35図の、１～16の遺物実測図が、そのうちの主要なものであるが、器種としては、壺形土器、甕形土器、鉢形土器、水指形土器などが含まれている。そのうち、(1)、(2)、(5)、(10)、(14)、(15)の６点が周溝下層より出土した遺物であり、他方、(3)、(4)、(6)～(9)、(11)～(13)、(16)の10点が周溝中層より出土した遺物である。そして出土した土器は、おおむね、畿内第Ⅱ様式の範疇に属するものである。壺形土器を型式的に分類するならば、(3)、(4)が第Ⅱ様式のB_1、B_2のタイプ、(5)がC_1、(6)、(7)がC_2、(8)がC_3（上方へのつまみだしを基本的特徴としながら、口縁端部が若干、垂下する）、そして(1)、(2)がそれぞれ、E_1（器壁の薄い口縁部が水平に伸び、端部が細くシャープに垂下する）、E_2（器壁の薄い口縁部が斜方に伸び、端部が細くシャープに垂下する）のタイプに帰属すると考えられる。一般に、(1)、(2)の遺物や(5)の遺物のように下層から出土する遺物には、シャープな形態を有する遺物が顕著であるのに対し、(3)、(4)の遺物や(6)、(7)、(8)の遺物のように中層から出土する遺物には、口縁端部の形態が鈍化したかたちのものが目立つように思われる。一方、甕形土器の方であるが、６号周溝内から出土した甕は、大きく二つのタイプに分けることができる。すなわちＳＴＰ３とも考えられる、(9)のよ



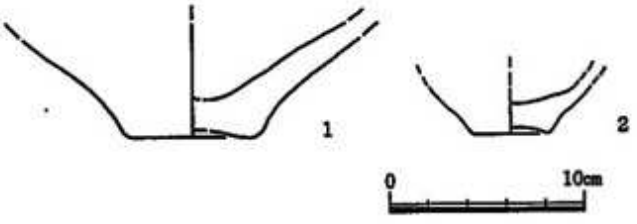
第35図　ＳＴＳ６・７周溝内出土土器

うに屈曲した口縁部がその端部で肥大化して、壺形土器のように少し幅広い端面を形成しようとするもの、もうひとつは(10)のように、屈曲した口縁部がそのまま素直に斜方に伸びるタイプのものである。前者をここでは、甕形土器のB₁のタイプ、後者を同じく甕形土器のA₁のタイプと呼んでいる。恐らくB₁の方がA₁に比して、後出的なタイプであると思われる。

ＳＴＳ６周溝内出土石器（第50図；図版168下）　６号墓周溝内の中層から、第50図の(9)のような石鏃が出土している。３号住居址内から出土した石鏃に比し、一層大型化の傾向を深めている。いずれにせよ、６号方形周溝墓の周溝内より出土した遺物は第Ⅱ様式の中に包含される遺物であるが、ただ、同じ第Ⅱ様式に属する４号方形周溝墓周溝内からの出土遺物と比較する時に、現下のところ、前者には、壺形土器のＡタイプとＤタイプとが欠落しており、その意味で、強いて両周溝墓の造営の先後関係を言うならば、前者の方が後者に比して、相対的に古い可能性がある。主体部と思われる土壙は、３基検出されているが、伴出遺物は皆無であった。

ＳＴＳ７周溝内出土土器（第35図；図版163上）　７号方形周溝墓の周溝内からは、約30点前後の土器片が出土しているが、出土した土器の中には小破片ながら、第Ⅱ様式に属すると思われる壺形土器の口縁部や胴部片が含まれている。第35図の(17)、(18)は、周溝下層から出土した壺形土器の底部片であるが、(14)、(15)など第Ⅱ様式の壺形土器の底部片に比べると、器壁が厚いことに気づかれる。６号方形周溝墓の周溝のきりあいとも関連して、７号方形周溝墓の方がより古い周溝墓であることが理解される。なお、石器および石製品の類は、検出されなかった。

溝状遺構ＳＴＳ８溝内出土土器（第36図）　７号方形周溝墓のすぐ西側に、方形周溝墓の可能性を有する、溝状遺構が検出されている。周溝内下層から約17点前後の遺物が出土しているが、そのうちの主なものは第36図の通りであり、壺形土器、甕形土器の特徴から第Ⅱ様式に属する遺物だと判断される。壺形土器の外面技法については、以下にのべる拓影図の項を参照されたい。



第36図　ＳＴＳ８溝内出土土器

付：周溝内出土土器拓影図　（第37・38図）

周溝内出土遺物の大要については今述べた通りであるが、壺形土器の胴部破片を凡そ30点ほど拓影図にしているので、上述の点を補足する意味で若干の解説を加えておきたい。

１号方形周溝墓の周溝内より出土した遺物は、第37図の(1)、(2)の遺物である。原体は異っているが、いずれも櫛描平行線文を有している。

２号方形周溝墓の周溝内から出土した遺物は、３～５の遺物である。３点とも櫛描平行線文を施しているが、殊に、(3)、(5)の遺物に関して言えば、縦方向の丁寧なヘラミガキが観察される。

３号方形周溝墓の周溝内から出土した遺物は、６～９の遺物である。(8)は櫛描平行線文を器壁に有する土器であるが、(6)、(7)、(9)の遺物には櫛描平行線文に加えて、櫛描波状文が施されてい

る。櫛描平行線文と櫛描平行線文との間にはヘラミガキが観察されるが、これら３点は、同一個体である可能性が強い。

４号方形周溝墓の周溝内から出土した遺物は、10～14の遺物である。(10)は櫛描波状文、(11)～(13)は櫛描平行線文、(14)は両者の組み合わせによる遺物である。なかでも(12)の遺物に関して言えば、櫛歯先端部分が細くシャープになっており、また櫛歯と櫛歯の間隔も狭くなっていて、施文自体が非常にひきしまり、精緻な印象を与えるものである。

５号方形周溝墓の周溝内から出土した遺物は、(15)、(16)および第38図の(1)、(2)の遺物である。４点とも櫛描平行線文を有しているが、櫛歯先端部の加工状態は不揃いである。第37図の(15)と第38図の(2)の遺物に関しては、縦方向にヘラミガキのあとを見いだすことができる。

６号方形周溝墓の周溝内から出土した遺物は、第38図の３～８の遺物である。(3)～(6)の遺物は櫛描平行線文を伴う遺物であり、(7)は櫛描波状文、(8)は簾状文で器壁を飾る土器である。

７号方形周溝墓の周溝内から出土した遺物は、(9)、(10)の遺物であり、前者は扇形文、後者はヘラミガキを伴う櫛描平行線文を有する土器である。

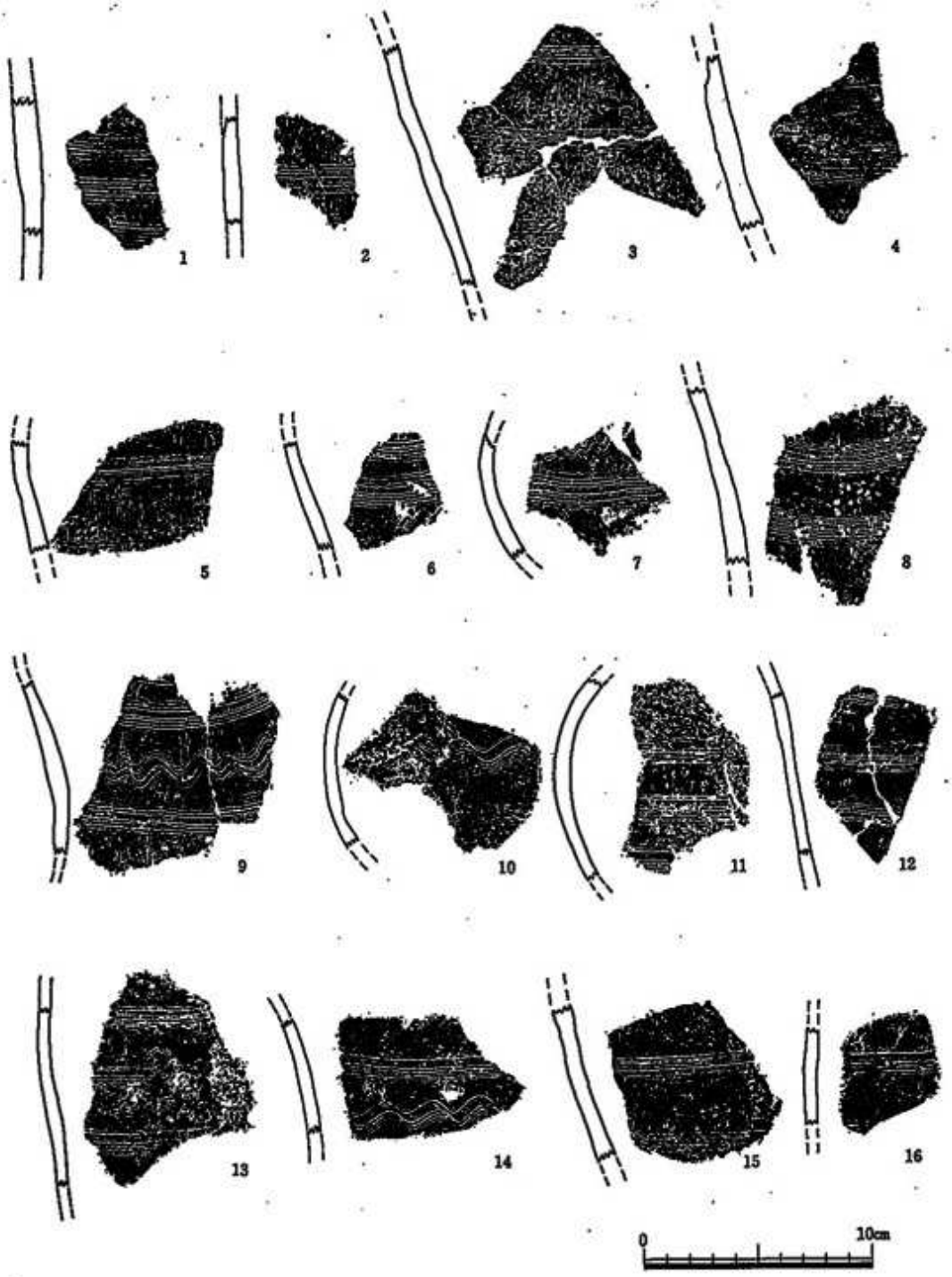
８号方形周溝墓になると思われる（但し未確認）周溝状遺構の溝内からも遺物片が出土している。第38図の11～14がそれである。４点とも櫛描平行線文を伴う土器であるが、(11)などは磨耗が甚だしくて、原体など細かくは識別できない。但し、(11)、(12)の遺物は、器壁の厚さの傾向からみても、(13)や(14)よりは後出的な要素をもっていると思われる。

以上が、周溝内出土遺物の、拓影図に関する説明である。

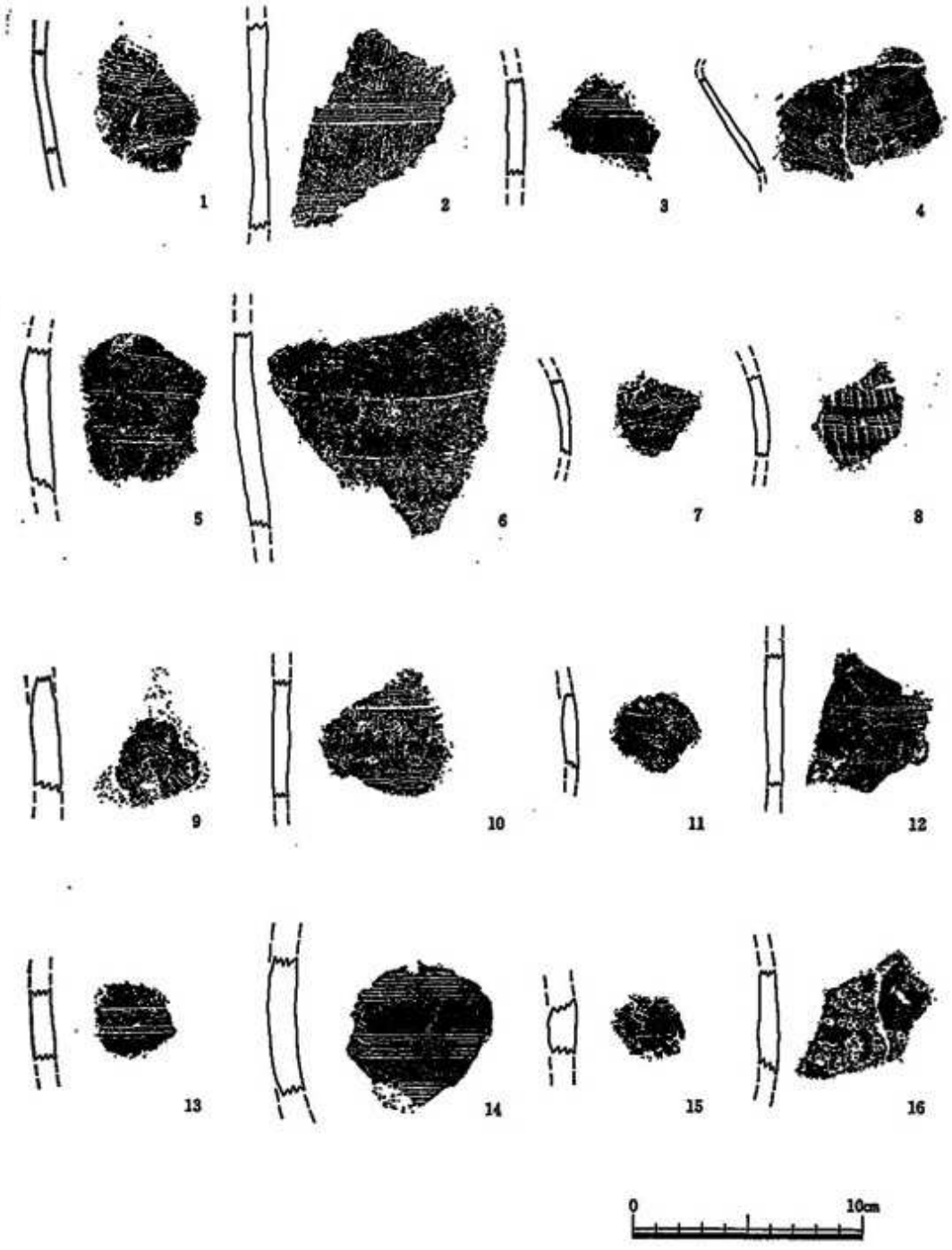
D　土壙・ピット内出土遺物及び土器棺　（第39・34・35図；図版162下）

弥生時代に属する土壙およびピットの中で、遺物を伴う遺構は、土壙墓ＳＴＫ１、ＳＴＫ５、屋外炉ＳＫＡ１、土器類廃棄壙ＳＫＡ８、そしてピット103の５ケ所である。そして、ＳＴＫ１から出土した壺形土器の口縁部のタイプ、第39図の(1)は、第Ⅱ様式のＢ₂のタイプに最も近いものであり、他方、ＳＴＫ５から出土した壺形土器の口縁部、第39図の(2)は、第Ⅱ様式のＢ₂のタイプの肥大化したものである。ＳＫＡ１は、２号住居址の屋外炉であるととらえているが、そこから出土した遺物(3)は、第Ⅱ様式の甕形土器の底部片であり、また土器廃棄壙と考えられるＳＫＡ８から出土した遺物(4)は、第Ⅱ様式の甕形土器の破片と考えられる。機能上の３、４号住居址との並行関係を想起する必要があろう。ピット103から出土した壺形土器の口縁部(15)に関して言えば、これは第Ⅱ様式のＢ₁のタイプに属する。土器棺としての機能を考えることもできるが、ほかに墓地における土器を樹立しての供献もしくは標識という機能も考慮にいれることができる。

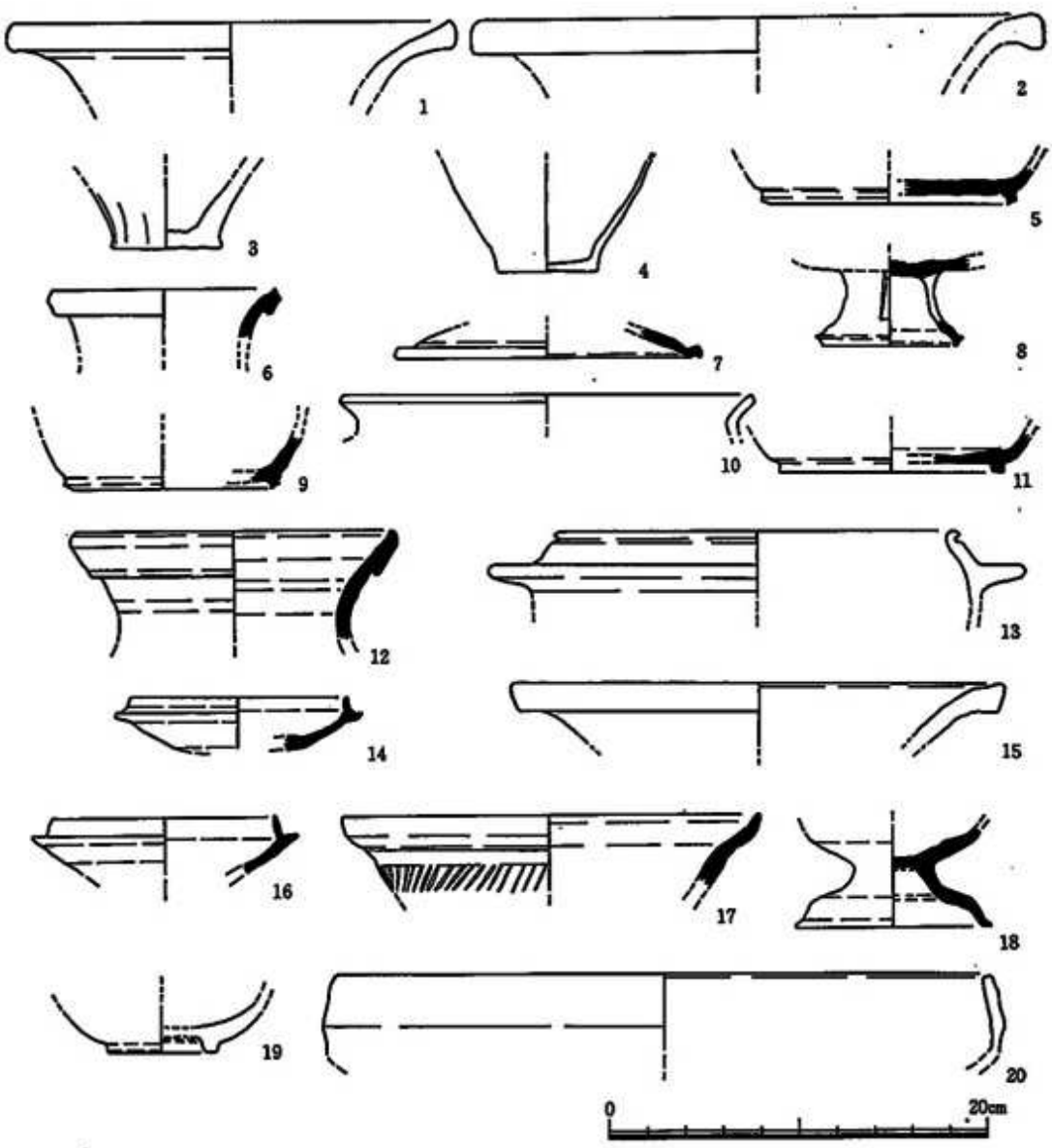
あと、この項で叙述すべきは、土器棺である。実測図として掲げたのは２点あるが、いずれも、方形周溝墓の周溝内にて検出されたものである。すなわち、第34図の(2)の壺形土器は、４号方形周溝墓の西側周溝部分で検出されたＳＴＰ２に関わる遺物であり、他方、第35図の(9)の甕形土器は、６号方形周溝墓の北側周溝部分で検出されたＳＴＰ３に関わる遺物である。そして、前者はⅡ様式のＢ₂に近いタイプのものであり、また後者は、Ⅱ様式のＢ₁のタイプに近似するもので



第37図　ＳＴＳ１～５周溝内出土土器拓影図



第38図　ＳＴＳ５～８周溝内及びＳＢＫ１内出土土器拓影図



第39図　土壙及びピット内出土土器

ある（図版162下）。

E　溝内出土遺物

ＳＤＡ１、２内出土遺物（第30図；図版159）　弥生時代に属する溝状遺構は、「遺構」の中でも述べたように、ＳＤＡ１とＳＤＡ２の２本の溝が検出されている。うちＳＤＡ１から出土した遺物に関しては、すでにＳＢＫ２の項目のところで、きりあい関係にふれる際、論じているので、ここでは再論しない。

また、ＳＤＡ２に関しては、この溝の中から、第Ⅲ様式に属する壺形土器や甕形土器（胎土は紀州系と思われる）の破片が合計４点ほど出土しているが、すべて小破片であって、遺物を実測

図化するには至らなかった。

以上が、菱木下遺跡第Ⅰ調査区から出土した、遺構別弥生時代遺物の大要である。

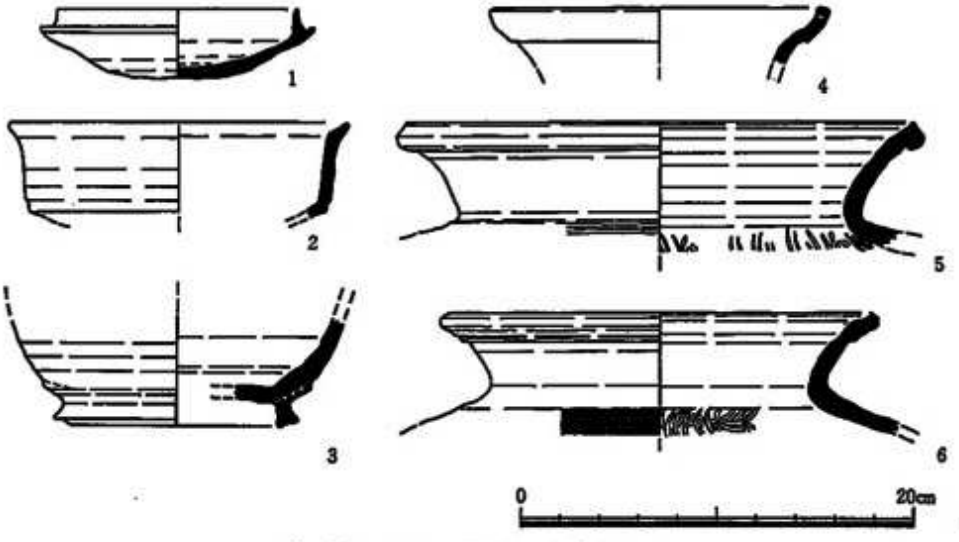
3　古墳時代及びそれ以後の出土遺物

菱木下遺跡第Ⅰ調査区において、弥生時代の遺物はひとまず、畿内第Ⅲ様式の時期をもって姿を消す。他の凹線文を有する第Ⅳ様式の土器や、続く第Ⅴ様式の土器、或いは庄内式の土器は検出されなかった。このことから、菱木の台地上に一時定住していた人々は、弥生時代中期中葉には何らかの理由で、この地をひとまず放棄し、他所へ移っていったものと考えられる。

さて、人々が再びこの地を占拠しはじめ、居住の場として空間利用しはじめるのは、古墳時代後期も6世紀中葉以降であると思われるが、そのことを示唆しているのが、方形周溝墓の周溝上層からの出土遺物や、遺構面直上からの出土遺物、そして、遺構内部からの出土遺物である。以下、古墳時代およびそれ以後の出土遺物について、若干の説明を加えることにする。

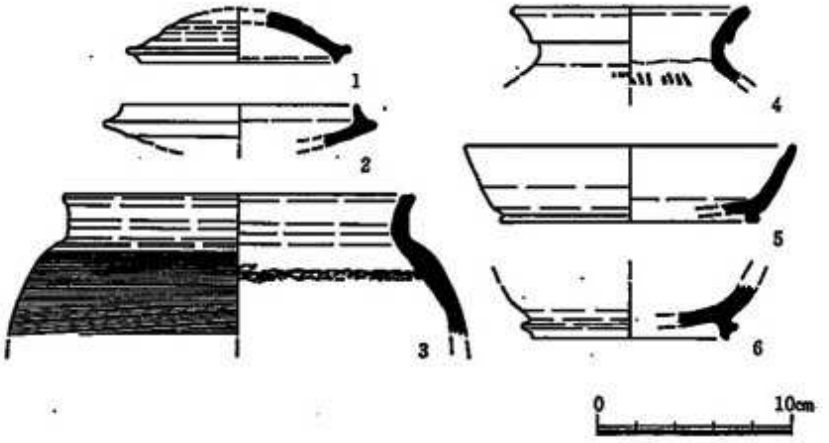
A　方形周溝墓周溝内上層出土遺物　（第40～42図；図版166下）

方形周溝墓の周溝上層から出土した主な遺物は、第40図、第41図、第42図に掲載した通りである。第40図には、1号方形周溝墓の周溝上層から出土した6点の遺物を、また第41図には4号方形周溝墓の周溝上層から検出された6点の遺物を、そして、第42図には5～6号方形周溝墓の周溝内上層から出土した遺物10点を、各々の周溝上層から出土した遺物の代表例として掲げているが、出土遺物はほぼ100%須恵器類のみであって、土師器類の共伴はみられなかった。出土した須恵器の器種については、坏身、坏蓋、壺、甕の種類がその中心的位置をしめており、他に椀や手ずくねの土器もみることができる。



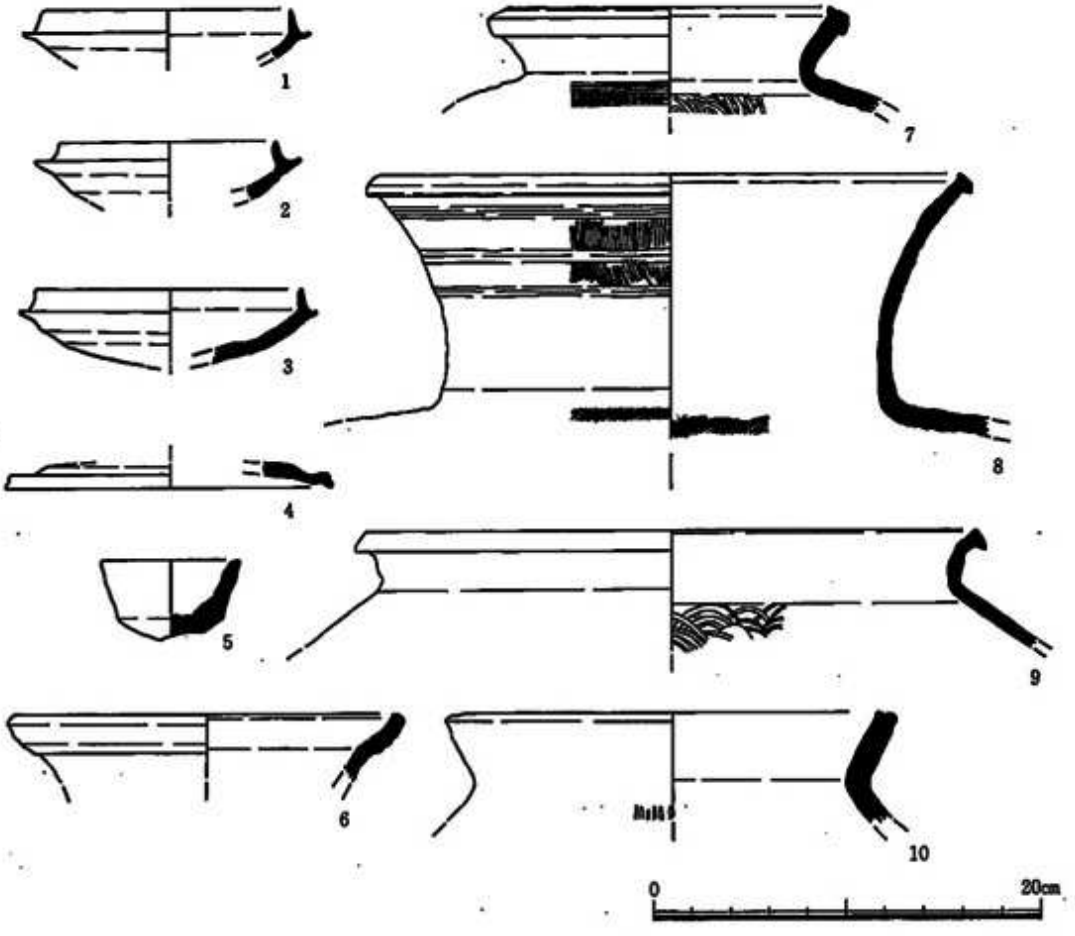
第40図　ＳＴＳ１周溝内上層出土土器

たとえば、第40図の(1)の坏身は、Ⅱ期の第4段階に属するものであり、(2)の椀はⅡ期の第6段階に、(3)の台付壺はⅣ期の第1段階に属するものである。一方、第41図の(3)の遺物はＴＫ237号窯出土の甕に型式として近似するものであり、Ⅲ期の第3段階からⅣ期の第1・第2段階の範囲



第41図　ＳＴＳ４周溝内上層出土土器

に属する遺物と把えられる。また(5)の坏も、同様の時期、Ⅲ期の第３段階乃至はⅣ期の第１段階に属するものと考えられる。他方、第42図の１～３の遺物は、おおむねⅡ期の第４、第５段階の坏身であり、(4)の坏蓋は、Ⅳ期の第３段階前後に位置するものである。(6)、(7)の甕はⅡ期の範疇



第42図　ＳＴＳ５・６周溝内上層出土土器

に属するもの、そして、(10)の甕はⅢ期の第3段階ないしはⅣ期の第1、第2段階に属するものである。

以上のことを総合する時、人々が再び菱木の台地上に足跡を残しはじめ、居住の場としてこの空間を再度利用しようとしはじめたのは、6世紀後半以降のことであり、弥生時代中期段階で一定程度埋もれていた周溝部分が、更に自然堆積或いはこれ以後人工的な堆積を蓄積して完全に埋まりきってしまうのは8世紀のことであると理解されるのである。

B　遺構面直上出土遺物　（第43・44図；図版164）

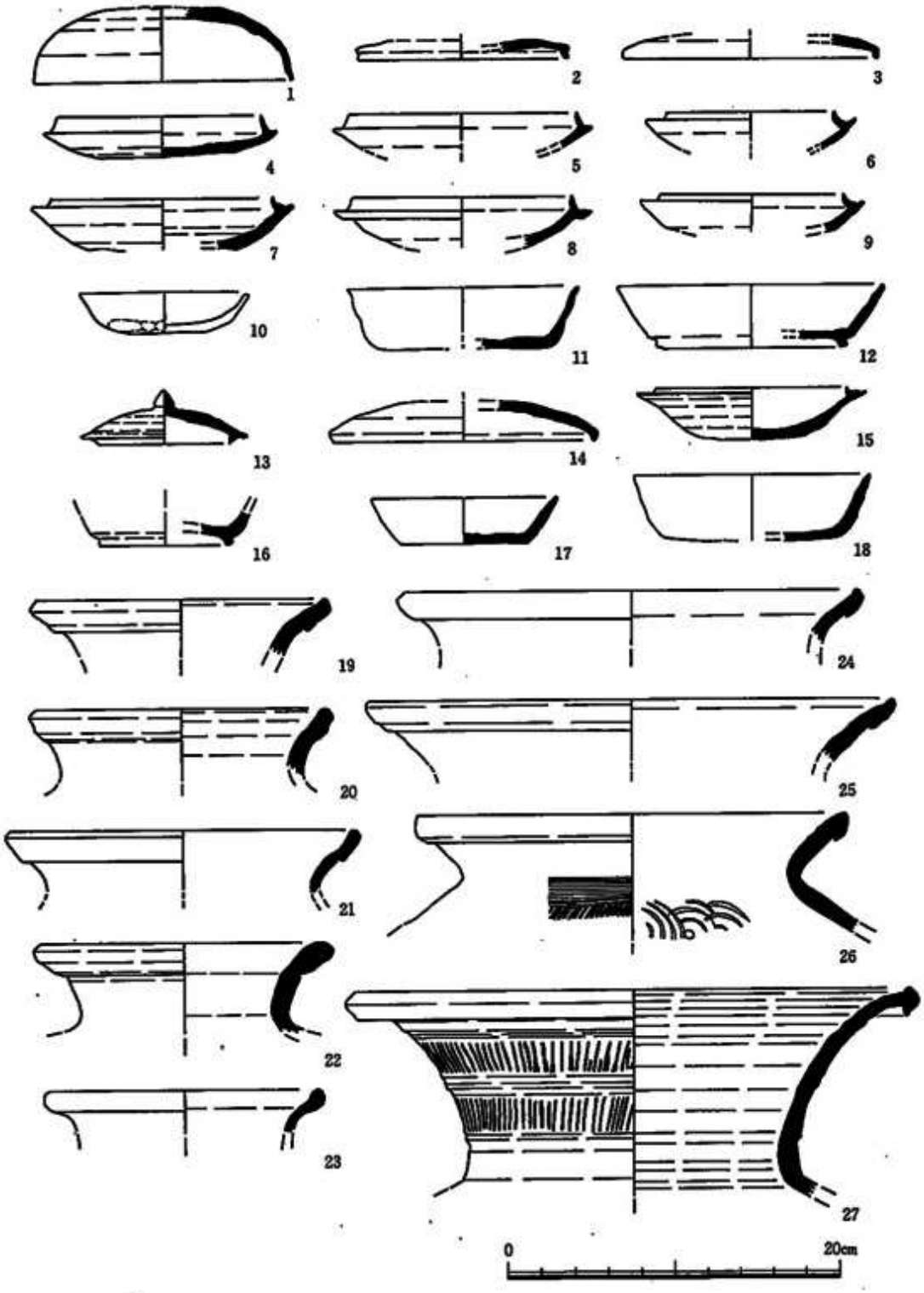
6世紀後半に方形周溝墓の周溝上層の凹み部分に、須恵器片が顕著に包含されはじめるのと相呼応して、遺構面である黄色シルト層直上においても、急激に須恵器片の散布が目立ちはじめる。そこで、次に、遺構面直上で検出された遺物のうち、第43図には27点、第44図には4点の合計31点を掲載して、その全体的傾向を説明したいと思う。

遺構面直上から出土した遺物のうち、第43図の1～12、19～27、そして第44図の1～4の合計25点の遺物は第Ⅰ調査区の中でも、特に西北部分に集中して検出されたものであり、他方、第43図の13～18の6点は、西南部分に集中して見い出されたものである。全般的に言って、土器の出土率は、調査区の東側よりも西側に、そして南側よりも北側に集中して高い。検出される土器は、その殆んどが須恵器であるが、1点だけ遺構面直上において土師小皿が見いだされている。須恵器の器種としては、坏身、坏蓋、甕類が中心であるが、他に器台なども検出されている。

坏身に関して言えば、第43図の(4)、(5)、(6)などはⅢ期の第4段階に属するものであり、(7)、(8)、(9)などはⅢ期の第5段階に、(15)はⅢ期の第6段階に所属すると考えられるものである。高台を有する(12)、(16)や高台のない(11)、(18)などはⅣ期の第1段階に位置すると把えられるものであり、同じ無高台の坏であっても、(17)などはⅣ期の第2段階にまで下るものであると考えられる。一方、坏蓋については、(1)のようにⅢ期の第4段階に属するものから、(13)のようにⅢ期の第1段階に位置するもの、そして、(2)、(3)、(14)などのようにⅣ期の第1段階に属すると考えられるものまで存在する。甕は、(19)～(23)、(24)～(26)の遺物ともに、Ⅲ期の第4段階と相前後する時期のものであるが、(27)の遺物に関しては、ＴＫ217号、ＴＫ23号窯からの出土遺物とも関連して、Ⅲ～Ⅳ期の範疇にはいるものと思われる。他方、第44図の器台に関しては、これらはいずれも、一応、Ⅲ期に属する遺物であると考えている。

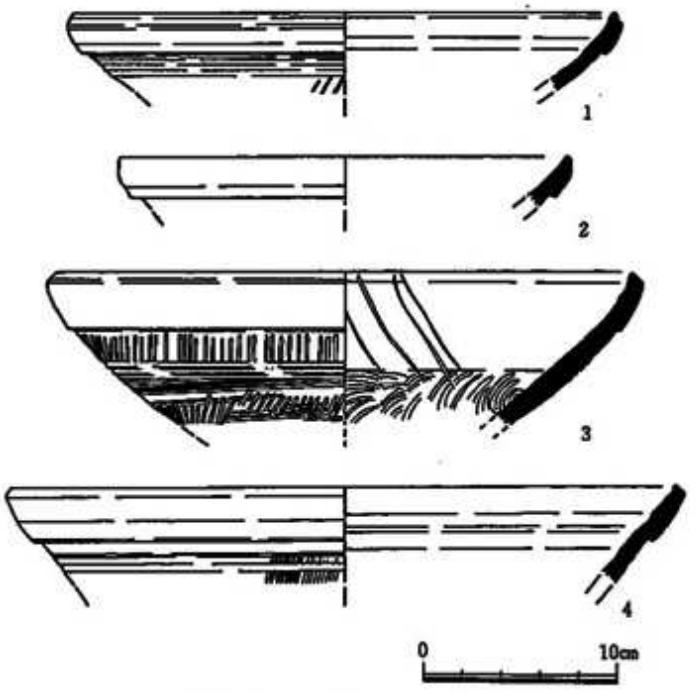
ところで、遺構面直上からの出土遺物は比較的多種にわたっているので、続いて、ここでは特に甕と器台を抽出して、その主な型式を紹介しておきたいと思う。

検出された甕は、小型甕（19～23）と大型甕（24～27）の大きく2種の系統に分離することができるが、主として口縁端部の形態比較によって、本報告書では小型甕をａ、ｂ、ｃの3型式に、大型甕をＡ、Ｂ、Ｃ、Ｄの4型式に分類している。すなわち、前者に関していえば＜ａ＞第43図の(19)のように口縁部が斜方に軽く外反し、端部断面が稜鋭く、長方形に近いかたちを呈するもの＜a_1＞、(20)のように、稜の鋭さがとれて端部断面が長円のように丸みをつけはじめるもの＜ａ



第43図　遺構面直上出土土器A

$_2$＞、またa_1、a_2のタイプとも肥厚部分の内面は比較的フラットであったのに対し、＜b＞㉒のように、口縁部が弓状に外反し、しかもその端部が丸く肥厚してとじるもの＜b_1＞、＜c＞a、bのタイプに比して器壁が薄く、㉑のように外反して斜方にのびた、一定程度の厚さをもつ口縁端部が僅かに内彎するもの＜c_1＞、㉓のように外反して斜方にのびた口縁部がその端部でスプーン状に肥厚するもの＜c_2＞の大きく3型式に分類できる。他方、後者に関



第44図　遺構面直上出土土器B

しては、＜A＞第43図の㉔のように斜方に伸びた口縁端部が僅かに内彎し、断面が基本的には矩形を呈するもの、＜B＞㉕のように斜方に伸びた口縁端部が、先端を鋤状にシャープにとじるもの、＜C＞㉖のように、斜方にのびた口縁部が、その端部でおりまげられたような観を呈し、従って口縁部外面の外形のラインが、A、Bのタイプのように斜方向へのラインとならず、ほぼ鉛直線方向のラインを呈するタイプのもの、そして＜D＞弓なり状に大きく外反した口縁部が、その端部で上下にひきだされ、断面三角形の基本形を呈するもの、と大きく4つの型式に分類することができる。

遺構面直上から検出された器台に関して言えば、それはAタイプ、Bタイプの2種にわけることができる。Aのタイプは第44図の(1)、(2)に示した類型であるが、口縁部の肥厚部分の先端がシャープな感を与えるものである。そのうち、(1)は稜線が明瞭であり、端部の整形が丁寧になされているタイプのもの＜A_1＞であり、(2)は、その稜線がだんだん崩れて、つくりがやや粗略化していくタイプのもの＜A_2＞である。Bのタイプは、(3)、(4)に図示したかたちのものであるが、口縁部肥厚部分の先端が基本的に矩形をなすものである。〔なお、(4)の遺物に関しては、遺物の割れ口近くのカーブをも考慮にいれて、本稿では一応器台の範疇にいれているが、或いは甕の口縁になる可能性もあることを付記しておく。〕

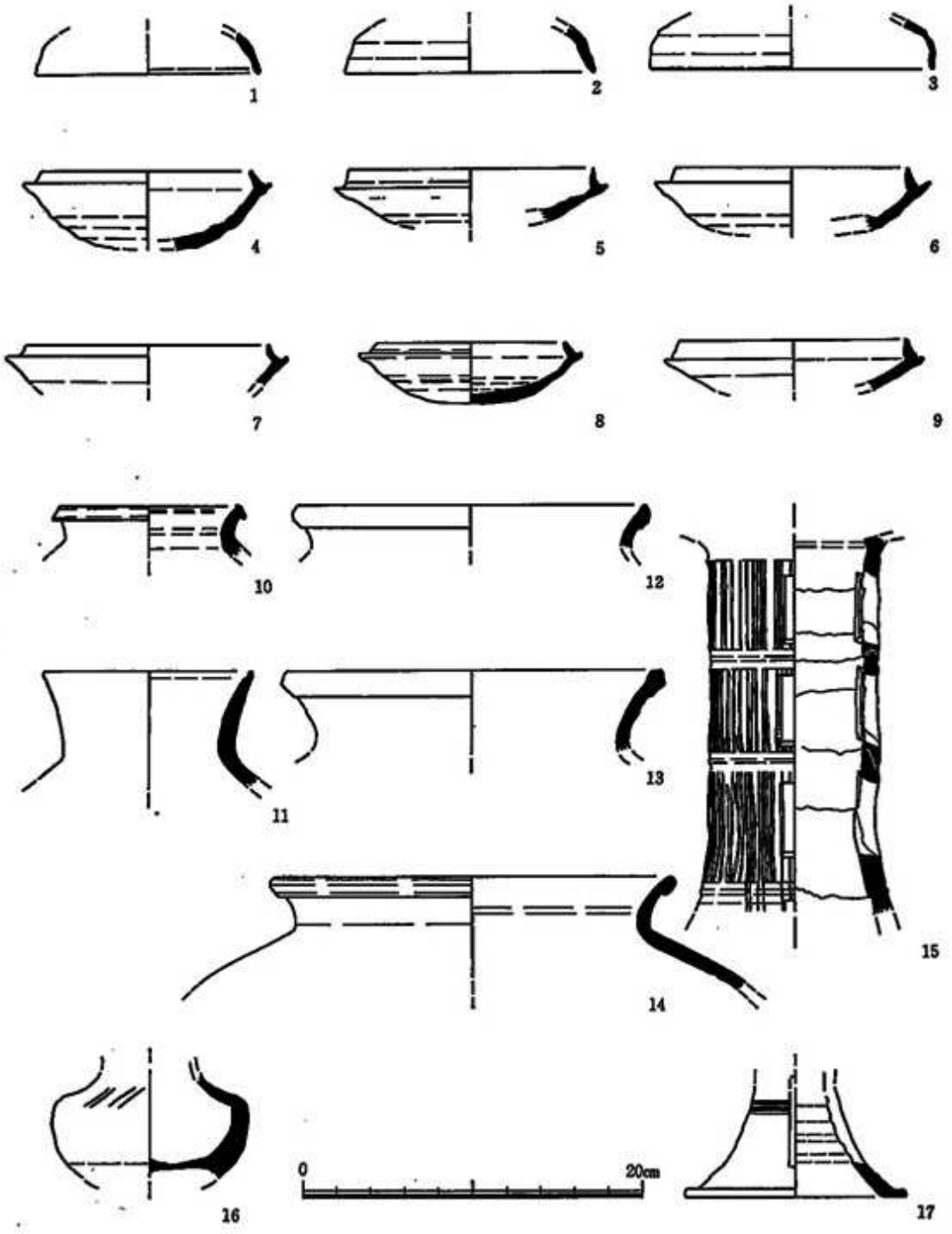
以上が、遺構面直上から出土した、特に甕と器台の型式についての説明である。これらの要素と、先程の坏身、坏蓋の型式及び編年関係を総合する時、古墳時代以後の遺構の時期に関しては、方形周溝墓の周溝上層遺物の場合と同様、6世紀後半以降8世紀前後の間を中心とする時期の遺構の展開を垣間みることができる。

C　竪穴住居址内出土遺物

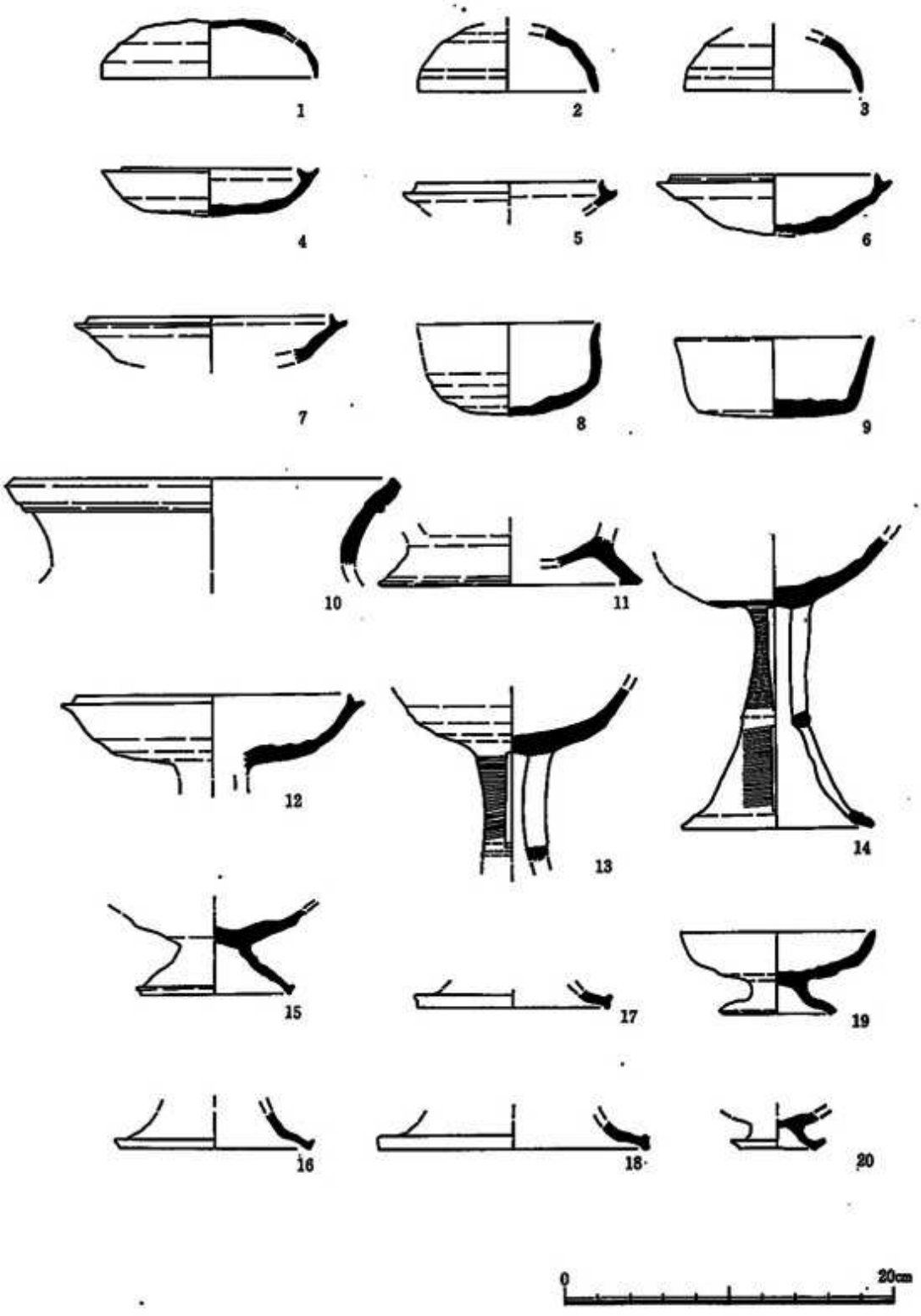
古墳時代の竪穴住居址は、今回の調査で２棟検出されている。５号住居址ＳＢＫ５と６号住居址ＳＢＫ６の、各々隅丸方形のプランを有する竪穴住居址であり、遺構の新旧関係について述べるならば、それはそのきりあいの様子から、５号住居址の方が、相対的には６号住居址よりも古いということができる。いずれにしても、住居址の中から数種数点の土器が一括的に検出されたということは、器種毎の型式の存在形態、或いは器種別の型式の対応関係などを、実際の土器の使用状況の中で明らかにしていく点で絶好の資料を提出しているといえる。

ＳＢＫ５内出土土器（第45図；図版165上）　５号住居址の床面からは、須恵器19点が出土しているが、そのうち図化の可能であった17点を抽出して、第45図に掲載した。器種としては、坏蓋、坏身、壺、甕、器台、高坏など、各種の土器を見いだすことができるが、坏身に着目してみるのに、器高がだんだん低平化し、かつ返りの部分がだんだん短小化していく中で、(5)、(6)、(9)などのように依然、かえりが垂直方向への伸びを保っているものと、(4)、(7)、(8)などのように、かえりが顕著に内傾化していくタイプのものと、両者が混在する状況を呈している。前者はおおむねⅡ期の第４段階、後者はⅡ期の第５段階に属するものと思われる。一方、(1)、(2)、(3)に挙げた坏蓋の類もおおむねⅡ期の４段階もしくは５段階に位置するものである。(10)、(11)、(16)は壺の類であるが、(11)は直口壺、(16)は短頸壺である。(12)～(14)は甕であり、口縁部の形態は互いに異なっているが、ＴＫ43－１号窯のものと同じく同時併存するタイプであることがわかる。(15)は住居址内から検出された筒形器台、(17)は高坏の脚部であるが、おおむねⅡ期の４～５段階に属する遺物といえよう。

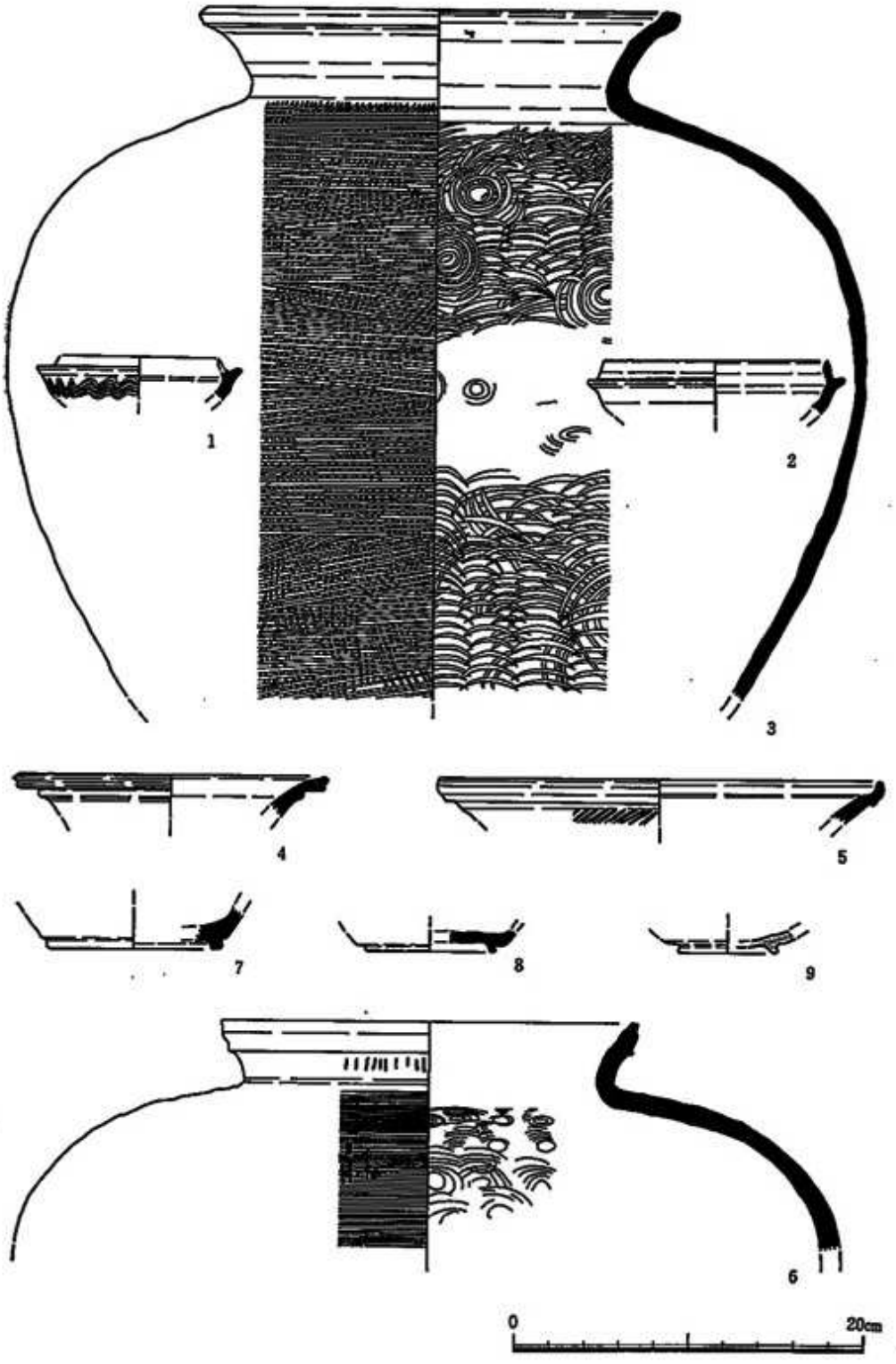
ＳＢＫ６内出土土器（第46図；図版165下、166上）　他方、６号住居址から出土した遺物の主なもの20点は、第46図に掲げた通りである。(1)～(3)は坏蓋であるが、天井部が急速に丸みをもち、そのことと呼応して蓋部の径が急に小型化してくる傾向が顕著となる。(4)～(7)の蓋坏も、器高が低平化し、同時に、かえりが短小化また内傾化の度を深めていくことが観察される。Ⅱ期の５段階もしくは最終末の６段階に属すると思われる。(8)は椀（もしくは坏）、(9)は坏であるが、前者はⅢ期の１段階、後者はⅢ期の２段階の要素を現出している。(10)は甕であるが、Ⅱ期の４段階には既に確認されているタイプのものである。(11)は、７世紀代前半の長頸壺あるいは細頸壺（台付壺）の脚台部と思われる。(12)～(20)までは高坏であるが長脚のものと短脚のものとがある。脚台の端部の型式だけをみても、(15)、(18)、(20)のように斜め外方にその端部がはねあがるａ型式のものと、(17)、(19)のようにその端部が上下につまみだされるｂ型式のもの、そして(19)のように端部が特別のつまみだしを伴なわずに精美にまとめられるｃ型式のものと大きく３種みいだすことができるが、使用年代に関していえば、これらの型式が、住居址内での使用という本例が示すようにある時点では併存関係にあることがわかるのである。以上を総合して、この６号住居址の使用年代は、Ⅱ期の５段階前後から、Ⅲ期の２段階くらいまで、すなわち、６世紀の末葉から７世紀の前葉の時期にかけての住居址と考えられる。



第45図　ＳＢＫ５内出土土器



第46図　ＳＢＫ６内出土土器



第47図　ＳＫＡ21内出土土器

D　土壙およびピット内出土遺物

古墳時代もしくはそれ以後の時期に属する土壙および掘立柱建物をも含むピット内から出土した遺物は第39図、第47図に掲げた通りである。

土壙（ＳＫＡ12、21、22）内出土土器（第39・47図）　土壙墓以外の、土器廃棄用或いは貯水的機能を有したと考えられる土壙を本稿ではＳＫＡの記号であらわしたが、その中でＳＫＡ12から出土した土器が、第39図の⑫である。須恵器の甕で、６世紀代のものである。土壙の中で、最も大きく、最も大量の遺物を出土したのはＳＫＡ21であるが、この土壙から出土した遺物の主なものは、第47図の(1)〜(9)に挙げてある。器種としては(1)〜(8)に示したような須恵器の高坏、坏身、坏、甕など、６世紀以後、８世紀もしくは９世紀にまで至る遺物片と、他に、(9)のような瓦器片など中世遺物も出土している。別の土壙ＳＫＡ22からは、第39図の⑬のような、中世の土師質の羽釜が出土している。

土壙内出土石器（第51図；図版169下）　土壙内から出土した遺物として、ＳＫＡ20から出土した砥石（第51図一２）と、ＳＫＡ21から出土した石鍋（図版169下一４）とを挙げることができる。いずれも、中世土壙からの出土遺物であるが、前者は砂岩製、後者は滑石製である。

土壙墓内出土土器　一方、古墳時代あるいはそれ以後の時期に属する土壙墓からの出土遺物は、第39図の５〜11に示した通りである。(5)はＳＴＫ10からの出土遺物でⅢ期の２段階以降、(6)はＳＴＫ13からの出土遺物でⅡ期の４段階前後、(11)はＳＴＫ15からの出土遺物でⅣ期に属するもの、(9)、(10)はＳＴＫ18からの出土遺物で、Ⅳ期の中でも奈良時代以後に属するものと思われる。また、(7)、(8)は、ＳＴＳ４とＳＴＳ５の周溝の共有部分の埋土上層の中にみられた土壙状のほりかたの中から出土した遺物であるが、(7)はⅣ期に、そして(8)は（古い要素の混入であるが）Ⅰ期に属する遺物と考えられる。

掘立柱建物およびピット（Ｐ110、112、113）内出土遺物　ピットからの出土遺物に関しては、第39図の⑭、⑯が、掘立柱建物ＳＢＰ２、ＳＢＰ11からの出土遺物であり、⑰〜⑳は、それ以外のピットからの出土遺物である。⑭はⅡ期の４、５段階、⑯はⅡ期の３、４段階の前後に位置するものである。⑱はピット110からの、Ⅱ期の高坏であり、⑰はピット112からのⅡ期の器台である。⑲、⑳は、ピット113から出土した近世の唐津焼および炮烙である。

土壙およびピット内出土遺物の内容は、以上のとおりである。

E　溝内出土遺物

古墳時代およびそれ以後の時期に属する溝状遺構は、弥生時代の竪穴住居址ＳＢＫ３、ＳＢＫ４をきっているＳＤＡ３と、その東方を走るＳＤＡ４の二本である。

ＳＤＡ３内出土土器　ＳＤＡ３は、現代水路によって大幅に撹乱を受けており、掘ることのできた範囲も極く狭小であったため、検出しえた遺物は少なかった。その中には、弥生時代の石槍や、６世紀末葉以後７、８世紀頃までの須恵器片や中世の瓦器片などが含まれていたが、混入品である石槍を除いて、図化しうる遺物は見いだしえなかった。

ＳＤＡ３出土石器（第50図；図版169上） 溝状遺構の中からも石器が出土しているが、弥生時代の竪穴住居址ＳＢＫ３、ＳＢＫ４をきるＳＤＡ３からは、サヌカイト製の石槍が１点出土している。実測図は、第50図の(4)に掲げたとおりであるが、或いは、ＳＢＫ３もしくはＳＢＫ４からの混入品である可能性もある。

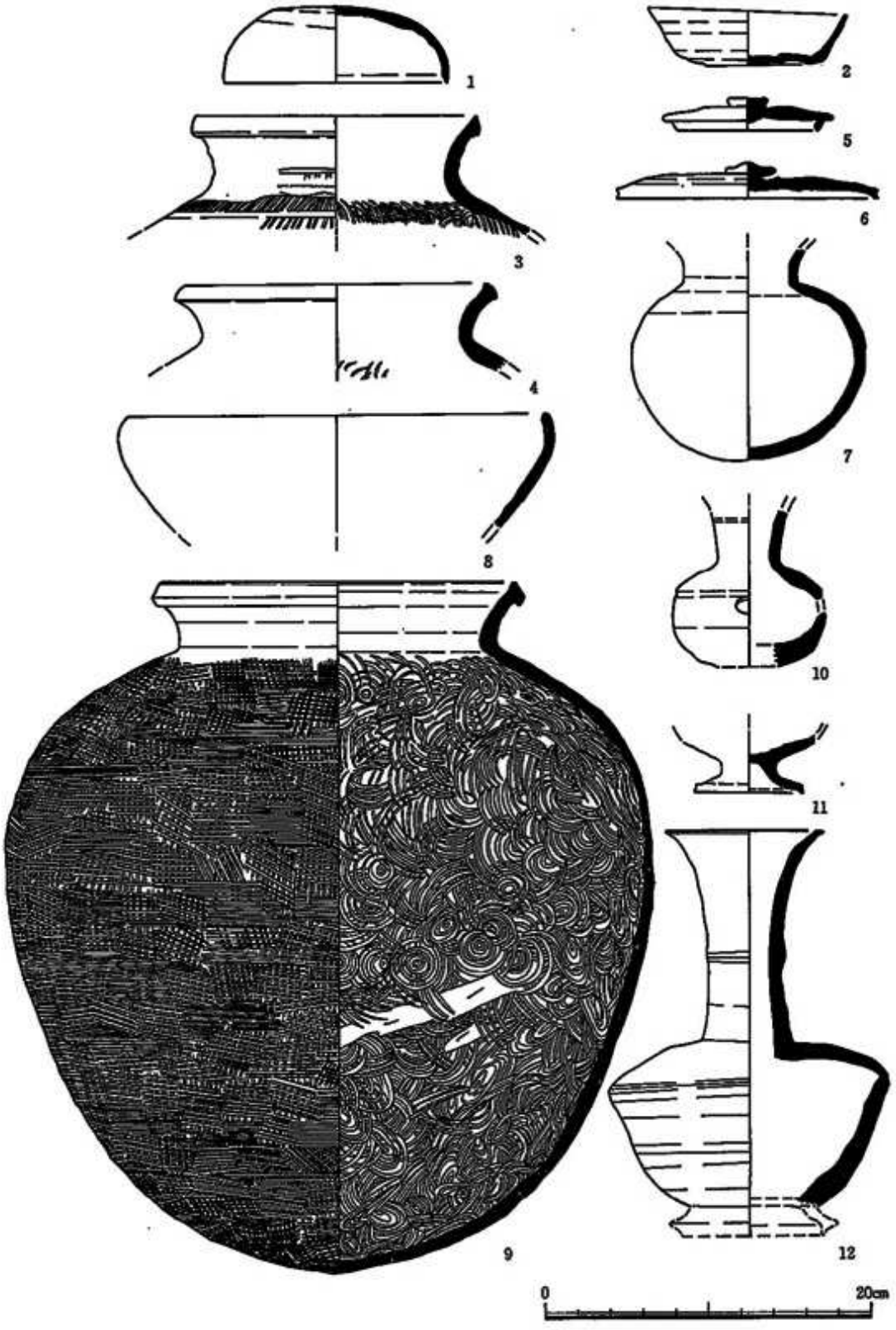
ＳＤＡ４内出土土器（第48図；図版166下、167） ＳＤＡ４から出土した土器はそのうちの12点を第48図に掲載したが、すべて須恵器である。(1)はⅡ期後半の坏蓋、(2)はⅢ期の坏、(3)、(4)はⅢ期後半からⅣ期の甕、(5)、(6)はⅣ期の蓋である。(7)はⅡ期からⅢ期にかけての壺、(8)はⅣ期の鉄鉢形土器、(9)、(10)、(11)はⅡ期の甕・瓶・高坏、そして、(12)はⅣ期の長頸壺である。総じて、このＳＤＡ４の機能した時期は、６世紀後半以降、８世紀頃までと判断できる。

ＳＤＡ４出土石器（第51図；図版169下） 古墳時代後期から奈良時代にかけての溝であるＳＤＡ４から凹み石が１点出土している。第51図の(3)に示したとおりであるが、砂岩製の石製品である。

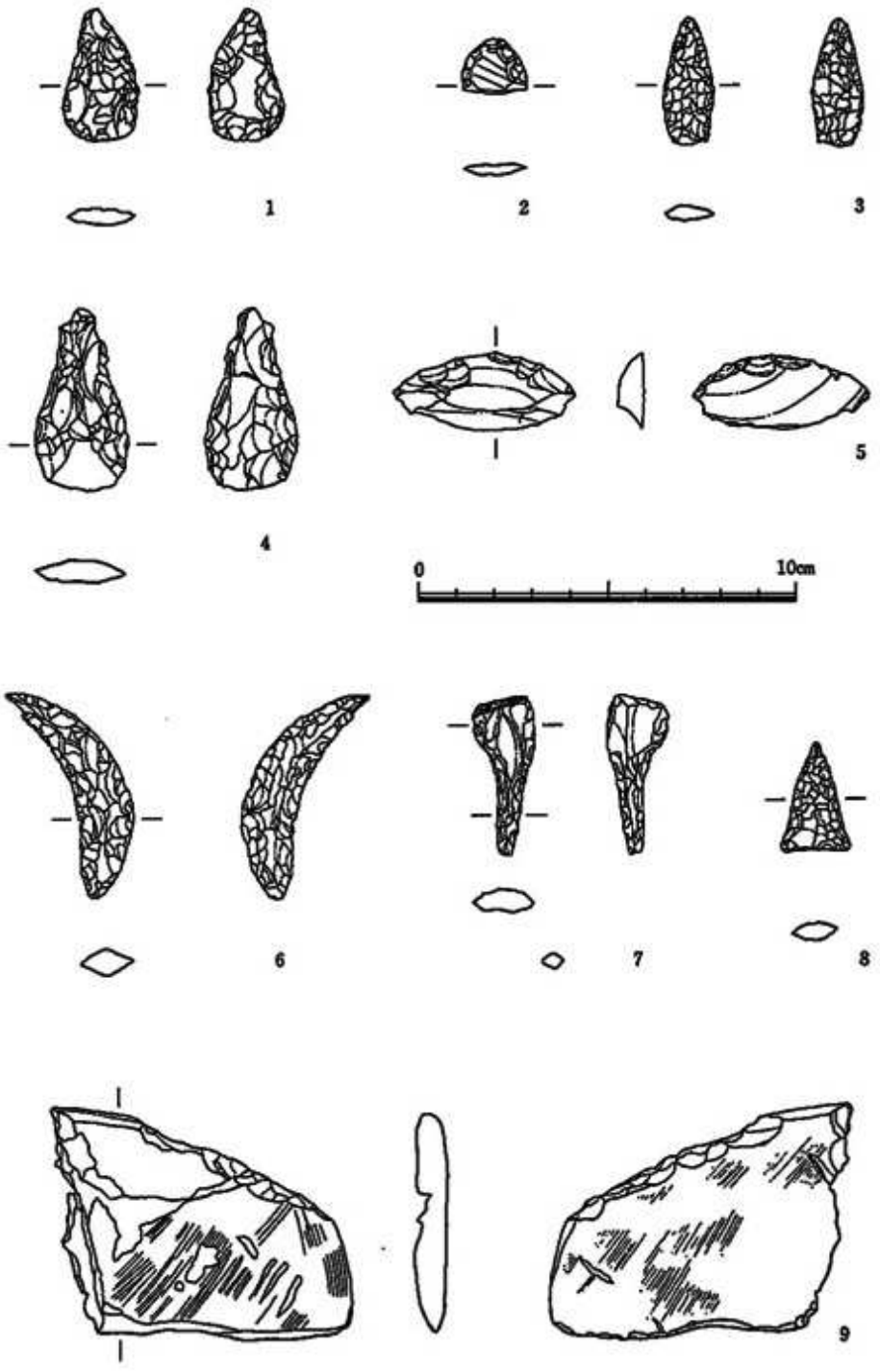
以上が、溝内出土遺物の大要である。

第５節　ま　と　め

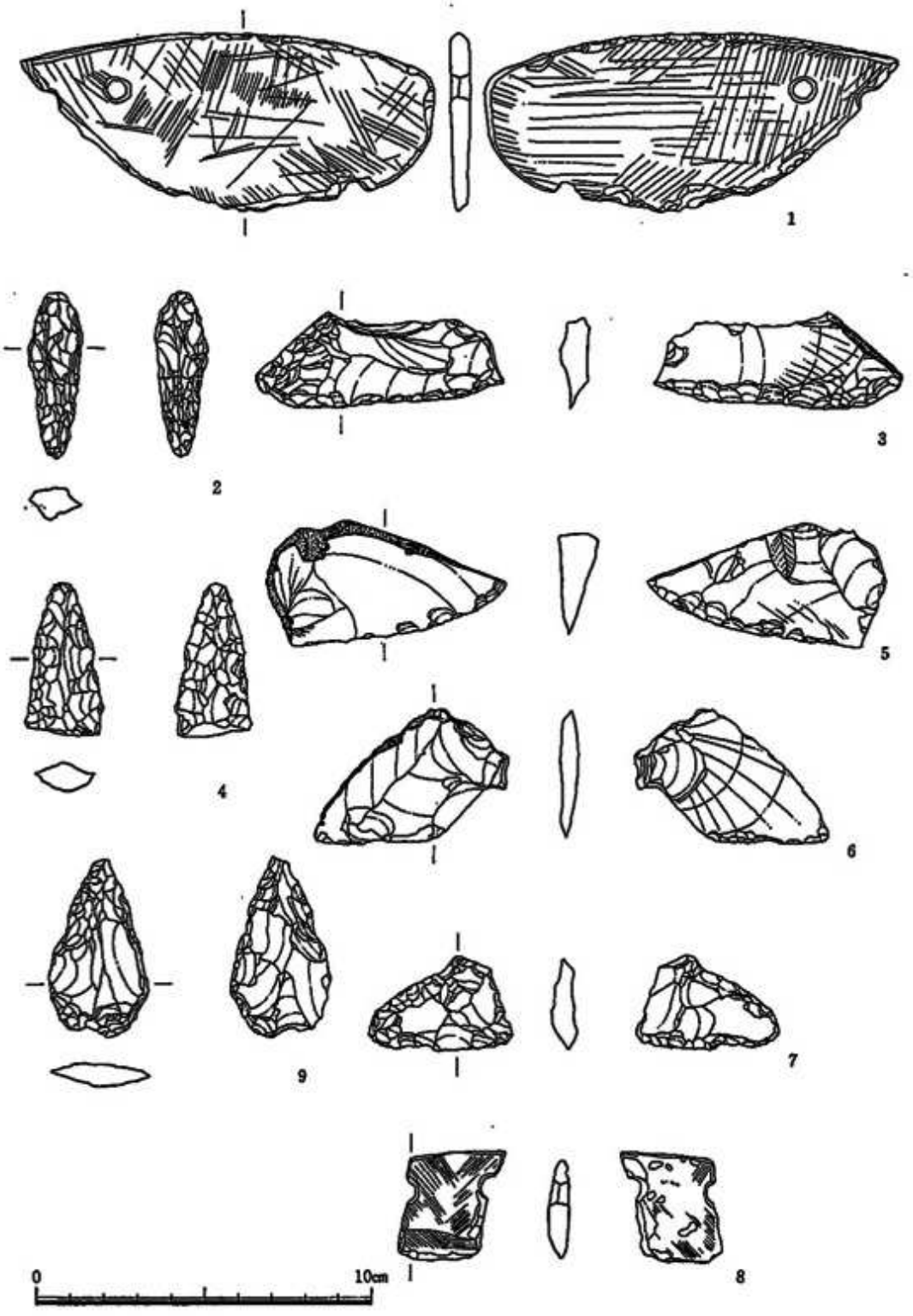
以上、菱木下遺跡の第Ⅰ調査区における遺構と遺物の双方に関して、叙述をすすめてきた。今回の調査を通じての成果は数多く挙げうるが、先ず、泉北台地上において、「陶邑」以前の人々の生活痕跡を明確に把握しえたこと、とりわけ弥生時代中期にまで朔及して、彼らの居住跡と方形周溝墓・土壙墓群などに代表される墓制を明らかにしえたことは、貴重な成果のひとつと言える。具体的に竪穴住居址の規模や構造を把握しえたこと、円形のプランから隅丸方形へのプランへの変化が少なくとも弥生時代中期中葉（第Ⅲ様式の時期）には現出していたこと、方形周溝墓は家族墓的性格を強く出しており、通常副葬品を伴なわない複数埋葬がなされること、そして、周溝内から見いだされる多数の供献用土器が示すように、被葬者に対する宗教儀礼的行為がなされていたこと、また周溝墓被葬者と相並んで、周溝墓外域で土壙墓に被葬される別枠の人々が存在したこと、土器や石材などの搬入から、当時の河内や紀伊などとの文物の交流や人間の移動を確認しうることなどが、その成果の主なものである。当時の生産基盤がどの程度のものであったかは資料的には把握しがたいが、竪穴住居の同時期における密集度や、備蓄的な機能をもつ倉庫的建物の検出がなかったことなどは、畿内弥生中期における一般的に受容されている豊饒さのイメージとは裏腹に、この地における極めて零細な農業生産のあり方を示唆しているように思われる。そして、余剰生産物を一手に収奪するような権力者は少なくとも本遺跡のあり方を見る限りにおいては、その方形周溝墓の内容の均等性とも相俟って、未だこの段階では現出していなかったように思われる。一方、この弥生時代の第Ⅱ・第Ⅲ様式の時期にこの台地上において明白な生活痕跡を残していった人々が、その時期以後、突然に姿を消しているかに見える現象も、興味をそそる点である。少なくとも、今回の第Ⅰ調査区の範囲内では、遺構面直上は勿論、包含層内に



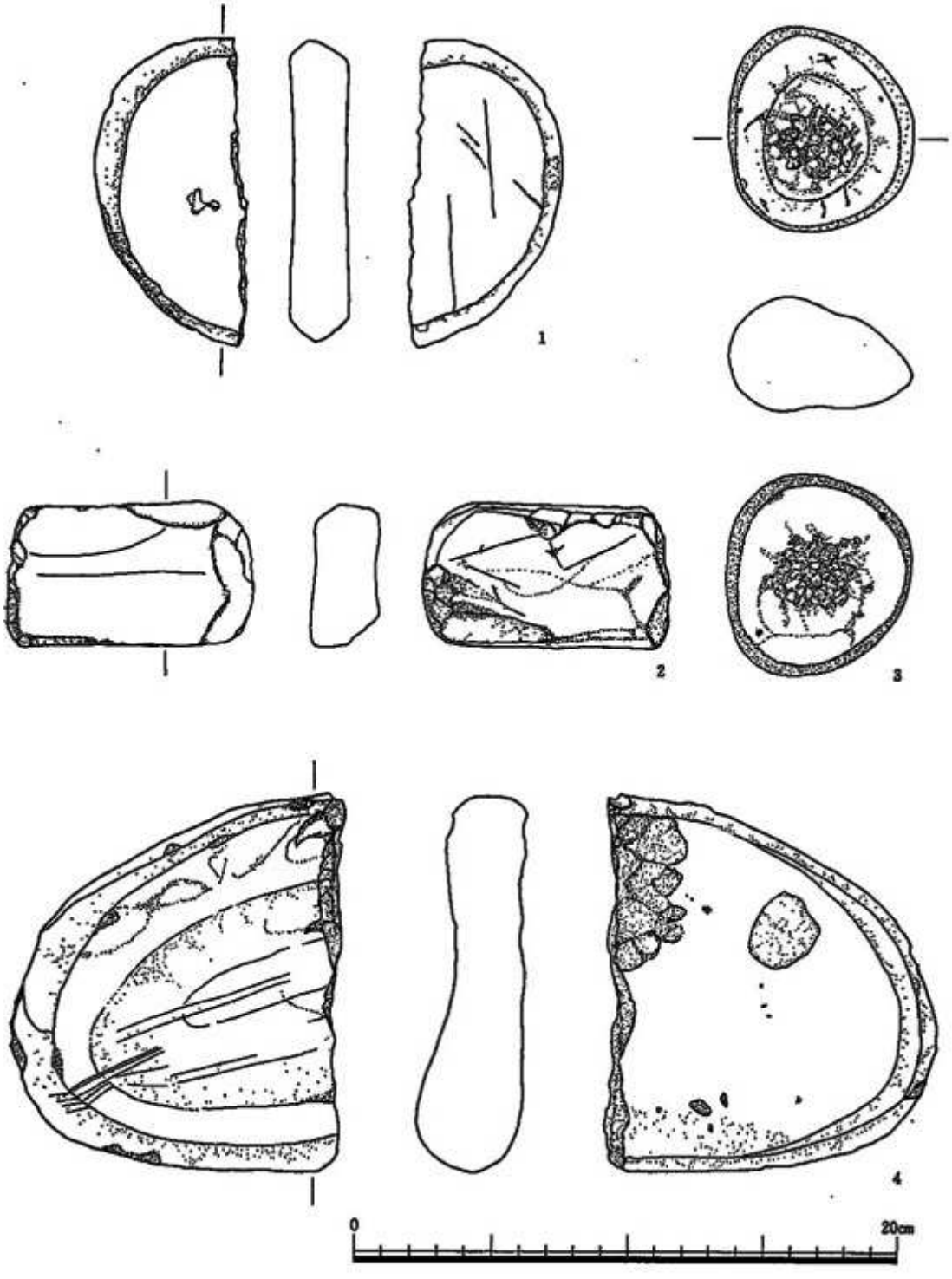
第48図　ＳＤＡ４内出土土器



第49図 ＳＢＫ１・３内出土石器



第50図　ＳＴＳ１・４・６、ＳＤＡ３内出土石器



第51図 ＳＢＫ１、ＳＴＳ５、ＳＫＡ20、ＳＤＡ４内出土石製品

おいても第Ⅳ・第Ⅴ様式に属する遺物は検出されていないので、まず中期後葉以降は、この地は生活経営の場所としては、一時期放棄されたものとみてさしつかえないであろう。それが単なる移動にとどまるのか、それとも、「倭国大乱」の如き歴史的大事件にまきこまれて、和泉の惣の池や観音寺山の前史を形成する集団として、或いはその近辺の組織的集団の中に、倏かに軍事的分子として編入されていったのか、それらは今後の課題である。

弥生中期後葉以後、長期にわたって途絶していたこの泉北台地上に再び人々が居住しはじめるのは古墳時代後期以降のことであるが、当時の建物のプランとしては、伝統的な隅丸方形の竪穴住居（6世紀後葉～7世紀初頭）の他に、遅くとも7世紀の初めには掘立柱建物が登場している。倉庫建築の比率も極めて高く、この時代の生産力の高さを彷彿とさせている。また、灌漑用と考えられる水路の他に、居住域と墓域を画したと思われる溝も検出された。一方、土器などの遺物廃棄用の土壙は、古墳時代の後期から中世にわたって点在しており、また、土壙墓は古墳時代後期から古代末期くらいまでのものが検出されている。そして、中世から近世にかけては、貯水的機能をもつ大土壙や古道の存在が確認されたのである。このように、泉北台地は古墳時代後期以後、再び人々の居住域として息づきはじめたわけであるが、調査成果として興味深い点は、古墳時代の後期から終末期における、竪穴住居から掘立柱建物への構築物変遷期の様相を具体的に見いだせることや、当時の人々の居住域と墓域に対する明確な識別的意識の存在、一般的民衆墓の存在形態のあり方、灌漑水利の具体的方法などを知りえたことである。今回の調査区の範囲内では、明確に中世墓といえるものが殆んどみいだせなかったことにも、ひとつの特徴があるが、それは、Ⅱ・Ⅲ工区の中世土壙墓群の中に吸収されているためかも知れないし、残された未調査区域の中に眠りつづけているのかもしれない。こういった問題の検討は、弥生時代以降、中近世にまで至る生産空間、すなわち水田遺構や畑地遺構の究明とも相俟って、次期調査時の課題としたい。

付、菱木下遺跡第Ⅰ調査区出土遺物観察表

凡 例

1．法量については、(　)内残存値、推：推定値、復：復原値、高：器高、残存：破片の残存値を示し、口、胴、底などは径を示す。

2．胎土には長石、石英、チャート、くさり礫砂粒を主に含むが、それ以外の特徴的な砂粒を記入した。砂粒は大きさにより、大＞5㎜、2㎜＜中≦5㎜、0.5＜細≦2㎜、微≦0.5㎜とした。

トレンチ内出土土器

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
28－1		縄文器	壺	トレンチB	□26.2、高(4.3)	(外・内)ナデ。	砂粒(含)、(外)灰色・(内)灰白色、良好、(内)僅かに自然釉
2		縄文器	壺	トレンチF	□18.0、高(8.6)	(外)タタキ後カキメ、カキメ。(内)同心円文、スリケシ状ナデ。	砂粒(含)、(外)灰オリーブ色・(内)灰色、良好、(外)自然釉
3		縄文器	壺	トレンチF	□18.4、高(4.8)	(外・内)ナデ。	砂粒(中)、灰色・(断)灰赤色、良好、(外)僅かに自然釉
4		縄文器	坏身	トレンチF	高台11.4、高(3.7)	(外)ナデ。(内)ナデ。(内底)ヘラケズリ。	砂粒(含)、灰色・(断)黄灰色、良好
5		縄文器	器台	トレンチF	□24.2、高(5.6)	(外)波状文、2条の沈線。カキメ後タタキ、ナデ。(内)ナデ、タタキ。	砂粒(含)、青灰色・黄灰色、良好
6		土師器	皿	トレンチB	□13.6、底16.0、高 2.0	(外)ナデ。(外底)ヘラケズリ。(内)ナデ。	砂粒(中)、灰色、良好
7		縄文器	坏蓋	トレンチC	□21.3、つまみ3.1、高 3.9	(外・内)ナデ。1条の沈線文。	砂粒(含)、(外)淡黄色・(内)灰白色、良好
8		縄文器	坏身	トレンチC	□12.2、高(2.4)	(外・内)ナデ。(外)立上り基底部に沈線文。	砂粒(含)、明青灰色、良好
9		縄文器	坏身	トレンチC	□12.4、高(3.6)	(外)ヘラケズリ、ナデ。(内)ナデ。	砂粒(含)、(外)灰色・(内)明オリーブ灰色、良好
10		縄文器	坏身	トレンチC	□12.7、底 8.6、高(3.9)	(外・内)ナデ。	砂粒(細)、(外)青灰色・(内)白灰色、良好
11		縄文器	坏身	トレンチC	□19.0、高台14.4、高(6.7)	(外)ヘラケズリ、ヘラケズリ後ナデ。(内)ナデ。	砂粒(細)、灰オリーブ色、良好
12		縄文器	壺	トレンチC	□19.8、高(4.3)	(外)タタキ、ナデ。(内)ナデ。	砂粒(含)、青灰色、良好
13		縄文器	壺	トレンチC	□23.6、高(3.6)	(外・内)ナデ。(外)粘土の接合痕。	砂粒(含)、(外)青灰色・(内)赤紫灰色、良好、(外)被灰
14		縄文器	高坏(脚部)	トレンチC	底13.2、高(3.2)	(外・内)ナデ。	砂粒(含)、(外・断)明緑灰色・(内)灰白色、良好
15		縄文器	器台	トレンチC	□25.6、高(6.6)	(外)タタキ、ヘラケズリ、ナデ。(内)ナデ。	砂粒(含)、(外)黒色・灰色・(内・断)灰色
16		縄文器	器台	トレンチC	□19.6、高(4.9)	(外)ナデ後タタキ。(内)ナデ。	砂粒(含)、(外)青灰色・(内)灰色、良好、(内)自然釉

第1・第2包含層内出土土器

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
29－1		縄文器	坏身	第1包含層	□12.4、高(3.4)	(外)ナデ、ヘラケズリ。(内)ナデ。	砂粒(含)、青灰色、良好
2		縄文器	坏身	第1包含層	□16.7、高(2.9)	(外)ナデ、ヘラケズリ。(内)ナデ。	砂粒(細)、褐灰色・(断)青灰色、良好、(外)被灰
3		縄文器	坏蓋	第1包含層	□16.2、つまみ2.4、高 1.8	(外)ヘラケズリ後ナデ。(内)ナデ。	砂粒(含)、暗青灰色、良好
4		縄文器	坏身	第1包含層	□12.8、高(4.0)	(外)ナデ、ヘラケズリ。(内)ナデ。	砂粒(細)、青灰色、良好
5		縄文器	壺	第1包含層	□10.8、高(3.8)	(外・内)ナデ。	砂粒(細)、灰色、良好
6		縄文器	壺	第1包含層	□17.0、高(3.8)	(外・内)ナデ。	砂粒(中)、青灰色、良好
7		縄文器	壺(高台)	第1包含層	高台10.0、高(2.6)	(外・内脚)ナデ。(外)粘土紐の接合痕あり。	砂粒(細)、(外)灰白色・(内)淡黄色、良好、(外脚・内底)被灰
8		縄文器	器脚	第1包含層	底 5.4、高(4.2)	(外)ナデ、ヘラケズリ。(内)ナデ。	砂粒(含)、灰色、良好、(受)自然釉
9		縄文器	高坏	第1包含層	脚中央 3.0、高(13.0)	(外坏)ヘラケズリ、ナデ。(坏内)ナデ。(外脚)カキメ、ナデ。(内脚)ナデ。	砂粒(細)、青灰色、良好
10		縄文器	坏身	第2包含層	□13.2、高(4.0)	(外)ナデ、ヘラケズリ。(内)ナデ。	砂粒(細)、青灰色、良好、(受)自然釉
11		縄文器	坏身	第2包含層	□14.2、高(2.2)	(外・内)ナデ。	砂粒(含)、灰色、良好
12		縄文器	坏身	第2包含層	□14.0、底 8.0、高(3.9)	(外・内)ナデ。	砂粒(細)、(外上)オリーブ灰色・(外下)青灰色・(内)青灰色、良好
13		縄文器	坏身	第2包含層	□13.6、高台10.3、高(3.7)	(外・内)ナデ。	砂粒(細)、青灰色・(断)暗赤灰色、良好
14		縄文器	坏身	第2包含層	□14.9、高台11.3、高(3.7)	(外)ナデ。(外底)ヘラケズリ。(内)ナデ。	砂粒(細)、(外)灰色・(内・断)淡黄色・(底)青灰色、良好
15		縄文器	壺(高台)	第2包含層	高台 7.3、高(3.1)	(外・内)ナデ。(外)粘土紐の接合痕あり。	砂粒(細)、青灰色・(断)紫灰色、良好
16		縄文器	壺	第2包含層	□35.0、高(5.3)	(外)波状文、沈線。(内)ナデ。	砂粒(含)、(外)黒色・灰色・(内)淡黄色・(断)黄灰色、良好
17		縄文器	壺	第2包含層	□18.6、高(5.0)	(外・内)ナデ。	砂粒(含)、灰色、良好
18		縄文器	壺	第2包含層	□18.2、高(4.2)	(外・内)ナデ。	砂粒(含)、黄褐色、良好
19		縄文器	壺	第2包含層	□37.2、高(7.7)	(外)ヘラ描き縦線、沈線。(内)ナデ。	砂粒(中)、(外)黒色・灰色・(内)灰色、良好、(外口縁)自然釉
20		縄文器	壺	第2包含層	□11.4、高(5.2)	(外・内)ナデ。(内)粘土の接合痕。	砂粒(含)、青灰色、良好
21		縄文器	高坏(脚部)	第2包含層	底14.2、高(2.6)	(外・内)ナデ。	砂粒(中)、灰色、良好
22		縄文器	高坏(脚部)	第2包含層	底15.2、高(1.7)	(外・内)ナデ。	砂粒(含)、灰色、良好

竪穴住居址SBK1～3内出土土器

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
30－1	158上-1	弥生式土器	壺形土器	SBK1 床面直上	□19.4、高(10.8)	(外)櫛描直線文。(内)ナデ。	砂粒(含)、橙色、良好
2	2	弥生式土器	壺形土器	SBK1 床面直上	□29.0、高(1.7)	(外・内)剥離のため調整不明。	砂粒(細)、橙色、良好
3	3	弥生式土器	鉢形土器	SBK1 床面直上	□28.0、高(2.8)	(外)ナデ。(内)剥離のため調整不明。	砂粒(含)、橙色、良好
4	158下-2	弥生式土器	壺形土器	SBK2、SDA1内	□26.2、高(3.7)	(外・内)剥離のため調整不明。	砂粒(含)、淡橙色、良好
5		弥生式土器	壺形土器	SBK2、SDA1内	□15.6、高(2.1)	(外・内)剥離のため調整不明。	砂粒(中)、赤橙色、良好
6	158下-1	弥生式土器	壺形土器	SBK2、SDA1内	□27.0、高(4.1)	(外)剥離のため調整不明。(内)ナデ。	砂粒(含)、黄褐色、良好
7		弥生式土器	壺形土器	SBK2、SDA1内	□28.5、高(4.4)	(外・内)剥離のため調整不明。	砂粒(細)、淡黄色、良好

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
30－8	152下－6	弥生式土器	壺形土器	SBK 3　中央土坡下層	底 4.1、高(1.95)	(外・内)剥離のため調整不明。	砂粒(大・中)、橙色、良好
9	5	弥生式土器	壺形土器(底部)	SBK 3　中央土坡下層	底 5.4、高(3.7)	(外・内)剥離のため調整不明。	砂粒(中)、橙色、良好

方形周溝墓STS 1 周溝内出土土器

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
31－1		弥生式土器	壺形土器	STS 1　周溝中層	口33.8、高(6.4)	(口縁)刻み目。(外)ヘラミガキ。(内)ナデ。	砂粒(大)、黄橙色、良好
2		弥生式土器	無頸壺形土器	STS 1　周溝中層	口 9.6、高(4.5)	(外・内)指ナデ。	砂粒(中)、灰白色、良好
3		弥生式土器	壺形土器	STS 1　周溝下層	口21.6、高(1.6)	(外・内)剥離のため調整不明。	砂粒(中)、橙色、良好
4	160上－3	弥生式土器	壺形土器	STS 1　周溝下層	口22.4、高(2.7)	(外・内)剥離のため調整不明。	砂粒(中)、赤橙色、良好
5	2	弥生式土器	壺形土器(胴部)	STS 1　周溝中層	胴(24.1)、高(9.0)	(外)櫛描直線文。(内)指ナデ。	砂粒(含)、淡橙色、良好
6		弥生式土器	壺形土器(胴部)	STS 1　周溝中層	胴25.6、高(6.0)	(外・内)ナデ。	砂粒(中)、(外)赤灰色・(内)灰赤色、良好
7		弥生式土器	壺形土器(胴部)	STS 1　周溝中層	胴27.6、高(5.6)	(外・内)ナデ。	砂粒(中)、(外)赤褐色・(内)淡橙色、良好
8	162上－1	弥生式土器	ミニチュア土器	STS 1　周溝中層	口 3.0、高 1.4	(外・内)櫛描文。	砂粒(細)、暗灰褐色、良好
9		弥生式土器	壺形土器(底部)	STS 1　周溝下層	底 7.2、高(5.5)	(外・内)剥離のため調整不明。	砂粒(中)、赤褐色、良好
10		弥生式土器	壺形土器(底部)	STS 1　周溝下層	底 6.6、高 3.8	(外)ナデ。(内)ヘラケズリ。	砂粒(含)、黄色・橙色、良好

STS 1 主体部内(K_2・K_3)出土土器

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
32－1	160上－1	弥生式土器	壺形土器	STS 1　K_2	口27.0、高(2.0)	(外・内)ナデ。	砂粒(中)、灰白色、良好
2		弥生式土器	壺形土器	STS 1　K_3	口31.0、高(2.8)	(外・内)ナデ。	砂粒(含)、黄橙色、良好

STS 2・3・5 周溝内出土土器

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
33－1	160下－1	弥生式土器	壺形土器	STS 2　周溝下層	口21.2、高(1.2)	(外・内)ナデ。	砂粒(細)、(外)淡黄橙色・(内)黒色、良好
2		弥生式土器	壺形土器(底部)	STS 2　周溝下層	底 7.6、高(4.7)	(外)摩耗のため調整不明。(内)ナデ。	砂粒(中・細)、黄橙色、良好
3		弥生式土器	壺形土器(胴部)	STS 2　周溝下層	胴16.0、高(7.9)	(外)櫛描直線文、ヘラミガキ。(内)ナデ。	砂粒(細)、淡黄橙色、良好
4		弥生式土器	壺形土器	STS 3　周溝中層	口17.0、高(2.3)	(外・内)剥落が激しく調整不明。	砂粒(含)、淡黄橙色、良好
5		弥生式土器	壺形土器	STS 3　周溝中層	口21.0、高(1.5)	(口縁)にわずかに波状文の痕跡あり。(口下縁)指オサエ。(内)ナデ。	砂粒(含)、淡橙色、良好
6	161下－5	弥生式土器	壺形土器(胴部)	STS 2　周溝下層	胴(18.0)、高(22.0)	(外)櫛描直線文、櫛描直線未端部形文。(内)指オサエ。	砂粒(中)、灰白色、良好
7		弥生式土器	壺形土器(底部)	STS 3　周溝中層	底 6.8、高(3.4)	(外・内)剥離のため調整不明。	細・砂粒(含)、(外)橙色・(内)黄橙色、良好
8	161下－1	弥生式土器	壺形土器	STS 5　周溝下層	口23.8、高(4.9)	(口縁)指ナデ、刻み目。(外)ヘラミガキ。(内)ナデ。	角閃石・砂粒(中)、赤褐色、良好
9	2	弥生式土器	壺形土器	STS 5　周溝下層	口26.0、高(3.7)	(外・内)剥離のため調整不明。	砂粒(中)、淡黄橙色、良好
10	3	弥生式土器	壺形土器	STS 5　周溝下層	口25.6、高(5.4)	(外)ナデ、ハケメの痕跡あり。(内)ナデ。	砂粒(細)、橙色、良好
11		弥生式土器	甕形土器	STS 5　周溝中層	つまみ 7.2、高(7.6)	(外)ヘラミガキ、ハケメ。(内)指ナデ、指オサエ。	砂粒(含)、(外)黄橙色・(内)橙色、良好
12	161下－6	弥生式土器	壺形土器(胴部)	STS 5　周溝中層	胴17.0、高(7.9)	(外)櫛描直線文、荒いハケ行り、ナデ。(内)指オサエ。	砂粒(含)、橙色、良好
13		弥生式土器	壺形土器(底部)	STS 5　周溝下層	底 9.2、高(2.4)	(外・内)ナデ。	砂粒(含)、暗赤褐色、良好

STS 4 周溝内出土土器

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
34－1	161上－5	弥生式土器	甕形土器	STS 4　周溝下層	つまみ(2.4)、底(12.4)、高(3.2)	(外)ヘラミガキ。(内)ナデ。	砂粒(含)、橙色、良好
2	162下－1	弥生式土器	壺形土器	STP 2　周溝下層	口14.8、胴22.1、底 5.8、高 31.2	(外)ヘラミガキ、ハケメの後ナデ。(内)ハケメ、ハケメの後指ナデ。	砂粒(細)、橙色、良好
3		弥生式土器	壺形土器	STS 4　周溝中層	口15.7、高 2.8	(口縁)波状文。(外・内)ナデ。	砂粒(細)、橙色、良好
4		弥生式土器	壺形土器	STS 4　周溝中層	口20.2、高 2.8	(外・内)ナデ。	砂粒(含)、淡黄橙色、良好
5		弥生式土器	壺形土器(底部)	STS 4　周溝下層	底5.4、高(3.6)	(外)ナデ、指オサエ。(内)ナデ。	砂粒(含)、黄橙色、良好
6		弥生式土器	高杯形土器(脚部)	STS 4　周溝下層	脚中央3.6、底9.2、高(8.3)	(外)ヘラミガキ。(脚部)沈線文、ナデ。(内)ナデ。	砂粒(含)、黄灰色、良好
7		弥生式土器	壺形土器(底部)	STS 4　周溝下層	底 7.8、高(6.4)	(外)ヘラミガキ。(内)ハケメ。	やや粗・砂粒(含)、黄橙色、良好
8	161上－3	弥生式土器	鉢形土器	STS 4　周溝中層	口20.8、高(4.8)	(外)圧痕文、櫛描直線文。(内)細かいヘラミガキ。	砂粒(細)、黄橙色、良好
9	2	弥生式土器	鉢形土器	STS 4　周溝中層	口11.8、高(5.1)	(外)櫛描直線文。(内)ヘラミガキの痕跡あり。	砂粒(含)、橙色、良好
10		弥生式土器	壺形土器(底部)	STS 4　周溝中層	底 7.8、高(2.3)	(外・内)剥落が激しく調整不明。	砂粒(含)、黄橙色、良好
11	161上－4	弥生式土器	壺形土器	STS 4　周溝中層	口24.0、高(4.7)	(口縁)波状文。(口下縁)指オサエ、ナデ。(口内)ヘラケズリあり。	砂粒(含)、橙色・(断)黄灰色、良好
12		弥生式土器	壺形土器	STS 4　周溝中層	口19.8、高(3.1)	(口縁)圧痕文。(内)ハケメ。	砂粒(含)、淡黄橙色、良好
13	161上－1	弥生式土器	壺形土器	STS 4　周溝中層	口22.2、高(6.3)	(口縁)波状文。(外・内)ハケメ、ナデ。	砂粒(含)、褐橙色、良好
14		弥生式土器	壺形土器(底部)	STS 4　周溝中層	底 6.4、高(5.0)	(外・内)剥離のため調整不明。	砂粒(中)、橙色、良好

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
34-15		弥生式土器	壺形土器(底部)	STS 4 周溝中層	底 9.8、高(7.1)	(外)ヘラケズリ、指オサエ。(内)ナデ。	砂粒(中)、黄橙色、良好

STS 6・7 周溝内出土土器

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
35-1		弥生式土器	壺形土器	STS 6 周溝下層	□31.4、高(1.8)	(口縁)波状文。(外・内)ナデ。	砂粒(細)、橙色、良好
2		弥生式土器	壺形土器	STS 6 周溝下層	□25.0、高(2.8)	(外)タタキ。(内)ナデ。	砂粒(含)、橙色、良好
3		弥生式土器	壺形土器	STS 6 周溝中層	□21.4、高(1.4)	(外)ナデ。(内)剥離のため調整不明。	砂粒(細)、橙色、良好
4		弥生式土器	壺形土器	STS 6 周溝中層	□24.6、高(2.7)	(外)ナデ。(内)剥離のため調整不明。	砂粒(細)、淡黄橙色、良好
5		弥生式土器	壺形土器	STS 6 周溝下層	□24.0、高(1.3)	(外)ヘラミガキ。(内)ナデ。	砂粒(細)、橙色、良好
6		弥生式土器	壺形土器	STS 6 周溝中層	□25.8、高(1.6)	(口縁)2条の沈線文。(外)ハケメ。(内)ナデ。	砂粒(細)、橙色、良好
7		弥生式土器	壺形土器	STS 6 周溝中層	□27.8、高(1.9)	(口縁)2条の沈線文。(外・内)ナデ。	砂粒(細)、橙色、良好
8		弥生式土器	壺形土器	STS 6 周溝中層	□23.6、高(1.4)	(外・内)ナデ。	砂粒(含)、橙色、良好
9	165下-2	弥生式土器	壺形土器	STP 3 周溝中層	□27.4、胴29.5、底10.8、高37.6	(外・内)剥離のため調整不明。	砂粒(含)、橙色、良好
10		弥生式土器	壺形土器	STS 6 周溝下層	□22.4、高(7.4)	(外・内)剥離のため調整不明。	砂粒(含)、褐橙色・橙色、良好
11		弥生式土器	吸口壺形土器	STS 6 周溝中層	つまみ 5.2、高(2.3)	(外)ナデ。(内)剥離のため調整不明。	粗、褐橙色、良好
12	162上-2	弥生式土器	鉢形土器	STS 6 周溝中層	□20.0、底 7.1、高 7.7	(外・内)ナデ。(内)指オサエ痕あり。	砂粒(含)、黄橙色、良好
13	3	弥生式土器	水差形土器	STS 6 周溝中層	□ 8.0、胴12.3、底 4.6、高16.4	(外)ヘラミガキ、ナデ(施釉あり)。(内)ハケメ。	砂粒(中)、橙色、良好
14		弥生式土器	甕形土器(底部)	STS 6 周溝下層	底 6.0、高(3.1)	(外・内)ナデ。(内)指オサエ痕あり。	砂粒(細)、淡黄橙色、良好
15		弥生式土器	壺形土器(底部)	STS 6 周溝下層	底10.4、高(4.9)	(外)ナデ。(内)剥離のため調整不明。	砂粒(大・細)、黄褐色、良好
16		弥生式土器	壺形土器(底部)	STS 6 周溝中層	底 6.6、高(5.2)	(外)ハケメ、ナデ。(内)ナデ、指オサエ痕あり。	砂粒(細)、(外)黒褐色・褐灰褐色・(内)淡黄橙色、良好
17		弥生式土器	壺形土器(底部)	STS 7 周溝下層	底 6.0、高(3.5)	(外・内)剥離のため調整不明。	砂粒(含)、(外・断)淡黄橙色・(内)暗灰色、良好
18		弥生式土器	壺形土器(底部)	STS 7 周溝下層	底 8.2、高(5.0)	(外)剥離のため調整不明。(内)ナデ、指オサエ痕あり。	砂粒(含)、淡黄橙色、良好

溝状遺構STS 8 溝内出土土器

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
36-1		弥生式土器	壺形土器(底部)	周溝下層	底 6.0、高(5.8)	(内)ナデ、指オサエ痕あり。	砂粒(中)、淡黄橙色、良好
2		弥生式土器	壺形土器(底部)	周溝下層	底 3.8、高(2.6)	(外)ナデ。(内)ナデ、指オサエ。	砂粒(大)、淡黄橙色、良好

STS 1 周溝内上層出土土器

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
40-1	165下-3	須恵器	坏身	周溝上層	□12.4、高(3.5)	(外底)ヘラケズリ、ナデ。(内)ナデ。	砂粒(細)、(外)灰色・(内)青灰色、良好
2		須恵器	坏	周溝上層	□17.2、高(4.9)	(外・内)ナデ。	砂粒(含)、淡灰色、良好
3		須恵器	台付壺	周溝上層	高台10.6、高(5.6)	(外)ヘラケズリ、ナデ、粘土紐の接合痕あり。(内)ナデ。(外・内)灰をかぶる。	砂粒(含)、灰色・(断)灰赤色、良好
4		須恵器	甕	周溝上層	□17.0、高(3.0)	(外・内)ナデ。	砂粒(中)、緑灰色、良好
5		須恵器	甕	周溝上層	□26.0、高(6.6)	(外)ナデ。(内)ナデ、青海波文。	砂粒(含)、黒灰色、良好
6		須恵器	甕	周溝上層	□21.6、高(6.2)	(外)タタキのちカキメ。(内)ナデ、青海波文。	砂粒(含)、(外)紫灰色・(内)青灰色、良好

STS 4 周溝内上層出土土器

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
41-1		須恵器	坏蓋	周溝上層	□10.0、高(2.7)	(外)ナデ、ヘラケズリ。(内)ナデ。	砂粒(含)、灰黄色・(断)灰色・(外)僅かに被灰、良好
2		須恵器	坏身	周溝上層	□12.0、高(2.1)	(外・内)ナデ。	砂粒(含)、灰色、良好
3		須恵器	甕	周溝上層	□17.8、高(7.2)	(外)ナデのちカキメ。(内)ナデ、青海波文。	砂粒(含)、紫灰色、良好
4		須恵器	瓶	周溝上層	□11.9、高(3.9)	(外)ナデ、タタキ。(内)ナデ、同心円文、粘土紐の接合痕。	砂粒(含)、青灰色・(断)紫灰色、良好
5		須恵器	坏	周溝上層	□16.8、高台13.0、高(3.9)	(外)ナデ。(外底)ヘラケズリ。(内)ナデ。	砂粒(含)、(外)青灰色・(内)灰色、良好
6		須恵器	瓶(高台)	周溝上層	高台10.0、高(3.6)	(外)ナデ。(外底)ヘラケズリ。(内)ナデ。	砂粒(細)、灰色・(断)灰赤色・紫灰色、良好

STS 5・6 周溝内上層出土土器

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
42-1		須恵器	坏身	周溝上層	□12.6、高(2.5)	(外・内)ナデ。	砂粒(含)、灰白色、良好、(外受部以下)被灰
2		須恵器	坏身	周溝上層	□11.0、高(3.0)	(外)ナデ、ヘラケズリ。(内)ナデ。	砂粒(細)、暗赤色・灰褐色、良好
3		須恵器	坏身	周溝上層	□13.6、高(3.7)	(外)ナデ、ヘラケズリ。(内)ナデ。	砂粒(含)、(外)暗青灰色・(内・断)青灰色、良好
4		須恵器	坏蓋	周溝上層	□16.6、高(1.3)	(外・内)ナデ。	砂粒(含)、緑灰色、良好
5		須恵器	ホウロクねこ器	周溝上層	□ 6.9、高 4.1	(外)ナデ、ヘラケズリ。(内)ナデ。	砂粒(含)、淡黄色、生焼
6		須恵器	甕	周溝上層	□19.2、高(3.5)	(外・内)ナデ。	砂粒(含)、(外)灰色・(内)オリーブ灰色・(断)青灰色、良好

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
42－7		須恵器	壺	周溝上層	□16.2、高(5.4)	(外)ナデ、タタキ後カキメ。(内)同心円文、ナデ。	砂粒(含)、青灰色・(断)黒灰色、良好、(外・内口)黒灰
8	165下-4	須恵器	壺	周溝上層	□29.8、高(13.6)	(外)タシメ、沈線、ナデ。(内)ナデ、同心円文。	砂粒(含)青灰色・灰色、良好
9		須恵器	壺	周溝上層	□31.2、高(6.2)	(外)ナデ。(内)ナデ、青海波文。	砂粒(含)、灰白色、良好、(外)黒灰・(外・内口)自然釉
10		須恵器	壺	周溝上層	□31.0、高(5.7)	(外)ナデ、タタキ、粘土紐の接合痕あり。(内)ナデ。	砂粒(含)、灰色、良好

遺構面直上出土土器A

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
43－1	164上-1	須恵器	坏蓋	遺構面直上(西北部)	□15.6、高(4.5)	(外・内)ナデ、ケズリ。	砂粒(含)、灰色、良好、(外)(外)白自然釉
2		須恵器	坏蓋	遺構面直上(西北部)	□12.5、高(1.2)	(外・内)ナデ。	砂粒(含)、灰白色、良好、(外)黒灰
3		須恵器	坏蓋	遺構面直上(西北部)	□15.2、高(1.4)	(外・内)ナデ。	砂粒(含)、灰色、良好
4		須恵器	坏身	遺構面直上(西北部)	□12.2、高 2.5	(外)ナデ、ヘラケズリ。(内)ナデ。	砂粒(細)、(外)灰色・(内)暗赤灰色、良好、(外)自然釉、土器片付着
5		須恵器	坏身	遺構面直上(西北部)	□13.6、高(2.1)	(外・内)ナデ。	砂粒(中)、青灰色・緑灰色、良好
6		須恵器	坏身	遺構面直上(西北部)	□10.2、高(2.2)	(外・内)ナデ。	砂粒(含)、暗灰色、良好、(外受部以下・内立上部)黒灰
7		須恵器	坏身	遺構面直上(西北部)	□13.2、高(3.0)	(外)ナデ、ヘラケズリ。(内)ナデ、指オサエ痕あり。	砂粒(中)、灰白色、良好
8		須恵器	坏身	遺構面直上(西北部)	□13.0、高(3.0)	(外・内)ナデ。	砂粒(中)、灰白色、良好
9		須恵器	坏身	遺構面直上(西北部)	□11.0、高(2.3)	(外・内)ナデ。	砂粒(含)、灰白色、良好、(受)黒灰
10	164上-4	土師器	鉢	遺構面直上(西北部)	□10.2、底 4.6、高(2.4)	(外・内)ナデ、指オサエ。	砂粒(含)、(外)灰赤色・(内)淡橙色、良好
11		須恵器	坏	遺構面直上(西北部)	□13.8、底10.0、高(3.7)	(外・内)ナデ。(外底)ヘラケズリ。	砂粒(含)、明オリーブ灰色、良好
12		須恵器	坏	遺構面直上(西北部)	□16.0、高台10.6、高(3.8)	(外・内)ナデ。(外底)ヘラケズリ。	砂粒(含)、灰白色、生焼
13	164上-2	須恵器	坏蓋	遺構面直上(西南部)	□ 7.8、つまみ1.2、高 3.2	(外)ヘラケズリ後ナデ。(内)ナデ、指オサエ痕あり。	砂粒(細)、灰白色、生焼
14		須恵器	坏蓋	遺構面直上(西南部)	□15.6、高(2.4)	(外)ナデ、ヘラケズリ。(内)ナデ。	砂粒(細)、明オリーブ色、良好
15	164下-2	須恵器	坏身	遺構面直上(西南部)	□11.6、底 6.2、高 3.0	(外)ナデ、ヘラケズリ。(内)ナデ。	砂粒(含)、赤灰色、良好、(外)黒灰
16		須恵器	坏	遺構面直上(西南部)	高台 7.9、高(1.9)	(外・内)ナデ。(外底)ヘラケズリ後ナデ。	砂粒(含)、(外)黒灰色・(内)青灰色・(断)灰色、良好
17	164下-3	須恵器	坏	遺構面直上(西南部)	□10.9、底 7.7、高 2.8	(外・内)ナデ。(外底)ヘラケズリ。	砂粒(細)、(外)褐色・(内・断面)灰色、良好
18		須恵器	坏	遺構面直上(西南部)	□14.2、底10.2、高(4.0)	(外・内)ナデ。(外底)ヘラケズリ。	砂粒(細)、灰黒色、良好、粘土ムラ有
19		須恵器	壺	遺構面直上(西北部)	□17.2、高(3.4)	(外・内)ナデ。	砂粒(含)、(外)暗黄色・(内)オリーブ灰色・(断)灰色、良好
20		須恵器	壺	遺構面直上(西北部)	□17.2、高(4.3)	(外・内)ナデ。	砂粒(含)、灰色、良好
21		須恵器	壺	遺構面直上(西北部)	□20.8、高(3.8)	(外・内)ナデ。	砂粒(含)、(外)青灰色・(内)灰色、良好
22		須恵器	壺	遺構面直上(西北部)	□17.0、高(5.4)	(外・内)ナデ。	砂粒(含)、(外)黄灰色、(内)青灰色、良好
23		須恵器	壺	遺構面直上(西北部)	□16.0、高(2.6)	(外・内)ナデ。	砂粒(含)、灰白色、良好
24		須恵器	壺	遺構面直上(西北部)	□27.0、高(3.3)	(外・内)ナデ。	砂粒(含)、灰色・(断)灰赤色、良好
25		須恵器	壺	遺構面直上(西北部)	□31.4、高(3.8)	(外・内)ナデ。	砂粒(細)、(外)オリーブ灰色・灰白色・(内・断)灰色、良好
26		須恵器	壺	遺構面直上(西北部)	□25.8、高(7.2)	(外)ナデ、カキメ、タタキ。(内)ナデ、同心円文。	砂粒(細)、オリーブ灰色、良好
27		須恵器	壺	遺構面直上(西北部)	□33.4、高(12.5)	(外)ナデ、ヘラ描き沈線、沈線。(内)ナデ。	砂粒(含)、(外)暗緑灰色・(内)灰色・(断)灰赤色、良好、(外・内)黒灰

遺構面直上出土土器B

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
44－1		須恵器	器台	遺構面直上(西北部)	□27.6、高(4.1)	(外)ナデ、ナデ後タタキ、沈線。(内)ナデ。	砂粒(含)、(外)青灰色・(内)褐灰色・(断)黒灰色、良好
2		須恵器	器台	遺構面直上(西北部)	□23.0、高(2.6)	(外・内)ナデ。	砂粒(含)、灰色・(断)灰白色、良好
3		須恵器	器台	遺構面直上(西北部)	□33.8、高(4.9)	(外)ナデ、ヘラ描き沈線、カキメ、タタキメ、沈線。(内)ナデ、青海波文。	砂粒(含)、灰色・(断)灰赤色、良好、ヘラ記号有
4		須恵器	器台	遺構面直上(西北部)	□29.6、高(7.8)	(外)沈線、ナデ、タタキ、タタキ後ナデ。(内)ナデ。	砂粒(含)、淡黄色・灰白色、良好、(内)黒灰

竪穴住居址SBK５内出土土器

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
45－1		須恵器	坏蓋	床面直上	□13.0、高(2.4)	(外・内)ナデ。	砂粒(細)、青灰色、良好
2		須恵器	坏蓋	床面直上	□14.5、高(2.7)	(外・内)ナデ。	砂粒(細)、オリーブ灰色・(断)灰色、良好
3		須恵器	坏蓋	床面直上	□16.6、高(2.9)	(外・内)ナデ。	砂粒(細)、灰白色・(断)黒灰色
4	165上-2	須恵器	坏身	床面直上	□12.4、高(4.6)	(外)ナデ、ヘラケズリ。(内)ナデ。	砂粒(中)、(外)青灰色・(内)灰白色、良好
5		須恵器	坏身	床面直上	□14.4、高(3.2)	(外)ナデ、ヘラケズリ。(内)ナデ。	砂粒(含)、(外)暗青灰色・(内)青灰色・(断)暗赤灰色、良好、(外)自然釉
6		須恵器	坏身	床面直上	□13.7、高(2.8)	(外・内)ナデ。	砂粒(含)、赤褐色、良好
7		須恵器	坏身	床面直上	□14.4、高(2.8)	(外・内)ナデ。	砂粒(細)、明青灰色、良好
8		須恵器	坏身	床面直上	□11.0、高 3.6	(外)ナデ、ヘラケズリ。(内)ナデ。	砂粒(含)、赤褐色、生焼

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
45－9		須恵器	坏身	K。	□13.4、高(3.0)	(外)ナデ、ヘラケズリ。(内)ナデ。	砂粒(含)、黄橙色・橙色、良好
10		須恵器	小形壺	床面直上	□10.6、高(3.0)	(外・内)ナデ。	砂粒(含)、灰色、良好
11	165上-3	須恵器	宝口壺	床面直上	□12.2、高(7.0)	(外・内)ナデ。	砂粒(含)、灰色、生焼
12		須恵器	甕	床面直上	□20.4、高(2.6)	(外・内)ナデ。	砂粒(含)、灰白色、良好
13		須恵器	甕	床面直上	□22.0、高(4.6)	(外・内)ナデ。	砂粒(含)、(外)灰色・(内)白灰色、良好
14		須恵器	甕	床面直上	□23.4、高(6.7)	(外)ナデ、タタキ後カキメ。(内)ナデ、青海波文。	砂粒(含)、灰白色、良好
15		須恵器	無脚器台	床面直上	脚中央10.0、高(22.4)	(外)ナデ後ヘラケズリ、ヘラ描き線鋸、沈線。(内)ナデ、粘土の継ぎ目。	砂粒(含)、青灰色、良好
16	165上-4	須恵器	短頸壺	K。	脚11.6、高(6.2)	(外)ナデ、ヘラケズリ、4条のヘラ記号。(内)ナデ。	砂粒(中)、(外)青灰色・(内)青紫灰色、良好
17		須恵器	高坏(脚部)	床面直上	底13.0、高(6.6)	(外)カキメ、ナデ。(内)ナデ。	砂粒(細)、暗青灰色、良好、(内)被灰

竪穴住居址SBK 6内出土土器

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
46－1	165下-1	須恵器	坏蓋	床面直上	□10.8、高(3.3)	(外)ナデ、ヘラケズリ。(内)ナデ。	砂粒(細)、(外)灰色・(内)灰白色・(断)暗赤灰色、良好
2		須恵器	坏蓋	床面直上	□13.0、高 3.3	(外)ナデ、ヘラケズリ。(内)ナデ。	砂粒(含)、褐黄色、生焼
3		須恵器	坏蓋	床面直上	□10.7、高(3.8)	(外)ナデ、ヘラケズリ。(内)ナデ。	砂粒(含)、(外)灰色・(内)灰白色・(断)赤褐色・灰色、良好
4	165上-2	須恵器	坏身	床面直上	□10.4、高 2.8	(外)ナデ、ヘラケズリ。(内)ナデ。	砂粒(含)、青灰色、良好、(受)被灰
5		須恵器	坏身	床面直上	□11.2、高(1.5)	(外・内)ナデ。	砂粒(細)、(外)灰色・(内)暗青灰色・(断)暗赤灰色、良好、(受)被灰
6	165下-2	須恵器	坏身	床面直上	□12.4、高 3.6	(外)ナデ、ヘラケズリ。(内)ナデ。	砂粒(細)、青灰色、良好、(受)被灰
7		須恵器	坏身	床面直上	□14.5、高(2.8)	(外・内)ナデ。	砂粒(含)、灰黄色、良好
8	165下-4	須恵器	壺	床面直上	□10.8、高 5.5	(外)ナデ、ヘラケズリ。(内)ナデ。	砂粒(含)、灰白色、生焼
9	3	須恵器	坏	床面直上	□11.8、底 9.2、高 4.8	(外)ナデ。(外底)ヘラケズリ後ナデ。(内)ナデ。	砂粒(中)、灰色、不良、(外)自然釉、(内)被灰、焼けひずみ顕著
10		須恵器	壺	床面直上	□22.8、高(5.4)	(外・内)ナデ。	砂粒(多)、灰色、良好
11		須恵器	台付壺	床面直上	高台15.2、高(3.0)	(外脚)ナデ。(内)ナデ、粘土紐の接合痕あり。(内底)ナデ。	砂粒(細)、灰黄色、良好、(外脚・内底)自然釉・(外脚)被灰
12	165上-3	須恵器	高坏	P内(長脚)	□16.4、高(4.7)	(外)ナデ、ヘラケズリ。(内)ナデ、ヘラケズリ。	砂粒(含)、(外)灰色・(内)青灰色・(断)黒灰色、良好、(外)被灰
13		須恵器	高坏	床面直上(長脚)	□13.8、高(10.3)	(脚)カキメ、沈線。(外坏)ナデ、ヘラケズリ後ナデ。(内坏)ナデ。	砂粒(含)、(外・脚)青灰色・(内)灰色、良好、(外)自然釉
14	165上-1	須恵器	高坏	床面直上(長脚)	□14.2、底11.4、高 17.8	(外脚)カキメ、ナデ。(内脚)ナデ。(外坏)ナデ。カキメ。(内坏)ナデ。	砂粒(細)、灰色、不良、(外)自然釉、土器片付着、焼けひずみ顕著
15		須恵器	高坏	床面直上(短脚)	底 9.0、高(5.0)	(外坏)ナデ、ヘラケズリ、粘土の継ぎ目。(内坏)ナデ。(外・内脚)ナデ。	砂粒(中)、青灰色、良好
16		須恵器	高坏(脚部)	床面直上(短脚)	底11.4、高(2.2)	(外・内)ナデ。	砂粒(含)、青灰色、良好
17		須恵器	高坏(脚部)	床面直上(短脚)	底11.4、高(1.6)	(外・内)ナデ。	砂粒(含)、灰白色、良好
18		須恵器	高坏(脚部)	床面直上(短脚)	底16.0、高(1.6)	(外・内)ナデ。	砂粒(含)、灰白色、良好
19		須恵器	高坏	床面直上(短脚)	□11.6、底 6.5、高 5.0	(外・内)ナデ。	砂粒(含)、青灰色、良好
20		須恵器	高坏	床面直上(短脚)	底 4.4、高(2.2)	(外・内)ナデ。	砂粒(中)、灰白色、良好

土壙SKA21内出土土器

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
47－1		須恵器	高坏	下層	受11.8、高(2.3)	(外)ナデ、波状文。(内)ナデ。	砂粒(含)、青灰色・(断)灰色、良好、(受)僅かに被灰
2		須恵器	坏身	上層	□12.8、高(3.2)	(外・内)ナデ。	砂粒(含)、灰色、良好
3	165下-1	須恵器	壺	下層	□26.8、胴49.2、高(39.3)	(外)タタキ後カキメ。(内)青海波文、同心円文。	砂粒(含)、青灰色、良好、(外・内)自然釉
4		須恵器	壺	下層	□17.8、高(2.4)	(外・内)ナデ。	砂粒(含)、黄灰色、良好、(口)僅かに被灰
5		須恵器	器台	下層	□25.2、高(2.6)	(外)ナデ、列点文。(内)ナデ。	砂粒(含)、灰色、良好
6		須恵器	壺	中層	□23.8、胴47.4、高 12.9	(外)タタキ後カキメ。(内)同心円文。	砂粒(細)、(外)灰色・暗赤褐色・(内)黒灰色・褐色、良好、(外・内)自然釉
7		須恵器	坏	下層	高台 9.8、高(2.4)	(外)ナデ、ヘラケズリ後ナデ。(内)ナデ。	砂粒(含)、青灰色、良好
8		須恵器	坏	中層	高台 7.4、高(1.2)	(外)ナデ、ヘラケズリ後ナデ。(内)ナデ。	砂粒(含)、灰色、良好
9		瓦器	坏(高台)	上層	高台 5.4、高(1.3)	(外)ナデ。(内)ナデ、暗文あり。	砂粒(含)、黒灰色・(断)灰色、良好

土壙およびピット内出土土器

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
39－1		弥生式土器	壺	STK 1	□23.2、高(3.7)	(外・内)剥離のため調整不明。	角閃石・金雲母・砂粒(含)、明褐色、良好
2		弥生式土器	壺	STK 5	□29.4、高(1.8)	(外・内)ナデ。	砂粒(中)、(外)赤褐色・(内)橙色、良好
3		弥生式土器	壺(脚部)	SKA 1	底 5.8、高(3.6)	(外・内)ナデ。	砂粒(細)、黄橙色・(断)橙色、赤灰色、良好
4		弥生式土器	壺(脚部)	SKA 8	底 5.2、高(6.0)	(外・内)ナデ。	砂粒(細)、赤橙色、灰色、良好
5		須恵器	坏身	STK10	高台12.6、高(2.0)	(外)ナデ。(外底)ヘラケズリ。(内)ナデ。	砂粒(細)、青灰色・灰色、良好

図番号	図版番号	種類	器類	遺構・番号・区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
39－6		須恵器	小型壺	STK13	□11.8、高(2.7)	(外・内)ナデ。	砂粒(細)、青灰色・灰白色、良好、(外・内)被灰
7		須恵器	坏蓋	STS 4～5内土横	□16.1、高(1.6)	(外・内)ナデ。	砂粒(含)、暗青灰色、良好
8		須恵器	高坏	STS 4～5内土横	底 7.2、高(4.7)	(外・内)ナデ。	砂粒(細)、暗青灰色、良好
9		須恵器	坏身	STK18	高台10.4、高(2.8)	(外・内)ナデ、粘土紐の接合痕あり。	砂粒(細)、灰白色、良好
10		土師器	甕	STK18	□21.4、高(2.1)	(外・内)ナデ。	砂粒(含)、灰白色、良好
11		須恵器	坏身	STK15	高台11.6、高(2.2)	(外)ナデ。(外底)ヘラケズリ。(外)粘土紐の接合痕あり。(内)ナデ。	砂粒(含)、青灰色・黄灰色、良好
12		須恵器	甕	SKA12	□16.6、高(5.7)	(外・内)ナデ。(外・内)灰をかぶる。	砂粒(含)、青灰色・(部)黄灰色、良好、(外・内)被色
13		土師器	羽釜	SKA22	□20.4、高(4.0)	(外)ナデ、粘土のつぎめ有り。(内)ナデ。	砂粒(含)、橙色、良好、(外・内)赤色被
14		須恵器	坏身	SBP 2 (P 3)	□11.4、高(2.9)	(外)ナデ、ヘラケズリ。(内)ナデ。	砂粒(少)、青灰色、良好
15		弥生式土器	壺	P103	□25.8、高(3.2)	(外・内)ナデ。	角閃石・砂粒(中)、橙褐色、良好
16		須恵器	坏身	SBP11 (P 6)	□11.8、高(3.0)	(外・内)ナデ。	砂粒(細少)、青灰色・灰色、良好
17		須恵器	器台	P112	□22.0、高(3.9)	(外)ナデ、ヘラ描き縦線。(内)ナデ。	砂粒(含)、赤褐色・明赤褐色、良好
18		須恵器	高坏	P110	底10.3、高(5.2)	(外・内)ナデ。	砂粒(含)、暗青灰色・黒褐色、良好
19		近世陶磁器(唐津焼)	碗	P113	高台 5.8、高(2.8)	(外・内)。	精緻、灰褐色・灰白色、良好、(外・内)釉をかぶる。
20		土師器	鉢形	P113	□34.6、高(4.2)	(外・内)ナデ。	砂粒(含)、橙褐色、良好

溝状遺構SDA 4内出土土器

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
48－1	167上-2	須恵器	坏蓋	溝内	□13.6、高 4.7	(外)ナデ、ヘラケズリ。(内)ナデ。	砂粒(含)、(外)青灰色・(内)黄灰色、良好、「骨」のヘラ記号あり。
2		須恵器	坏	溝内	□12.2、底 9.2、高(3.4)	(外)ナデ。(外底)調整不十分。(内)ナデ。	砂粒(含)、青灰色、良好
3		須恵器	甕	溝内	□17.2、高(7.4)	(外)ナデ、タタキ後スリケシ状ナデ。(内)ナデ、青海波文。(外・内)粘土の継ぎ目あり。	砂粒(含)、灰色、良好
4		須恵器	甕	溝内	□18.4、高(5.4)	(外)ナデ。(内)ナデ、青海波文。	砂粒(細)、灰白色、生焼
5	167上-3	須恵器	壺	溝内	□ 8.6、つまみ2.5、高 2.8	(外)ヘラケズリ、ナデ。(内)ナデ。	砂粒(含)、青灰色、良好、(外)自然釉
6		須恵器	坏蓋	溝内	□16.0、つまみ3.1、高 2.2	(外)ナデ、ケズリ。(内)ナデ。	砂粒(含)、明緑色、良好
7	167下-2	須恵器	壺	溝内	胴14.4、高(12.8)	(外・内)ナデ、(内)粘土の継ぎ目あり。	砂粒(細)、灰色、良好
8		須恵器	鉢(鉢形)	溝内	□25.6、高(7.1)	(外・内)ナデ。	砂粒(含)、灰白色、生焼
9	167下-1	須恵器	壺	溝内	□21.6、胴39.8、高 42.4	(外)タタキ後カキメ、ところどころに粘土の継ぎ目あり。(内)同心円文、青海波文。	砂粒(含)、青灰色・黒灰色、良好、(口)被灰
10		須恵器	瓶	溝内	胴 9.4、高(9.7)	(外)ナデ、ヘラケズリ後ナデ。沈線あり。(内)ナデ、絞り目あり。	砂粒(含)、(外)灰色・(内)灰白色、良好、(外)被灰
11		須恵器	高坏	溝内	底 6.8、高(3.5)	(坏外)ヘラケズリ、ナデ。(坏内)マキアゲ後ナデ。(外・内脚)ナデ。	砂粒(中)、灰色、良好、(坏外)ヘラ記号あり。
12	167上-1	須恵器	長頸壺	溝内	□ 9.8、胴17.2、高 24.9	(外)ナデ、ヘラケズリ。(頸)沈線。(内)ナデ。	砂粒(細)、暗青灰色・(内)青灰色、良好、(外)自然釉、(内)自然釉、(外)被灰

SBK 1・3内出土石器

図番号	図版番号	種類	遺構・地区・層位	長・幅・厚(cm)	重量	備考(石材・その他)
49－1	168上-1	石鏃	SBK 3　床面直上	3.5×2.1×0.4	3.0g	サヌカイト。完形品。
2	168上-2	石鏃	SBK 3　床面直上	(1.5)×1.7×0.3	0.7g	〃 ⅓欠損。
3	168上-3	石鏃	SBK 3　床面直上	(3.4)×1.4×0.3	1.7g	〃 基部破損。
4	168上-5	石鏃	SBK 3　床面直上	(4.8)×2.5×0.6	8.4g	〃 完形品。
5	168上-6	不定形石器	SBK 3　床面直上	4.8×(2.1)×0.7	7.1g	〃 下部欠損(図版)。
6	168上-7	石小刀	SBK 3　床面直上	5.4×1.5×0.7	6.5g	〃 完形品。
7	168上-8	石錐	SBK 3　床面直上	4.3×1.6×0.5	3.2g	〃 完形品。
8	168上-4	石鏃	SBK 1　床面直上	2.9×1.8×0.5	1.8g	〃 完形品。
9	169上-6	石錘	SBK 1　床面直上	8.0×6.2×0.8	55.9g	緑色片岩。⅓欠損。

STS 1・4・6、SDA 3内出土石器

図番号	図版番号	種類	遺構・地区・層位	長・幅・厚(cm)	重量	備考(石材・その他)
50－1	169上-2	石錘	STS 1　周溝内下層	(12.3)×(5.3)×0.6	58.7g	緑色片岩。⅓欠損。穿孔間 2.1cm。
2	169下-6	石鏃	STS 1　周溝内中層	5.0×1.6×1.0	6.8g	サヌカイト。完形品。
3	169下-3	不定形石器	STS 1　周溝内下層	(7.4)×2.9×0.9	21.4g	〃 ⅓欠損。
4	169上-4	石錐	SDA 3　上層	4.6×2.3×0.9	9.4g	〃 ⅓欠損。
5	169下-8	不定形石器	STS 4　下層	7.1×3.8×1.1	30.1g	〃 ほぼ完形品(図版)。
6	169下-5	有使用痕剥片	STS 4　下層	5.8×4.0×0.6	13.1g	〃 完形品。使用部 4.0cm。
7	169下-4	石匙	STS 4　下層	4.3×2.8×0.8	9.0g	〃 完形品。

図番号	図版番号	種　類	遺構・地区・層位	長・幅・厚(cm)	重量	備　考（石材・その他）
50－8	169上-1	石厚丁	STS 4　中層	(3.1)×3.3×0.6	30.6g	緑色片岩。一部欠損、中央部・縦孔間 2.6cm。
9	169下-1	石　鏃	STS 6　中層	5.3×3.0×0.7	12.4g	サヌカイト。ほぼ完形品、基部破損。

SBK 1、STS 5、SKA20、SDA 4 内出土石製品

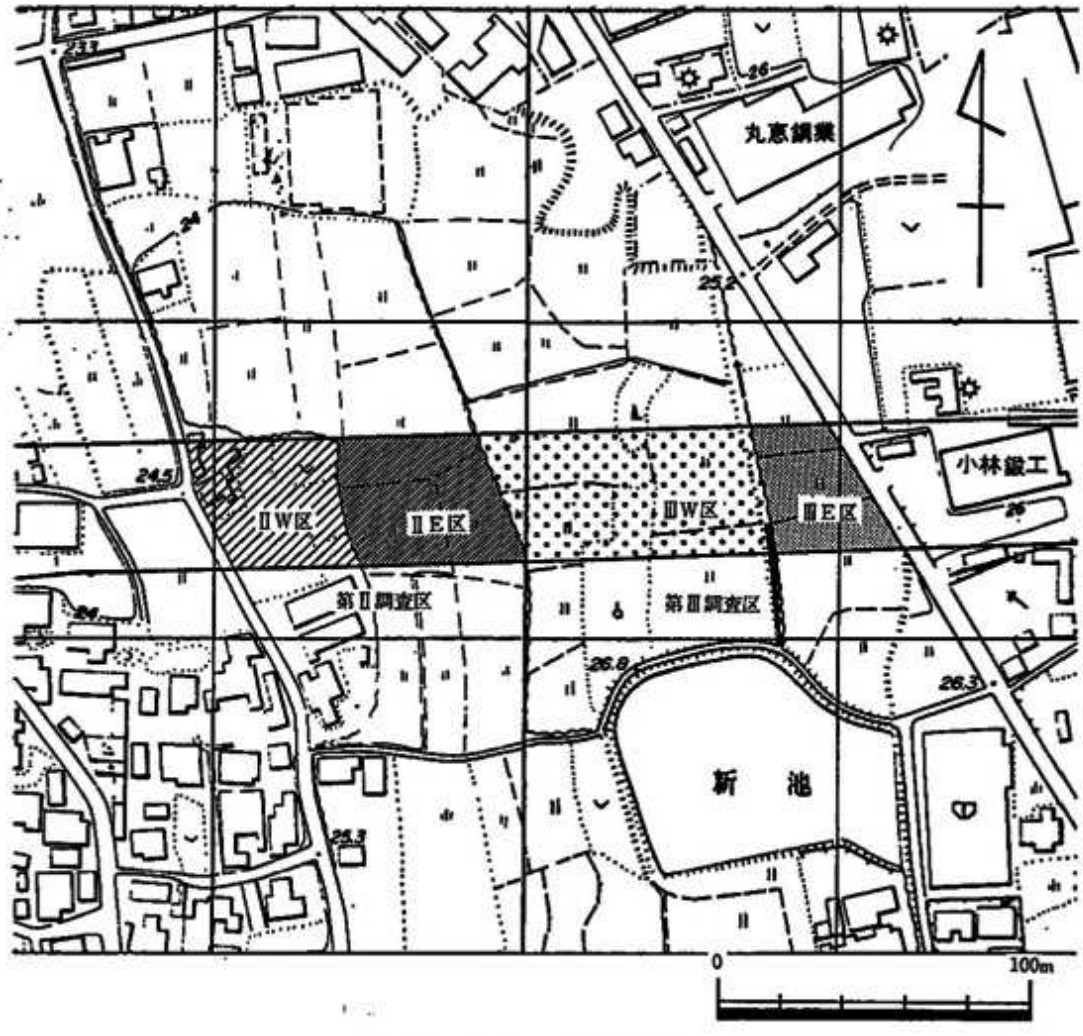
図番号	図版番号	種　類	遺構・地区・層位	長・幅・厚(cm)	重量	備　考（石材・その他）
51－1	169下-1	紡　石	SBK 1　床面直上	(5.7)×11.3×2.3	300.9g	砂岩。一部欠損。
2	169下-7	紡　石	SKA20　下層	(9.1)×5.4×2.6	238.6g	砂岩。一部欠損。
3	169下-6	凹み石	SDA 4　下層	7.5×6.9×4.2	309.2g	砂岩。完形品。
4		紡　石	STS 5　下層	(12.2)×13.9×3.9	950.0g	砂岩。ほぼ完形品（基部破損）。

第２章　第Ⅱ・第Ⅲ調査区

第１節　はじめに

１　調査範囲と期間

菱木下遺跡は堺市菱木にある。西は菱木下遺跡第Ⅰ調査区、東は府道別所草部線を境に万崎池遺跡第Ⅰ調査区に接する（第52図）。調査は府道を除きほぼ全域に実施した。面積は第Ⅱ調査区3820.5㎡、第Ⅲ調査区4691.8㎡、合計8512.3㎡で、およそ幅40m、長さ 212mの範囲である。調査は1980年７月29日に伐採を開始、1982年３月18日に記録をとり終え、その後埋め戻し及び撤収作業を月末まで行った。調査期間約20ケ月である。



第52図　第Ⅱ・第Ⅲ調査区地形図

2　遺構と遺物

主要な遺構は、弥生時代の竪穴住居址や大溝、古墳時代から奈良時代の土壙墓群、平安時代後期から室町時代の釈尊寺址と集落址、室町時代後期及び近世・近代の耕作址等である。遺構総数700余基に及び、その他に各時代の多数のピットがある。 遺物は縄文時代の石鏃の他、各時代の遺物がコンテナに 579箱、井戸枠材が水槽いっぱいに採集された。本調査区は今回報告されている他の遺跡・調査区に比べ遺構密度が高く、遺物量も最大である。

3　調査区の地区割と名称　（第53図）

菱木下遺跡は西から第Ⅰ・第Ⅱ・第Ⅲ調査区に分けた。第Ⅱ・第Ⅲ調査区内には３本の水路が北流しており、中央の水路を境にして第Ⅱ調査区と第Ⅲ調査区とに分ける。更に第Ⅱ調査区内を流れる水路を境にして西側をⅡW区、東側をⅡE区とする。同様に第Ⅲ調査区内を流れる水路を境にして西側をⅢW区、東側をⅢE区とする。また今回の調査で使用している20m区画の区割表示では、南北座標のQ・R・S・T列に属す。ただし、R列とS列の境の座標軸線が幅40mの長方形の調査区のほぼ中央を南北に通る為、調査区北半の大部分がR列に、南半がS列に該当する。東西座標は45列から55列までに属す。遺構の所在地は、たとえばⅡW区S49と表示する。

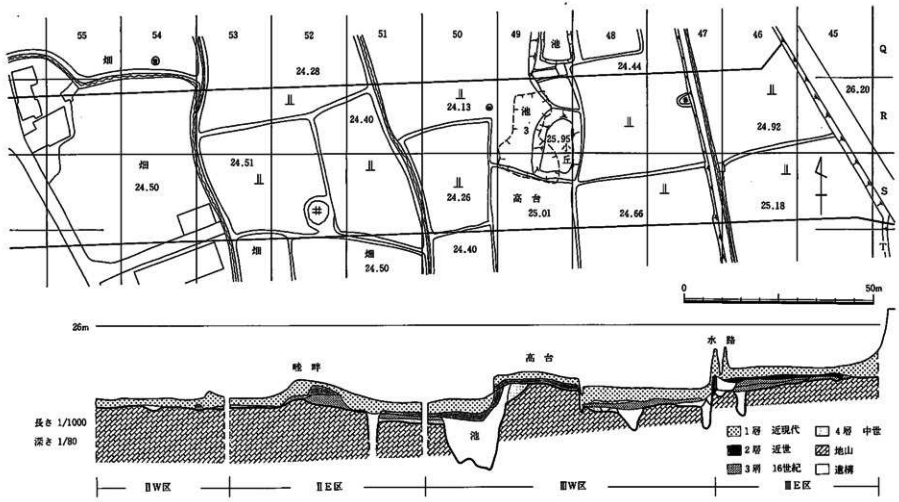
第２節　微地形と層序

1　微地形

菱木下遺跡第Ⅱ・第Ⅲ調査区は和田川の東岸の中位段丘状にある。中位段丘の縁辺部の標高は西浦橋遺跡第Ⅱ調査区の現地表面で約23.5mである。菱木下遺跡では第Ⅱ調査区の西で約24.5m、第Ⅲ調査区の東で約25.2mになる。段丘の縁辺から第Ⅲ調査区の東端まで約 345m離れているが、この間にいくつかの小さな浅い谷を挟みながら、段丘の中央に向かってしだいに高くなっていく。東に接する万崎池遺跡との間には明瞭な段があり、比高1.0～1.2mを測る。この段の上に所在する万崎池遺跡第Ⅰ調査区は、中世以前の遺構・遺物の量が稀薄であり、菱木下遺跡とはかなり異る様相を示している。

遺跡の調査前の状況は（第53図）、大部分が水田ないしは草地と化した休耕田であった。ⅡW区だけは宅地と畑である。この畑は第二次大戦中に食糧増産の為、織物工場の敷地を畑にしたとのこと（北隣の地主談）、ⅢW区では中央付近に微高地と塚状の高まりがあった。微高地を高台、塚状の高まりを小丘と名付けた。この小丘は、50年ほど前に小丘の西に掘った池の土を盛ったもので、高台・小丘とも桃畑にしていたとのことである（旧地主談）。この池は、池３と名付けているが、調査時点では埋没しており、湿地となっていた。全体としては、平坦な一枚一枚の水田や畑が隣接地と小さな段を有しながら連続する景観を呈している。

こうした景観も実際は小さな谷と微高地よりなっている。地形図を見ると調査区の北方には和田川へと開析する小さな谷が入り込み、現地に行くと１mあまりの段差を視認できる。この谷は調査区内では、それほどはっきりと認められない。しかし、土層堆積の状態や地山の落ち込む範



第53図　第Ⅱ・第Ⅲ調査区地区割図及び南理上層図

囲からみると、かなり浅くなってはいるが、この谷が南へずっと続いていることを確認できる。谷は南壁土層図（第53図）にもよく表われている。谷の西肩はⅡE区中央東よりを通る。南壁土層図では畦畔にあたる為段差が大きくみられるが、全体としては20～30cmと小さな段がつく。谷の東肩は府道別所草部線から万崎池遺跡にかかる標高 2.6mの等高線の位置にほぼ相当する。ここでは前述のように 1.2mの大きな段がつく。地区割で表示すれば45列から51列までが浅い谷となり、第Ⅱ調査区の西部と第Ⅲ調査区の全体にわたる。谷の最深部は両調査区の境を流れる現水路付近にあり、谷のずっと西寄りである。それゆえ谷の底面の東側はゆるやかな傾斜を持って上っていく。

谷の中には北へ伸びる舌状の微高地があり、谷を東西に分けている。第Ⅲ調査区49列がそれにあたり、S49に幅20mほどの高台を形成する。高台の上面と谷底面の比高を発掘調査後の地山面で測ると、深い方の西の支谷は約80cm、東の支谷とは約60cmである。また調査区の南方に新池という溜池があるが、この池は東の支谷を掘削し、微高地の基部を削りとって造成していると思われる。現在この溜池から流れ出る三本の水流が調査区内を通っており、周辺の田や畑を潤している。

こうしてみると調査区内の地形は大きく二つに分けられる。即ちⅡE区の中央からⅡW区にかけ、52列から55列までが平坦な面をなし、ⅢE区からⅡE区の西半の45列から51列までが浅い谷状をなす。この谷は高台によって更に二つに分けられ、やや深めの西支谷と、緩斜面を呈する東支谷になる。東支谷の底面は段々と上っていく結果、その標高はⅡE区の平坦面より高くなっている。

この地形の違いは遺跡を残していった人々の土地利用に影響を与えている。第Ⅱ調査区に拡がる平坦面は中世の屋敷地である。西支谷は古墳時代から奈良時代までの墓地で、中世になっても建物が建てられることがなく畑となっている。高台と緩斜面を呈する東支谷は釈尊寺址及び屋敷地として利用され、弥生時代の竪穴住居址もここに営まれている。より乾燥した土地が居住地として利用され、湿潤な土地が墓地や耕地となっている状態をここにみることができる。

2　層序

菱木下遺跡第Ⅱ・第Ⅲ調査区の基本層序は以下の通りである（第53図）。上から時代別に大きく6層に分けたが、各層が更に細分される地点もある。

第1層　近・現代　表土（大部分が耕作土）・床土及び盛土をまとめて第1層とした。ⅡW区とⅢW区高台の第1層が畑の耕作土である他、ほぼ全域が水田の耕作土である。道路用地売収前後に一部盛土がなされたが、この盛土は第53図の土層図からは省略している。全体に耕作土（黒色土）と2～5cm程度の薄い床土（灰青色砂質土）が良好に残っていた。

第2層　近世　赤褐色砂質土である。ほぼ遺跡の全体に厚さ5cmほどで遺存しているが、ⅡW区の一部とⅢE区の東南部は近・現代の耕作の為、この層が削りとられている。この層は近・現代の床土の下に遺存しており、近世の水田の床土であったと推定される。この他に江戸時代には

浅い窪地であった中世の池１の上部、近世の池２の上部、近世の畔畦等には同質の土が20～25cmと厚く堆積している。色調は地点によってやや異なる。高台の近世土層だけは他とかなり異なり、淡黄茶色土である。この土は畑の耕作土であったと思われる。

第３層　中世後葉　中世遺構の上を覆っている遺物包含層である。地点によって厚さ・色調が異なるが、第２層と同様ⅡW区とⅢE区の東南部で削平されている以外ほぼ全域に遺存している。この土は中世の集落・寺院が廃絶後この地が耕地となり、その際中世の遺構を削平しつつ耕作土として形成されたものと思われる。多量の遺物を包含する。この層が覆っている集落地や寺院址の遺構は14世紀末から15世紀にかけて廃絶する。またこの層には江戸時代の染付磁器を含まないことから15～16世紀代に形成された土層と考えられる。ただ染付磁器も17世紀代の出土例が大阪府下の農村地帯では少なく、本調査区でも17世紀代を示す遺物の量が希少なので、この土層の形成の最終期が17世紀にずれ込む可能性もある。

第４層　中世　中世の遺構が形成されつつある時期に堆積した遺物包含層である。ⅡE区とⅢW区に所在する浅い谷部と高台の東側（S48）に堆積している。谷部にはⅡE区とⅢW区の中央に中世にも水路が貫流しており、その両側では若干土質が異なる。ⅡE区側は黄色土でⅢW区側は黄褐色粘質土ないしは黄色土で、厚さ５～10cmを測る。14世紀以前の遺物を包含する。

第５層　平安時代　４層と同様西支谷内にのみ存在する。極めて薄く、厚さ１～２cm程である。この地域は墓地として利用されているが、その土壙墓の上を薄く覆っている。土壙墓の最終期が奈良時代の末頃に比定されるので、この包含層はそれ以降のものである。遺物では古墳時代～奈良時代のものが多い。

第６層　弥生時代　ⅢW区R49の北端がわずかに低くなっており、ここに濃茶褐色土の弥生時代の包含層が遺存している。厚さ５～８cm程度で、浅い大きな落ち込みの可能性もある。上部は中世に削平されており、すぐ上に３層が堆積している。弥生時代の包含層はこの地点の狭い範囲以外には認められない。

３　遺構面

遺構面は各時代の土層の残存状況が地区によって異なる為、一様でない。付図の遺構平面図ではⅢW区S49高台部分を除いて最終遺構面を図示した。最終遺構面では一部を除いて弥生時代から中世までの遺構が同一面で検出された。各地区の遺構面の概要は以下の通りである。

ⅡW区　近代面・近世面・中世～弥生時代面の３面である。各時代の包含層が比較的薄い為、最終遺構面にも近世・近代の遺構がよく残っている。

ⅡE区　近代面・近世面・中世～弥生時代面の３面である。ただし51列と52列東半はやや低くて浅い谷になる為、中世面と奈良時代～弥生時代面が分離でき、４面となる。遺構配置図では52列西半から53列は中世～弥生時代面を示したが、51・52列東半は奈良時代～弥生時代面を示した。

ⅢW区　近代面・近世面・中世～弥生時代面の３面である。50列と51列はⅡE区と同様に中世面と奈良時代～古墳時代面に分離でき４面となる。ただしこの２つの遺構面間の包含層が薄い為、

最終遺構面にも中世遺構の一部が残る。S49高台は他と異なり、中世面が2面ある。付図では中央に土層観察用の土手を図示している。

ⅢE区　近代面・近世面・中世後葉面・中世～弥生時代面の4面である。この地区では他の地区と異なり、包含層がよく発達しており、各時代の遺構が各面で良好に残っていた。

第3節　遺　　構

1　縄文時代

菱木下遺跡の初源は縄文時代に始まる。この時代は凹基無茎式の石鏃（第126図）が2点出土しているにすぎず、遺構も検出されていない。周辺の遺跡では西接する西浦橋遺跡で縄文時代晩期終末（船橋式と長原式）の土器が遺構を伴って出土しており、後期の土器片も出土している。現在調査を継続中である。それより北方100mほどの地点では、堺市教育委員会による関西電力高圧線鉄塔移築の際の調査で晩期中葉の遺物包含層が検出されている（堺市教育委員会野田芳正氏の御好意で現地を見学させていただいた）。東接する万崎池遺跡では石鏃1点、更に東の太平寺遺跡でも石鏃1点と前期の土器が1片、後・晩期の土器が8片出土している。

このように縄文時代各時期の遺物が周辺で点々と出土しているが、集落址の位置は不明である。菱木下遺跡出土の石鏃は周辺の土器の出土状況から後・晩期のものと推測されるが、特定の時期に限定することは今のところ困難である。ただ大阪府の縄文時代遺物が採集される遺跡では、少量の石器のみの遺跡が多くあり、その中には発掘調査を実施しても土器の出土をみない遺跡が少からず知られている。そうした点からすると、縄文人が集落の近傍でも弓矢による狩猟を行い、矢をそのまま残置していったという状況が眼に浮かぶのである。

2　弥生時代

A　遺構の分布　（第54図）

菱木下遺跡第Ⅱ・第Ⅲ調査区では弥生時代の土壙31基・溝10本が検出されているが、ⅢE区で竪穴住居址も1棟だけ検出されている。これらの遺構はすべて中期のもので、畿内第Ⅱ・第Ⅲ様式の土器を出土する。同時期の弥生時代の遺構は和田川の段丘縁辺に集中しており、菱木下遺跡第Ⅰ調査区に集落址が、それに西接して同調査区の西部から西浦橋遺跡にかけて方形周溝墓群がある。ⅢE区の竪穴住居址はその集落から200mほどの距離があり、同時期にもかかわらず1棟だけぽつんと離れており、特異な感じを与える。

弥生時代の遺構は菱木下遺跡第Ⅰ調査区に比べ、数こそ少ないが第Ⅱ・第Ⅲ調査区のほぼ全域に分布する。それゆえ第Ⅰ調査区の集落址とⅢE区の竪穴住居址との間の空間が何らかの生活領域であったことは疑いえない。それは弥生式土器の分布や石器の素材であるサヌカイトの分布（第62・63図）がこれらの空間の全面に及び、その数もかなりの量になることからも推測されえる。

遺構の分布は大きく二つの群に分けることができる。ひとつは第Ⅱ調査区全体とⅢW区の西よりに見出される土壙・溝などである。これらの遺構は散漫に分布して日常の居住空間である集落

の外縁部を構成している。この遺構群を第１遺構群とする。

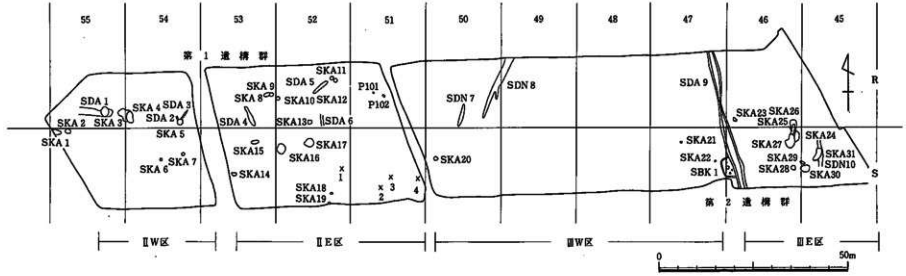
もうひとつの分布はⅢＥ区にある竪穴住居址とその周辺にある土壙・溝である。この地区では調査区の南半に遺構が集中している。現在竪穴住居址は１棟しか検出されていないが、更に南方にも存在する可能性がある。竪穴住居址の廃絶後には大きな溝９が南北に貫流する。これらの遺構群を第２遺構群とする。

ⅢＷ区に２つの遺構群を分ける空白地帯がある。この地域は中世以降の開発をかなり受けているので、弥生時代においても遺構がなかったのかどうか検討しておく。まず49列の部分では、Ｓ49高台が中世の建造物の為かなり削平を受けている。高台の北方Ｒ49は昭和初年に池３が掘られている。この両区画ではそれ以前の遺構はよほど深く掘られたもの以外残りえない。Ｒ47・48は16世紀以降の田畑の造成の為平坦にされており、中世の建物の柱穴も削られている。ここも柱穴程度の深さの遺構は残り難い。このようにみるとⅢＷ区の内で弥生時代の遺構の残りえる地域は第１遺構群の西方Ｓ47・48と第２遺構群の東方Ｒ・Ｓ50に限られてくる。Ｓ47・48では土壙２基が検出されているだけである。Ｒ・Ｓ50では自然の溝２本と土壙が１基検出されている。いずれも２つの遺構群の縁辺にある。中世の開発以前にもこの地域に弥生時代の遺構が集中していたとしたら、Ｓ49の高台の東及び西側でもう少し遺構が確認されてもよさそうである。またこの遺構の空白地帯は弥生時代の遺物量も相対的に少ない。それゆえこの地域は当初から遺構が空白か極めて少ない地帯であり、遺構の分布も現在のように２群に分かれて存在していたと思われる。

弥生時代の遺構の中には遺物を出土していないにもかかわらず弥生時代の遺構としたものがある。その理由は地区によって、弥生時代の遺構の覆土とそれ以後の遺構の覆土との差が比較的はっきりと区別できる為である。おそらく弥生時代の表土とそれ以後の開発によってもたらされた表土とが異なり、遺構の覆土の差異となって表われたものと思われる。ⅢＷ区では弥生時代の覆土は茶褐色土系を呈し、古墳時代から中世までの覆土は灰色土系を示す。茶褐色土系の覆土はⅢＷ区でも認められ、自然の溝８の北端部では弥生時代の薄い包含層となって存在している。

Ｒ・Ｓの50・51列には浅い谷があり、弥生時代には黒色土を覆土にもつ遺構があったようである。ここには古墳時代から奈良時代にかけての土壙墓が多数存在する。その中には黒色土を埋土にもち、同時に須恵器に混じって弥生式土器を多量に包含する土壙墓がある。この現象は、弥生式土器を多量に包含し、かつ黒色土の覆土をもつ弥生時代の遺構が土壙墓によってこわされた為だと思われる。これらの土壙墓は地山掘削の際混入した黄色土のブロックを含む。一方、須恵器を含まず、また黄色土のブロックを含まない純粋な黒色土を覆土にもつ遺構は弥生時代のものと考えられる。土壙20は遺物が皆無だがそうした理由で弥生時代とした。

なお前述の黒色土の覆土をもち、弥生式土器を１基で30片以上出土する土壙墓のある地点は、弥生時代遺構配置図中に×印で示した。全部で４ヶ所ある。これらの各地点には弥生時代の遺構があったと推定してもまず誤りがないと思われる。第１地点は土壙墓107・109があり、前者だけで弥生式土器が 265片出土している。第２地点は土壙墓138・142・143があり、合計 129片



第54図　第Ⅱ・第Ⅲ調査区弥生時代遺構分布図

出土。第3地点では土壙墓140・155があり、合計76片出土。第4地点では土壙262だけで112片が出土している。この他にも黒色土を覆土にもつ土壙墓があるので、更にいくつかの弥生時代の遺構が存在していたと思われる。

ⅡE区の平坦部（52・53列）とⅢE区では弥生時代の遺構は茶褐色土系の覆土をもつものが多いが、中世の遺構でも似かよった覆土をもつものがある。それゆえこの区域では遺物の出土状況から弥生時代の遺構と断定できるものだけに限り、無遺物の遺構で弥生時代の遺構と推定したものはない。

B　遺構の変遷　（第14・15表）

第Ⅱ調査区を中心とする第1遺構群は土壙と溝が多数あり、分布範囲も広い。土壙は第Ⅱ様式5基、第Ⅲ様式4基、第Ⅱ或は第Ⅲ様式11基である。溝は第Ⅱ様式2本、第Ⅲ様式3本、第Ⅱ或は第Ⅲ様式1本である。土壙はどちらの時期に所属するか特定できないものが多い。

第1遺構群では第Ⅱ様式の遺構がほぼ全体に分布しているが、第Ⅲ様式の遺構はそれよりやや西よりに分布する。これらの遺構は菱木下遺跡第Ⅰ調査区から続いているもので、その遺構の変遷も第Ⅰ調査区の集落・方形周溝墓の開始と共に始まり、集落の衰退と共に終焉を迎えている。

一方ⅢE区を中心に分布する第2遺構群には竪穴住居址が1棟存在する。この住居址は第Ⅲ様式の新段階に埋没する溝9に破壊されているのでその時期以前の遺構である。住居址の覆土中からは第Ⅱ様式と考えられる遺物が少量出土しているが、全体に遺物量が少い為時期を特定することがむずかしい。それゆえ住居址は第Ⅱ様式の時期の可能性を強くもちつつも、第Ⅲ様式古段階までずれ込むこともありえる。

その他の遺構は、第Ⅱ様式の時期のものが多い。土壙は11基のうち第Ⅱ様式7基、第Ⅲ様式2基、第Ⅱ或は第Ⅲ様式は2基である。溝は2本で、溝9が第Ⅲ様式新段階、溝10が第Ⅱ様式である。

第14表　弥生時代溝（SD）一覧表　　（　）は残存値

遺構名	地区名		長さ(m)	幅(cm)	深さ(cm)	時期	備考	図	図版
1	ⅡW	R55	(8.8)	236	27	Ⅱ			
2	〃	R54	(0.7)	22	4	Ⅲ	弥生土壙6と同時期		
3	〃	〃	(3.2)	22	5	ⅡかⅢ	弥生土壙6に切られる		
4	ⅡE	R53	4.9	65	16	Ⅲ			
5	〃	R52	4.4	85	25	〃			
6	〃	〃	(4.4)	62	13	Ⅱ			
7	ⅢW	R50	6.3	70	2	〃			
8	〃	〃	(19.4)	110	7	不明			
9	ⅢE	R・S47	(37.0)	290	56	Ⅲ新	人工の大溝	60	39
10	〃	S45	(7.5)	(120)	7	Ⅱ	遺物少量・土壙31に切られる		

第15表　弥生時代土壙（ＳＫＡ）一覧表　　（　）は残存値

遺構名	地区名		形状	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	時期	備考	類別	図	図版
1	ⅡW	S55	長楕円	(220)	150	20	不明	細片・濃茶色土	4		
2	〃	〃	楕円	150	135	22	〃	遺物なし・濃茶色土	4		
3	〃	R53・54	不整楕円	460	250	44	Ⅱ	土壙4にきられる	3		
4	〃	R54	楕円	270	190	30	Ⅲ		3		
5	〃	〃	円	140	138	42	Ⅱ	底面に炭層	2	56	40
6	〃	S54	〃	60	60	17	Ⅲ	〃	2		
7	〃	〃	楕円	120	88	40	ⅡかⅢ	〃	2		
8	ⅡE	R53	長楕円	240	95	34	不明		3		
9	〃	〃	楕円	(95)	70	13	〃		3		
10	〃	R52	円	74	70	27	Ⅱ	底面火を受け炭層あり	1	57	
11	〃	〃	〃	80	77	10	〃	土器投棄	3	58	40
12	〃	〃	〃	97	90	9	不明		3		
13	〃	〃	〃	115	105	16	〃		3		
14	〃	S53	楕円	150	90	20	Ⅲ		3		
15	〃	〃	長楕円	(185)	108	55	不明		3		
16	〃	S52	楕円	270	170	52	Ⅲ		3		
17	〃	〃	不整円形	243	257	31	不明		3		
18	〃	〃	楕円	65	42	4	不明		3		
19	〃	〃	不明	不明	(54)	16	Ⅱ	南壁土層断面にあり	3		
20	ⅢW	S50	円	84	76	12	不明	遺物なし・灰黒色土	4		
21	〃	S47	長楕円	95	35	10	Ⅱ	土器投棄	3	58	
22	ⅢE	〃	円	45	38	18	不明		3		
23	〃	R46	長楕円	124	65	17	不明		3		
24	〃	S46	隅丸長方形	(240)	(105)	10	Ⅱ	土壙25～27に切られる	3		
25	〃	R・S46	不明	(350)	102	24	〃	土壙26に切られる	3		
26	〃	〃	長楕円	(385)	217	22	〃	多量の炭化物・土壙27に切られる	2		
27	〃	S46	不整楕円	305	200	37	〃	土壙24→25→26→27	3	59	40
28	〃	〃	隅丸方形	126	95	19	〃	土器投棄	3	58	40
29	〃	〃	長楕円	135	40	14	Ⅲ		3		
30	〃	〃	不整楕円	220	140	22	〃		3		
31	〃	S45	〃	304	160	26	Ⅱ	底面に炭層	2		

（注）　時期「不明」は、弥生式土器の様式を特定できないものだが、ⅡないしⅢ様式と思われる。

しかし第Ⅲ様式の時期には前述の溝９が掘削される。この溝９の掘削は第２遺構群の変遷史の中で特筆されるべきものである。それはこの溝が竪穴住居址を破壊して掘削されており、この地が居住地としての役割を終えたことを示すからである。溝９は幅が３ｍ近くあり、深さも50cm前後を測る大溝で、灌漑用の水路と考えている。湧水点はこの溝の所在する浅い谷の奥で、現在の新池の付近が想定される。この湧水点から水を引くことによって、この水路の周辺が開発され耕地化されていったものと思われる。この規模の水路からすれば、その耕地は畑だけではなく水田の存在も考えられる。この推測が正しければ和田川に開折する谷田の水田化が第Ⅲ様式の時期には少なくとも行なわれていたことになる。この想定の是否については今後の調査・研究の課題としたい。この水路は第Ⅲ様式の新段階に多量の土器が投棄されて埋没し、菱木下第Ⅰ調査区内にある集落址の終焉と共にその機能を終える。

このようにみてくると第１遺構群と第２遺構群の変遷の過程が異なっていることがはっきりする。第１遺構群は一貫して第Ⅰ調査区の集落址の外縁部として土壙や小さな溝状の遺構が掘られているが、第２遺構群はⅡ様式或はⅢ様式の古段階まで第Ⅰ調査区の集落と同時に併存した小規模な集落であり、その後水路の掘削に伴って集落は消失したと思われる。いずれの遺構群も第Ⅰ調査区の集落・墓地の消長と軌を一にしており、これらの遺構を残した人々は密接なつながりをもっていたと考えられる。

C　遺構の種類と性格

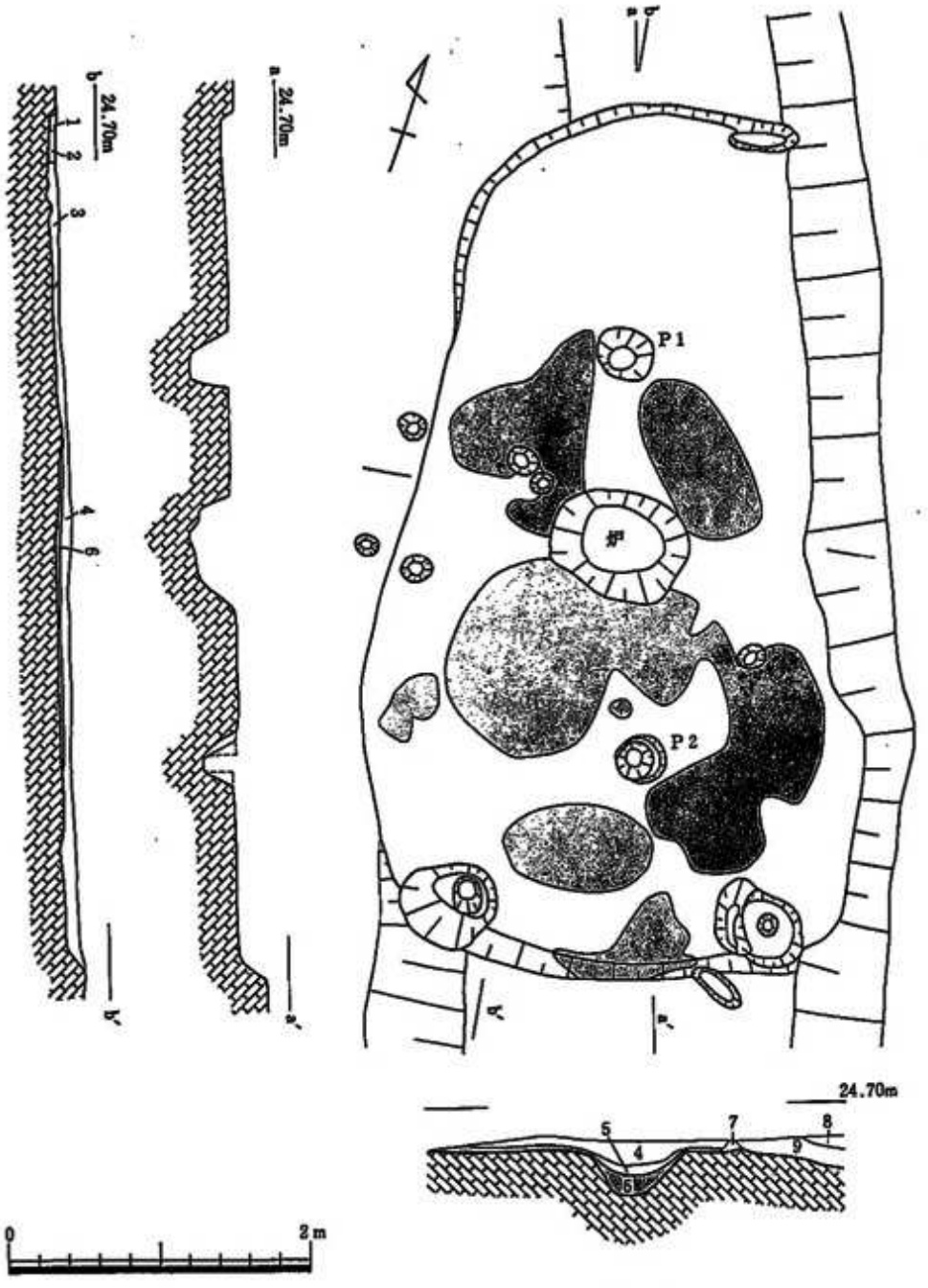
遺構は竪穴住居址１棟、土壙31基、溝10本の他に多数のピットがある。この項では主要な遺構について説明を加え、それらの遺構の性格について分析する。

竪穴住居址　（第55図；図版39）

竪穴住居址１　ほぼ東西に主軸をもつ隅丸方形の住居址である。東半部を溝９によって破壊され、西壁ぎわを中世の溝によってわずかに削平されている。東西径は1.67mしか残存していないが、南北軸は2.93mある。現存部には炉を挟んで２本の主柱穴があり、当初は４本柱であったと思われる。北壁ぎわにわずかに溝状の落ち込みがみられるが壁溝はない。図中の小ピットは住居址に伴うものであるが、南壁ぎわの大ピット２基は平安時代後期の建物の柱穴である。

炉は長径46cmで主軸方向に長く、短径36cm、深さ14cmがある。主柱穴の直径は両方とも直径35cm前後で、深さはＰ１が13cm、Ｐ２が10cmである。

住居址の中央から南よりにかけて厚さ２cmほどの炭化物層が検出された。平面図では炉やピットを明示する為、その上にかかる炭化物層の範囲を省略したが、この炭化物層は炉の中やピットの上をも覆っている。壁ぎわの炭化物層は壁にそって斜めに堆積している。炭化物層中には形のわかる炭化材が何点かあったが焼土はほとんどなく、床面も焼けていない。それゆえこの炭化物層は床面に敷いたり、火災によって堆積したものではなく、住居廃絶後に投棄されたものと考えられる。このような炭化物を遺構に投棄する行為は、他の土壙やピット中にも多くみられる。時期は前項の遺構の変遷で述べたように第Ⅱ様式の可能性が強い。



1．薄茶色土(ピット覆土)
2．薄茶色土(ピット覆土)
3．灰黄色土
4．薄茶色土
5．薄黄色土
6．炭化物層 ピットにかかる部分は省略した。
7．灰黄色土
8．茶褐色土
9．暗茶褐色土

第55図　ＳＢＫ１平面図・土層図・断面図

土壙　（第15表）

土壙は31基あるが埋没状況を基準にして次の４種に大別した。

１類　底面が赤橙色に熱変化を受け、かつ炭化物層がある土壙

２類　底面に炭化物層があるが、熱変化の痕跡のない土壙

３類　炭化物層がなく、土器・石器・サヌカイト片等を包含する土壙

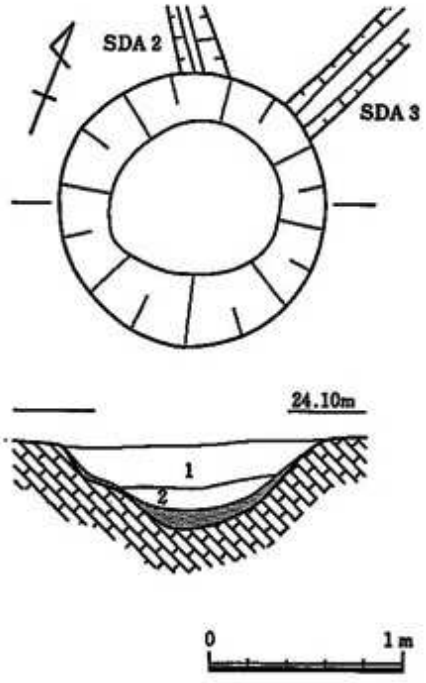
４類　遺物量が極めて少ないか、まったく出土しない土壙

１類の土壙は土壙10の１基しかない。

土壙10（第57図）　直径70cm前後の円形を呈し、深さ27cmを測る。底面は赤橙色になっているので、火を焚いた為熱変化を受けていることがわかる。炭化物層は底面に５cmほど堆積するが、壁ぎわにも薄く堆積する。炭化物層は微細な粒子で、炭化材状のものは入っていない。

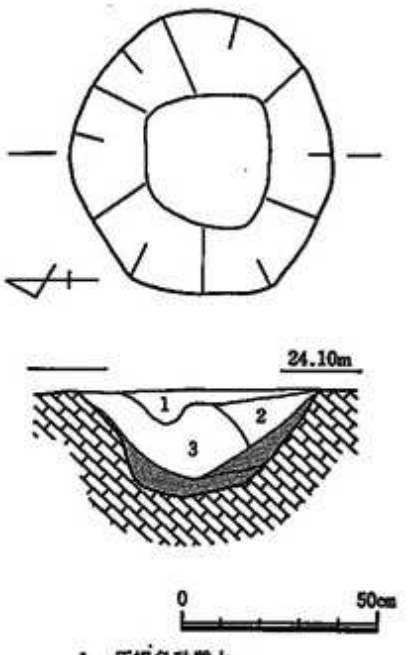
２類の土壙はやや多く、ⅡW区の土壙５・６・７、ⅢE区の土壙26・31がある。ⅡW区の土壙は直径１m前後の円形・楕円形だが、ⅢE区の土壙は大形で長径３～４m近くあり、長楕円形・不整楕円形を示す。

土壙５（第56図；図版40）　この土壙は底面から壁面の全体にわたって炭化物層が堆積している。土壙の北に溝２と溝３があるが、溝２は全体が炭化物で埋まっていた。溝３は炭化物層がない。土壙５と溝２の炭化物層は切れ目なく堆積しているので同時期のものと考えられる。溝２は北側を試掘坑できられているが試掘坑の先には認められないのでそれほど長くない。当初この溝



１．暗灰色土
２．暗灰色土
炭化物層

第56図　ＳＫＡ５平面図・土層図



１．灰褐色砂質土
２．茶灰色砂質土
３．褐色砂質土
炭化物層

第57図　ＳＫＡ10平面図・土層図

が煙道で、土壙を炉跡と考えた。しかし焼土がなく底面も赤橙色になっていない。逆に底面は灰青色を呈し、還元状態になっていた。こうした現象が火を焚いた場合でも起こりえるのか、或は炭化物層の堆積が底面に還元作用を与えたのかはっきりしない。炭化物の堆積層のある土壙で底面が灰青色のものはこれ1基だけである。

土壙26　この土壙は土壙24を切り、かつ底面にも隅丸長方形の大きな土壙25がある。土壙26の炭化物層は土壙25の上をも覆っており、土壙25が古く、土壙26が新しい。この土壙の炭化物は、土壙覆土の下層の厚さ10〜15cmの暗茶褐色土中に多量に混入した状態で存在している。他の土壙の炭化物層がほぼ純粋に炭だけで土をほとんど含まないのに比べ、やや異なっている。

土壙31　底面に炭化物層があると同時に覆土上層にもやや多量の炭化物を含む。

このように、2類の土壙の炭化物の存在の仕方は様々であるが、共通して底面に炭化物層を形成しており、炭化物の投棄の場所として利用されたことがわかる。ⅡW区の土壙は小さくて炭の量もそれほどではないが、ⅢE区の土壙は大きくて炭も多量である。炭化物層の上の堆積土中には土器片も多く含まれている。2類は第Ⅱ様式・第Ⅲ様式のいずれの時期にもある。

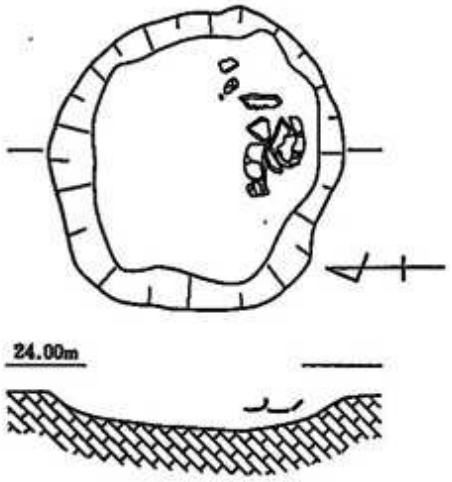
3類の土壙の数は最も多く、第Ⅱ・第Ⅲ様式の両時期にわたる。その中にも遺物量の多い土壙と少量の土壙とがある。遺物量の多寡は土壙の大小にも関連し、その数量も漸次変化する。それらの土壙を遺物の数量で明確に区分することが困難なのでまとめて3類とした。遺物量の多い土壙はⅡW区の土壙3・4、ⅢE区の土壙26・27・30で、やはり大型の土壙に多い。土壙16・17のように大型の割には遺物の少い土壙もある。遺物量はそれほどでもないが、比較的復原ができる破片がまとまって廃棄されているものには土壙11・21がある。

土壙11（第58図；図版40）　径80cmほどの円形の浅い土壙である。南よりに甕の上半部がまとめて投棄されている。

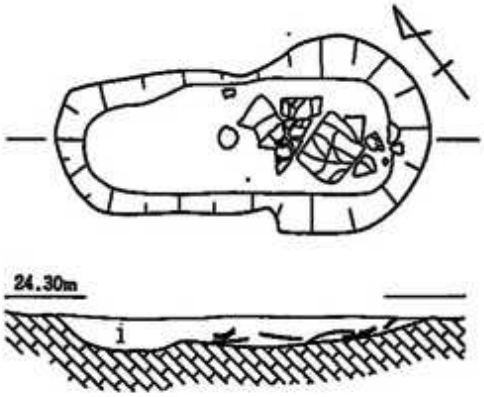
土壙21（第58図）　長径95cmの長楕円形である。底部を欠いた1個体の高さ30cm以上の大型の甕の破片が多量に出土した。完全に復原するには破片がかなり足りないので、これも破片をまとめて投棄したものと考えられる。土器は竪穴住居址のある東方から捨てられている。

土壙27（第59図；図版40）　長径が 295cmと大型の土壙である。底面から8cmの間に1個体の大型の甕の破片が散乱していた。甕は底部を欠くが口縁・胴部はほぼ全周する。他の土器片も含めて北東より遺物が多く、北東ないしは東から投げ入れられたと思われる。覆土は上・下2層に分かれ、甕の破片は下層の中に含まれている。この下層は地山の土のブロックを多量に含む灰色粘質土で、中央が厚さ5cmと薄いのに対し、東壁よりに15cmと厚く堆積している。したがって甕の破片は下層の灰色粘質土と共に土壙内に一時期に東から堆積していったものと思われる。上層は茶褐色土で下層の土とかなり異なる。上・下層とも炭化物を少量含む。

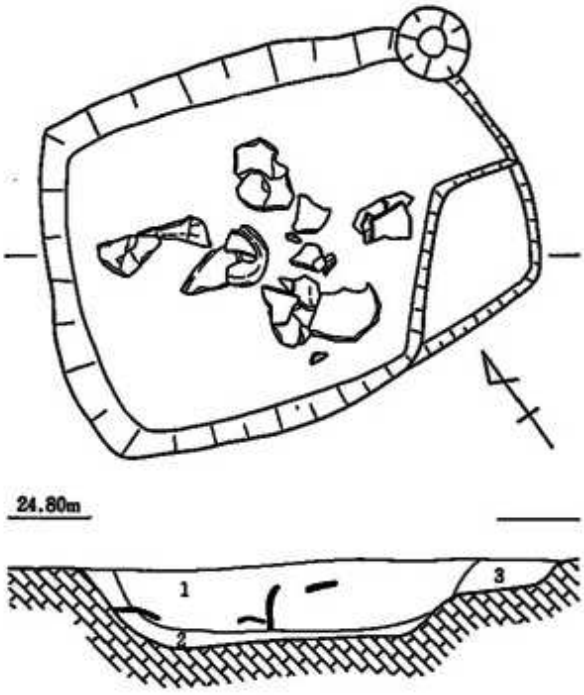
土壙28（第58図；図版40）　長径 126cmの隅丸方形である。底面と南東隅に地山の土とよく似た灰黄色土が堆積している以外、全体に暗茶褐色土が入る。暗茶褐色土中から数個体の壺・甕の破片がまとまって出土した。一部の破片は立っているものもあるので、いっぺんに投棄され、短



土 壙 11



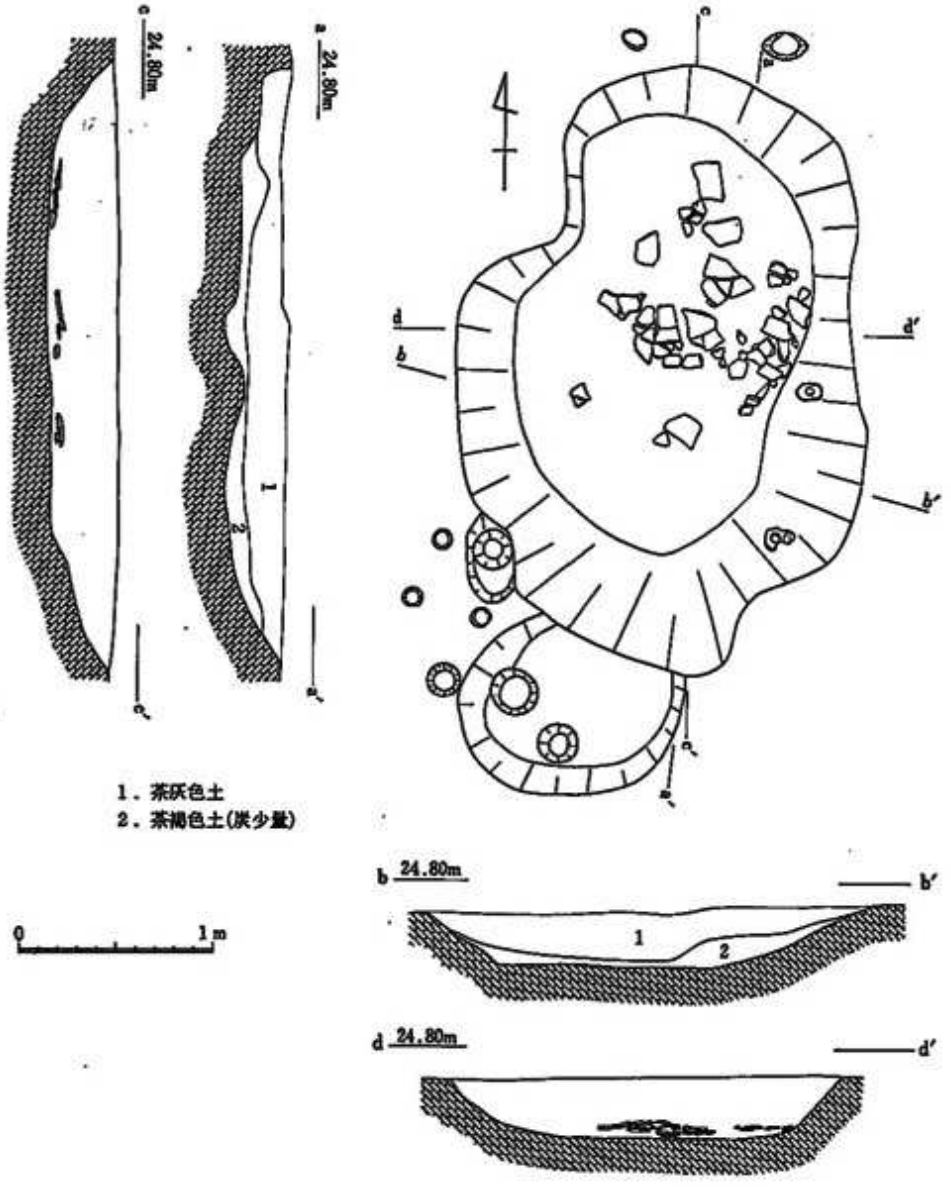
土 壙 21



土 壙 28

1．暗茶褐色土　　3．灰黄色土
2．灰黄色土

第58図　ＳＫＡ11・21・28平面図・土層図・断面図



第59図　ＳＫＡ27平面図・土層図・断面図

時間のうちに埋没したものと思われる。

４類の土壙は遺物が微量かまったく出土しないものである。表に掲げた以外に中世に含めている無遺物の土壙の中にこの類の土壙が混じっているかもしれない。この類の土壙は覆土が地山の土と明らかに異なっていて、輪郭もはっきりしている。こうした土壙の性格をどのように考えるかは今後の課題である。

以上、１類は火を焚いた場所、２類は炭や土器片等を投棄した場所、３類は土器片等を投棄した場所、４類は性格不明として分類してみた。これらの土壙の中には単にゴミ捨て穴として掘られたのではなく、当初は別の目的で掘られたものもあるかもしれないが、今のところそれを明ら

かにすることは困難である。

溝　（第14表）

弥生時代の溝は10本検出されているがその形態は様々で、その成因・機能も一様でない。時期は他の弥生時代の遺構と同じく、第Ⅱ・第Ⅲ様式の両時期にわたる。溝はその形態を基準にして4種に大別した。

1類　掘り込みが深く、溝の両端ないしは一方の端がしっかりと立ち上がるが比較的短い溝

2類　掘り込みが深く、幅も広く、またかなり長い大溝

3類　掘り込みが浅く、幅は4～5cmと非常に狭く、かつ短い小溝

4類　掘り込みが7cm以下と浅く、溝の両壁と両端ないしは一方の端がなだらかに立ち上がる溝

1類の溝は4本で、遺物量の多い溝1・5と遺物量の少い溝4・6とに分かれる。いずれも掘り込みがしっかりしていて人為的に掘られたものである。溝1はその中でも最も大きく、幅が236cm、長さも8m以上ある。溝5の壁の立ち上がりは特に急で、幅が85cmと狭い割には深さが25cmと深い。溝4・6は長さ4～5m、幅62～65cm、深さ13～16cmと同規模の溝である。これらの溝は水の流れていく先がなく（溝1は一端が近世遺構に切られていて不明）、また方形周溝墓の溝のように矩形をなさない。溝1・5のように最終的には土器等の投棄場所として利用されたものもあるが、当初どのような目的で掘られたものか不明である。

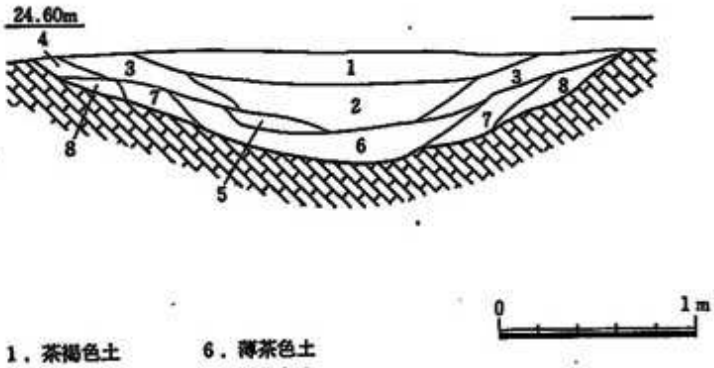
2類の溝は溝9（第60図；図版39）の1本だけである。最大幅は3m近く、最深部も56cmを測る大溝である。調査区内を傾斜に沿って北北西へほぼ直線的に走っており、溝底の南北の比高差は74cmである。この溝は湧水の豊富な谷地形の中を通っており水路として掘られたものと思われる。溝の北よりに溝幅が一部狭くなっている部分がある。ここは地山を削り残して溝壁を凸状に突出させており、溝幅が約130cmと半分ほどにせばめられている。この構造は、この狭い部分に土砂や板材等を置いて水をせき止め、水位を上げる施設と想像することができるが、杭の痕や分流させる為の枝溝等は検出されておらず、その機能の正確なところは不明である。

この溝は竪穴住居址を破壊し、第Ⅱ様式の時期の土壙群を東西に分断して作られており、この地区が居住地としての機能を停止した第Ⅲ様式のある時期に掘削されたものと思われる。この地区では第Ⅲ様式の時期には土壙2基のみと遺構が少なくなっており、この溝が居住地を区画ないしは囲んでいたとは思われない。

この溝の位置は、中世・近世・近代・現代の各時期にわたって灌漑用の水路が掘られている場所であり（第122図）、谷奥の湧水を導く上で絶好の位置にあたっている。それゆえこの大溝の機能も灌漑用の水路であったという仮説を提示しておく。

溝9は第Ⅲ様式の新段階に埋没し、本遺跡内では最も遅く機能を停止する遺構のひとつである。全体に遺物を多く包含するが、南半部は覆土の中層（第60図2・3層）に西から土器が多量に投棄され、折り重なって層状に出土した。これは溝が最後に廃物の投棄場所になったことを示す。

3類の溝は2本で溝2・3（第56図）がある。どちらも土壙5から北西及び北東へ伸びていく。



第60図　ＳＤＡ９土層図

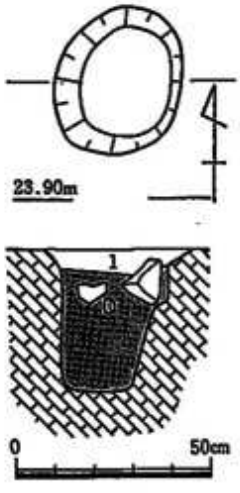
炭化物層が土壙５と溝２を覆っていることから、この２遺構は同時期の埋没と考えられる。溝３はこの炭化物層の堆積以前に埋っており、底面に小ピット２個がある。一見竪穴住居址の炉と間敷切り溝のようにみえるが、近辺には竪穴住居址の柱穴に相当するピットの配列はない。溝は土壙５と関連する遺構と思われるが、その性格は不明。

４類の溝は、溝７・８・10の３本である。溝の始まりが不明瞭で、全体になだらかに落ち込む浅い溝である。溝８は途中から小さな枝溝が入り込む。全体に遺物量は少ない。いずれも低い北の方へ伸びており、雨水が地面を削ってできた自然の溝と考えている。

ピット

明確に弥生時代のピットとわかるものは少いが、Ⅱ E区にはサヌカイトだけを出土し、灰黒色土を覆土にもつピットが２個ある。ピット 101 と 102 がそれである。

ピット 101（第61図）　長径37cm、短径32cm、深さ36cmを測る。内部に炭化物が充満しており、上層に５cmと薄い灰黒色土層が入る。炭化物中には多量のサヌカイトのフレイク・チップがあり、炭化物の上部に自然礫３個が入っていた。サヌカイト片の数は50片以上あると思われたが、水洗いをする為にコンテナに採集しておいた炭化物や土が誤って捨てられてしまった為その数量は不明である。当然後述するサヌカイト片の分布図・表にもこの数量は除かれている。おそらく石器製作址の近辺に火を焚いた場所があり、そこで生じた炭や灰をこの小穴中に埋めたものと思われる。



第61図　ピット 101 平面図・土層図

明確な弥生時代のピットは以上のように少ないが、その他にⅢ W区R 49～51、Ⅲ E区Ｓ46に分布する極めて径の小さい小ピット群は弥生時代の可能性がある。それらは弥生時代の多くの遺構の覆土と同じく茶褐色土の覆土をもち、Ⅲ W区では古墳時代から奈良時代の遺物を含む５層の下から検出される。また弥生時代の溝８の底面からも同様の小ピットが検出されている。すべて無遺物で、直径５～６cmの杭を打ち込んだような小ピットで、機能は不明である。

石器・剝片等の分布と石器の製作場所

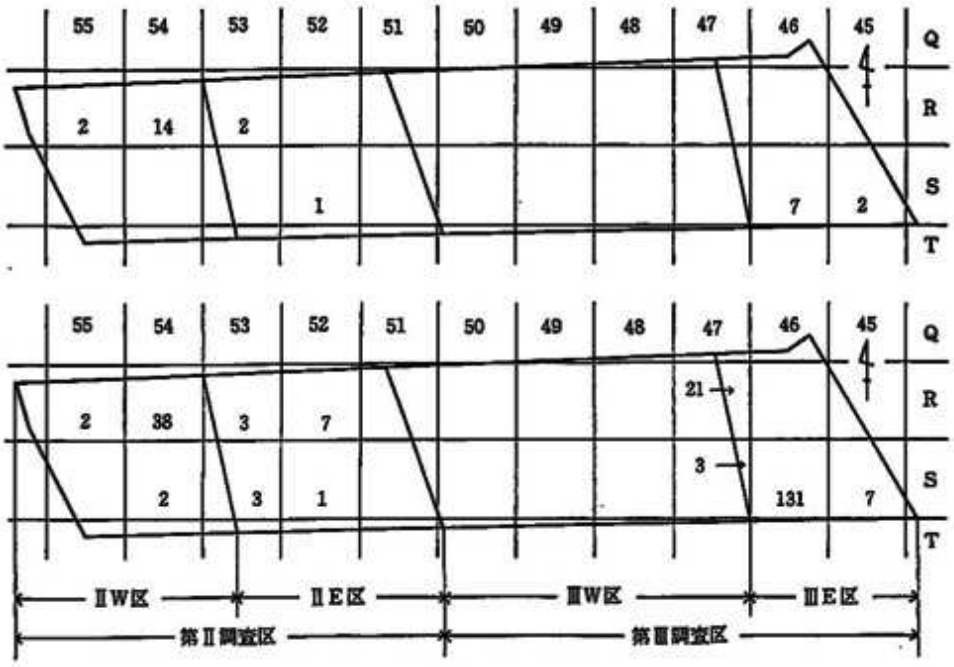
ここでは石器・剝片等の分布状況から、石器の製作場所について述べる。

第62図と第63図は弥生時代の石器・剥片等の分布状況を示した図である。第62図上図は弥生時代の遺構中に含まれるもので、第63図は古墳時代以降、現代までの遺構や包含層中に含まれるものである。前者は同時代の１次堆積物であり、後者はその後の遺構の掘削や耕作によって当初の埋没位置から移動している２次堆積物である。それぞれ上図に石器、下図に石器未成品・剥片・石核の合計数量を記した。上図は石器が使用（或いは完成）された場所を反映し、後者は石器が製作された場所を反映する。なおⅡE区R51に所在するピット101から多量（約50個ぐらいか）の石器・剥片等が出土したが、水洗して採取するようにとっておいた土を誤って捨てられてしまった為、この数量は分布図に記していない。

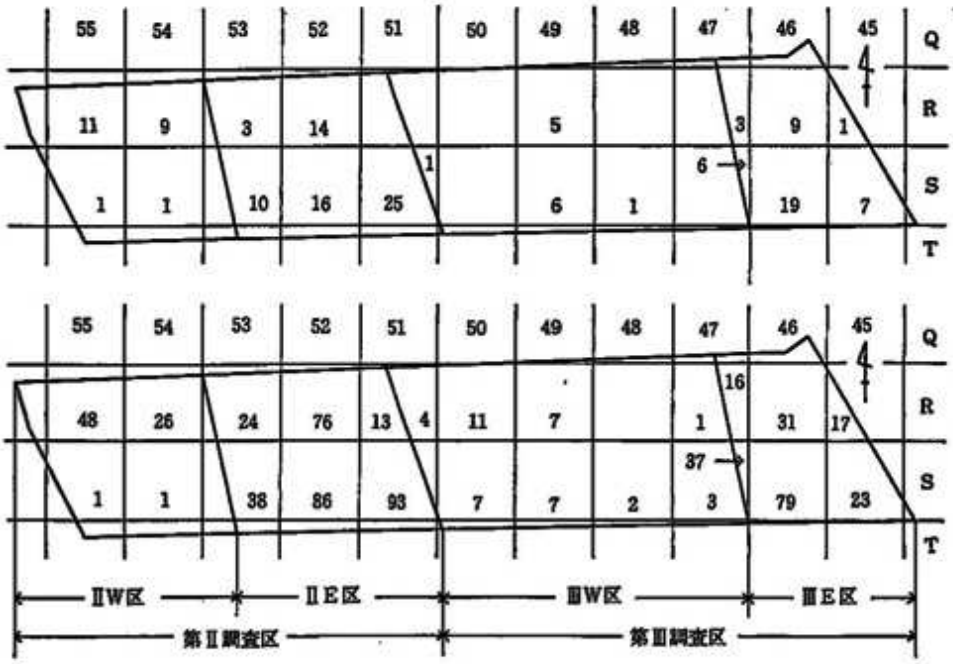
これらの図をみると、古墳時代以降の堆積土中の石器・剥片等の分布密度が、２次堆積物も含めて、弥生時代遺構の分布密度とよく対応していることがわかる。これは後世の遺構の掘削や耕作によって土が掘り起こされはしたが、遺物が遠くにまで拡散していく度合が比較的低かったことを示している。特に第１遺構群と第２遺構群との間の遺構空白地帯（ⅡW区）では、石器・剥片等が全体の５％と極めて低く、この遺構の空白が後世の削平によるだけではなく、当初から遺構がほとんどなかったことを示している。またこの地区では石器が製作されることもありえなかった。

石器未成品・剥片等の合計数は 869片あり、ハンマーストーンの出土からも遺跡内のいずれかで石器が製作されていたことは確実である。しかし石器の製作址とよべるような未成品・剥片等が集中する遺構は見当らない。弥生時代遺構中の未成品・剥片等の分布図をみても遺構内の包含量はR54とS46の２区画を除いて遺構数の割には僅少であることがわかる。出土量の比較的多い遺構はR54で土壙５から38片、誤って廃棄されたため図には示さなかったR51ピット101から約50片出土している。この２遺構は小遺構の割にはやや多い。S47では竪穴住居址が18片、土壙26が38片、土壙27が36片、大溝９が48片である。多数ある他の遺構は10片未満と少ない。発掘時に小さな剥片の採集もれがあるだろうが、ひとつの打製石器の剥離回数を考えてみるならばこれらの数はかなり少ないといえるだろう。

ところが古墳時代以後の遺構・包含層の出土数も合わせて考えてみると、第１遺構群ではⅡW区北半とⅡE区の全体にわたってかなりの量が分布しており、特にS51、R・S52の３区画がいずれも80～90片と集中している。第２遺構群では竪穴住居址のあるS46が 210片と極めて集中している。石器の製作は、これらの集中区画ないしはその周辺で行なわれていたと考えて大過ないであろう。石器製作は第２遺構群のように住居址の近辺でされる場合と、第１遺構群のように住居からかなり離れた場所でされる場合とがあったと思われる。ところがそれらの場所には剥片等が特別に集中する遺構を伴わない点に特色があり、石材を保管したり、剥離した不用な剥片を処理する為の特別な土壙を掘ったりもしていない。ピット101が小遺構の割に数が多いが、これもピットの口近くまで埋まっている炭化物層の中に混入しており、石器製作の場所近くで火が焚かれ、そこで生じた炭を処理したものと考えられる。



第62図　弥生時代遺構石器・剥片分布図　　上　石器数　下　剥片数



第63図　古墳時代以降の堆積土中の石器・剥片分布図　　上　石器数　下　剥片数

弥生時代の集落では、極めて多量の石器素材や未成品・剥片等が集中し、明らかに石器製作址とよぶべき遺構が検出されることがある。菱木下遺跡の弥生時代集落はその一部が調査されただけなのでそのような石器製作址をもっていたかどうかは不明である。しかしながら、石器の製作がそのような特定の場所だけに限らず、比較的自由に住居の近辺や集落の外縁部でも行なわれていたことをここにみることができる。

まとめ

菱木下遺跡第Ⅱ・第Ⅲ調査区の弥生時代遺構は第Ⅱ様式に始まり、第Ⅲ様式の新断階に終焉を迎える。第Ⅲ様式新段階の土器量はかなり少ないので、遺構の主要な時期は第Ⅱ様式と第Ⅲ様式古段階にあり、第Ⅲ様式新段階に入ってまもなくこの遺跡は廃絶したものと思われる。

遺構群は２つのグループに分かれる。第Ⅱ調査区を中心に分布する第１遺構群は、第Ⅰ調査区の集落の外縁部であり、ⅢＥ区を中心に分布する第２遺構群はほぼ同時期の小集落である。菱木下遺跡では、和田川沿いの段丘縁辺（第Ⅰ調査区）にひとつの集落があり、段丘の内側（ⅢＥ区）に約200mの距離を置いて小集落が存在していたことになる。

和田川沿いの集落は第Ⅱ・第Ⅲ様式の時期で竪穴住居址４棟、方形周溝墓７基以上が検出されており、和田川の流れる低地に水田の存在が考えられる。一方ⅢＥ区の集落は竪穴住居址が１棟検出されているだけである。集落は更に南方へひろがるとしても、幅が狭く、奥行きもさほどない谷状地形の中にあるので（第52図）かなり小さな集落であったと思われる。この小集落内にある土壙は第Ⅲ様式の時期には２基と減少し、かわって竪穴住居址を破壊し、かつての遺構群を分断して大溝９が掘られている。この時期にはこの小集落は廃絶していたと思われる。大溝９が第Ⅲ様式の時期であることから、この小集落は和田川沿いの集落より早くに終焉を迎えている。

この大溝には西から多量の土器が投棄され、第Ⅲ様式新段階に埋没する。現在のところ第Ⅲ様式新段階の遺跡はこの周辺で確認されていないので、これらの土器を投棄した人々は和田川沿いの集落の人々と考えられる。

想像をたくましくすれば、この両集落は当初から密接な関係にあり、和田川沿いの「ムラ」が大集落ではないにしても本拠地の「ムラ」であり、ⅢＥ区の小集落が分居した人々の住む小さな「ムラ」であったと思われる。それゆえ小集落廃絶後、和田川沿いの集落の人々がその跡地を占有してこの地に大溝を掘ったと考えられる。この大溝は先に灌漑用の水路と仮定したが、それは和田川に開析する小支谷の耕地化を目指したものではなかっただろうか。将来、弥生時代の集落の調査研究の進展によって、こうした集落のあり方が再評価されれば幸いである。

３　古墳時代から奈良時代

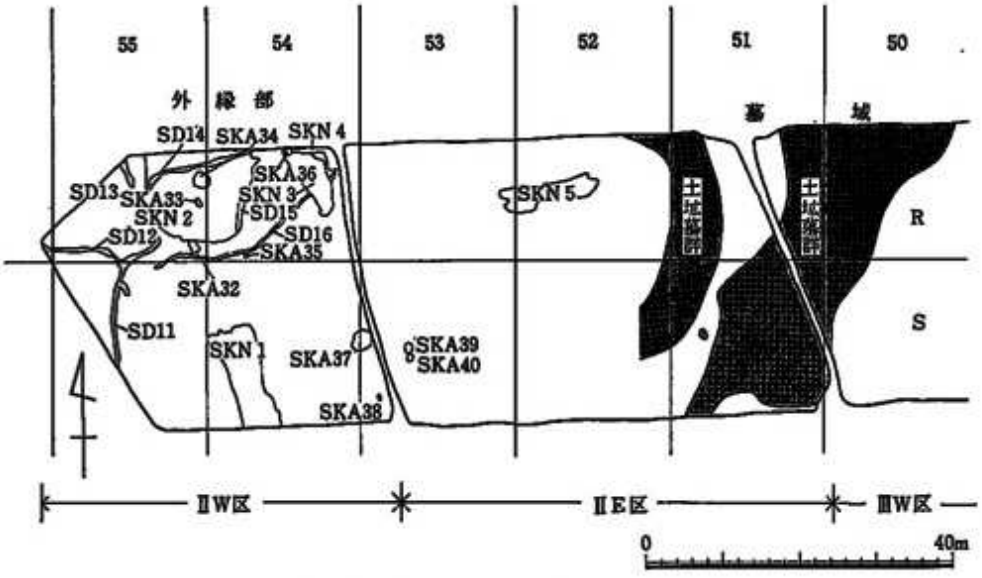
菱木下遺跡第Ⅱ・第Ⅲ調査区では、古墳時代から奈良時代にかけての土壙10基、大落ち込み５ケ所、溝９本がある。更に 380基の土壙墓が検出された墓地が特筆される。これらの遺構の時期は陶邑編年のⅡ期後半からⅣ期の全体にわたる。その絶対年代観を適用すれば、おおよそ６世紀後葉から８世紀末にあたり、約200年間余り存続している。

A　遺構の分布——集落の外縁部と墓域　（第64図）

Ⅱ期後半からⅣ期末にかけての集落地が第Ⅰ調査区にあるのに対し、同時期の墓地が第Ⅱ調査区東部から第Ⅲ調査区の西部にかけてかなり広範囲にひろがっている。その間は約 100mあり、この中間地帯に土壙・大落ち込み・溝が存在する。即ち、和田川の段丘縁辺に集落があり、段丘内陸よりに墓地があって、この中間地帯が何らかの生活領域となる。

集落は竪穴住居址２棟、掘立柱建物が倉庫を含めて20棟（居住家屋は12棟）復原されているが、それに対し土壙墓数は 380基とはるかに多い。このように集落規模と墓地の規模がうまく整合していない。

第Ⅱ・第Ⅲ調査区の遺構の分布は二つに大別することができる。ひとつは、第Ⅰ調査区の東半からⅡW区及びⅡE区の西半につらなる遺構群で集落の外縁部を構成している。遺構は配置図にみるように第Ⅱ調査区でも集落よりのⅡW区に集中している。もうひとつの分布は、土壙墓と墓域内にある土壙・溝である。この二つの遺構群の間は、狭いながらも遺構の空白地帯が存在していて、集落の外縁部と墓域を分けている。



第64図　第Ⅱ・第Ⅲ調査区古墳時代遺構分布図

このように古墳時代から奈良時代にかけての菱木下遺跡の遺構は、竪穴住居址や掘立柱建物のある居住地域（第Ⅰ調査区）と、住居がなくて土壙・大落ち込み・溝等がある集落の外縁の地域、そして墓域と大きく三つの区域に分けることができる。

第Ⅲ調査区ではⅢW区の西部に墓域が拡がっている以外明確な遺構は確認できていない。この時代の遺物量も第Ⅲ調査区を東に行くに従って少なくなる。ただ陶棺片がⅢW区の中央にやや集中して出土しており（第149図）、陶棺を埋納した墳墓の存在がⅢW区ないしはその周辺のいずれかの地域に考えられる。それゆえこの時代の遺構分布の東限は、現在のところⅢW区の中央付近と考えている。

B　遺構の時期と変遷――Ⅱ期からⅣ期へ

集落と墓地及びその中間に所在する遺構群の時期はⅡ期後半からⅣ期末までである。集落の変遷については第Ⅰ調査区で報告されている。ここでは土壙・大落ち込み・溝などがある集落の外縁部の遺構について述べる。墓地の変遷については、別に一項を設けて後に詳述するので墓地内については土壙・溝について記す。

ⅡW区とⅡE区の西よりに分布する集落外縁部の遺構は、土壙がⅡ期後半が6基、時期不明2基、溝はⅡ期後半が3本、Ⅲ期1本、不明2本、大落ち込みがⅡ期後半2ヶ所、Ⅲ期1ヶ所、Ⅳ期1ヶ所、不明1ヶ所である。

以上のようにⅡ期後半に属す遺構が多く、Ⅲ期・Ⅳ期になるに従って遺構の数が減ってくる。これらの遺構をみるとⅡ期後半は、完形に近い須恵器を含んで多量の遺物を出土した土壙32を除けば各遺構からの遺物量は少ない。特にこの時期の2つの大落ち込みは、遺構の大きさの割に遺物が少なく、自然の窪地に周囲に散乱していた遺物が少量流れ込んでいった状況を示している。ところがⅢ期・Ⅳ期になると、土壙・溝等がほとんどなくなり、新たな大落ち込みが出現し、意識的にゴミ捨て場として利用されるようになる。この大落ち込みは自然の窪地と考えているがその成因はわからない。だが、この時期の大落ち込みがそれ以前の土壙・溝を切って存在しているので、新たに出現したことは確かである。ここにⅡ期後半とⅢ期・Ⅳ期の土地利用の仕方の違いをみることができる。

墓域内には土壙1基・溝3本がある。溝17・18は後述するように墓地内にあった何らかの構造物の痕跡である。時期は墓地形成期間内のある時期という以外特定できない。溝19と土壙41は近くにあって両者とも炭化物が充満しており、炭の廃棄場所として利用されている。こうした遺構はこの2遺構だけで、ほぼ同時期の遺構と思われる。両者とも周辺の土壙を切っているので、土壙墓形成期間内でも比較的新しい時期に属す。

C　遺構の種類と性格

遺構は土壙10基、大落ち込み5ヶ所、溝9本、土壙墓 380基が検出されている。古墳時代から奈良時代のピットは大落ち込み1の底面にいくつかあり、中世のピット群内にある無遺物のピットの中に、この時代に属すピットがあるかもしれないが、断定できるものはない。

土壙　（第16表）

土壙はその埋没状況を基準にして以下の3類に大別した。

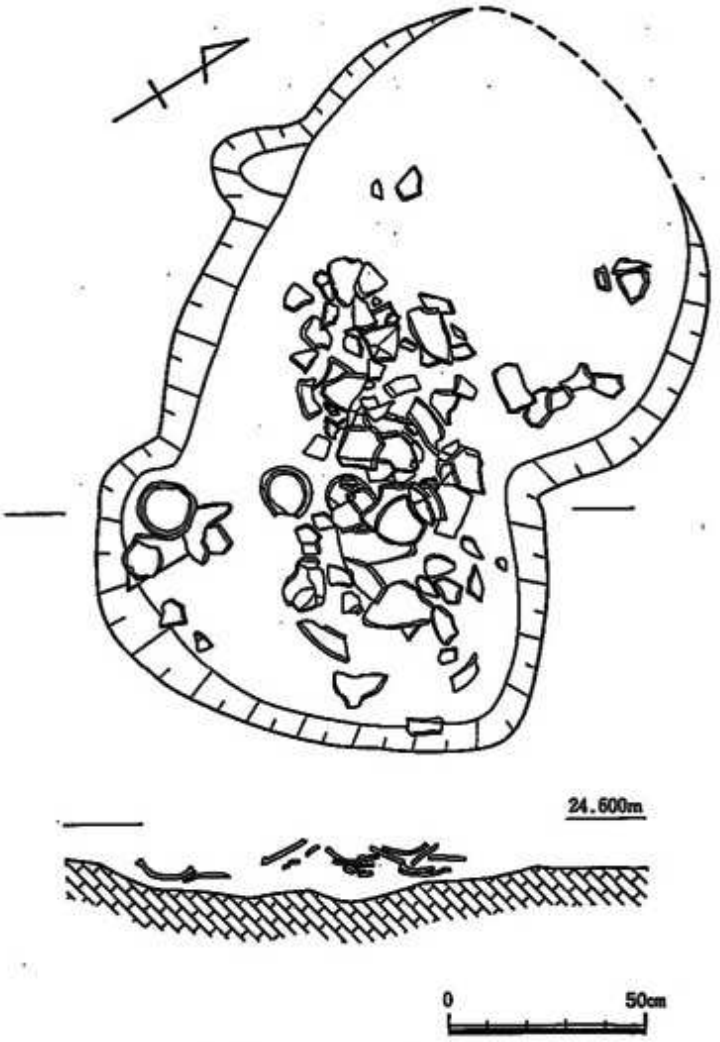
1類　遺物を多量に投棄している土壙

2類　遺物の出土量の少ない土壙

3類　炭を多量に投棄している土壙

1類は土壙32の1基だけである。

土壙32（第65図；図版43）　隅丸長方形をしているが、途中両側がくびれていて、かなり不整の形になっている。中央から南よりにかけて多量の須恵器が出土した。須恵器は下のものでも底



第65図　ＳＫＡ32平面図・断面図

面より５cmほど浮いており、土壙内に土が薄く堆積したあと、一時期に須恵器等を投棄したことを示す。須恵器は坏蓋・坏身・甕の破片が圧倒的に多く、その他の器種は少ない。甕の破片は散乱しているが、坏蓋・坏身にはほとんど完形に近いものもある。時期はⅡ期中葉と、土壙の中では最古の時期に属す。

２類は土壙33～40の８基がある。いずれも須恵器・土師器片が数片から20片未満と少ない。形態は円・楕円・長楕円と様々で、規模も長径でみると土壙36が３m、土壙34が２m強、その他の土壙が0.8～1.2mである。深さは土壙39が26cmとやや深いのに対し、大部分は14～18cmと浅く、土壙37は７cmと更に浅い。それらの性格は不明であるが、その生成要因は一定ではなかったと思われる。時期不明の２基を除けば、すべてⅡ期後半の時期内に含まれる。

３類は土壙41の１基だけである。

土壙41　基地内にあって、土壙内いばっいに炭が充満していた。遺物は須恵器３片、土師器１片と少なく、この土壙が炭の投棄穴であったことを示している。すぐ北に溝19があってこの中にも炭が充満している。土壙41は、遺物から時期を決定するのは困難であるが、土壙基42→43→44→土壙41と変遷するので、比較的新しい時期に属す。

大落ち込み　（第17表）

大落ち込みは５ケ所あるが、ⅡW区に４ケ所、ⅡE区に１ケ所と、ⅡW区に集中している。大落ち込み１が深さ28cmとやや深いが、その他は10～13cmと浅い落ち込みである。Ⅱ期後葉に属す大落ち込み１・４は遺物が少ない。Ⅲ期は大落ち込み３があって遺物がやや多くなり、Ⅳ期は大落ち込み２があって遺物が多量に出土している。大落ち込み５は遺物がきわめて少ない為時期不

明としたが、この遺構の上を覆う中世の包含層中からはⅡ期後半の坏蓋等の遺物が少量出土している。遺物が少量の点は、他のⅡ期後葉の大落ち込みと似ており、この時期に属す可能性が高い。

大落ち込み１・４は灰色砂質土を覆土にもつのに対し、遺物の多い大落ち込み２・３が茶褐色土粒子を含む茶灰色土の覆土をもつ。前者は大落ち込みが自然に埋まる際周辺の遺物が流入したものと理解されるが、後者は須恵器・土師器等のゴミ類が意識的に投棄されたものと思われる。ⅡE区の大落ち込み５は茶褐色土の覆土をもつが、須恵器・土師器等は非常に少なく、これも自然流入であろう。

これらの大落ち込みを他の遺構との関連でみると各時期の特徴がはっきりする。Ⅱ期後半ではⅡW区で６基の土壙が掘られ、そのうちの１基（土壙32）には完形に近い須恵器も含めて多量の遺物が廃棄されているが、その他の土壙では20片未満と遺物はそれほど多くない。また大落ち込み１・４も遺物は少量である。即ちこの区域ではⅡ期後半のゴミ捨て場が土壙32という特別な土壙を除けば存在していないのである。

Ⅲ期では溝が１本だけで（溝11）、大落ち込みがひとつある。両者とも遺物がやや多い。Ⅳ期では大落ち込みがひとつあって極わめて遺物が多い。これらの遺物は土壙32のようにまとまって出土するのではなく、覆土中に大小の破片となって混入している。土壙32が多数の破片を一時期にまとめて投棄しているのに対し、大落ち込みの方は時間をかけて埋没していった状況を示している。

即ちⅡ期後半では、土壙や溝を残すような行為を伴う空間であったものが、Ⅲ・Ⅳ期になるとそうした行為が行なわれなくなって、ゴミを捨てる場所に意識されていったと考えられる。そうかといってⅡ期後半の遺物がこの区域で少ないわけではない。むしろその時期以降の遺構・包含層に混じってかなりの量が出土しているので、調査区周辺にゴミ捨て場が存在していたであろう。

第16表　古墳時代土壙（ＳＫＡ）一覧表　　（　）は残存値

遺構名	地区名		形　状	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	時　期	備　考	図	図版
32	ⅡW	R55	隅丸長方形	(179)	120	18	Ⅱ期中葉	遺物多量	65	43
33	〃	〃	楕　円	120	64	16	Ⅱ期後葉？	須恵器２・大落ち込み２に切られる		
34	〃	〃	円	225	225	15	Ⅱ期後葉	須恵器14・土師器５・同上		
35	〃	R54	〃	88	72	18	〃	須恵器17		
36	〃	〃	楕　円	(105)	80	14	Ⅱ期後葉？	須恵器５・大落ち込み３に切られる		
37	〃	S53	〃	300	150	7	Ⅱ期後葉	須恵器８		
38	〃	〃	長楕円	(77)	70	10	〃	須恵器９・土師器１		
39	ⅡE	〃	〃	120	(25)	26	不　明	須恵器２		
40	〃	〃	〃	105	(45)	16	〃	須恵器１		
41	〃	R51	円	58	55	7	Ⅳ期？	須恵器３・土師器１、炭多量		

第17表　古墳時代大落ち込み（ＳＫＮ）一覧表　　（　）は残存値

遺構名	地区名		長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	時期	備考	図	図版
1	ⅡW	S54	(1360)	610	28	Ⅱ期後葉	遺物少量　22		
2	〃	R54・55	1430	(1190)	10	Ⅳ　期	遺物多量　コンテナ６箱		
3	〃	R54	(1060)	400	12	Ⅲ　期	土壙36・溝16をきる、やや多量 コンテナ1箱		
4	〃	〃	(550)	(310)	13	Ⅱ期後葉	遺物少量　7		
5	ⅡE	R52	(1210)	335	13	不　明	須恵器２・土師器２		

第18表　古墳時代溝（ＳＤ）一覧表　　（　）は残存値

遺構名	地区名		長さ(cm)	幅(cm)	深さ(cm)	時期	備考	図	図版
11	ⅡW	R・S55	(1890)	108	21	Ⅲ　期	須恵器353・土師器28		
12	〃	R55	(1060)	81	11	Ⅲ期？	弥生のみ、溝11から分岐する		
13	〃	〃	(250)	74	6	不　明	須恵器２・土師器４		
14	〃	〃	(1550)	95	13	Ⅱ期後葉	須恵器60・土師器12		
15	〃	R54	(600)	81	20	Ⅱ期末	須恵器41・土師器12		
16	〃	〃	(2710)	5	30	Ⅱ期後葉？	須恵器２・土師器３、大落ち込み４に切られる		
17	ⅡE	S51	140	32	25	不　明	須恵器、墓地内にあり		
18	〃	〃	(220)	48	20	〃	須恵器、墓地内にあり		
19	〃	R51	212	55	17	ⅢかⅣ期	炭が入る、土壙墓44を切る		

溝　（第18表）

溝は９本あるが以下の５類に大別した。

１類　ゆるやかに屈曲しながら長く続き、幅が狭い割には深く、断面がＵ字形を呈する溝

２類　長さは不明だが、立ち上がりがゆるやかで、横断面が浅い皿状を呈する溝

３類　短く、立ち上がりのしっかりした溝

４類　短く、溝内に何かを埋置した溝

５類　ピットを連続したような不整の外形を呈し、炭が充満している溝

１類は溝11・12・14・16の４本である。幅が50～80cmだがしっかり掘り込まれている。溝11は途中に長さ約 1.5mの枝溝が入り込み、その北では更に溝12が分岐する。これらの溝は途中屈曲しながら伸びているので雨水が集まって流れる際に生じた自然の溝のような形をしている。しかし地面は第Ⅰ調査区の北に谷頭が入り込んでいて北西方向が低くなるのに対し、溝11・14・16の３本は北東方向へと伸びているので、地面の高低に合わない。よってこれらの溝は人工の溝の可能性が強い。溝12だけは谷の方へ伸びている。性格は不明である。

時期は溝14がⅡ期後葉、溝16は遺物が少ないが、Ⅲ期の大落ち込み３に切られているのでⅡ期後半の可能性が強い。溝11は須恵器・土師器が 381片とやや多量に出土しているが、その８割は

溝12が枝分れしている地点より北の短い部分に集中している。Ⅲ期に埋没するがⅡ期後半の遺物が多い。溝12は弥生式土器を少量出土しているだけだが、溝11から枝分かれしていく溝と考えるとⅢ期の溝の可能性が強い。

2類は溝13の1本だけである。他の溝に比べて深さ6cmと浅く、1類のU字形断面の溝と異なり、浅い皿状断面をもつ。人工の溝か自然の溝か不明。遺物も少く時期もわからない。

3類は溝9の1本だけである。短いがかなりしっかりした溝で人工のものと思われる。性格不明。時期はⅡ期末葉である。

4類は溝17・18の2本である。溝18は2本の溝のように示したが、実は1本の溝で南側に茶褐色土が入り、北側に地山の土である灰黄色土のブロックと濃茶褐色土の混合した層が入っていた。これは南側に丸太ないしは板状のものを埋置し、北側はそれを固定する為に埋め戻した状況を示している。溝17は異なる覆土の境を示さなかったが、まったく同様の状態であった。2本の溝とも墓地の中でも同一の土壙墓群（東Ⅰ群）に属し、また同一の方向を持っている。溝17は土壙墓205を切っているが、溝18は土壙墓156に切られている。よってこれらの溝が土壙墓の形成期間内に掘られたものであることは確実で墓地内にある何らかの構造物の痕跡であったと推測している。

5類の溝は溝19の1本だけである。地面を適当に掘り凹めて溝状にしたもので、外形もピットが連続したような不整形で、底面も凹凸がある。全体に炭が充満しているが底面は焼けていない。炭を埋める為に掘られた投棄穴が溝状を呈しているものであろう。近くに炭の投棄穴である土壙41があり、ほぼ同じ時期と思われるが、比較的新しい遺構という以外時期を特定できない。

土壙墓群　（第66～68図・付図3；図版41～42）

古墳時代から奈良時代にかけての主要な遺構として土壙墓群があげられる。土壙墓はⅡE区の東部からⅢW区の西部にかけて、おおよそ1600㎡の範囲に群集し、ひとつのまとまりのある墓地を形成している。土壙墓総数は380基を確認しているが、未調整区に拡がる土壙墓の存在や破壊された土壙墓の数を考慮すれば、本来の土壙墓総数は400基を幾分か超していたと思われる。墓地内にはその他に坏を埋納したピット1基と前述の溝3本、土壙1基がある。

墓地の立地　この墓地はⅡE区とⅢW区のR・S―50・51にかけて存在する幅40mほどの小さな谷状地形の中にある。谷底面と西側の肩上面との比高は約20cm、東側の高台との比高は約80cmである。いずれも調査時の最終遺構面での比高であるが、当時もかなり浅い谷であったと思われる。こうした谷状地形を墓地に選んでいることは、後述される万崎池遺跡第Ⅳ・Ⅴ調査区の墓地と共通している。この谷部は中世以降は畑や水田となり、建物はその両側の高い部分を利用して建てられる。このような湿潤な場所を墓地として選択していることは、当時の人々が墓地の選地に一定の基準を持っていたことを示している。

墓地の範囲　土壙墓群は中央に空白地帯を挟んで大きく西群と東群とに分かれる。西群の北端は土壙墓が密に群集しており、調査区の北壁土層断面にも重複して6基の土壙墓の断面が確認さ

れている。この地点にかなりの密集度があるので、墓域は更に北へ伸びていると思われる。南端は中世の大溝25に切られているが、この大溝を超える地点には土壙墓が確認されていない。大溝で何基か破壊されているだろうが、現在の分布域の南端がほぼ南限である。

東群の北半部は密集区域とまばらな区域に分かれる。密集部の北に東西に走る中世の溝があり、この溝より北には土壙墓がない。まばらな区域では北壁土層断面に土壙墓373～376の4基（遺構配置図に破線で示す）の断面が確認されており、墓域は更に北へ拡がると思われる。東群の南端は調査区の南壁近くまで伸びているが、南壁土層断面には土壙墓がひとつもかかっていない。西群の南限が調査区南壁より9mほど手前にあるので、東群の南限もかろうじて調査区内に収まっていると思われる。

このように墓地の範囲は北へ伸びるが、東群密集部の北限が既に現われているので、その拡がりはそれほど大きくはないと思われる。墓地の南限は西群・東群ともに調査区内に収まっているよう。

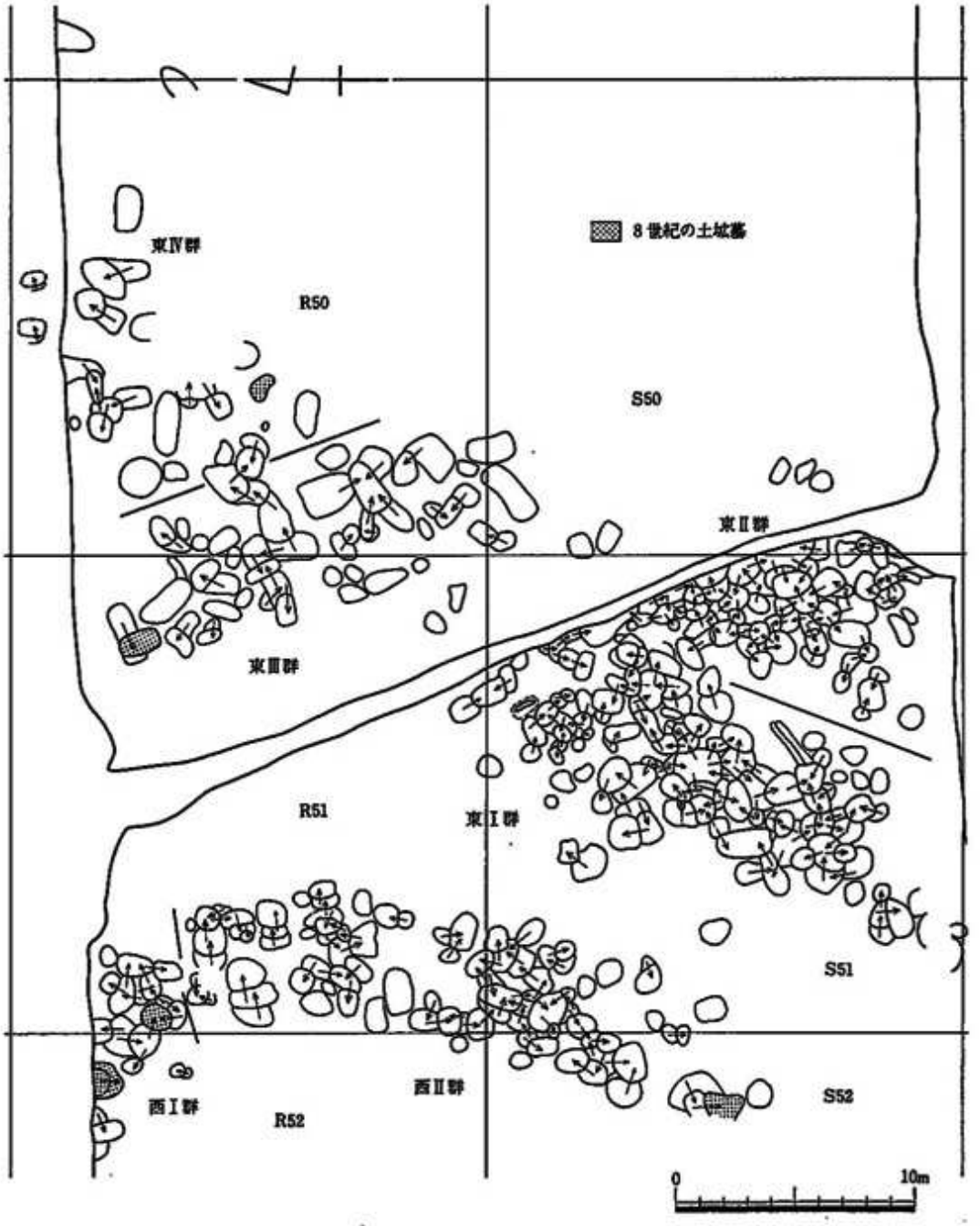
墓域の設定（付図3）　墓地は土壙墓の群集域と空白域とで構成されている。墓地の中央には幅5～10mの大きな帯状の空白地帯があり、それを境に土壙墓群は大きく西群と東群とに分かれる。この空白地帯が墓地中央の墓道として利用されたと思われる。

西群は110基を有し、幅6mで帯状に連なり、南北に弧を描く。東群は密集度が均一でないが269基が南北に連なる。空白地帯の南よりにどちらの群にも属さない土壙墓111が1基だけ存在する。この土壙墓には多数の須恵器が副葬されており、他の土壙墓が副葬品を持たないか、あっても1個しか持たないのに比べると、この墓の被葬者が他の被葬者に比べて特別な存在であったことを示す。またこの墓が土壙墓群の中でも最古段階のひとつであることから、当初からこの墓を中心に東西に墓域を設定し、中央が墓道となっていったものと思われる。

東西両群とも全体として弧状に連なるが、いくつかの支群で構成されている。ひとつひとつの支群はおおむね長方形の枠内に群集し、それが連接して弧形をなしている。西群は2群に分けた。北よりで屈曲するところを境にすると20基（土壙墓1～20）を有する西Ⅰ群と、90基（土壙墓21～110）を有する西Ⅱ群とに分かれる。

東群は4群に分けた。まず北半部と南半部との間に狭い空間があって二分することができる。南半部は北半部に比べて密集度が高く、更に二又に分かれていて、108基（土壙墓112～219・379）を有する東Ⅰ群と、75基（土壙墓220～295）を有する東Ⅱ群に分かれる。東Ⅰ群と東Ⅱ群は北端で接近し合って、両群を明瞭に区別することが困難であるが、両群の間にごく狭い空白部が線状に続いているので、そこから分けることにした。ここでは長方形区画の一角が崩れてしまっているが、これは両群の墓域が土壙墓築造の増大により維持できなくなった為と思われる。北半部も長方形に密集し、58基（土壙墓296～352・380）を有する東Ⅲ群と、散漫に分布し、26基（土壙墓353～378）を有する東Ⅳ群とに分かれる。

この結果をまとめてみると、各群の土壙墓数は以下のようになる。



第66図 土坑墓切り合い図

西Ⅰ群　20＋？基
　Ⅱ群　90＋数基
東Ⅰ群　108基
　Ⅱ群　75＋10～20基
　Ⅲ群　58基
　Ⅳ群　26＋？基

ほぼ全体が窺える4つの群のうち西Ⅱ群・東Ⅰ群・東Ⅱ群の3つの群が 100基前後、東Ⅲ群が58基、西Ⅰ群・東Ⅳ群は全体基数不明となる。これらの各群の上壙墓は、狭い範囲に密集して掘られた結果、多数の切り合い示している。これは、土壙墓は、墓地内のどこに造っても良いというわけにはいかず、一定の範囲に掘らなければいけないという規制があったことを示している。

土壙墓群の時期　各土壙墓は副葬品を持たないものが多いので、時期を決定するのがむずかしい。遺体を被覆していたと思われる大型須恵器片は、いくつかの土壙墓のものが接合し合うので、須恵器の型式が必ずしも土壙墓の築造時期を示さない。土壙墓どうしの切り合いが多い結果、古い土壙墓の遺物が新しい土壙墓の中に破片になって入ることも接合作業の結果多数見出される（第68図、第22表）。

そうした点を考慮に入れて、各土壙墓群の遺物出土状況から各土壙墓群の形成時期をみてみると西Ⅰ群・西Ⅱ群・東Ⅰ群・東Ⅱ群の4群では、墓地形成の始まったⅡ期後半の遺物を多数出土している。それに対し、東Ⅲ群・東Ⅳ群では少ない。前者の4群の属する第Ⅱ調査区土壙墓の遺物実測図と後者の第Ⅲ調査区の実測図を比べるとはっきりする。実測図には破片で入っていたものも多く示したが、副葬品として入っていた土壙墓をみても、西Ⅱ群・東Ⅰ群・東Ⅱ群には墓地創始期のものがある。

一方、墓地形成の終わるⅣ期の遺物は西Ⅰ群・西Ⅱ群・東Ⅲ群・東Ⅳ群にはあるが、西Ⅲ群・西Ⅳ群には明確なものがない（第66図）。ただⅣ期の遺物は全体に少なく遺物が出土しなかったり、細片で時期の確定できない土壙墓も少なくないのでⅣ期の土壙墓がまったくないとは言い切れない。しかし他の群に比べてⅣ期の造墓活動が低調であったことを感じさせる。

こうしてみると、各土壙墓群の形成状況は必ずしも一様でないことがわかる。墓地の形成の始まったⅡ期後半には、西Ⅱ群・東Ⅰ群・東Ⅱ群がそれぞれの間に空白地帯を設けて墓域が設定され、西Ⅱ群と東Ⅰ群との間には唯一多数の副葬品をもつ土壙墓111が造られた。少し遅れて、東Ⅲ群・東Ⅳ群が設定された。その遅れが、土壙墓がややまばらに分布する要因かもしれない。西Ⅰ群はⅡ期後半の遺物が出土しているが、副葬品がないので、正確な形成開始時は断定できない。

土壙墓の形態と規模（第19～22表）　土壙墓は形態からA～E類の5類に分け、形態不明のものをF類として全体を6類に分けた。

A類　隅丸長方形　　長径＞短径×1.1
B類　長楕円形　　長径＞短径×1.5

C類　横幅のある楕円形・不整楕円形　　短径×1.5≧長径＞短径×1.1

D類　隅丸方形　　長径≦短径×1.1或いは長径と短径の差が10cm未満

E類　円形・不整円形　　長径≦短径×1.1或いは長径と短径の差が10cm未満

F類　形態不明

形態を決めるのには土壙墓の長径と短径の比率を基準にした。A類隅丸長方形とD類隅丸方形との区別は、長径が短径の 1.1倍より大きいものをA類、以下のものをD類とした。B類長楕円形、C類横幅のある楕円形、E類円形の区別は、長径が短径の 1.5倍より大きいものをA類、長径がそれ以下で、かつ短径の 1.1倍より大きいものをC類、それ以下のものをE類とした。ただし長径が1m未満のもので長径と短径の差が10cm未満のものは、形態上長方形・楕円形と言い難いので、計算上A～C類に入るものが少数あるが、それぞれD類・E類とした。

また規模から1～3類に分けた。

1類　長径150cm以上

2類　長径100cm以上、150cm未満

3類　長径100cm未満

土壙墓の多くは底面が皿状に凹んでおり、平坦なものは少ない。A類の隅丸長方形のものは木棺の可能性を考えたが、木棺の痕跡は埋土の平面的な掘り下げや土層観察でも確認できなかった。それゆえこれらの土壙墓は基本的にはすべて無棺であったと思われる。土壙墓は特別の内部施設を持たないので、土壙墓の形態と規模は被葬者の身長（年令）や埋葬姿勢、副葬品の有無などによって決定されたであろう。

規模のわかる土壙墓数は380基中286基である（第19表）。1類が73基（25.5%）、2類が 175基（61.2%）、3類が38基（13.3%）である。1類は長径 150cm以上なので被葬者は成人の可能性が強く、3類は1m未満なので少年・幼児の可能性が強い。2類は成人と少年の両者が考えられる。即ちこの墓地は幼児から成人まであまねく埋葬しているといえる。

形態の判別できる土壙墓は335基である。A類は11基（3.3%）と少ないが、長径が大きいのが特徴で、ほとんどが1類に属し、2類は皆無である。A類は3類の1基を除けば成人の伸展葬と考えられる。B類は 102基（30.4%）とかなり多い。1類・2類ともに多いが、3類は少ない、形態から伸展葬が考えられ、1類は成人、2類は少年、3類は幼児と思われる。C類は 140基（44.5%）で最も多く、規模も1～3類まであるが、特に2類が 100基ときわめて多いのが特徴である。成人が伸展葬で入りえるA－1類、B－1類が44基（15.4%）と少なく、C－1類とB或いはCの1類に属すものを含めても全体の4分の1しかない。それゆえ成人はC－2類の土壙墓にも屈葬されたのではなかろうか。C類は楕円形でも横幅が広いのが特徴でその姿勢は横臥屈葬の可能性があろう。

葬制――副葬品と須恵器大型片による被覆（第67・68図）

遺体は無棺で直接埋葬されているが、埋葬の際に副葬品を入れた墓が25例、遺体を大型の須恵

第19表　土壙墓の形態・規模別分類表

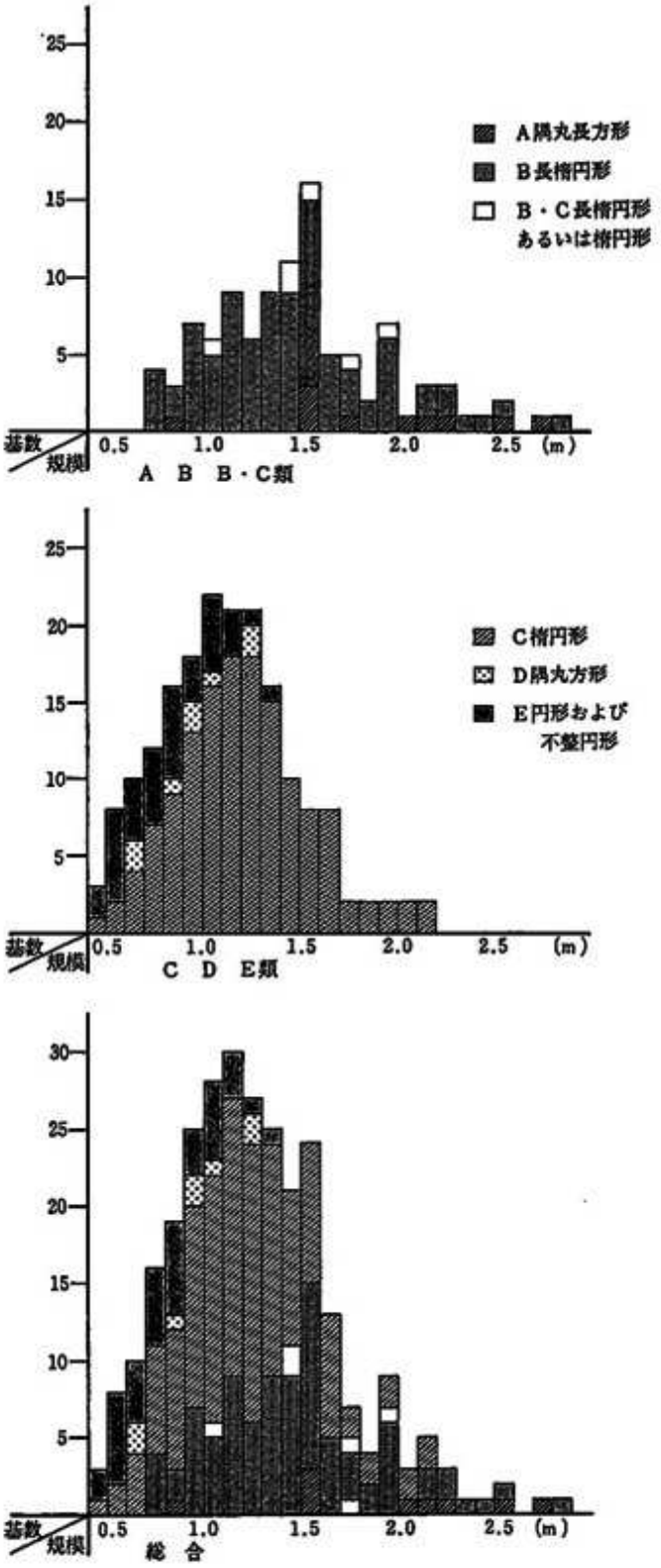
	1　類	2　類	3　類	計	比　率（%）
A　類	8	—	1	9	3.1
B　類	36	47	4	87	30.4
B・C類	3	3	—	6	2.1
C　類	26	100	14	140	49.0
D　類	—	6	2	8	2.8
E　類	—	19	17	36	12.6
計	73	175	38	286	100
比　率（%）	25.5	61.2	13.3	100	

形態・規模とも確実なものだけを示した

第20表　土壙墓の形態別数量表

平面形	規　模	基数	比率%	計	比率	参考	基数	合計	比率	総計	比率
A　類	1　類	8	2.8	9	3.1	1	2	11	3.3	11	2.9
	2　類	0	—			1					
	3　類	1	0.35			0					
B　類	1　類	36	12.6	87	30.4	4	14	101	30.1	101	26.6
	2　類	47	16.4			9					
	3　類	4	1.4			1					
B・C類	1　類	3	1.05	6	2.1	1	22	28	8.4	28	7.4
	2　類	3	1.05			16					
	3　類	0	—			5					
C　類	1　類	26	9.1	140	49.0	2	9	149	44.5	149	39.2
	2　類	100	35.0			7					
	3　類	14	4.9			0					
D　類	1　類	0	—	8	2.8	0	1	9	2.7	9	2.4
	2　類	6	2.1			0					
	3　類	2	0.7			1					
E　類	1　類	0	—	36	12.6	0	1	37	11.0	37	9.7
	2　類	19	6.6			0					
	3　類	17	5.59			1					
F　類										45	11.8
計		286	100.0	286	100.0		49	335	100.0	380	100.0

参考基数は形態のわかるものを残存長だけで分類したもの
B・C類はB類又はC類に属すもの



第21表 土壙墓の形態別数量図

器で覆ったものが10例、遺体の下に須恵器片を敷いたと思われるものが2例ある。そのうち複数の副葬品をもつのは土壙墓111の1基だけである。坏身と被覆の甕胴部の両方をもつのものに土壙墓347がある。よって何らかの形でやや丁寧に葬むられているのは、土壙墓347の副葬品・被覆の重複例を差し引くと35例で、全土壙墓 380基の1割でしかない。ただ土壙墓全体が削平を受けており、埋土中にあった遺物も少なからず失なわれているので、実際の比率はもう少し上回るだろう。しかし土壙墓の上を覆う包含層も含めて須恵器の出土量は少なく、比率が大幅に上がることはない。

副葬品は底面に置かれる例と埋土中に埋納される例とがある。副葬品は長軸方向の一端に置くのが大部分で、その場合南北軸では南端に、東西軸では西端に置く。副葬品が埋土中にある場合には中央に置かれる場合もある。遺体の脇に置くことは、土壙墓の幅をより広く掘らなければならず、こうした例は土壙墓347の1例だけである。

須恵器片による被覆には甕胴部が一般的に使用されるが、壺（土壙墓3）や把手付鉢（土壙墓25）が使用される例もある。更に甕の破片を多数使用するもの（土壙墓343）、甕の口縁部2個を使用するもの（土壙墓366）などがある。須恵器片はその一端が底面に接地しているものと、かなり底面からういているものがある。これは遺体の沈下と土砂の流入状況によって様々な状態が生じるが、接地しているものは、直接遺体を覆っていた可能性が高い。須恵器片の位置は副葬品と同じく南端部に多い。或いは中央からやや南寄りである。遺体の一部を被覆するとすればこれらの破片は頭部ないしは胸部の被覆となろう。

副葬品の位置も南よりに多いことから、当時の遺体の埋葬姿勢は頭部南向きが多かったと推測される。

こうした例の他に、須恵器の胴部大型片が底面に接地して中央から出土する例が2例ある。これは副葬、被覆とは考えられず、遺体の下に敷いたものと考えている。また副葬品とはしたが、内面を上に向けた甕、横瓮例の中には、削平の為ではなく、当初から破片で入っていたものもあるかもしれない。

土壙墓内で使用される大型片は互いによく接合できることは第68図・第22表に示した。特に接合表45番の甕は、口縁・胴部が3基の土壙墓に分散して入っていた。そのうち土壙墓321の胴部、土壙墓326の口縁部は削平を受けておらず、当初から破片で入れていたことは確かである。これらの破片がいつどこで割られたかを知るため、土壙墓群内の甕口縁片とⅡW区出土の甕口縁片と接合できるか試みた。その結果はひとつも接合できなかった。このことから甕は墓地内で割られたと推測された。ただ1度に数基の土壙墓に埋納されたとは思われないので、割られた甕のうち不用部分はしばらく放置され、更に再利用されたものと判断された。

土壙墓3（第69図；図版48）　壺の胴・底部3分の1大の破片が内面を下に向けて出土。土層断面から調査区外にも伸びていることがわかり、南北を長軸とする楕円形と推定できる。破片は土壙墓の南よりにあり、おそらく遺体頭部に密着して覆っていたものと思われる。

同一個体の胴部片が土壙11から1片、包含層（5層）から3片出土。これらのうち1片は、土壙墓内の大形破片の下向きになっている断面と接合できる。即ち、土壙墓内の須恵器片が削平によって外に出てしまったのではないことを示している。このことは、埋葬をする側の人が、須恵器片を墓域内で適当な形に割って遺体にかぶせたことを示しており、残余の小片が他の土壙墓や包含層中に残ったものである。

壺（第145図5；図版180－5）は平城宮出土の双耳ないしは四耳壺に類似した形態をもち、8世紀後半から9世紀初頭。

土壙墓25（第70図；図版48）　把手付鉢の3分の1ほどの大破片が内面を下に向け出土。幅広い楕円形の土壙墓の北西寄りにあり、遺体が横臥屈葬と推定すると頭部を覆っていた可能性が高い。須恵器片は大きく2つに割り、一部が重なるように丁寧に置かれている。南東隅からこれと接合できる口縁・胴部片が出土しており、口縁・胴部の半分と底部全体が復原できる。南東隅に散乱する破片は、送葬者が鉢を適当な大きさに割った際、覆うのに必要な破片以外を廃棄したものと思われる。それゆえ、この破片を割るという行為は、掘削した土壙墓のそばで行ったと推定できる。把手付鉢の年代は6世紀後葉に属し、土壙墓の切り合い関係も24→25→27→28→29→30と古いグループに属す。

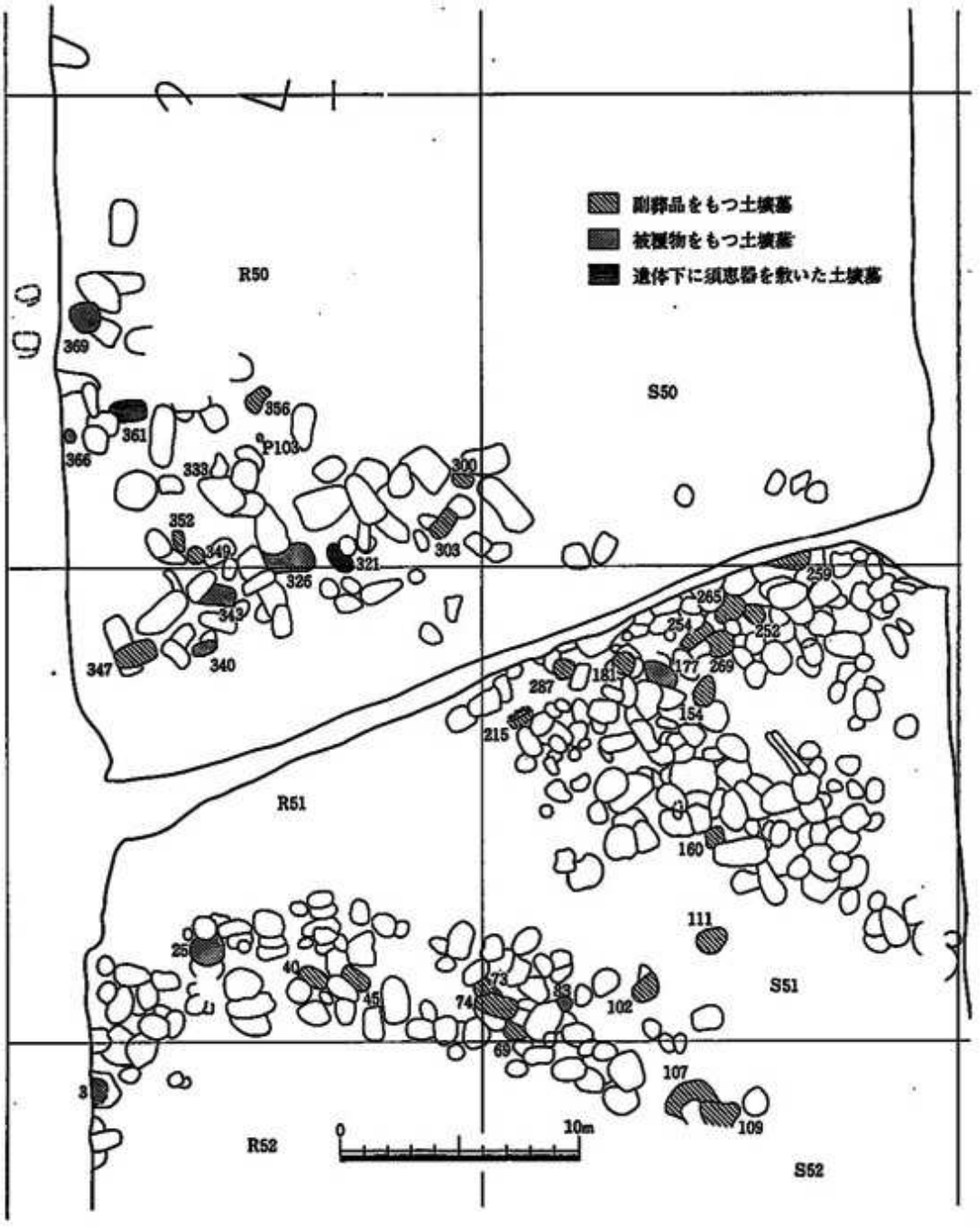
土壙墓73（第71図；図版45）　土壙墓は両端を切られている。中央北壁ぎわの底面近くに甕の縦半分が内面を上向きにして出土。土壙墓上部は削平されており、甕は本来完形品が副葬されていた可能性が高い。

土壙墓83（第72図；図版47）　甕を縦に半截し、その半分を内側を下にして出土。楕円形長軸の南寄りに置かれ、頭部被覆と推測される。胴部は天井にあたる部分が3cmほど陥没していた。これは甕の内側に完全には土が充満しておらず、遺体の腐敗によって空隙が生じたため、土圧で陥没したものと推測される。

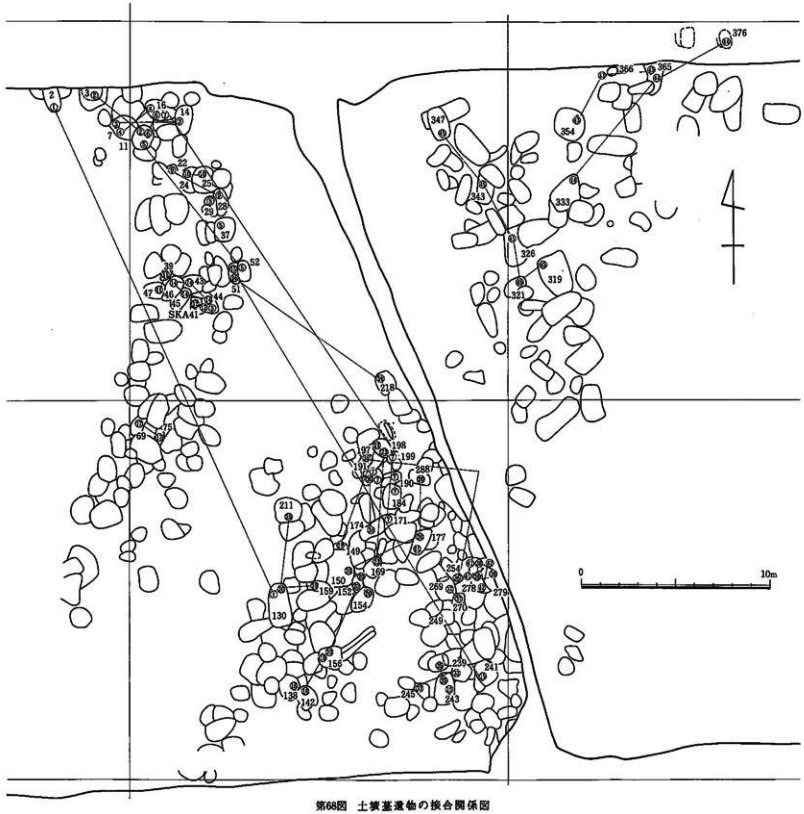
土壙墓102（図版44）　壺の底部が壙底面に接して正位の状態で出土。土壙墓は横幅の広い楕円形で、壺は長辺の壁ぎわにある。壙底面のピットは土壙墓の茶灰色との埋土と明らかに異なり、灰黒色土である。灰黒色土のピットは、この地区では弥生時代の溝帯の覆土であり、土壙墓には伴わない。

土壙墓107（第73図；図版44）　甕が土壙墓の埋土上部より出土した。壙底より34cmういている。口縁部を欠失しているが、土壙墓確認面で頸部が露出していたので、口縁は後世の削平によって失なわれたものであろう。土壙墓の土層断面を観察すると、土壙墓を埋めたあと、再度甕を入れる小さなピットを掘って埋納していることがわかる。小さな穴を掘るという行為が、埋める作業の途中なのか、完全に埋め終ったあとなのかはわからない。

土壙墓109（第73図；図版44）　口頸部を欠いた長頸壺と、別個体の細頸壺の口頸部が長楕円形の長辺壁ぎわから横倒しになって出土した。別個体でありながら体部の上に口頸部がうまくのる。当初からこうした欠損品を組み合わせて副葬しているのはこの土壙墓だけである。更に別の



第67図　副葬品・被覆物を伴う土壙墓



第68図　土壙墓遺物の接合関係図

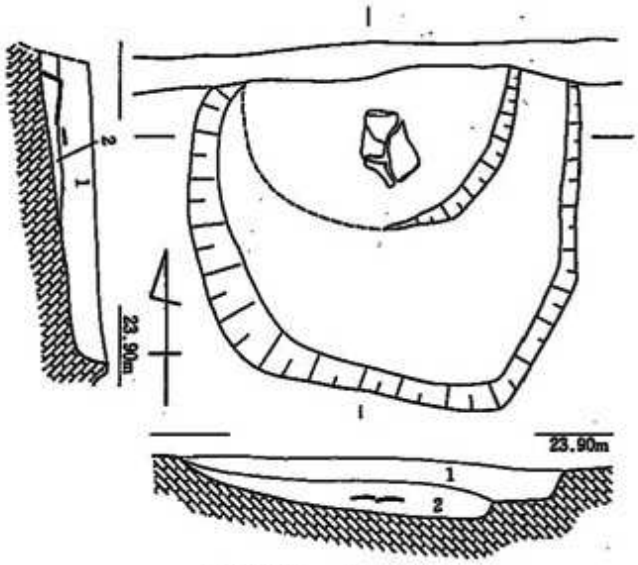
第22表　土壙墓遺物接合表(1)

番号	土壙墓名	器種		破片数	備考	図	図版
1	2	坏身	口縁	1	接合		
	130		〃	1			
2	3	壺	胴部	1	接合		
	11		〃	2			
	包含層		〃	1			
3	7	坏蓋	口縁	1	接合	143-9	
	14		〃	1			
4	7	坏身	〃	1	接合		
	16		〃	1			
	包含層		〃	4			
5	11	甕	胴部	1	接合 同一		
	52		〃	1			
	29		〃	1			
	44		〃	1			
	37		〃	1			
6	11	坏身	口縁	1	接合	143-11	
	16		〃	1			
	包含層		〃	1			
7	16	甕	胴部	1	接合 同一		
	171		〃	3			
	191		〃	6			
	199		〃	1			
	包含層		〃	1			
	184		〃	1	接合		
	190		〃	1			
	191		〃	4			
	包含層等		〃	3			
	184		〃	1	接合		
	180		〃	5			
	包含層		〃	2			
	184		〃	1			
	199		〃	1			
8	16	坏身	口縁	3	接合		
	包含層		〃	4			
9	22	坏蓋	〃	1	接合		
	28		〃	1			
10	24	坏身か	〃	1	接合		
	25	坏蓋	〃	1			
11	39	坏身	〃	1	接合	143-14	
	47		〃	1			
12	44	甕	胴部	1	接合		
	47		〃	1			
	包含層		〃	1			
13	47	甕	胴部	1	同一か		
	56		〃	2			
	71		〃	1			
	77		〃	1			
	78		〃	1			
	84		〃	1			
	93		〃	1			
	45		〃	1			
	202		〃	1			
	214		〃	1			
14	44	たこ壺	〃	1	接合		
	43・45・46(スジ掘)		口縁	1			
	包含層		胴部	1			
15	51	甕	〃	1	接合 同一		
	241		〃	1			
	177		〃	1			
	231		〃	1			
	243		〃	2			
16	51	坏蓋	口縁	1	接合		
	218		〃	1			
17	69	短頸壺	頸部	2	接合	144-3	179-6
	69		口縁	1			
	75		底部	1			
18	138	甕	頸部	1	接合		
	138		胴部	1			
	142		〃	2			
	156		〃	2			
	包含層		〃	2			
19	149	甕	〃	1	接合		
	198		〃	1			
20	152	甕	〃	1	接合 同一	146-7	180-1
	156		〃	1			
	150		〃	3	接合		
	152		〃	3			
	154		〃	3			
	177		〃	10			
	289		〃	1			
	包含層等		口縁	4			
	〃		胴部	2			
	130		〃	1	接合		
	159		〃	1			
	211		〃	1			
	包含層等		〃	1			

第22表 土壙墓遺物接合表(2)

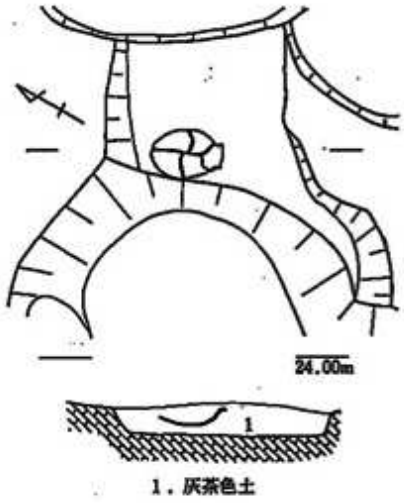
番号	土壙墓名	器種		破片数	備考	図	図版
20	包含層等	甕	頸部	1			
21	150	甕	肩部	1	同一か		
	194		〃	1			
	包含層		〃	5			
22	155	甕	〃	1	接合		
	191		〃	3			
	180		〃	3			
	包含層		〃	2			
23	169	甕	〃	1	接合 同一か		
	198		〃	1			
	包含層		〃	1			
24	40	甕	〃	1			
	199		〃	1			
25	156	甕	〃	1	接合 同一		
	包含層		〃	4			
	156		〃	3			
	包含層等		〃	5			
26	173	甕	〃	2	接合		
	180		〃	1			
27	180	甕	〃	3	接合 同一か		
	包含層等		〃	5			
28	173	甕	〃	3	接合		
	土壙?		〃	8			
29	150	甕	〃	2	同一か		
	178		〃	5			
	154		〃	2			
30	174	甕	口縁	1	接合		
	191		頸部	2			
	191		口縁	3			
	包含層		〃	1			
31	180	甕	肩部	1	接合		
	239		〃	1			
32	161	甕	〃	1	同一か		
	162		〃	8			
	173		〃	3			
	185		〃	1			
	186		〃	2			
33	239	甕	〃	3	接合		
	245		〃	1			
	包含層		〃	1			

番号	土壙墓名	器種		破片数	備考	図	図版
34	237	甕	肩部	1	同一か		
	239		〃	1			
	240		〃	1			
	243		〃	4			
35	243	坏身		2	接合(完形)	143-31	
	249			1			
36	254	甕	肩部	6	接合		
	197		〃	1			
37	269	坏蓋	〃	1	接合		
	270		口縁	1			
38	277	横瓮	肩部	1	接合		
	278		〃	2			
	279		〃	1			
39	239	甕	〃	1	同一か		
	244		〃	1			
40	199	甕	頸部	1	接合		
	199		肩部	1			
	包含層		〃	2			
41	277	甕	〃	1	接合 同一		
	278		〃	1			
	包含層		〃	1			
	〃		〃	1			
42	277	甕	〃	1	接合		
	279		〃	1			
	包含層		〃	2			
43	354	甕	〃	1	接合		
	365		〃	1			
	366		口縁	1			
44	365	甕	頸部	1	接合	147-7	
	333		口縁	1			
	376		肩部	1			
45	343	甕	〃	1	接合	148-5	181-6
	321		〃	8			
	319		口縁	1			
	326		〃	2			
	326		頸部	5			
	347		肩部	1			
	包含層		口縁	2			
	〃		頸部	1			
	〃		肩部	3			



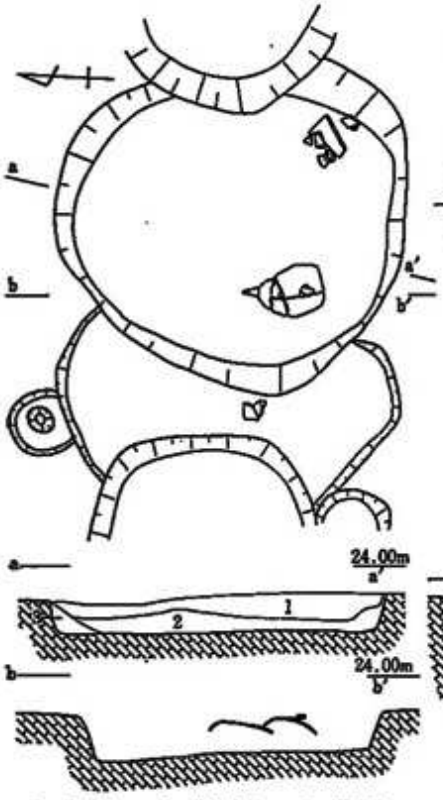
1．灰色土　　2．灰色土

第69図　ＳＴＫ３平面図・土層図



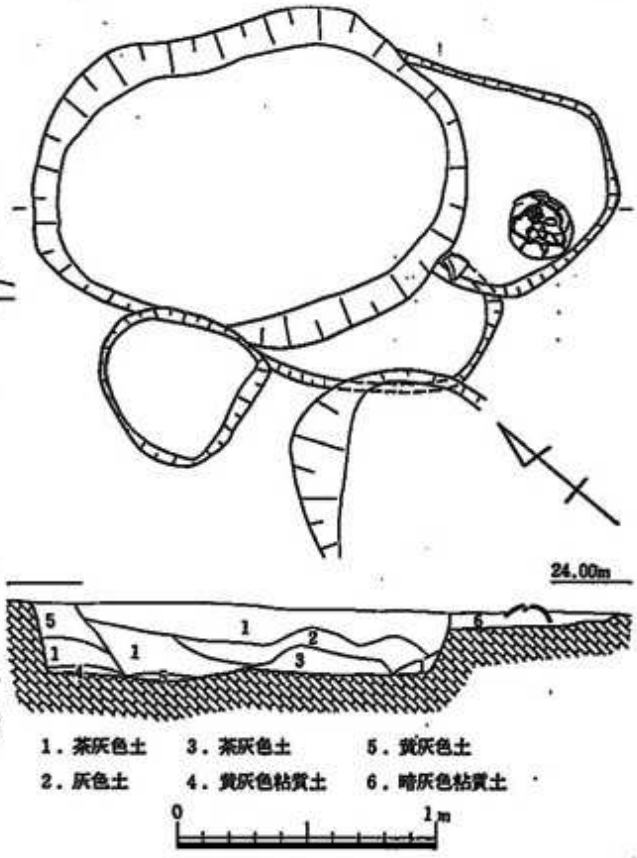
1．灰茶色土

第71図　ＳＴＫ73平面図・土層図



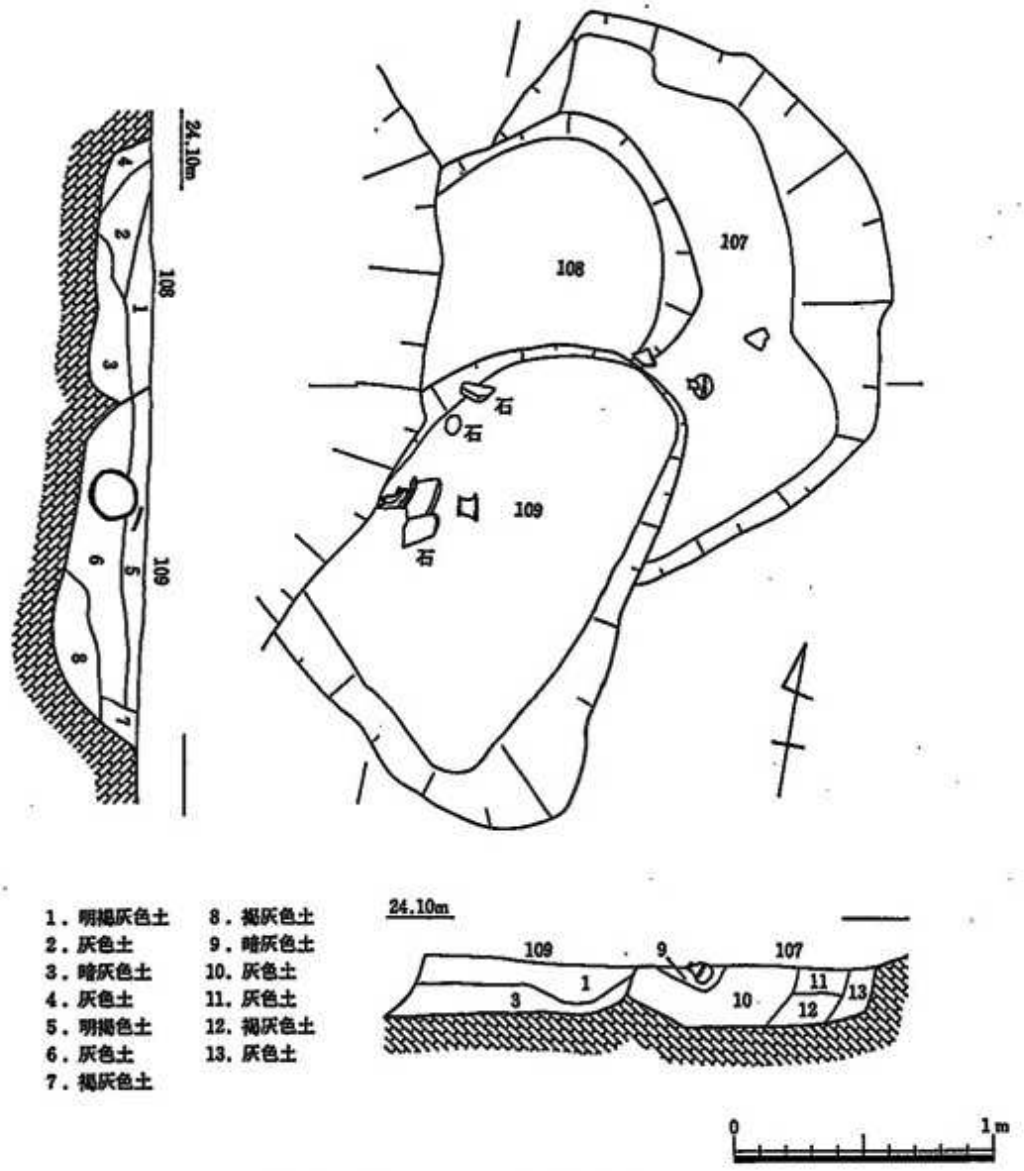
1．灰色土　　2．褐灰色土　　3．褐色土

第70図　ＳＴＫ25平面図・断面図



1．茶灰色土　　3．茶灰色土　　5．黄灰色土
2．灰色土　　4．黄灰色粘質土　　6．暗灰色粘質土

第72図　ＳＴＫ83平面図・土層図



第73図　ＳＴＫ107・108・109平面図・断面図

長頸壺の底部を底にあてがい、甕の破片で上部を覆っている。また円礫２個が北側から出土した。この土壙墓では容器として使用不能品を丁寧に埋葬した状況を知ることができる。

出土遺物（第145図７～９）のうち長頸壺はⅢ期前葉、底部だけの長頸壺はⅥ期中葉、細頸壺はⅢ期末葉に似る。甕胴部片は幅広の擬格子叩き目があり、Ⅲ期末葉の陶邑ＴＫ７号窯出土品に類似する（田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古クラブ、1966）。これらの遺物は100年ほどの隔りがある。時期比定が誤っていなければ、長頸壺が埋納されるまでの経過は二通り考えられる。こわれていた長頸壺の体部に細頸壺の口頸部を添えて埋納したか、長頸壺が埋納時まで完存しており、これをこわして埋納したかである。今のところ長い時間の隔りから、前者の可能性が高いと考えている。

土壙墓111（第74図；図版43）　本土壙墓は、他の土壙墓と次の２点で大きく異なっている。第１に、西群と東群の土壙墓群を分ける空白地帯に、１基だけ独立してあること。第２に、他の土壙墓が副葬品をもたないか、あっても１点に限られるのに対し、本土壙墓は多数の副葬品をもっている。

これらの副葬品は土壙墓の全体から出土するが、壁ぎわから中央に向かって、下へ傾いて出土している。壁ぎわの坏身が壙底から30cmうくのに対し、中央のは11cmういているにすぎない。これらの副葬品は土壙墓の埋土内に埋納したもので、遺体の腐敗にともなって中央が沈下したものと考えられる。土壙墓の埋土は大きく上層・下層に分けられ、上層は暗灰色粘質土に褐色土（地山の土）の大ブロックを多く含み、土壙墓を掘った際の地山の土が多く混入した状況を示している。副葬品はすべてこの上層中から出土する。

副葬品は、完形ないし完形に近い須恵器で、坏蓋１・坏身４・無蓋高坏１・有蓋短頸壺１である。その他に口縁部の３分の２を欠損した小型碗、半分しかない生焼けの坏蓋、無蓋高坏の脚部と大きな石が１個出土した（第143図１～８；図版178－１～９）。副葬品の須恵器はいずれも不良品で、坏蓋は大きくゆがみ、一部は溶着によって剥離し、口縁部も少し欠ける。坏身の１点はゆがみ、他の坏身２点と無蓋高坏は焼きが悪い。有蓋短頸壺は肩部を三角形に穿孔している。これらの須恵器はⅡ期後葉であり、土壙墓の中でも古いグループに属す。

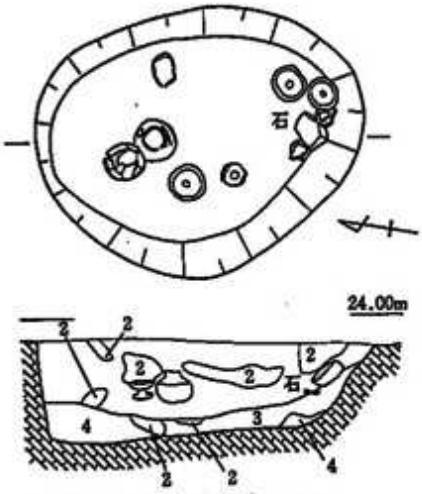
本土壙墓が東西２つの土壙墓群の間にあって独立しており、かつ多数の副葬品をもつことからこの墓地に埋葬された人々の中では上の階層にあったと思われる。また古いグループに属すことから、墓地を形成した集団にあって、初期の指導的立場にあった長ではなかったかと思われる。200年以上にわたって築造されたこの墓地の中には、その後こうした特別な土壙墓は存在しない。

土壙墓160（第75図；図版44）　有蓋高坏が南壁の壙底に置かれていた。この高坏（第143図29）は脚部下半がなく、埋葬時から欠損品の有蓋高坏を副葬している。

土壙墓177（図版47）　甕胴部のたいへん大きい破片が土壙墓の中央埋土中より出土した。大きい須恵器片は一般に一方に片寄って出土し、頭部を覆ったと推測できるのに対し、この１例だけが胸部を覆っていると推定される。胴部片は大きくは２つに分かれる。大きい方は遺物接合表（第22表）の20番にみるように９基の土壙墓に同一破片が入っていて、第146図７のような底部を欠いた甕が復原できた。手前の破片は同一個体でない可能性があり、接合表の15番で表示したように５基の土壙墓の破片が同一個体と判断された。このように多数の土壙墓に１個体の甕の破片が散在するのは、甕が墓地で割られ、一部が遺体を覆うのに使用され、残りがそのまま墓地に放置されていた結果と思われる。

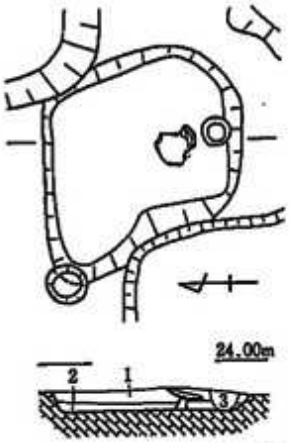
土壙墓181（第76図；図版46）　円形に近い土壙墓の南壁ぎわに甕胴部が内面を上に向けて出土。上部を削平されていて、当初完形であったかどうか不明。生焼けの甕である。

土壙墓259（第77図；図版46）　南北に長軸をもつ長楕円形の土壙墓で南壁ぎわ壙底に大きな横瓮が副葬されていた。上部を削平されていたが、容器の内側にかなり多くの破片が落ち込んで



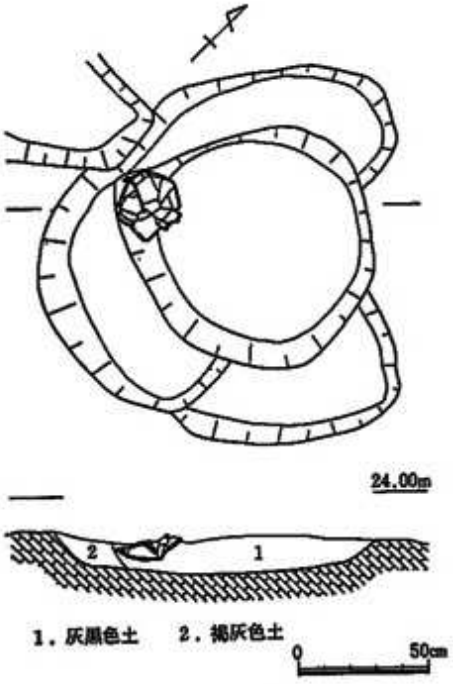
1．暗灰色粘質土　2．褐色土ブロック
3．暗灰色粘質土　4．灰色砂質土

第74図　ＳＴＫ111平面図・土層図



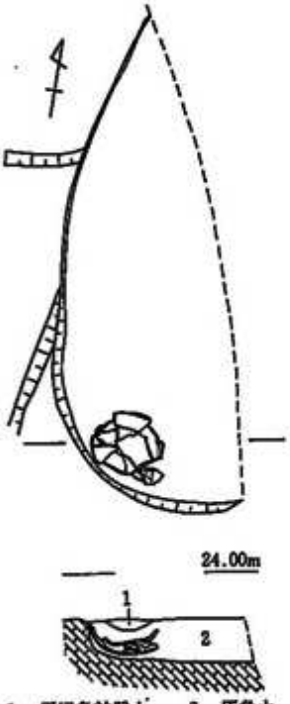
1．灰色土　2．灰褐色粘質土
3．茶灰色土(ピット覆土)

第75図　ＳＴＫ160
平面図・土層図



1．灰黒色土　2．褐灰色土

第76図　ＳＴＫ181平面図・土層図



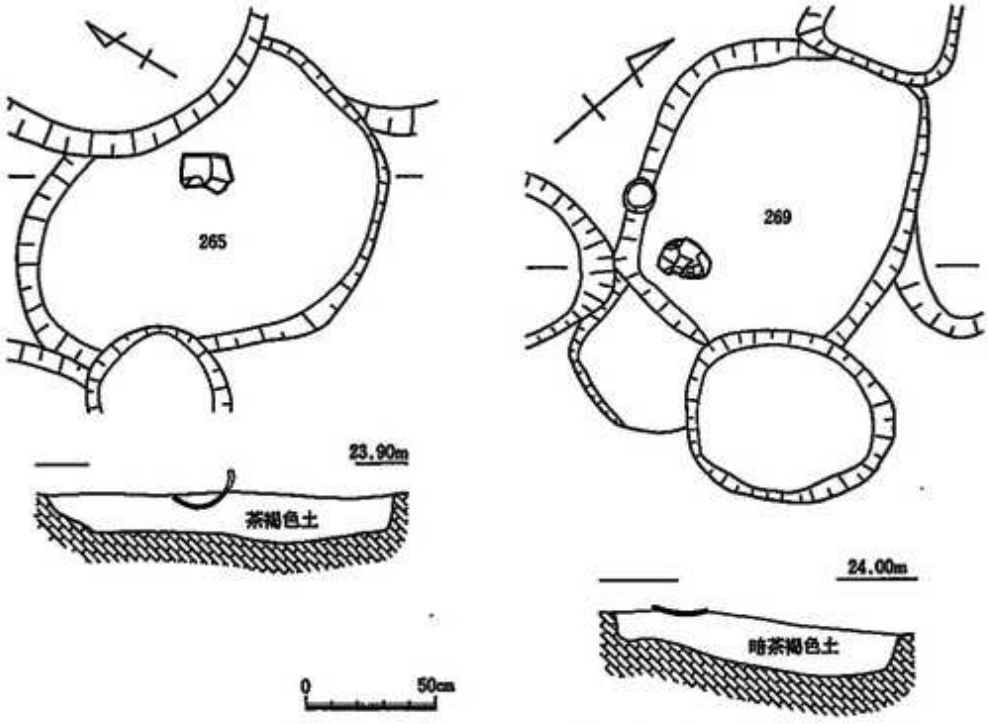
1．灰褐色粘質土　2．灰色土

第77図　ＳＴＫ259
平面図・土層図

いた。内部が空洞になった横瓮が土圧で潰されて破片が内側に落ち込んだものであろう。

土壙墓265（第78図；図版45）　鉢の３分の１ほどの破片が横倒しになって埋土上部から出土した。土壙墓の輪郭の確認の際、埋土をかなり削平してしまったので、写真ではやや小さくみえる。実際はかなり残っており、すぐそばの包含層（５層）から残りの破片も出土している。口縁から底部まであり、縦に割った半分が復原できるので、当初は完形品が副葬されていたと考えている。

土壙墓269（第78図；図版46）　土壙墓南隅埋土中に甕胴部片が出土した。胴部が潰れて２層になって出土したが、図では下になった胴部片のみを示した。全部で28片あってかなりまとまりのある胴部を復原できるが、口縁部はなく、当初完形品であったかどうか不明。副葬品と考えている。

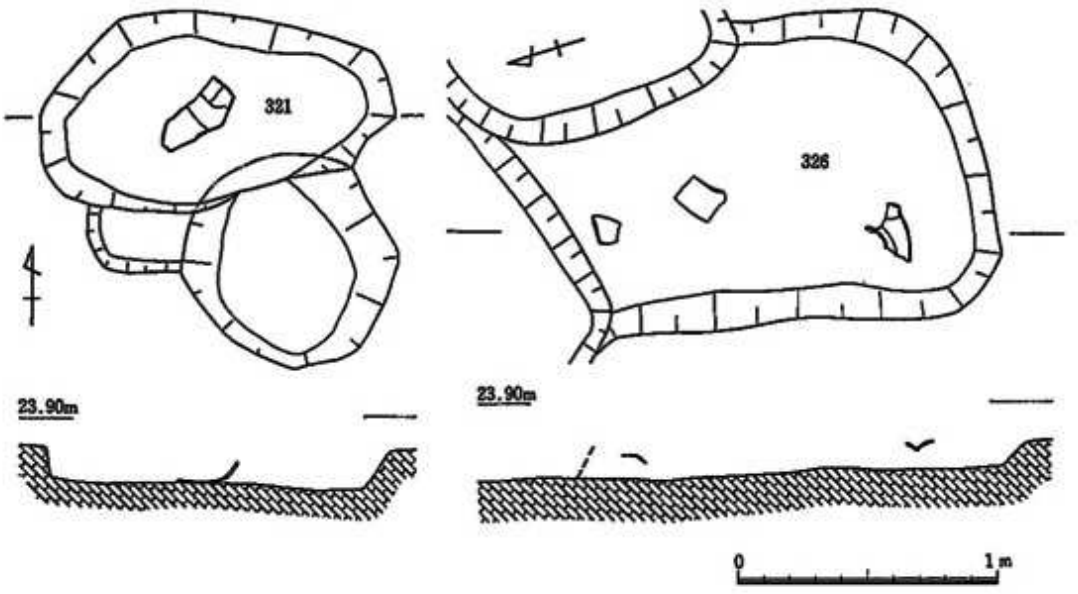


第78図　ＳＴＫ 265・269 平面図・土層図

土壙墓321（第79図）　甕胴部片が、中央壙底に接地して出土。破片は内面を上方に向け、原形の曲面を残しているので、破片の一端が上方に立ち上がっている。ここに遺体を埋葬するとなると、遺体の下に敷かれたと解釈せざるをえない。この甕は遺物接合表の45番にあり、５基の土壙墓の破片が接合されて高さ17cmほどの甕が復原できる（第148図）。

土壙326（第79図）　土壙墓321と接合できる口縁から頸部・胴部が３ケ所にみられる。一番大きな口縁から頸部の破片が南寄りにみられる。これらの破片も遺体を覆ったものであろうか。

土壙墓340（第80図）　甕の胴部大破片が内面を上に向けて出土。大くの破片出土例が南寄り



第79図　ＳＴＫ321・326平面図・断面図

にあるのに対し、唯一北西寄りにある。土壙墓が１辺70cmほどの隅丸方形で、このような小さな土壙墓に大破片を入れるのも、この土壙墓だけである。

土壙墓343（第81図；図版47）　甕の胴部片が62片と多量に出土、うち３個体分で57片を占める。そのうち１個体38片はかなりの大型片となる。これらの破片は壙底から８～16cmほどういており、ほとんどが内面を上に向けて出土している。破片は南半部に片寄っており、遺体の上を覆うように埋土中にまき散らしたものと考えられる。

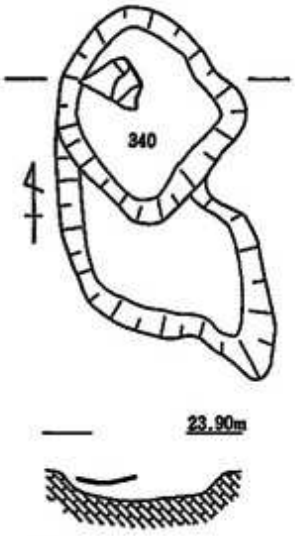
土壙347（第82図；図版45）　南北を長軸とする隅丸長方形の土壙墓。木棺の存在を考えたが痕跡はなかった。長辺の東壁寄りに坏身の完形品を入れ、中央やや南寄りに甕の胴部片を内面上向きに置いている。いずれも埋土中で、副葬品と須恵器の大型片を入れるのはこの１例だけである。この須恵器片は遺物接合表の45番で、他の４基の土壙墓の胴部片と接合できた。

土壙墓352（第83図；図版44）　東西を長軸にとる長楕円形の土壙墓で、西寄り埋土中に完形の有蓋短頸壺が副葬されていた。欠損部のない完形品であるが、肩部から底部にかけてき裂が最大幅２mmほど入る。この土壙墓は長径 105cm、短径64cmと小さく、少年ないしは幼年を埋葬したと思われる。副葬品は成人用の土壙墓と同様に、こうした小型の土壙墓にもみられる。

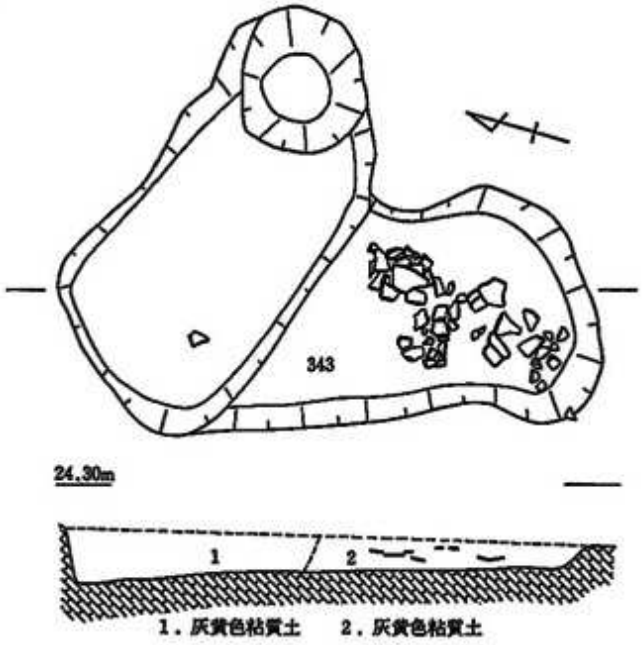
土壙墓356（第84図；図版45）　長楕円形の土壙墓で、長軸南寄りに広口壺が底部を壙底に接地して副葬されていた。土壙墓352と同様長径 119cm、幅55cmと小さく、広口壺の置かれている部分を除くと長さは78cmしか空間がない。これも少年か幼児の埋葬であろう。

土壙墓361（第85図；図版46）　隅丸長方形の土壙墓の中央に甕の胴部片が置かれていた。底面に近く、遺体の下に置いたものであろうか。

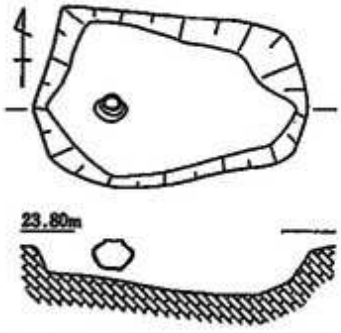
土壙墓366（第86図；図版48）　径50cmほどの小さい土壙墓に異なる甕の口縁２点が入ってい



第80図　ＳＴＫ340平面図・断面図

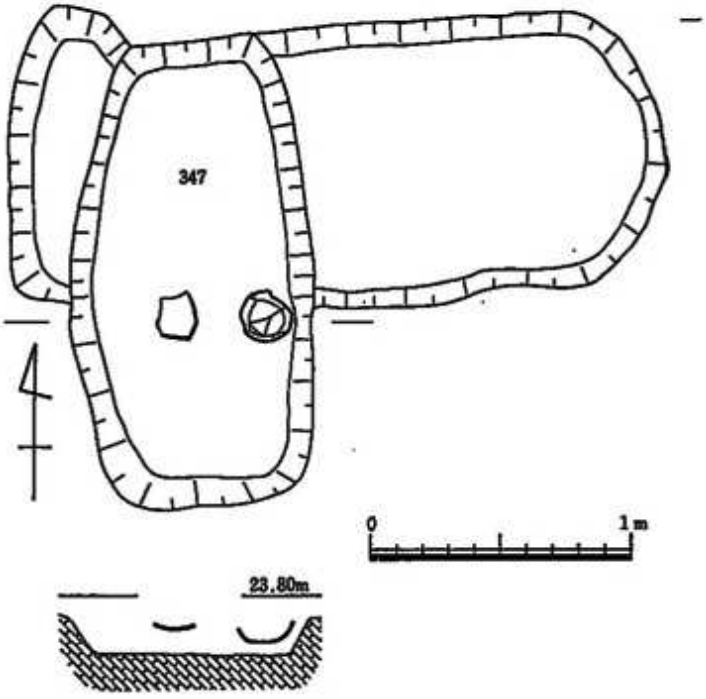


第81図　ＳＴＫ343平面図・断面図



第83図　ＳＴＫ352平面図・断面図

第84図　ＳＴＫ356平面図・断面図

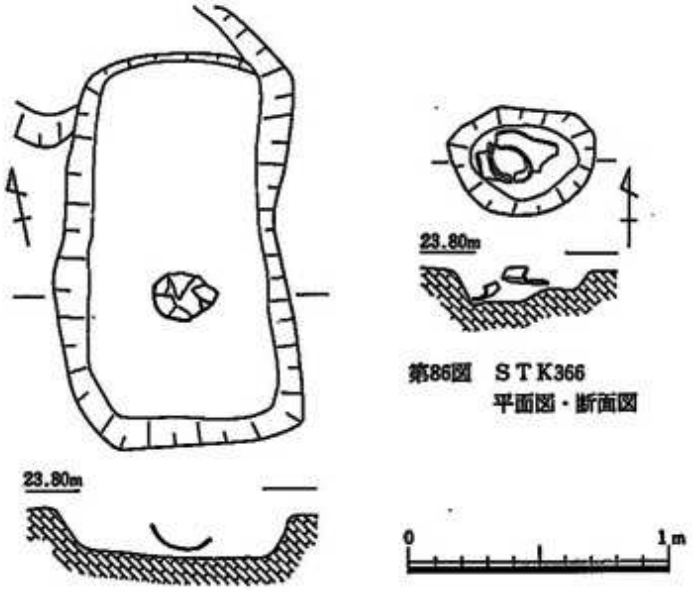


第82図　ＳＴＫ347平面図・断面図

た。こうした例はこの1例だけである。口縁のひとつは土壙墓354・365の胴部片と接合できた（第22表接合第43番）。

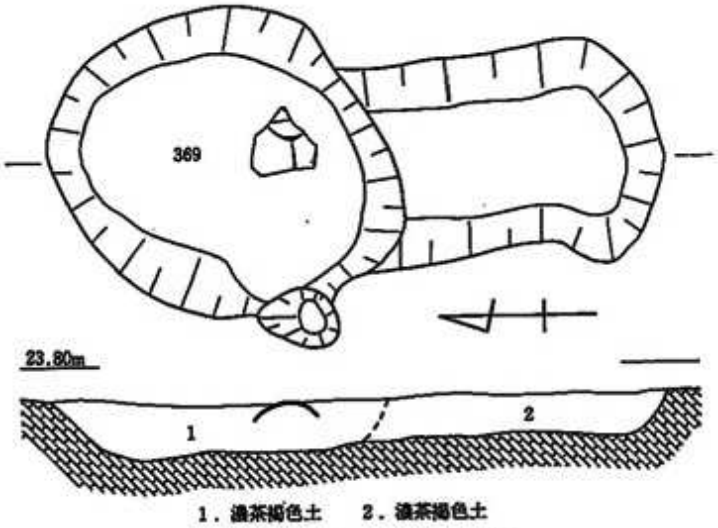
土壙墓369（第87図；図版47）　土壙墓南よりに丸味のある甕胴部片を被覆している状態がよくわかる。

ピット103（図版48）　径20cmの小さなピットいっぱいにⅣ期の坏身をやや斜めに入れてあった。周辺に土壙墓の掘り方を精査したが検出されず、ピット内に埋納したものと判断した。墓前祭に使用したと考えられる。



第86図　ＳＴＫ366
平面図・断面図

第85図　ＳＴＫ361平面図・断面図



1．濃茶褐色土　2．濃茶褐色土

第87図　ＳＴＫ369平面図・土層図

第23表　古墳時代～奈良時代土坑墓一覧表(1)

（　）は残存値
＊　は復原値

遺構名	地区		形状	長径cm	短径cm	深さcm	方位	時期	備考	図	図版
1	ⅡE	R52	B 1	223	(60)	7	79°E				
2	〃	〃	A	(138)	80	9	25°W				
3	〃	〃	B・C 1	(70)	(115)	25	0°	Ⅳ期	被覆・壺底部・南	69	48
4	〃	〃	C 1	(122)	150	25	0°				
5	〃	〃	C 1	172	(130)	9	80°W				
6	〃	R51	C 1	(90)	103	12	0°				
7	〃	R52	C 1	＊155	125	10	85°W				
8	〃	〃	C 2	92	70	8	29°W				
9	〃	R51	B・C	(63)	(44)	6	36°E				
10	〃	〃	C 2	119	＊ 80	12	87°E				
11	〃	〃	C 2	132	103	22	4°E				
12	〃	〃	B・C	(120)	(40)	4	—				
13	〃	〃	B・C	(115)	83	8	83°E				
14	〃	〃	B 1	158	90	16	9°E				
15	〃	〃	C 2	122	82	13	3°E				
16	〃	〃	B 1	＊175	102	12	65°W				
17	〃	〃	C 2	90	78	12	54°W				
18	〃	〃	E 2	81	74	3	—				
19	〃	〃	C 3	55	35	4	20°W				
20	〃	〃	D 3	63	56	7	21°W				
21	〃	〃	F	(42)	(50)	17	—				
22	〃	〃	F	(50)	(40)	—	—				
23	〃	〃	C 2	＊ 95	84	18	30°W				
24	〃	〃	B・C 2	143	(75)	12	3°E				
25	〃	〃	C 2	142	＊125	15	0°	Ⅱ期後葉	被覆・把手付鉢・南	70	48
26	〃	〃	F 2	(85)	(43)	5	—				
27	〃	〃	E 2	107	105	10	—				
28	〃	〃	B 2	145	＊ 70	9	12°W				
29	〃	〃	B 2	110	＊ 60	8	5°W				
30	〃	〃	E 3	54	54	18	—				
31	〃	〃	E 3	50	(42)	7	—				
32	〃	〃	B・C 1	178	＊120	9	15°E				
33	〃	〃	B 1	210	＊100	10	14°W				

第23表　古墳時代～奈良時代土壙墓一覧表(2)

遺構名	地区		形状	長径cm	短径cm	深さcm	方位	時期	備考	図	図版
34	ⅡE	R51	C 1	164	125	10	10°W				
35	〃	〃	B 2	130	* 70	11	9°W				
36	〃	〃	B 2	110	* 60	9	0°				
37	〃	〃	D 2	125	110	11	0°				
38	〃	〃	E 2	116	112	10	—				
39	〃	〃	C 3	68	47	5	39°E				
40	〃	〃	B 2	128	75	11	30°E		副葬品・短頸壺・埋土中		
41	〃	〃	D 2	100	98	13	63°W				
42	〃	〃	B・C	(85)	(60)	—	30°W				
43	〃	〃	C 2	(117)	95	9	0°				
44	〃	〃	C 1	151	115	9	0°				
45	〃	〃	B 2	138	* 76	8	42°E				
46	〃	〃	B 1	154	82	13	38°E				
47	〃	〃	C 2	112	90	11	80°E				
48	〃	〃	C 2	* 85	60	8	18°W				
49	〃	〃	B 1	165	* 75	13	14°W				
50	〃	〃	C 2	105	75	17	8°E				
51	〃	〃	B 2	115	* 70	8	4°W				
52	〃	〃	B 2	110	68	8	5°W				
53	〃	〃	B 3	70	43	9	11°W				
54	〃	〃	E 3	66	61	7	—				
55	〃	〃	A 1	150	89	11	81°E				
56	〃	〃	B 1	198	120	11	82°E	Ⅲ期初？	碗（第143図16）の破片出土		
57	〃	〃	C 2	105	82	12	88°W				
58	〃	〃	E 3	75	* 75	16	—				
59	〃	〃	C 2	113	96	19	20°E				
60	〃	〃	C 2	85	63	6	37°E				
61	〃	〃	B	(75)	60	6	20°E				
62	〃	〃	C 1	167	112	11	74°W				
63	〃	〃	B 2	* 105	65	4	80°E				
64	〃	〃	C 2	* 130	90	10	8°W				
65	〃	〃	B・C 2	92	(32)	8	85°W				
66	〃	S52	C 2	85	(55)	15	45°E				

第23表　古墳時代～奈良時代土壙墓一覧表(3)

遺構名	地区		形状	長径cm	短径cm	深さcm	方位	時期	備考	図	図版
67	ⅡE	R51	C 2	127	98	8	80°W				
68	〃	〃	C 2	135	110	10	40°W				
69	〃	S51	B	(112)	75	19	40°E		副葬品・短頸壺・底面		
70	〃	S52	B 2	140	75	15	7°W				
71	〃	S51	B 1	160	* 80	(20)	32°E				
72	〃	〃	F	(50)	(55)	26	—				
73	〃	〃	B	(100)	80	9	40°E		副葬品？、甕の縦半分内面上向き	71	45
74	〃	〃	B 1	186	93	31	26°E	Ⅱ期後葉	副葬品？、坏身大型片出土・埋土中		
75	〃	〃	F	(90)	(65)	17	—				
76	〃	〃	C 2	*130	105	23	67°E				
77	〃	〃	B 2	140	92	10	47°W	Ⅲ期	盤（第145図6）の破片出土		
78	〃	〃	C 2	135	(80)	(17)	50°W				
79	〃	〃	B 1	160	* 95	11	58°W				
80	〃	R51	B 2	135	82	10	40°W				
81	〃	S51	C 2	115	102	13	86°W				
82	〃	〃	B・C	(106)	(53)	20	72°W				
83	〃	〃	B・C	(54)	65	6	36°W		被覆・甕の縦半分・内面下向き・南	72	47
84	〃	〃	C 1	195	137	30	62°W				
85	〃	〃	C 3	67	55	10	70°E				
86	〃	〃	C 2	129	105	19	2°E				
87	〃	S52	F	(155)	(65)	19	—				
88	〃	〃	C 1	160	*125	18	35°E				
89	〃	〃	C 2	93	65	16	40°W				
90	〃	〃	C 2	105	83	17	0°				
91	〃	〃	C	(105)	100	12	30°E				
92	〃	〃	C 2	140	100	14	6°W				
93	〃	〃	C 1	165	145	21	65°E				
94	〃	R52	E 3	75	65	5	—				
95	〃	S52	C 2	95	72	10	90°				
96	〃	S51	C	(100)	(62)	16	62°E				
97	〃	〃	C 2	100	70	15	53°W				
98	〃	〃	D 2	92	77	11	28°W				
99	〃	〃	C 2	90	75	10	55°W				

第23表　古墳時代～奈良時代土壙墓一覧表(4)

遺構名	地区		形状	長径cm	短径cm	深さcm	方位	時期	備考	図	図版
100	ⅡE	S51	C2	127	100	23	48°W				
101	〃	〃	F	(57)	75	6	—				
102	〃	〃	C2	145	94	11	22°W		副葬品・壺・底面・西		44
103	〃	〃	C2	85	72	10	56°E				
104	〃	〃	C2	86	64	10	60°E				
105	〃	〃	B2	89	52	7	86°W				
106	〃	〃	C2	131	107	8	19°W				
107	〃	S52	C1	210	*145	23	15°W	Ⅱ期後葉	副葬品・鏡・埋土中・中央	73	44
108	〃	〃	F	(100)	*105	20	—		土壙墓107→108→109	〃	〃
109	〃	〃	C1	165	*115	34	30°E	Ⅳ期	副葬品・長頸壺体部・細頸壺口頸部底面・南西	〃	〃
110	〃	〃	E2	114	108	18	—				
111	〃	S51	C2	135	105	40	27°W	Ⅱ期後葉	副葬品・坏蓋1・坏身3・無蓋高坏1 短頸壺1・埋土中・中央	74	43
112	〃	〃	B・C2	140	(50)	5	—				
113	〃	〃	E2	*70	62	6	—				
114	〃	〃	F	(130)	(40)	20	—				
115	〃	〃	C2	115	(70)	12	78°E				
116	〃	〃	C2	115	(80)	8	27°E				
117	〃	〃	C2	106	(70)	11	79°W				
118	〃	〃	E2	80	70	4	—				
119	〃	〃	B1	180	105	13	63°E				
120	〃	〃	C2	97	80	11	90°				
121	〃	〃	C2	104	80	5	84°W				
122	〃	〃	C2	90	66	—	—				
123	〃	〃	C2	105	78	10	2°W				
124	〃	〃	E3	60	52	9	—				
125	〃	〃	C2	91	75	10	25°W				
126	〃	〃	B・C1	(120)	(125)	26	1°E				
127	〃	〃	C1	156	(87)	17	—				
128	〃	〃	B	(110)	90	7	14°W				
129	〃	〃	B1	*195	85	10	68°E				
130	〃	〃	A1	225	120	12	8°W				
131	〃	〃	C1	(164)	(148)	(10)	17°W				
132	〃	〃	F	(36)	75	4	—				

第23表 古墳時代～奈良時代土壙墓一覧表(5)

遺構名	地区		形状	長径cm	短径cm	深さcm	方位	時期	備考	図	図版
133	ⅡE	S51	F	(45)	(45)	13	—				
134	〃	〃	B・C	(115)	(60)	10	—				
135	〃	〃	C 2	110	82	9	64°W				
136	〃	〃	C 2	*125	88	10	—				
137	〃	〃	F	(57)	(50)	7	—				
138	〃	〃	C 2	*140	110	16	0°				
139	〃	〃	B 2	98	55	7	40°W				
140	〃	〃	C 2	*110	102	11	—				
141	〃	〃	C 1	185	133	14	60°E				
142	〃	〃	D 2	120	105	20	38°W				
143	〃	〃	E 2	92	82	21	—				
144	〃	〃	C 2	105	88	7	27°W				
145	〃	〃	B・C	(63)	75	10	50°W				
146	〃	〃	F	(88)	(66)	16	—				
147	〃	〃	F	(63)	(35)	26	—				
148	〃	〃	F	(75)	(70)	10	—				
149	〃	〃	F	(78)	(35)	13	—				
150	〃	〃	C 1	201	(135)	32	5°E				
151	〃	〃	E 2	125	125	20	—				
152	〃	〃	B 2	92	58	9	17°E				
153	〃	〃	B・C 1	194	(85)	16	—				
154	〃	〃	B 1	151	96	19	45°E	Ⅱ期後葉	副葬品・無蓋高坏・完形品		
155	〃	〃	C 1	155	130	15	35°W				
156	〃	〃	E 2	130	125	18	—				
157	〃	〃	E 2	70	* 70	57	—				
158	〃	〃	F	(105)	(67)	12	—				
159	〃	〃	B 2	131	* 70	8	77°W				
160	〃	〃	D 2	83	80	10	4°W	Ⅱ期後葉	副葬品・有蓋高坏・脚部下半欠損品 底面・北	75	44
161	〃	〃	C 1	*160	113	24	9°E				
162	〃	〃	B 1	172	110	23	74°E		土錘（第152図3）出土		
163	〃	〃	C 2	120	86	19	30°E				
164	〃	〃	B 2	76	32	26	76°E				
165	〃	〃	C 2	144	104	29	39°E				

第23表　古墳時代～奈良時代土壙墓一覧表(6)

遺構名	地区		形状	長径cm	短径cm	深さcm	方位	時期	備考	図	図版
166	ⅡE	S51	F	(63)	(35)	18	—				
167	〃	〃	F	(95)	(55)	7	—				
168	〃	〃	B2	*110	70	33	35°W				
169	〃	〃	C2	113	85	19	38°E				
170	〃	〃	C2	110	86	(20)	5°E				
171	〃	〃	F	(70)	(62)	16	—				
172	〃	〃	C2	125	80	15	12°E				
173	〃	〃	C2	(97)	97	14	10°E				
174	〃	〃	A1	151	70	15	53°E				
175	〃	〃	F	(40)	(40)	21	—				
176	〃	〃	C1	164	*120	15	88°W				
177	〃	〃	B2	145	85	26	22°E		被覆・斃胴部・内面下向き・埋土中中央		47
178	〃	〃	D2	(70)	90	5	—				
179	〃	〃	B1	157	80	7	10°E				
180	〃	〃	B2	141	70	15	88°W				
181	〃	〃	E2	105	95	12	—		副葬品？、斃・底面・西	76	46
182	〃	〃	B2	100	57	14	30°E				
183	〃	〃	F	(40)	60	(15)	—				
184	〃	〃	C2	132	102	17	14°E				
185	〃	〃	C2	145	127	18	49°E				
186	〃	〃	C2	130	93	11	81°W				
187	〃	〃	A2	87	37	11	20°E				
188	〃	〃	B2	90	40	7	55°E				
189	〃	〃	B1	156	70	(8)	14°W				
190	〃	〃	C2	118	70	13	63°E				
191	〃	〃	C2	115	*80	14	68°W				
192	〃	〃	C2	85	73	8	5°W				
193	〃	〃	D3	*60	52	—	30°W				
194	〃	〃	C3	48	35	8	34°W				
195	〃	〃	C1	*150	100	10	30°E				
196	〃	〃	B2	132	75	11	60°E				
197	〃	〃	C2	79	60	(13)	44°E				
198	〃	〃	C2	*115	88	12	40°W				

第23表　古墳時代～奈良時代土壙墓一覧表(7)

遺構名	地区		形状	長径cm	短径cm	深さcm	方位	時期	備考	図	図版
199	ⅡE	S51	C2	73	* 60	11	30°E				
200	〃	〃	C3	66	49	19	89°E				
201	〃	〃	E3	55	50	6	—				
202	〃	〃	B2	81	57	10	34°W				
203	〃	〃	C2	105	88	9	30°E				
204	〃	〃	E3	52	50	10	—				
205	〃	〃	B2	76	45	18	60°E				
206	〃	〃	F3	69	(30)	12	—				
207	〃	〃	C2	130	(80)	—	20°W				
208	〃	〃	B1	210	120	9	27°W				
209	〃	〃	C2	132	*100	16	73°E				
210	〃	〃	C1	155	121	18	49°W				
211	〃	〃	C2	142	125	14	—				
212	〃	〃	E2	93	83	13	—				
213	〃	〃	C1	160	125	9	27°W				
214	〃	〃	D2	96	89	7	86°W				
215	〃	〃	F	(93)	(20)	—	—		副葬品・短頸壺		
216	〃	〃	C2	75	57	—	—				
217	〃	〃	B2	118	68	—	—				
218	〃	R51	C2	122	103	9	30°W				
219	〃	〃	B1	152	90	—	—				
220	〃	S51	E2	100	100	5	—				
221	〃	〃	C3	65	55	6	20°W				
222	〃	〃	C2	85	* 60	10	30°E				
223	〃	〃	C2	135	105	10	85°E				
224	〃	〃	B1	150	62	12	58°E				
225	〃	〃	B2	* 75	43	6	42°E				
226	〃	S50	F	(70)	(30)	1	—				
227	〃	〃	F	(45)	(37)	4	—				
228	〃	〃	B2	110	62	9	80°E				
229	〃	〃	C2	146	105	8	—				
230	〃	〃	C2	73	58	7	21°W				
231	〃	S51	C1	170	*130	17	8°E				

第23表　古墳時代～奈良時代土壙墓一覧表(8)

遺構名	地区		形状	長径cm	短径cm	深さcm	方位	時期	備考	図	図版
232	ⅡE	S51	E 2	* 90	80	—	—				
233	〃	〃	B	(100)	60	2	20°E				
234	〃	〃	E 2	80	* 75	15	—				
235	〃	〃	E 2	108	106	20	—				
236	〃	〃	C 2	*120	* 85	5	35°W				
237	〃	〃	B 2	96	37	7	15°E				
238	〃	〃	B 2	95	70	14	68°E				
239	〃	〃	E 2	110	*110	19	—	Ⅱ期後葉	副葬品・坏身・埋土中		
240	〃	〃	F	(77)	(100)	12	—				
241	〃	〃	C 2	127	110	14	35°W				
242	〃	〃	F	86	(54)	15	—				
243	〃	〃	B 1	173	110	17	9°E				
244	〃	〃	B・C	(87)	120	22	—				
245	〃	〃	B 2	*120	70	9	45°W				
246	〃	〃	E 2	80	80	9	—				
247	〃	〃	C 2	94	69	10	61°W				
248	〃	〃	C 2	115	* 75	8	38°E				
249	〃	〃	C 2	110	85	9	—				
250	〃	〃	F	*105	70	16	—				
251	〃	〃	F	(45)	(35)	—	—				
252	〃	〃	B	(100)	75	14	47°E		副葬品・短頸壺・埋土中		
253	〃	〃	F	(90)	(110)	(14)	—				
254	〃	〃	B 1	150	*105	12	33°W		副葬品・短頸壺・埋土中		
255	〃	〃	B・C 1	(150)	(100)	11	30°W				
256	〃	〃	F	(102)	(39)	10	—				
257	〃	S50	F	(75)	(45)	5	—				
258	〃	S51	F	(180)	(75)	10	—				
259	〃	S50	F	(192)	(70)	9	—		副葬品・横瓮・底面・南	77	46
260	〃	S51	B 2	147	* 90	12	26°W				
261	〃	〃	E 2	83	* 80	13	—				
262	〃	〃	C 1	165	110	17	22°W				
263	〃	〃	C 2	145	110	9	71°E				
264	〃	〃	F	(43)	(39)	11	—				

第23表 古墳時代～奈良時代土壙墓一覧表(9)

遺構名	地区		形状	長径cm	短径cm	深さcm	方位	時期	備考	図	図版
265	ⅡE	S51	C2	138	(85)	15	33°W		副葬品・鉢・埋土中・南東	78	45
266	〃	〃	C2	*110	88	13	5°W				
267	〃	〃	C2	*110	75	12	60°E				
268	〃	〃	C2	112	92	13	78°W				
269	〃	〃	C2	125	110	20	21°W		副葬品?、甕・埋土中・北	78	46
270	〃	〃	C2	78	62	13	51°E				
271	〃	〃	B2	90	50	13	26°W				
272	〃	〃	F2	(84)	(57)	8	—				
273	〃	〃	B・C2	(145)	(57)	8	25°W				
274	〃	〃	B・C2	(118)	100	9	13°W				
275	〃	〃	F	(50)	(50)	—	—				
276	〃	〃	B2	148	* 90	19	31°W				
277	〃	〃	C2	91	71	20	3°E				
278	〃	〃	C2	125	*100	18	29°W				
279	〃	〃	B・C1	*150	(50)	10	20°W				
280	〃	〃	E3	52	50	14	—				
281	〃	〃	E3	45	45	13	—				
282	〃	〃	C2	80	(60)	7	10°E				
283	〃	〃	F	(45)	(30)	5	—				
284	〃	〃	B・C	(85)	78	6	80°W				
285	〃	〃	B・C	(80)	(36)	8	25°W				
286	〃	〃	A1	270	(90)	14	30°W				
287	〃	〃	C2	*100	87	11	28°E		副葬品・短頸壺・埋土中		
288	〃	〃	B2	120	65	4	65°W				
289	〃	〃	B1	*155	82	10	53°E				
290	〃	〃	E3	44	40	9	—				
291	ⅢW	〃	C2	105	90	7	22°W				
292	〃	〃	B2	90	53	7	32°W				
293	〃	〃	B2	113	60	9	67°W				
294	〃	〃	B2	142	88	42	78°W				
295	〃	〃	C2	103	(90)	22	69°E				
296	〃	〃	C2	120	80	17	26°W				
297	〃	〃	C2	121	82	11	42°E				

第23表　古墳時代～奈良時代土壙墓一覧表(10)

遺構名	地区		形状	長径cm	短径cm	深さcm	方位	時期	備考	図	図版
298	ⅢW	S51	B1	280	95	7	51°E				
299	〃	〃	B1	190	110	(10)	15°W				
300	〃	〃	C2	93	63	14	15°E	Ⅱ期後葉	副葬品？、提瓶・底面・中央		
301	〃	〃	C2	110	*80	15	44°W				
302	〃	〃	B・C	(67)	82	7	34°E				
303	〃	〃	B1	156	76	12	44°W		副葬品？、壺底部・埋土中・北		
304	〃	〃	B2	104	55	4	67°E				
305	〃	〃	B1	192	107	6	10°E				
306	〃	〃	C2	105	84	11	50°E				
307	〃	〃	B2	120	70	16	73°W				
308	〃	〃	E3	62	60	12	—				
309	〃	〃	A1	200	65	12	15°W				
310	〃	〃	B2	110	71	6	14°W				
311	〃	〃	C3	76	51	10	33°E				
312	〃	〃	E3	75	72	12	—				
313	〃	〃	C1	215	140	(16)	44°E				
314	〃	〃	B1	153	96	20	82°E				
315	〃	〃	C2	85	64	4	20°E				
316	〃	〃	B・C2	(80)	64	15	0°				
317	〃	〃	B1	(172)	85	17	49°E				
318	〃	〃	C1	(95)	148	22	—				
319	〃	〃	A1	210	166	18	22°W				
320	〃	〃	B1	225	142	18	68°E				
321	〃	〃	B2	138	73	15	54°E		遺体下・甕胴部内面上向き・中央	79	
322	〃	〃	E2	83	75	18	—				
323	〃	〃	C2	149	100	16	36°W				
324	〃	〃	B1	197	103	12	84°W				
325	〃	〃	F	(56)	77	15	—				
326	〃	〃	A1	(165)	115	12	15°W		被覆？、甕口縁と胴部・全体	79	
327	〃	〃	B1	(127)	102	5	67°E				
328	〃	〃	C1	154	*130	13	75°E				
329	〃	〃	B1	(185)	130	12	83°E				
330	〃	〃	B2	133	72	6	80°E				

第23表　古墳時代～奈良時代土壙墓一覧表(1)

遺構名	地区		形状	長径cm	短径cm	深さcm	方位	時期	備考	図	図版
331	ⅢW	S51	B 2	144	64	11	22°W				
332	〃	〃	B・C	(98)	94	7	12°E				
333	〃	〃	C 1	200	123	24	43°E				
334	〃	〃	C 2	121	* 92	9	28°E				
335	〃	〃	C 2	125	97	23	80°E				
336	〃	〃	B 2	106	62	15	79°W				
337	〃	〃	C 2	90	64	18	59°W				
338	〃	〃	B 1	160	65	25	18°E				
339	〃	〃	B 2	120	65	10	34°W				
340	〃	〃	E 3	68	65	11	—		被覆・甕胴部内面上向き・北	80	
341	〃	〃	B・C	(81)	74	18	46°W				
342	〃	〃	B 2	139	81	13	58°E				
343	〃	〃	B 1	(150)	85	10	11°E		被覆・甕胴部片多数使用・南半	81	47
344	〃	〃	B 1	165	77	20	50°W				
345	〃	〃	B 1	*245	106	20	45°W				
346	〃	〃	A 1	252	106	16	68°W		土壙墓 346 → 347		45
347	〃	〃	A 1	*178	91	13	17°W	Ⅳ期	副葬品・坏身・埋土中・東、被覆・甕胴部内面上向き	82	45
348	〃	〃	B 2	100	58	(11)	74°W				
349	〃	〃	E 3	(70)	75	14	—		副葬品・短頸壺・埋土・中央		
350	〃	〃	B 2	*130	65	14	13°E				
351	〃	〃	C 2	139	100	14	50°E				
352	〃	〃	B 2	106	65	12	76°E		副葬品・短頸壺・底面・西	83	44
353	〃	〃	C 2	100	80	8	7°W				
354	〃	〃	C 1	185	157	18	23°W				
355	〃	〃	B 1	257	100	28	86°W				
356	〃	〃	B 2	120	55	13	46°W	Ⅳ期	副葬品・広口壺・底面・南	84	45
357	〃	〃	B・C 1	(87)	108	19	8°W				
358	〃	〃	F	(32)	80	14	—				
359	〃	〃	F	165	(39)	12	—				
360	〃	〃	C 2	103	90	16	68°W				
361	〃	〃	A 1	153	84	18	7°W		遺体下か副葬品・甕胴部内面上向き・南	85	46
362	〃	〃	C 2	126	* 95	14	35°W				
363	〃	〃	C 2	120	98	15	—				

第23表　古墳時代～奈良時代土壙墓一覧表02

遺構名	地区		形状	長径cm	短径cm	深さcm	方位	時期	備考	図	図版
364	ⅢW	S51	B	(116)	75	22	87°E				
365	〃	〃	B1	(178)	90	21	10°E		壁ぎわに甕破片、流れ込み		
366	〃	〃	C3	54	41	12	76°E		被覆・甕口縁2点・中央	86	48
367	〃	〃	B・C	(91)	112	12	12°W				
368	〃	〃	B	(109)	85	17	31°E				
369	〃	〃	C2	137	117	21	35°E		被覆・甕胴部内面下向き・南	87	47
370	〃	〃	B	(123)	82	22	15°E				
371	〃	〃	B1	230	126	24	43°E				
372	〃	〃	B1	193	115	14	90°				
373	〃	〃	F	(28)	—	8	—				
374	〃	〃	F	61	—	17	—				
375	〃	〃	F	(20)	—	2	—				
376	〃	〃	F	60	—	22	—				
377	〃	〃	B1	(156)	104	40	16°E				
378	〃	〃	C1	158	109	40	47°E				
379	ⅡE	〃	E2	107	97	15	—				
380	ⅢW	〃	B1	153	89	14	35°W				

まとめにかえて――土壙墓群と古墳群

調査区内から埴輪が2片、金環1点と多数の陶棺片が出土しており、これらの遺物から近くに古墳があったことが想定される。字名図をみると、第Ⅱ調査区に南接する部分に「中塚」という小字名が広範にみられる。小字名は広く入り組んで分布しており、ここに小さな群集墳があったと推定される。これらの遺物から古墳群の時期を想定すると6世紀後半から7世紀前半の間におさまり、土壙墓群形成期間のうち、前半に平行していたことがわかる。

これらのことから菱木下遺跡は、第Ⅰ調査区の集落址、第Ⅱ調査区から第Ⅲ調査区にかけての土壙墓群、そして調査区外の古墳群という構造を復原することができる。全部が調査されていないので確かなことはわからないが、380基を超す土壙墓群に対し、第Ⅰ調査区の住居址は、倉庫を含めて22棟と少ない。その上古墳群も近くにあることになると、果して第Ⅰ調査区の集落だけで、これらの土壙墓群や古墳群が形成されたかどうかは疑問である。こうした土壙墓群が数集落の共同墓地として形成されたのか、単一の集落の墓地なのか、今後の調査研究によって解明されなくてはならない。

素掘りの小さな土壙墓に、無棺のまま、副葬品もほとんどもたずに埋葬された人々は、この時代の一般的な集落の人々であったであろう。これまでこうした遺構群を墓と認識することが少な

かった為その分析はあまりされていない。各地の調査例をみると、こうした群集する土壙墓群を墓とはせずに報告する例も少なからずあり、今後の研究によって、古墳時代から奈良時代の社会構成を知る上で大きな手がかりになろう。

4　平安時代後期から室町時代

古墳時代後期から長い間続いた集落（第Ⅰ調査区）はやがてなくなり、奈良時代の末頃には墓地（ⅡE区・ⅢW区）への埋葬も行なわれなくなった。引き続く平安時代前期・中期の様相はよくわからない。平安時代後期になると倉庫群が建ち始め、釈尊寺が建立された。寺の周囲は屋敷となり、掘立柱建物が多数検出された。これらの建物群は何回も建て替えが行なわれ、14世紀末葉まで約 200年間続いている。南北朝時代の末期になると屋敷がなくなり、寺だけが存続している。この寺も15世紀末頃には滅んで全体が耕地になっていく。この耕地の区割りは江戸時代から現代に至る区割りとほぼ一致している。

A　中世菱木下遺跡の範囲と集落

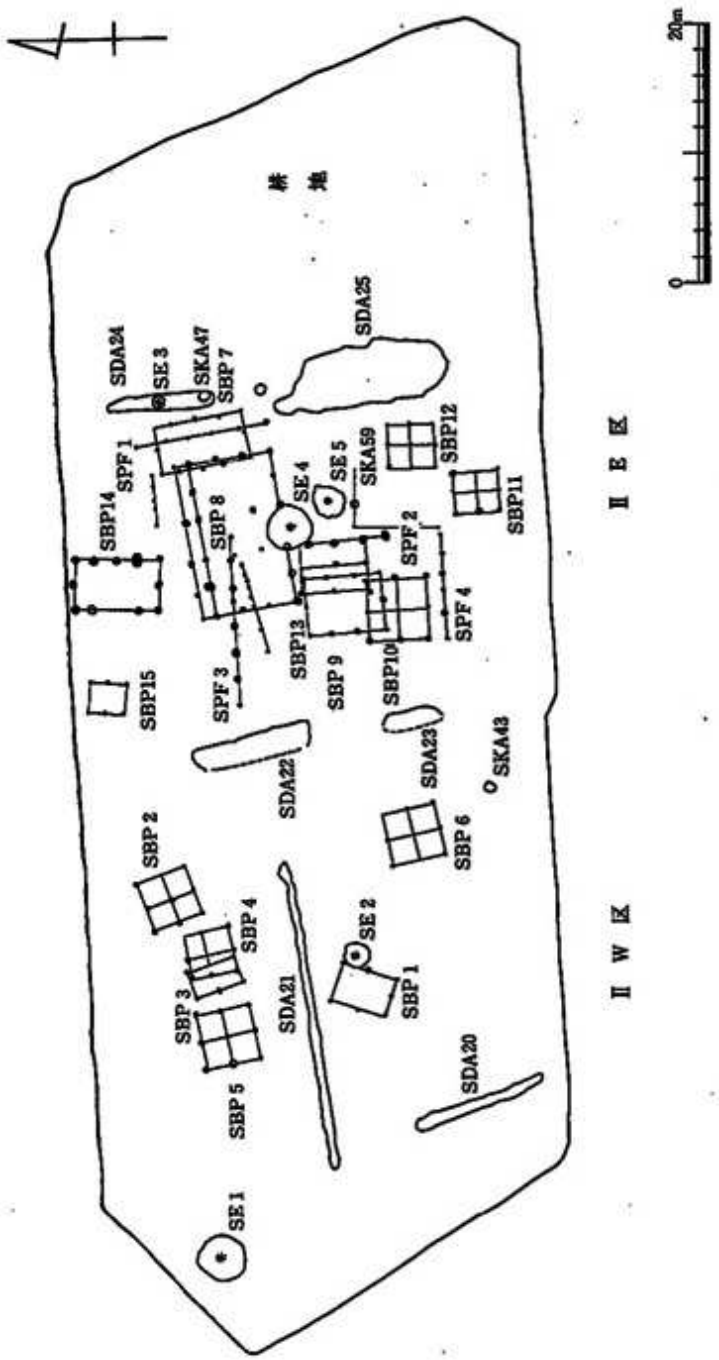
遺物の表面採集によると、中世遺物の散布範囲は、調査区を中心に東西220m、南北250mの範囲に集中している。その地域は、東西がほぼ第Ⅱ・第Ⅲ調査区の幅に一致する。北は調査区北辺から北へ約 110mで、これより先は工場・住宅等の為、北限は確認できない。しかしこのあたりでは北から小さな谷が入り込んで居住地には適さないので、集落の北限は工場・住宅街のあたりに想定できる。南限は調査区南辺から南へ約 100m、新池の西側の地域に遺物が多い。新池より更に南の田畑では表採遺物は希少である。即ち今回の調査は、中世の菱木下の集落のほぼ中央部を西限から東限まで発掘したことになる。

遺構の検出される範囲は、東西に関する限り遺物の散布範囲と一致している。西限は第Ⅰ調査区と第Ⅱ調査区を分ける里道である。里道の西側の第Ⅰ調査区からは中世遺構は検出されず、遺物も100片に満たない。東限は府道別所草部線の下に位置する高さ1.5mほどの段丘崖である。この断丘崖は南は新池の東北隅から確認され、府道の下を通って万崎池遺跡第Ⅰ調査区にわずかに入り込み、第52図の北へ伸びる26mの等高線のラインに合致すると思われる。万崎池第Ⅰ調査区ではこの段丘崖の周辺に遺物が集中し、段丘崖上からも遺物が出土する。しかし中世遺物は少なくコンテナ数杯にすぎない。この場所は小林鍛工の工場建設の為かなり破壊されているが、工場の建物間にかなり残っていた未撹乱部分でも明確な中世遺構は極めて少ない。

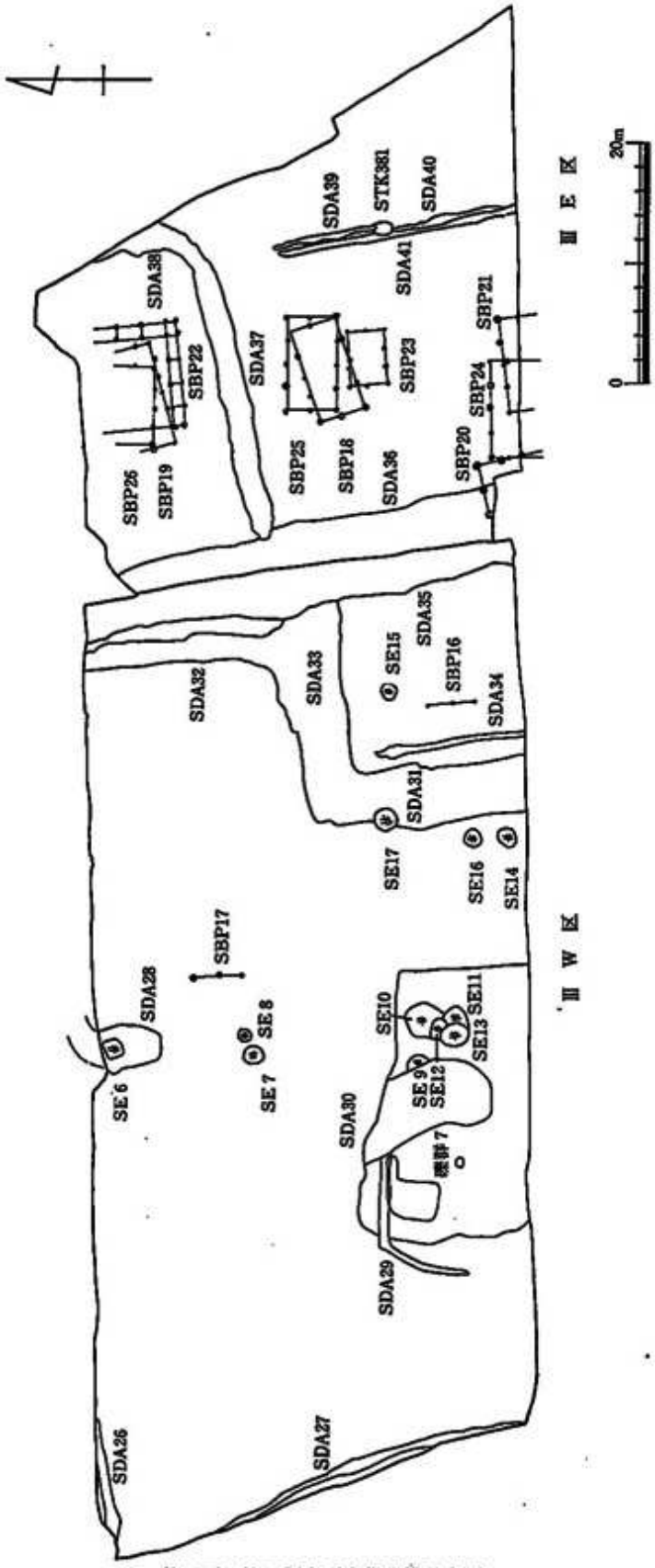
中世の一般的な集落は古絵図や古文書によると、一村落内において家敷地が集中している地区もあれば、比較的点在している地区もある。中世菱木下遺跡は、遺物の散布量が全体に多く、遺構密度も高い点から、東西２町、南北２町半の範囲に釈尊寺と接して屋敷地が集中していたものと思われる。

B　集落と釈尊寺寺域――遺構の分布と性格　（第88・89図）

第Ⅱ調査区と第Ⅲ調査区の遺構の分布状況はかなり異なっている。第Ⅱ調査区は直線状の狭く浅い溝で区画された中に建物群が配置されているが、ⅢW区では幅の広い溝が「コ」字状にめぐ



第88図　第Ⅱ調査区中世遺構分布図



第89図　第Ⅲ調査区中世遺構分布図

りその中に建物があったり、高台に礫が敷きつめられ、礎石建物の存在が考えられたりする。瓦の出土量をみると、丸瓦・平瓦出土総数12423片中、第Ⅲ調査区から11406片と全体の91.8%が出土している（第90・91図、第24表）。中世は土地の私有に関し、自他の意識がはっきりしており、他人の土地にゴミを廃棄することは少なかったと思われる。それゆえ瓦の出土量の多い第Ⅲ調査区は瓦葺建物があった寺域内と判断される。またⅢW区は塼の出土も多い（第190図）。一方、瓦の出土量が比較的少なく、掘立柱建物で構成される第Ⅱ調査区は集落と判断した。集落と寺域の間には、多数のすき跡が検出された耕地があり、更に耕地と寺域の間は溝27で区切られて、境界となっている。

調査区内の字名をひろうと、第Ⅱ調査区に「ソノ村」、第Ⅲ調査区に「釈尊寺」の字名が残る。「釈尊寺」の字名は東隣りの万崎池第Ⅰ調査区にまでひろがっている。

C　集落の構造　（第88図、付図4）

第Ⅱ調査区の集落は大きく四つの区画に分かれる。ⅡW区は北半と南半の二区画、ⅡE区は、中央全体を占める区画と東側の耕地の二区画である。更にⅢE区に寺創建以前の建物がある。

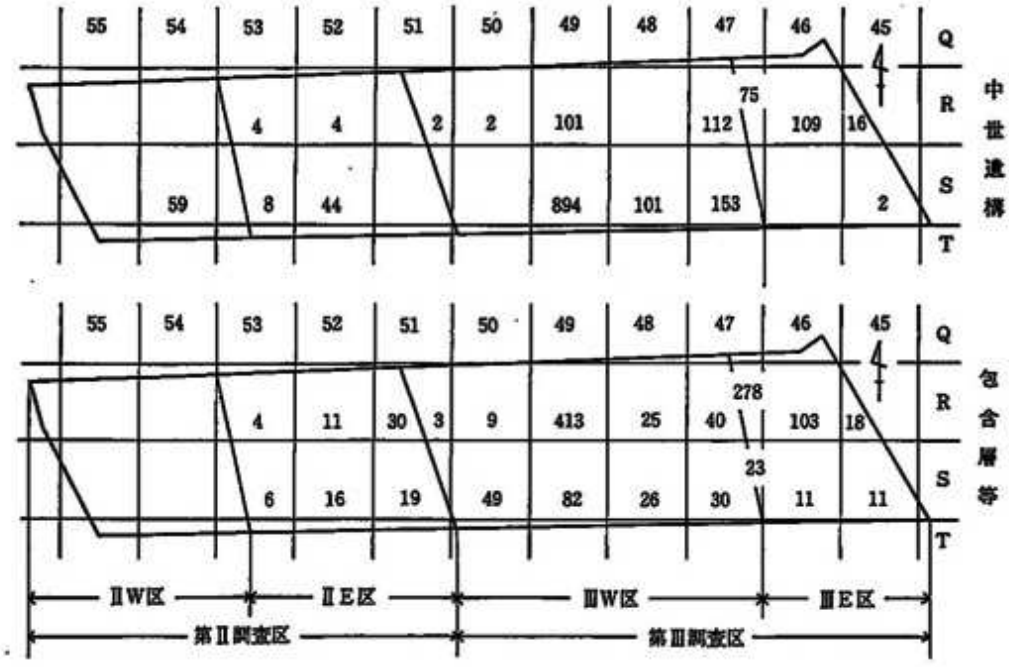
ⅡW区北半　（図版51）

掘立柱建物4棟（建物2～5）と井戸1基がある。建物2・4・5の3棟が2間×2間の総柱で倉庫群と考えられる。建物3は2間×1間で、更に2間×2間の総柱建物にならないかと柱穴を探したが、適当な場所に検出できなかった。建物2・4・5は南西隅や南東隅の柱穴から完形に近い椀が出土している。建物2は両黒の黒色土器椀（第153図1）、建物4・5から瓦器椀（第153図4・5）が出土している。割れて破片を一部欠失しているが、底近くから出土しており、建物を建てる際に埋納したものと判断している。よって建物2→建物4・5の建築順が想定できる。4棟の建物の方位をみると、北から西へふれている。建物2は西へ20°、建物3は18.5°、建物4と5は10°である。古い建物ほど西へのふれが大きく、新しい建物は北へ近づいてくることがわかる。出土遺物と北からのふれる角度からみると、建物2・3→建物4・5の順が想定できる。建物2・3は11世紀前半、建物4・5は11世紀中葉から12世紀前葉に位置しよう。

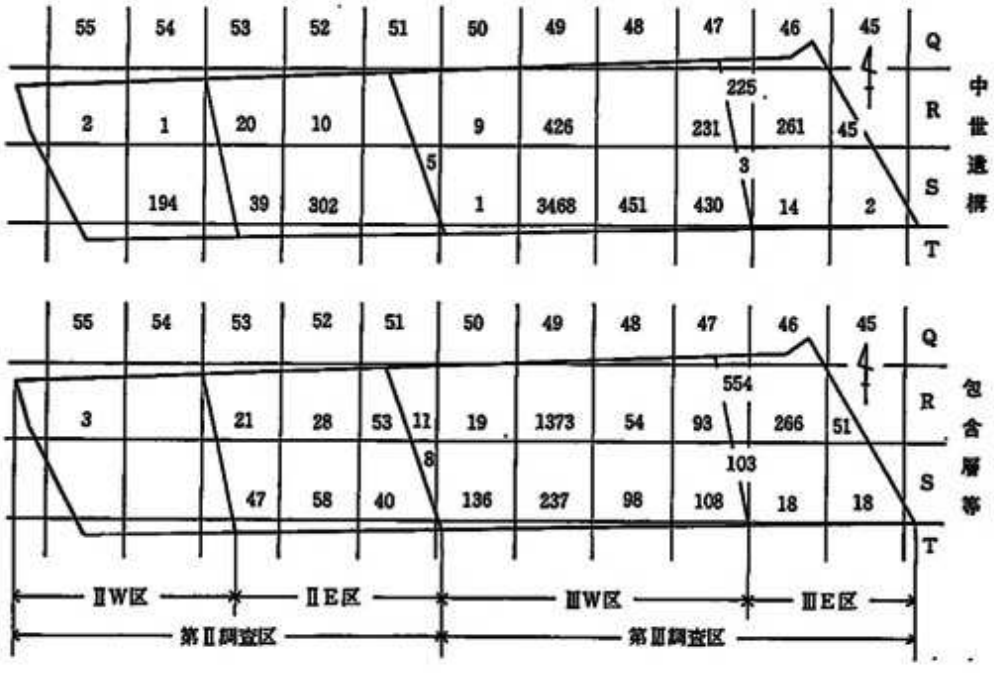
西方に井戸1があるが、出土遺物から埋没年代が14世紀代に下ることは明らかである。倉庫群

第24表　第Ⅱ・第Ⅲ調査区出土瓦数量表

地区名		Ⅱ W	Ⅱ E	Ⅲ W	Ⅲ E	小計	合計
丸瓦	中世遺構	59	60	1,365	202	1,686	2,893
	寺廃絶後の包含層	0	86	677	444	1,207	(23.3%)
平瓦	中世遺構	197	371	5,021	550	6,139	9.536
	寺廃絶後の包含層	3	247	2,137	1,010	3,397	(76.7%)
合計		259	764	9,200	2,206	12,429	(100%)
比率		2.1	6.1	74.0	17.8	100%	
合計		1,023 (8.2%)		11,406 (91.8%)			



第90図 丸 瓦 分 布 図



第91図 平 瓦 分 布 図

と時期差がかなりある。井戸1が倉庫群に伴って、時期を隔てて埋められたのか、北の未調査区に建物があって、それに伴うのか不明である。なおこの井戸からのみ凸面に格子状浮文が押印された平瓦(第187図5・6)が出土し、釈尊寺全体から出土する他の瓦群と異質な様相を示している。

ⅡW区南半　(図版51)

北と東西を三本の溝(溝20・21・23)で区画されている。溝20がⅡW区南半と北半を分ける溝である。

建物が2棟(建物1・6)と井戸1基、多数の土師器小皿を埋納した土壙43を検出した。建物1は、他の中世建物群と方位が異なり、北から東へ16.5。と大きくふれている。柱穴から遺物が出土せず、時期不明である。古墳時代から奈良時代へさかのぼる可能性もある。建物6は2間×2間の総柱建物で倉庫と考えられる。方位が北から西へ12.5°ふれており、北半区画の建物3・4に近似する。

西辺の溝20は中世遺物4片と少なく、北辺の溝21は完形に近い瓦器椀(第168図1)など13世紀後半から14世紀前葉にかけての遺物を出土する。土壙43の土師器小皿も14世紀でも新しい時期であろう。

そうすると建物6を方位のふれから12世紀代のグループに入れるか、土壙43の時期まで存続していたとして13世紀代の建造とすべきかがむずかしい。遺構の変遷表(第25表)では12世紀代としておいたが、13世紀におくべきかもしれない。

ⅡE区　(図版49)

東西を溝で区画され、その中に掘立柱建物が9棟、柵列が4本、井戸が3基ある。大きな建物4棟を主屋と考え、2間×2間の総柱建物4棟と1間×2間の建物を倉庫と考えた。

主屋は方位の北から西へふれる角度の大きいものを古く、北に近いか、東へとふれるものを新しいと考えた。建物7は西へ10.5°、建物8は西へ10°、建物9は西へ4.5°、建物14は東へ0.6°ふれている。よって建物7→8→9→14の建て替えを想定した。

同様に倉庫群は、建物10・11・12が西へ3°、建物13が西へ1.5°、建物15が東へ4.5°ふれている。建物10〜13は角度のふれに大差なく、それだけで建て替え順を判断するのがむずかしいが、建物7〜9のいずれかに付属するであろう。最も新しい建物14(主屋)と建物15(倉庫)は隣りあっていて対応することは確実である。

そこで建物7・8・9(主屋)と建物10・11・12・13(倉庫)を遺構配置から考えてみると、建物8と建物13は両立せず、建物9と建物10・13も両立しない。それゆえ建物13(倉庫)に対応できる建物(主屋)は建物7だけであり、建物8(主屋)には建物10(倉庫)が対応する。建物11・12(倉庫)は建物8・9のどちらへも対応させることができるが、主屋には倉庫が必ず伴うとすれば、建物9(主屋)に属す。

区画内には4本の柵列が検出された。柵1は北から西へ10°ふれ、建物8(主屋)の東辺(西へ10°)ぎわにあって平行する。柵2は西へ7°ふれ、建物9(主屋)の東辺(西へ4.5°)ぎわ

第25表 中世遺構の区画と変遷表

調査区		Ⅱ W 区					Ⅱ E 区						Ⅲ W 区						Ⅲ E 区						主屋・建物の方位（北を基準として）
区画		北半			南半								中央北			中央高台		南西			北半		南半		
遺構		主屋	倉	井戸	主屋	井戸	溝	主屋	倉	井戸	溝	溝	柵	建物	井戸	溝	建物	井戸	建物	井戸	溝	建物	溝	建物	溝	
世紀	11	2	3	?																		19		18	20 39	西へ15° 以上
	12	5	4		6			7 8	13 10	3						28		9				22		23	28 40	西へ6°～13°
	13			1			20・21	9	11・12	5		22～25	1・4 2	17	6		碓石建物？礫敷	10	14			26	37・38	25	24 41	西へ3°～5°
	14					2		14	15		4		3		7 8			11 12	15							西へ1° 以内 東へ5° 以内
	15																	13	16 17	碓石建物？	31・33・35					?
	16																建物？									

(注) ⇓は埋没時期を示す　⋮は推定

にあってほぼ平行する。柵3は東西方向に伸び、建物14（主屋）の南にあってほぼ平行する。柵はそれぞれの主屋に伴うものと考えられる。柵4は建物10（倉庫）の南辺に平行している。

建物を区画する溝は4本あるが、西辺に2本、東辺に2本あり、中間に空地がある。屋敷地間の通路であろう。ⅡE区の溝はⅡW区の溝に比べて幅広く、かつやや深い。特に大溝23は、幅445cm、深さ170cmと堀のようで、調査中も湧水を満々とたたえていた。これは東隣りの耕地への給水を意図していたものと考えられる。4本の溝は屋敷地を区画するという意味で、ほぼ同時に掘られたものと思われる。そのうち溝24は井戸3を切っており、12世紀末葉以後のものである。溝の方位は建物8（主屋）と近似しており、建物8がⅡE区では庇付きの立派な建物であることからも、この建物のある時期に掘削されたと考えられる。ただ、建物8の東には柵列1があり、必ずしも建物8の建築時ではないかもしれない。4本の溝の埋没時期は同じで、無高台の瓦器椀が出土する14世紀後葉である。

D　寺域の構造　（89図、付図5）

寺域は、西は溝27を境とし、東は万崎池第Ⅰ調査区との間の約1mの段であろう。東西間 120m、1町強である。北は溝26が東西に走り、溝28が調査区外で東へ曲がることが確認されており、溝32も北端で西へ曲がっていく。よって調査区のやや北に寺域の北限があると推測される。南側は遺構が続いており、ⅢW区中央高台の高まりが調査区南方の新池まで続いている。1町四方の寺域を想定するとほぼ新池の北堤のあたりまでが寺域となる。

第Ⅲ調査区はⅢW区とⅢE区の間に大溝35・36があり、両区を分けている。ⅢW区では、中央北と中央南高台及南東部の三区画に建物・井戸群があり、西及び北東部にはない。ⅢE区では北半と南半の二区画に分かれる。

ⅢW区中央北　（図版56上）

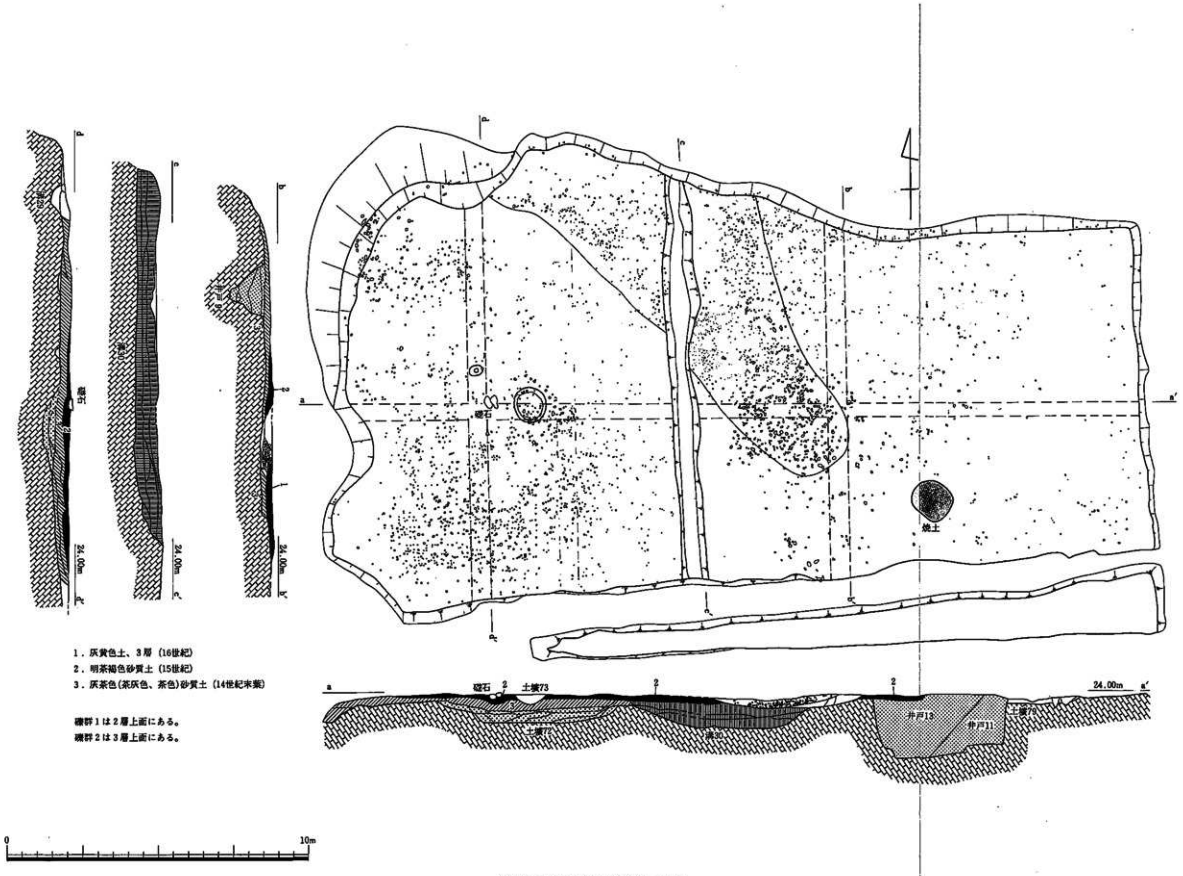
いくつかの柱穴と3基の井戸が検出された。大溝28が「L」字形に走る。大部分を昭和の池3によって破壊され、更に東側を水田の耕作によって削平されているので、柱穴を確認できる範囲が少ない。わずかに等間隔にならぶやや大き目の柱穴列を建物17とした。方位は北から西へ1.5°ふれ、14世紀代の建物群の方位と一致する。

溝28は12世紀末葉から13世紀前葉の遺物を出土する。この溝が埋没したのちに、井戸6→7→8の順序で井戸が掘られる。池3の覆土を掘った際に盛った土（小丘）から多量の遺物が出土したので、この地区にはかなり遺構が集中していたと思われる。

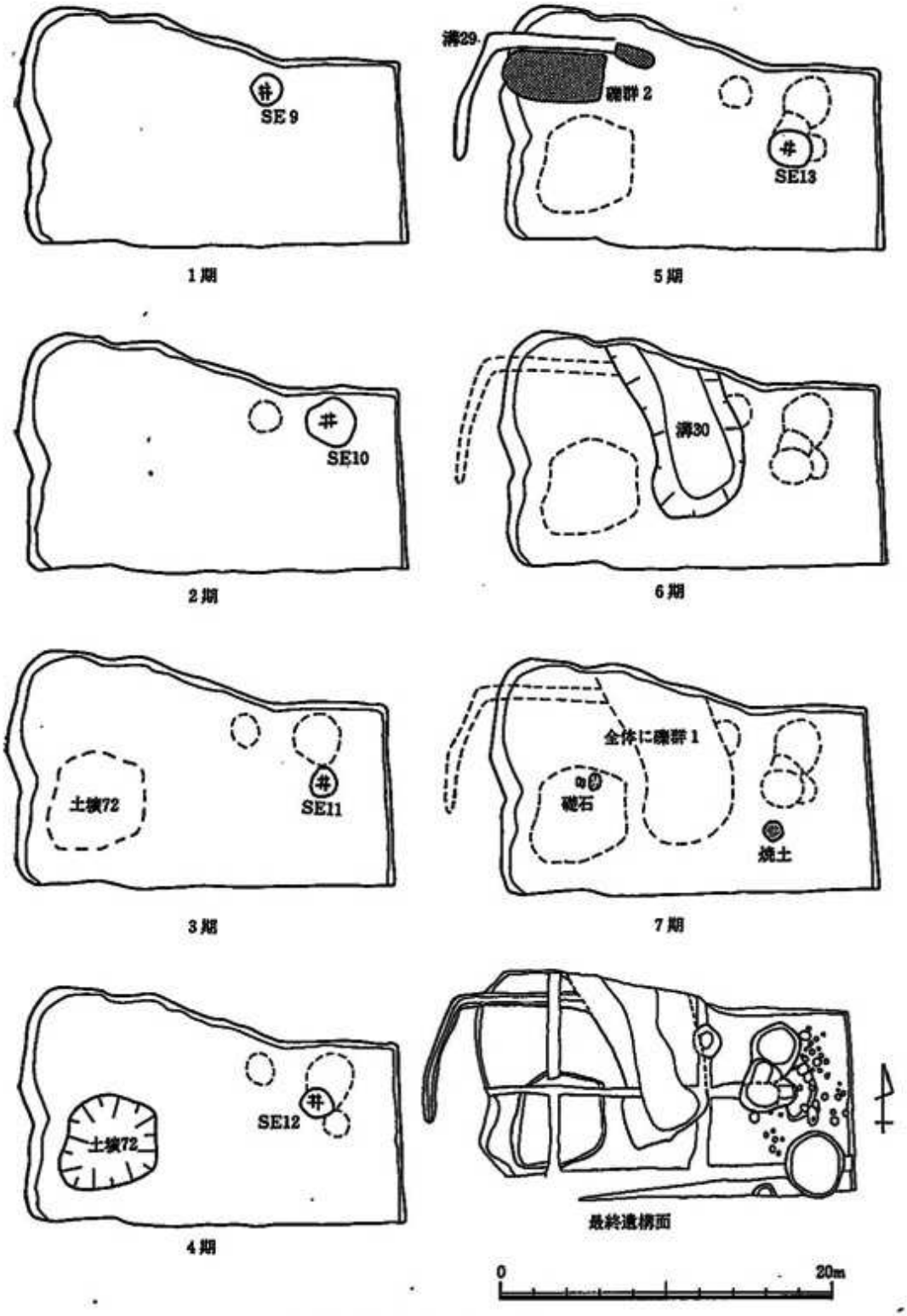
高台　（第92・93図；図版58～60）

高台上には何回か建物の建て替えが行われ、井戸の作り替えが行われて、13～15世紀にわたる遺構が残されている。建物は礎石建物だったようで、高台上に周溝がめぐり、内部に礫が敷かれている。井戸周辺にもピットが多数存在し、井戸の覆屋があったかもしれない。

検出時の高台は、地山の隆起の先端を平坦に削り、東西約22m、南北約14mの長方形の平坦面を造成している。この平坦面は井戸のある東側よりやや低いが、造成当初から低く造ったのか、



第92図　頂W区高台礫群平面図・土層図



第93図 Ⅲ W区高台遺構変遷図

建物改築時に低くしたものかはわからない。高台南端は地山が一段上がっていて、高台平坦面の南限を示しており、高台平坦面の全体が調査区内に収まっている。

このように高台は旧状をよく留めてはいるが、周囲を後世に幾分か削られている。まず西側は江戸時代の池2及び近代の樋によって削られている。しかし高台上にめぐらされた溝29の西辺が確認されているので、その消滅分は溝29の西1～2mほどであったと思われる。北側は昭和初年造成の池3によって北東部が2～3m削られているが、北西部は溝29が残っていることから消失部分はわずかであったろう。東側は現代の小溝が通っているが、中世包含層の堆積が高台の基部を覆っており、この部分の消失もわずかであったと思われる。

遺構の変遷は建物の建て替えに不明な点もあるので、井戸の作り替えを考慮して7期に分けた。

第1期（12世紀後葉）　井戸9が掘られる。他の井戸に比べやや西に寄っている。高台上の井戸のうちこの井戸だけが素掘りである。同時に建物が建てられていたと思われるが、その痕跡は不明である。

第2期（13～14世紀前葉）　井戸9が埋められ、井戸10が掘られる。井戸の位置が東側に移動する。高台上の井戸のうち掘り方が最も大きい。底を抜いた桶側を底面に設置している。建物は不明だが、井戸の位置の移動から建物の規模ないしは位置が変化した可能性が考えられる。

第3期（14世紀）　井戸10が埋められ、井戸11が掘られる。細い角材と狭い板材で四角い枠組を作り、底面に設置している。井戸11出土の瓦器椀にはまだ高台が残っており、14世紀前半の埋没と考えられる。

第4期（14世紀）　井戸11が埋められ、井戸12が掘られる。第3期の井戸11と同様に底面に四角い枠を設置する。井戸11は15世紀まで使用される。大きな土壙72が掘られ、多量の遺物が出土している。この大土壙には無高台の瓦器椀が入るが瓦質の土釜は出土せず、14世紀後葉の埋没と考えられる。高台南西部にこのような大土壙を掘削していることから、前代までの建物の取り壊しが想定される。

第5期（14～15世紀）　新たに高台上に溝を方形にめぐらし、その内側に礫を敷き（礫群2）、礎石建物が建立されたと思われる。井戸12は埋められ、井戸13が掘られる。高台上で最も立派な井戸で、四隅に太い柱を据え、横桟を渡し、幅広の板材で四角く二段に囲っている。

第6期（15世紀）　建物が取り壊され、高台中央に大きな溝30が掘られる。溝中には多量の遺物が捨てられて埋没する。同時期に井戸13も埋められる。

第7期（15～16世紀）　溝30や井戸13を覆って厚さ約10cmの土が敷かれて整地される。整地土中には15世紀後葉の遺物が含まれる。全体に細かい礫が散布し（第92図）、西方に大きな石が2つ置かれていた（図版59）。大石は階段上に段差がある。大石を礎石とみるか、或いは建物入口にすえられた踏み石とみるか、或いは単に廃棄された石とみるかはむずかしい。今のところ建物が存在した可能性があるとしておく。この面では、井戸は完全に埋没しており火をたいた場所が1ヶ所、土壙が2ヶ所ある。礫群を覆う土から砂目積の唐津皿（第206図1）が出土している。

16世紀の遺物は希少で、15世紀末頃に釈尊寺は廃絶したと考えられる。

ⅡW区南東　（図版56下）

大溝35と「L」字形に大溝31・33がめぐり、周囲を大溝で囲まれた区画である。大溝31の西辺に井戸が3基、区画内に1基ある。区画内には、南北に走る小さな溝34があり、それに平行して3本の柱穴列がある。区画内には掘立柱建物が検出されないので、ここには礎石建物が建てられたと思われる。柱穴列を西庇とすると、方位は北から西へ5°ふれる建物が復原できる。西へ5°は13世紀代の建物に多い。周囲の大溝はすべて15世紀後半に埋没している。

井戸をみると井戸14が14世紀代でも早い時期に埋没しており、13世紀代から使用されたと考えられる。井戸15は14世紀、井戸16・17は15世紀の埋没で、周囲の大溝と同時期である。よってこの区画内では13～15世紀にかけて礎石建物が建てられていたと想定できる。

ⅡE区北半　（図版50・57上）

大溝36と「L」字形に大溝37・38がめぐる。周囲を大溝で区画され、建物が3棟重複して検出されたが、北半を大落ち込み8で削られ確認できなかった。井戸は検出されていない。

建物19の方位は北から西へ15°ふれ、建物22は北から西へ6°、建物26は北から東へ2.5°～3.5°ふれる。ⅡW区北半の方位に合わせると建物19は11世紀代のグループに含まれ、建物22の柱穴出土の瓦器椀片は最も新しいものでも口縁に数条のヘラミガキを残し、12世紀後葉に属す。建物26は13世紀で、建物19→22→26の順に建て替えられている。

溝25・28はひとつながりの溝で、溝25の方がやや深く掘っている。溝28は14世紀後葉に埋没するが、溝25はわずかに溝の窪みを残しており、上層にのみ15世紀の遺物を出土する。溝の機能は建物の廃絶と共に、14世紀後葉にはなくなっている。

ⅡE区南半　（図版50・57下）

西に大溝36、北に大溝37があるが、東を更に小さな溝39～41で区画している。建物が6棟あるが、井戸はここでも検出されていない。別に土壙墓が1基ある。

最も古い建物は建物20で大きな掘り方を持ち、柱穴より両黒の黒色土器を出土する。10世紀末葉から11世紀前葉に比定される。この区画には内黒・両黒を出土する土壙群があり、包含層からも復原できる両黒の黒色土器椀（第153図3）が出土した。建物20は大溝36に切られており、寺域の基本的な区画内にうまく収っていない。これは11世紀前葉までは寺域が形成されていないことを示しており、釈尊寺創建時の軒瓦も11世紀後半以降であることと一致する。

他の5棟は南半部でも中央に3棟、南端に2棟検出した。中央の建物18の方位は北から西へ20°ふれている。建物23は5°、建物25は長軸と短軸で異なるが1～3°ふれる。建築順は建物18→23→25が想定できる。建物18は11世紀、建物23は12世紀後葉、建物24は13世紀後葉から14世紀であろう。

南端の建物2棟は、比較的大きな柱穴がならんだので建物としたが、大半が未調査区にあるので確定できない。建物21は西へ8°、建物22は西へ6°ふれる。

東辺を画する溝は3本あるが、すべて同じ場所にあり、溝39→40→41の順に掘られている。最も古い溝31は幅が62cmと狭い割に深さ30cmとしっかりと掘られている。この溝は短かく、南端で土壙墓381と接している。他の2本の溝は未調査区の南方まで続いていく。溝39は当初南半区画の中央部に建物18だけがあった時期の溝で、南端部に建物がつくられるようになって、更に南へ伸びる溝40・41が掘られる。なお土壙墓391は完形の瓦器椀（第176図20）が副葬されており、12世紀代に比定される。

建物　（第94・95図；図版52～55・第26表）

建物には掘立柱建物の他に礎石建物があったと推定される。礎石建物は寺域内のⅢW区高台と南東区画に想定されるが、その規模は不明である。

掘立柱建物は、集落（第Ⅱ調査区）と寺域（第Ⅲ調査区）の両者にみられる。集落の建物は、長方形の主屋に2間×2間ないしは2間×1間の倉が伴うが、ⅡW区のように倉庫だけしか検出されていない区画もある。この二区画は、それぞれ北と南に実際の屋敷地がひろがる可能性がある。一方寺域の建物は、ⅢE区では長方形の建物が何度も建て替えられ、集落にあるような倉をもたない。また同時期の井戸が検出されていない点で、集落及び寺域内ⅢW区の諸区画とも異っている。

長方形の主屋についてはⅡE区建物8が最も大きく、建物内にも4本の柱があり、北庇をもつ。寺域では、建物22が南と東に庇をもつ（北と西は不明）。 その他の主屋は内部に柱穴をもたない。

建物の柱穴内には底に石・瓦・須恵器片・陶棺片など、比較的平なものを置いて礎石がわりにしているものがある。また柱の周囲に詰石を行っている柱穴もある（図版65・66）。こうした礎石類や詰石は、ひとつの建物でも、それらを伴う柱穴と伴わない柱穴がある。礎石類・詰石は必ず行わなければならない建築工程ではなく、その場の状況に応じて適宜行われている。礎石類・詰石のある柱穴は、全体平面図にアミのスクリーントーンをかけて表示した。

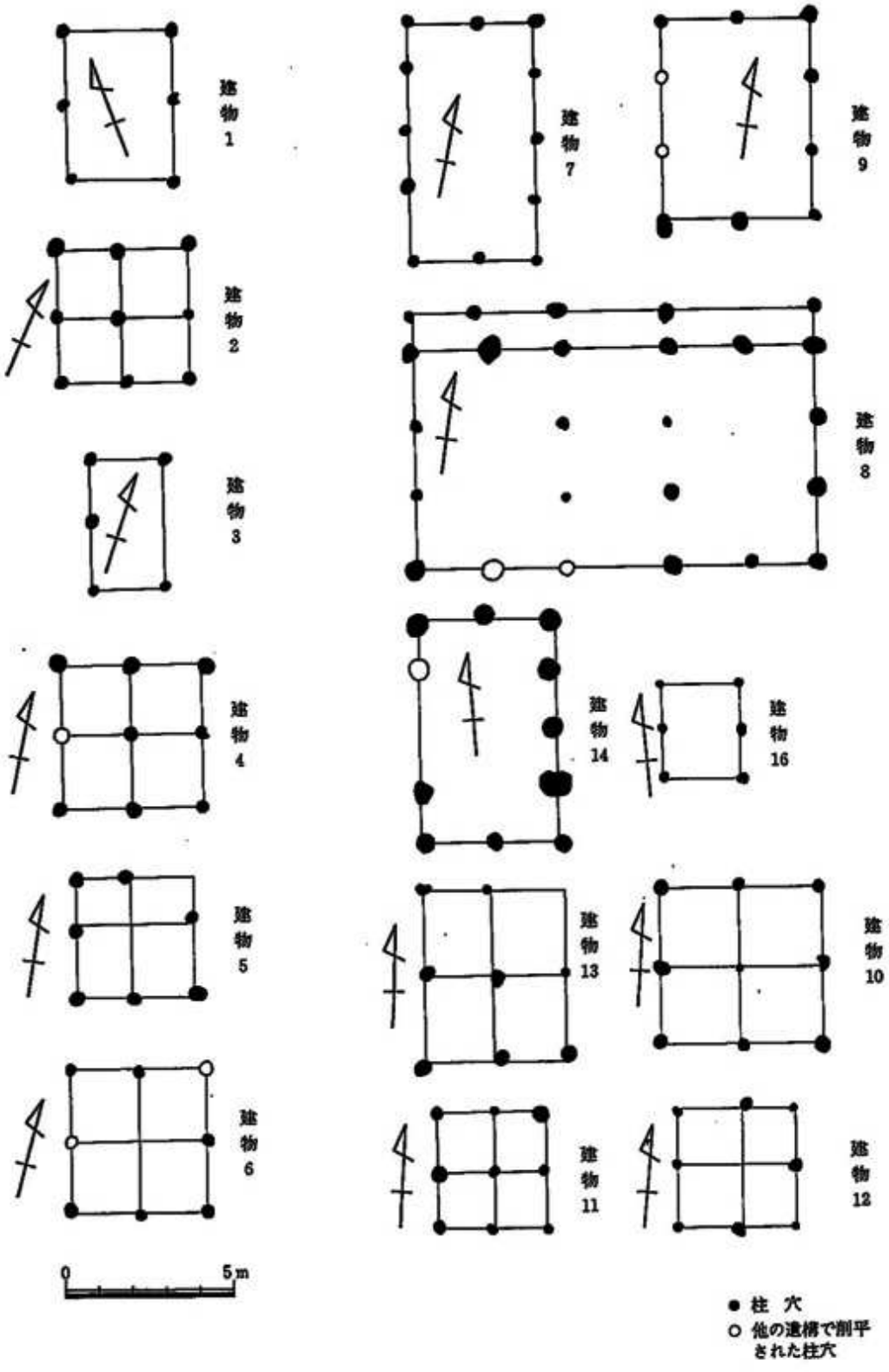
溝　（第96～99図；図版64、第27表）

溝には、集落で屋敷地の境を画する溝と、寺域内にあって建物群を画する溝とがある。その集落と寺域を画する溝27、寺域内でⅢW区とⅢE区を画する溝35・36は水路も兼ねており、水が南から北へ流れる。なお、この二つの溝は共に15世紀に埋没しており、同時に平行して存在した可能性が強い。両者の溝底はかなり段があるので、溝の境に土手があって両者を分けていたと思われるが、その部分は江戸時代の溝が掘削されているため不明である（第122図4層）。溝27からは花粉分析の結果淡水性藻類が検出され（第55表試料番号7・8）、溝35は溝底の土壙からやはり淡水性藻類が検出されている（試料番号15・16）。淡水性藻類の検出が必ずしも流路の証明にはならないが、これらの溝の位置には引き続き近世・近代・現代と水路が掘り直されており、当時も水路の機能を果していたと推察した。

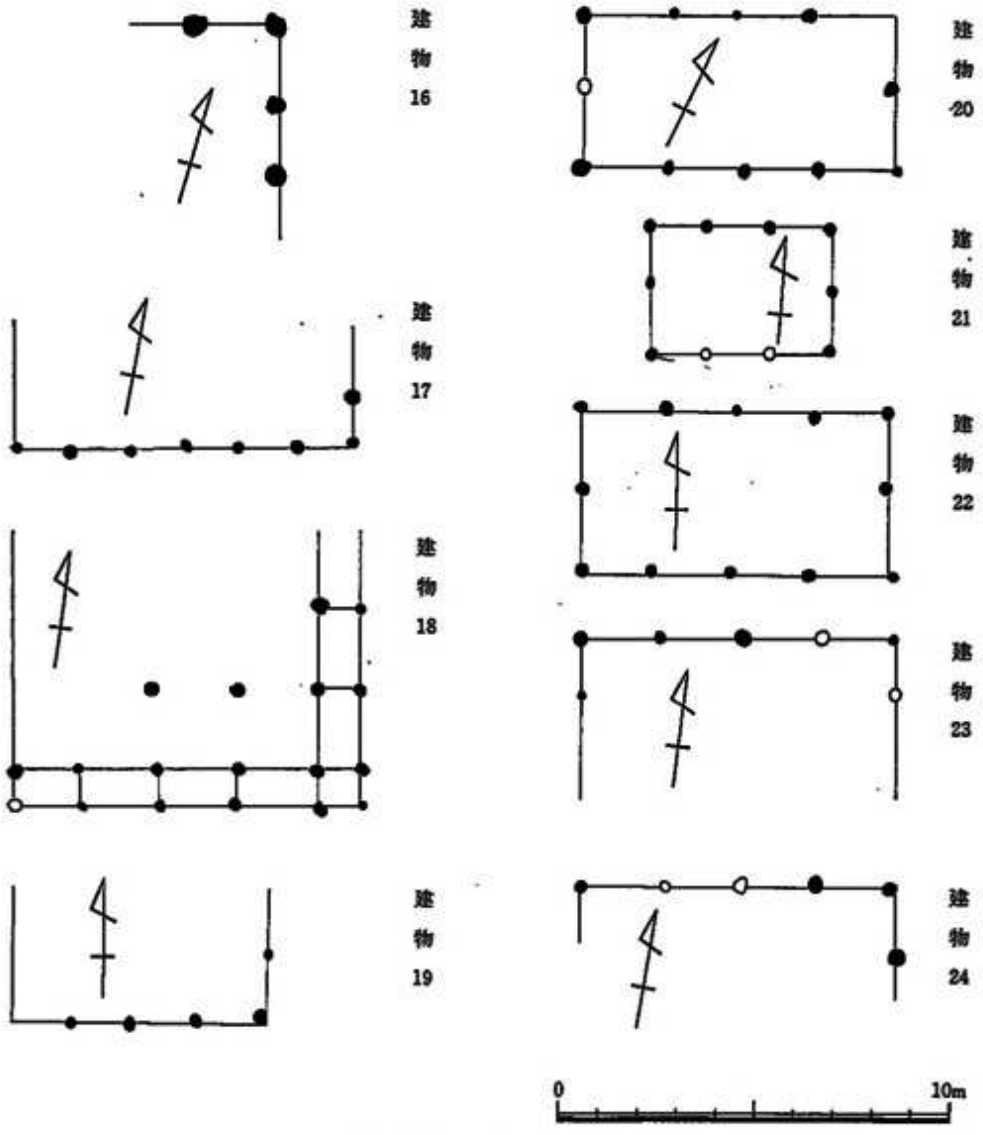
集落で屋敷地を区画する溝（第96図）は、溝20・21・24のように1m弱のものと溝22のように2m強のものがある。深さはほぼ10～30cmである。集落と寺域を画する溝25・26もほぼ同規模で

第26表　中世掘立柱建物（ＳＢＰ）・柵（ＳＦ）一覧表

建物名	地区	長軸	短軸	間数	桁行	梁行	柱間（長軸）	柱間（短軸）	備考	図	図版
1	ⅡW	N16.5°E	W16.5°N	2×2	4.3	2.8	2.15	1.4	古代にさかのぼる可能性あり	94	
2	〃	N20°W	W20°S	2×2	4.0	3.8	2.0	1.9	南西柱穴より黒色土器埴	〃	51
3	〃	N18.5°W	W18.5°S	2×2	3.9	2.2	1.95	1.1		〃	〃
4	〃	N10°W	W10°S	2×2	3.5	3.5	1.75	1.75	南西柱穴より瓦器埴	〃	〃
5	〃	N10°W	W10°S	2×2	4.2	4.2	2.1	2.1	南東柱穴より瓦器埴	〃	〃
6	〃	N12.5°W	W12.5°S	2×2	4.1	4.1	2.05	2.05		〃	〃
7	ⅡE	N10.5°W	W10.5°S	4×2	7.0	3.7	1.75	1.85		〃	55
8	〃	N10°W	W10°S	5×3	12.0	6.5	2.4	2.17		〃	〃
9	〃	N4.5°W	W4.5°S	3×2	5.8	4.5	1.93	2.25		〃	54
10	〃	N3°W	W3°S	2×2	4.8	4.5	2.4	2.25		〃	53
11	〃	N3°W	W3°S	2×2	3.3	3.2	1.65	1.6		〃	55
12	〃	N3°W	W3°S	2×2	3.6	3.5	1.8	1.75		〃	〃
13	〃	N1.5°W	W1.5°S	2×2	5.2	4.0	2.6	1.3		〃	53
14	〃	N0.5°E	W0.5°N	4×2	6.5	4.0	1.63	2.0		〃	54
15	〃	N4.5°E	W4.5°N	2×1	2.8	2.4	1.4	2.4		〃	55
16	ⅢW	N5°W		2×?	4.0		2.0				56
17	〃	N1.5°W		2×?	4.2		2.1				〃
18	ⅢE	W20°S	N19°W	4×2	8.2	4.0	4.1	2.0		95	57
19	〃	W15°S	N15.5°W	4×?	8.65		4.325			〃	〃
20	〃	N14°W		2×?	4.0		2.0			〃	〃
21	〃	W8°S		4×?	4.7	3.5	2.35	1.75		〃	〃
22	〃	W6°S	N6.5°W	4×?	8.4		4.2			〃	〃
23	〃	W5°S	N5.5°W	3×2	9.05		4.025			〃	〃
24	〃	W2°S		4×?	10.05		5.025			〃	〃
25	〃	W1°S	N3°W	4×?	8.0	4.2	4.0	2.1		〃	〃
26	〃	W2.5°N	N3.5°E	4×?	6.7		3.35			〃	〃
柵名	地区	長軸		間数	長さ		柱間				
1	ⅢE	N10°W		5	10.2		2.04				55
2	〃	N7°W		3	6		2.0				
3	〃	W3°S		7	13		標準 2.0		部分的に柱間が狭い		
4	〃	W3°S		5	8		1.6				



第94図　第Ⅱ調査区ＳＢＰ平面図



第95図 ⅢE区ＳＢＰ平面図

ある。溝25だけが特別で幅4.45m、深さ 170cmを測り、東接する畑への灌漑用の溜池を兼ねていたと考えられる。

寺域内で建物群を画する溝は、ⅢW区の溝31・33・35・36（第97図）のように幅４～５ｍ、深さ30～40cmの規模のものと、ⅢＥ区の溝37・38のように幅２ｍ大の溝とがある。寺域内を区画する溝は、集落の屋敷地を区画する溝より一般的に大きいが、ⅢＥ区南半の東辺を区画する溝39・40・41（第99図）は幅60cm大で、小規模である。

こうした屋敷地・寺域内を区画する溝の他に、建物の周囲に掘られた小規模な排水溝（溝29・34）もある。

溝30は、高台上に掘られているが、高台上の最後の井戸13が埋没する時期と同じ頃に埋っている。これは高台上の建物がいったんなくなった際に溝状に掘られた大きなゴミ穴であった可能性

第27表　中世溝（ＳＤＡ）遺構一覧表　　（　）は残存値

遺構名	地区	長さm	幅 cm	深さcm	埋没時期	備　　考	図	図版
20	ⅡW	10.4	86	16	13C	ⅡW区南半の西辺を画す		
21	〃	24	80	9	〃	ⅡW区の屋敷地を北半と南半に画す		
22	ⅡE	6.1	210	30	14C	ⅡE区の西辺（北より）を画す		
23	〃	4.5	(92)	(20)	〃	ⅡE区の西辺（南より）を画す		
24	〃	8.26	95	11	〃	ⅡE区の東辺（北より）を再す	94	
25	〃	13.76	445	170	〃	ⅡE区の東辺（南より）を再す	〃	64
26	ⅢW	(10.64)	88	21	13C	ⅢW区の北西で、東西に走る	〃	
27	〃	(30)	150	22	15C	集落と寺域を画する水路	98	
28	〃	(5.5)	400	90	13C	ⅢW区中央で「L」字形に囲う		
29	〃	(10)	48	28	15C	ⅢW区高台礫群２を「L」字形に囲う		58
30	〃	(10)	465	75	〃	ⅢW区高台中央の大溝		〃
31	〃	(18)	520	35	〃	ⅢW区東南区画の西辺を画す	97	56
32	〃	(16)	240	43	〃	溝33に合流、南北に走る		
33	〃	18.3	460	35	〃	ⅢW区東南区画の北辺を画す	97	56
34	〃	(12)	50	19	〃	建物16の雨落ち溝か		〃
35	〃	(40)	415	38	〃	ⅢW区とⅢE区を画す	97	〃
36	ⅢE	(40)	450	35	〃	ⅢW区とⅢE区を画す		
37	〃	23.85	230	44	15C	ⅢE区南半を「L」字形に囲う	99	57・64
38	〃	(6.5)	(260)	(19)	14C	溝38は、14Cに埋没し、上部のみ15Cに埋まる	〃	
39	〃	9	62	30	12C	ⅢE区南半区画の東辺を再する	〃	
40	〃	(17.5)	(65)	7	13C	溝39→40→41	〃	
41	〃	(20)	65	10	14C		〃	

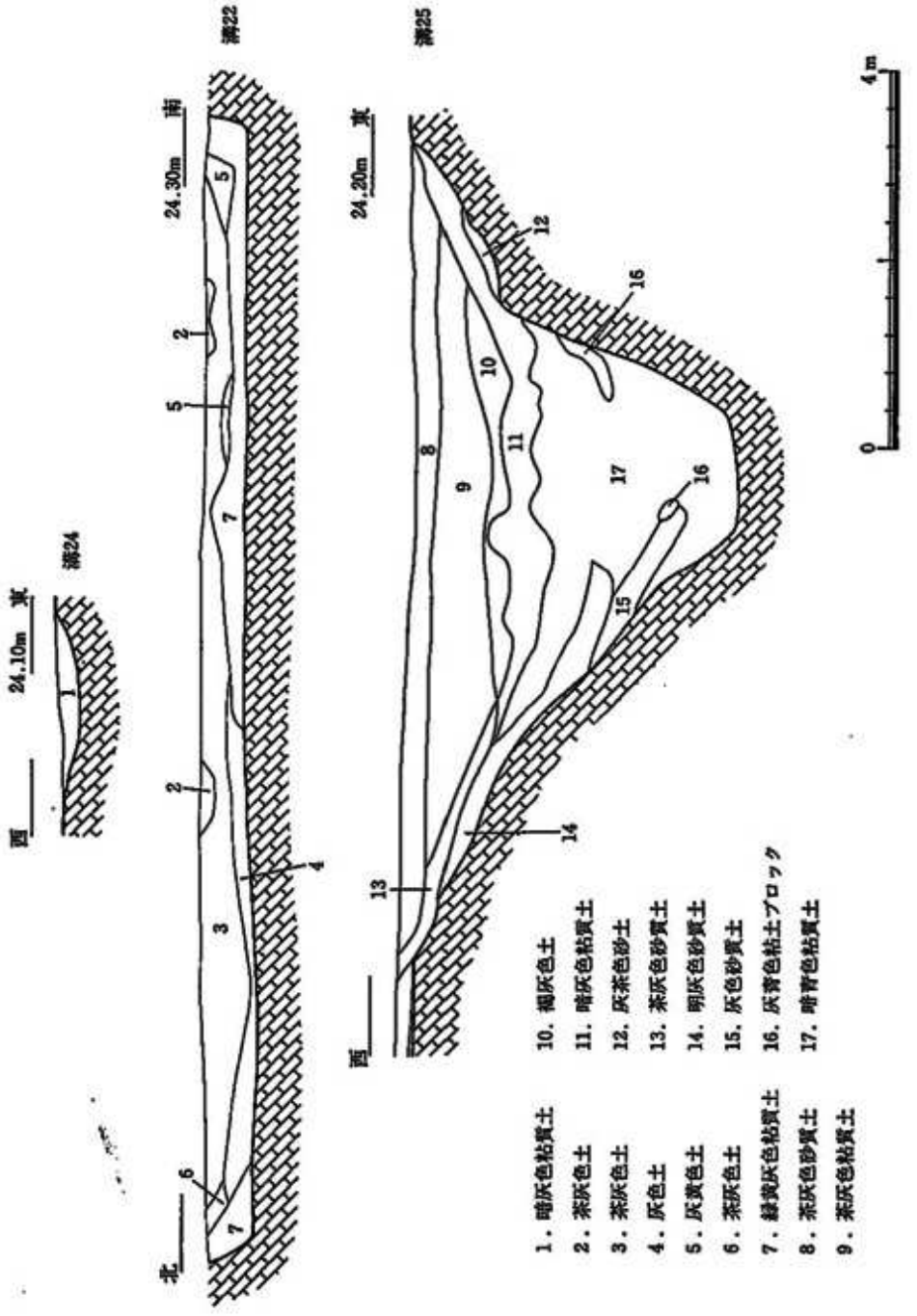
が強い。溝の上は整地土で覆われるが、溝の直上には多量の礫を埋め込んでいた（第92図；図版58下）。その他にも中世の溝がいくつかあるが、幅狭く、短かいものが多く、その性格はよくわからない。

井戸　（第100～110図；図版61～63、第28表）

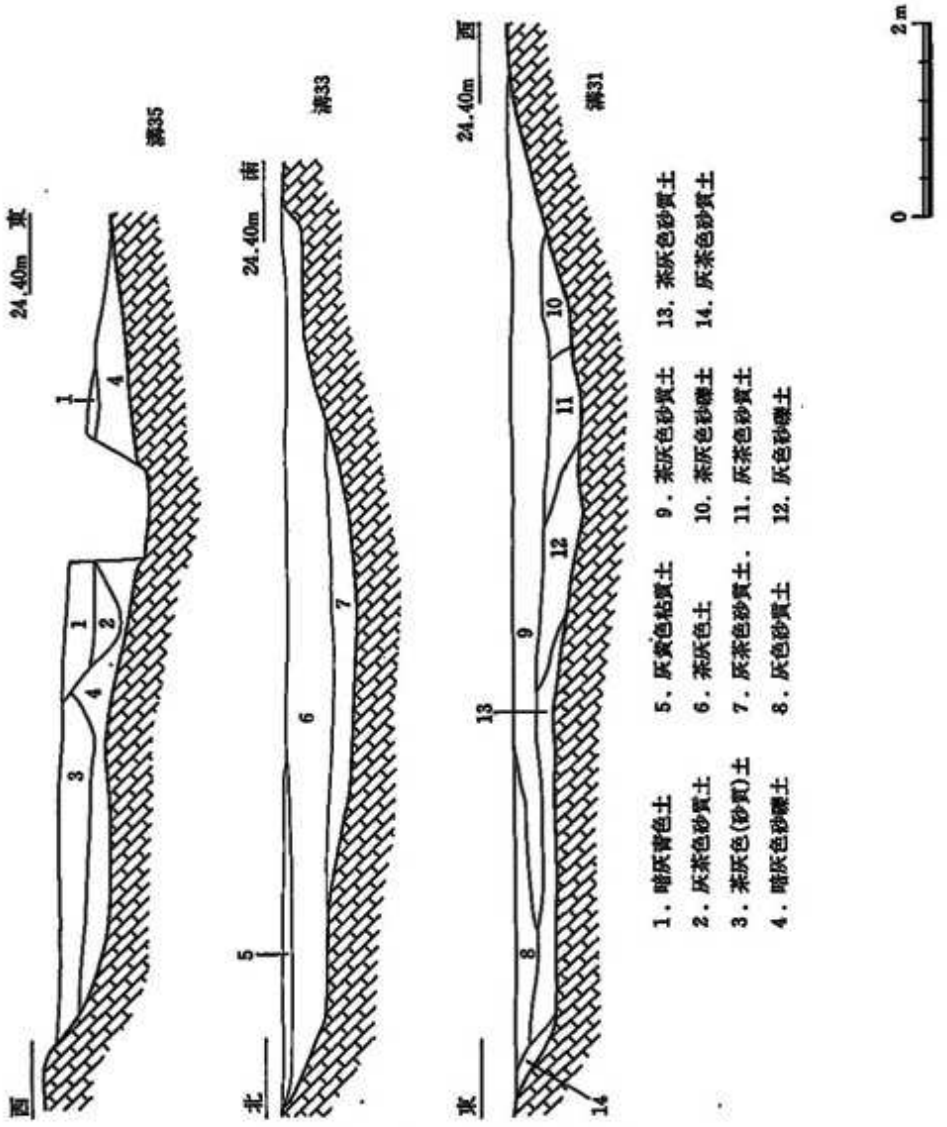
中世の井戸は18基検出した。井戸１～17までは13～15世紀に埋没する。井戸18の１基だけが、集落址・釈尊寺址廃絶後のものである。これは後に述べる。

建物に伴う井戸――その分布と年代　　菱木下遺跡の第Ⅱ調査区が集落、第Ⅲ調査区が釈尊寺の寺域であることは先に述べた。井戸の分布をみると、集落では、三つに区画されているそれぞれに井戸が伴い、寺域では建物群のある五区画のうち三区画に井戸があることがわかる。

これらの井戸は、それぞれの区画毎に埋没年代が異なり、基本的には一時期に各区画毎に一基



第96図　ⅡE区SDA22・24・25土層図

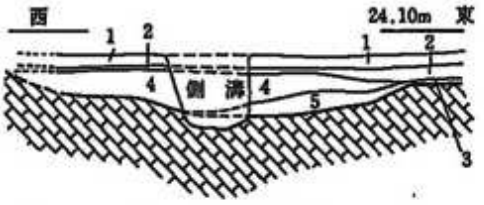


第97図　ⅢW区ＳＤA31・33・35土層図

だけ使用されている。基数の多い区画は、それだけ多く井戸が掘り直されている。これは各区画の遺構の存続期間と関係する。井戸の埋没年代はⅠW区の２区画は共に14世紀、ⅠＥ区は13～14世紀、ⅠW区中央北は14世紀、ⅠW区区高台と南東区画は13～15世紀である。ⅠW区北半は建物（11～12世紀）の年代と井戸の埋没年代に大きな開きがあるが、他の区画では建物等の存続期間と井戸の埋没年代がほぼ対応する。なお同一区画内では井戸番号は小さい方が早く埋没している。

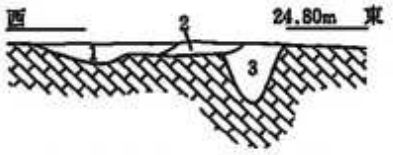
集落址		釈尊寺寺域	
ⅠW区北半	井戸１	ⅠW区中央北	井戸　6・7・8
ⅠW区南半	井戸２	ⅠW区高台	井戸　9・10・11・12・13
ⅠＥ区	井戸３・４・５	ⅠW区南東	井戸　14・15・16・17

井戸の構造――集落と寺域の違い　井戸の構造は集落と寺域でかなり異なっている。集落で

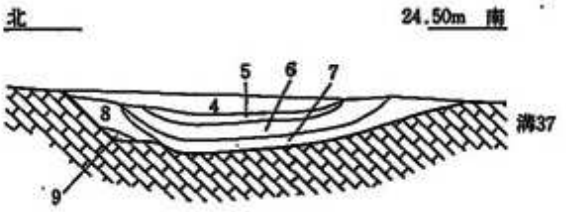


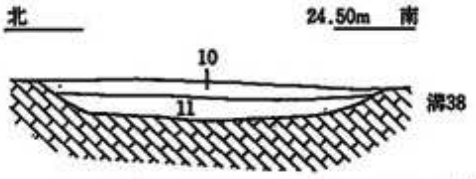
1．茶灰色砂質土　4．茶灰色砂質土 } 溝覆土
2．灰黄色土　5．茶灰色粘質土 }
3．黄褐色粘質土

第98図　ⅢW区ＳＤＡ27土層図



1：溝41、2：溝40、3：溝39





1．茶灰色土　4．褐灰色土　7．灰色粘質土　10．褐灰色土
2．黄灰色土　5．灰色土　8．褐灰色土　11．灰色粘質土
3．茶灰色土　6．褐灰色土　9．褐灰色砂礫土

第99図　ⅢE区ＳＤＡ37～41土層図

第28表　中世井戸（ＳＥ）一覧表　　（　）は残存値

井戸番号	地区名		短径(cm)	長径(cm)	深さ(cm)	形態	構造	埋没時期	図	図版
1	ⅡW	R55	335	370	(209)	上部広口形	素掘り？、完掘せず	14世紀	100	
2	〃	S54	195	200	(172)	〃	〃　？、完掘せず	14 〃	101	
3	ⅡE	R52	90	95	169	細筒形	〃	13 〃	102	
4	〃	S52	220	285	195	太筒形	〃	14 〃	103	
5	〃	S52	330	360	174	〃	〃	14 〃	104	
6	ⅢW	R49	150	158	66	〃	井底に４枚の厚板で四角に組む	14 〃	105	62
7	〃	R49	100	116	113	細筒形	井底に桶側	14 〃	106	
8	〃	R49	172	184	119	上部広口形	素掘り、井底に円礫多数	14 〃		
9	〃	S49	164	172	92	〃	〃	12 〃		
10	〃	S49	266	277	143	太筒形	井底に桶側	14 〃	107	62
11	〃	S49	130	(115)	140	細筒形	井底に四角く横桟を配し側面を板材で囲う	14 〃	〃	63
12	〃	S49	145	(100)	127	〃	同上、一部に瓦丸を配す	15 〃	〃	〃
13	〃	S49	183	231	174	太筒形	四隅支柱に横桟、井側板材で囲う	15 〃	〃	〃
14	〃	S48	160	166	122	〃	四隅支柱に縦長の厚い板材で囲う	14 〃	108	62
15	〃	S47	124	132	80	細筒形	浅いので井戸か、滞水していた痕跡あり	14 〃		
16	〃	S48	150	166	185	〃	覆土より瓦質井筒出土	15 〃	109	62
17	〃	S48	204	232	92	太筒形	浅いので井戸か、滞水していた痕跡あり	15 〃	110	
18	ⅢE	S47	280	280	178	〃	四隅支柱に横桟、井側細竹で四角に囲う	16 〃	120	68

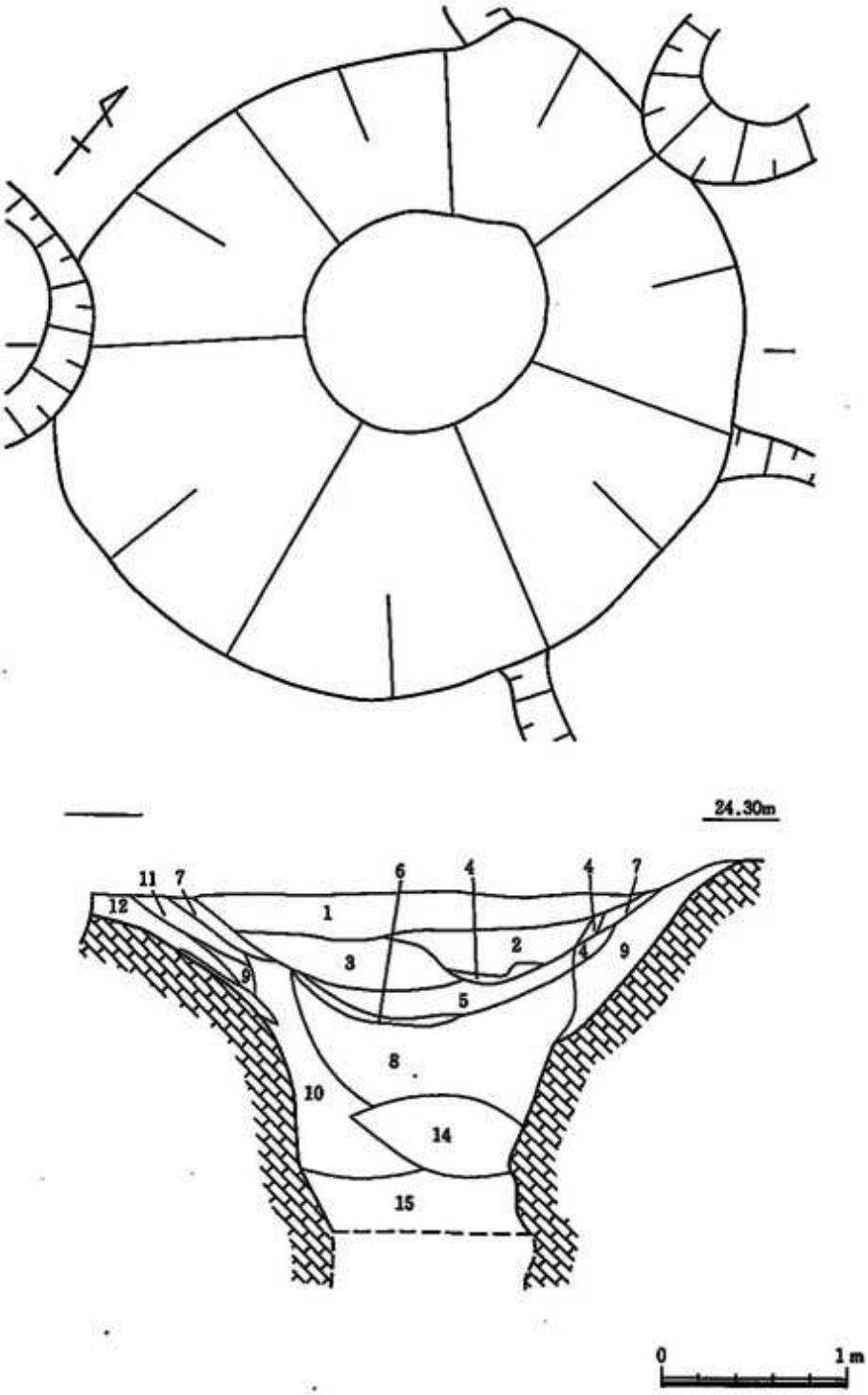
はすべて素掘であるのに対し、寺域では各種の構造物がみられる。

集落址		釈尊寺寺域	
ⅡW区北半	素掘り？１基	ⅢW区中央北	方形板枠１基、円形桶側１基、素掘り１基
ⅡW区南半	〃　？１基	ⅢW区高台	円形桶側１基、四隅横桟３基、素掘り１基
ⅡE区	〃　３基	ⅢW区南東	方形板材１基、瓦質井戸枠１基、素掘り２基

ⅡW区の２基は全掘していないので、井底の構造物の有無は分からないが、ⅡE区の井戸と比べると寺域の井戸の方が立派につくられている。

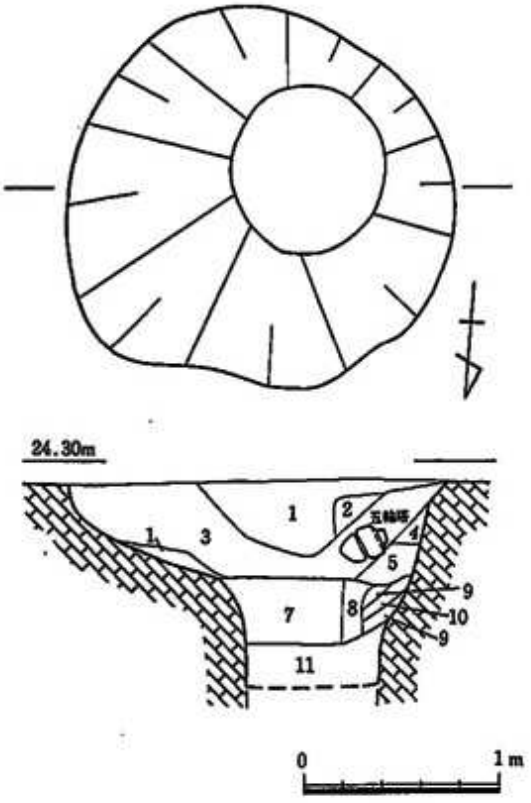
井戸１（第100図）　ⅡW区北半の屋敷地内にある。掘立柱建物群は11～12世紀の倉庫と考えられ、かつ井戸の埋没年代が14世紀とかけ離れているので、果して倉庫群に伴ったかどうか不明である。ただ井戸１の東と南には調査の結果、中世建物群は検出されていない。井戸１が倉庫群以外の建物群に伴うとすれば北にしか存在しえない。ただ北も段差１ｍの谷が入ってきており、もし別の建物群があるとすれば北東であろうか。

井戸１は上部が広口になる大型のもので、下層から多量の土釜が出土した（第154・155図）。２ｍまで掘ったが、ボーリングで更に１ｍ以上あり、壁が崩落してきたので完掘しなかった。



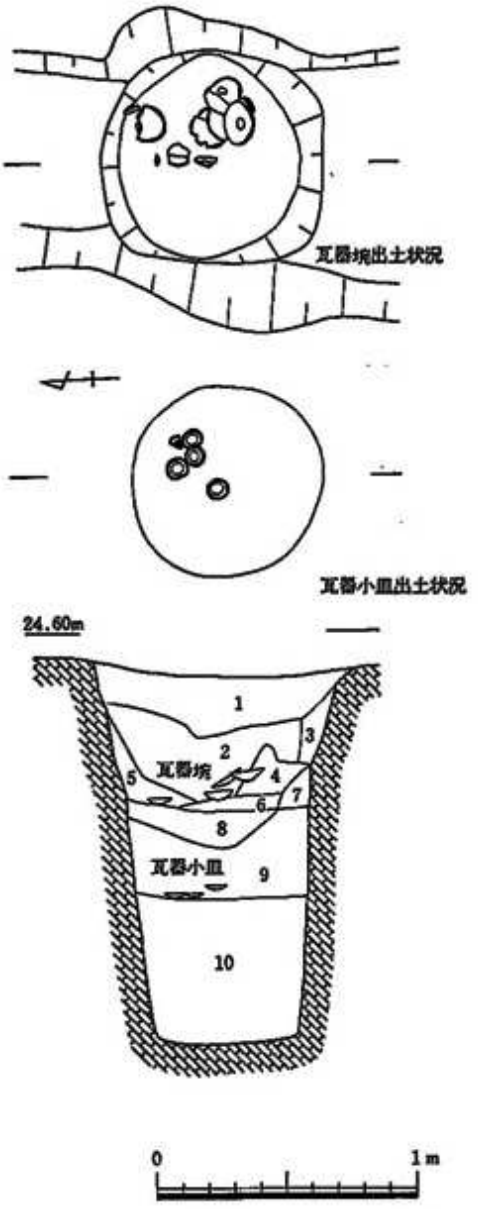
1．茶褐色土　6．灰黒色粘質土　11．灰色砂質土
2．灰茶褐色土　7．灰色砂質土　12．黄褐色粘質土
3．灰色褐色土　8．暗灰色粘質土　13．灰色砂質土
4．灰色砂質土　9．暗灰色粘質土　14．暗灰色粘質土
5．灰褐色砂質土　10．暗灰色粘質土　15．青灰色粘質土

第100図　ＳＥ１平面図・土層図



1．灰色砂質土
2．灰色砂質土
3．灰茶色砂質土
4．灰茶色砂質土
5．茶灰色砂質土
6．灰色砂質土
7．灰茶色砂質土
8．灰茶色砂質土
9．茶灰色砂質土
10．灰色砂質土
11．灰青色粘質土

第101図　ＳＥ２平面図・土層図

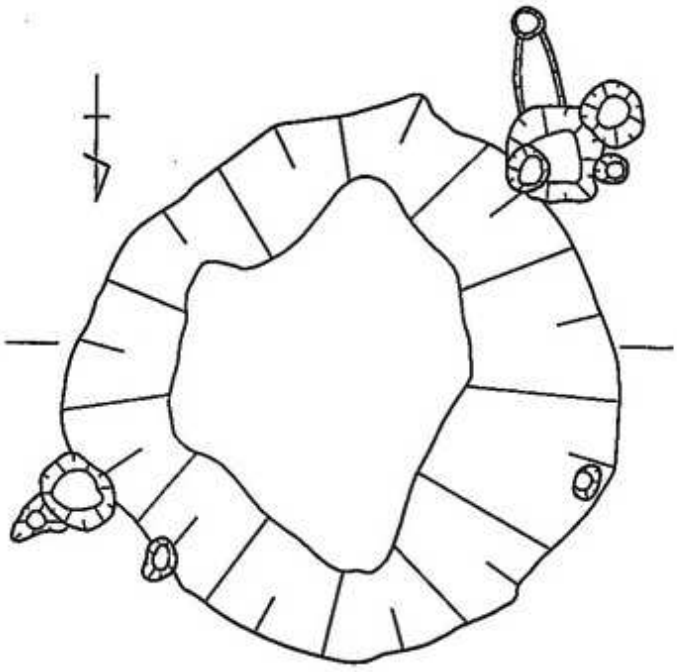


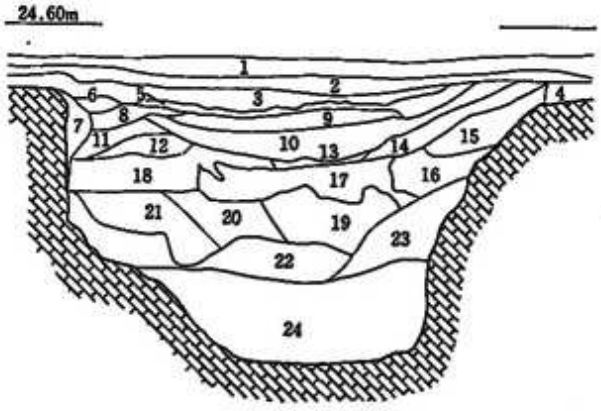
1．茶褐色土
2．灰色土
3．茶褐色土
4．灰黄色砂土
5．灰色粘質土
6．灰色砂土
7．灰色粘質土
8．黄灰色粘質土
9．暗灰色粘質土
10．暗灰色粘質土

第102図　ＳＥ３平面図・土層図

井戸２（第101図；図版61）　ⅡＷ区南半の屋敷地内にある。上部が広く開口するが下半部が狭い。ボーリングの結果、更に１ｍ以上あるが、下半が直径65cmと狭いため、これも完掘していない。上層に五輪塔（第193図）の頭部が廃棄されていた。瓦質のすり鉢の古いタイプが少量あるが段のある瓦質土釜は出土していない。14世紀末葉の埋没である。

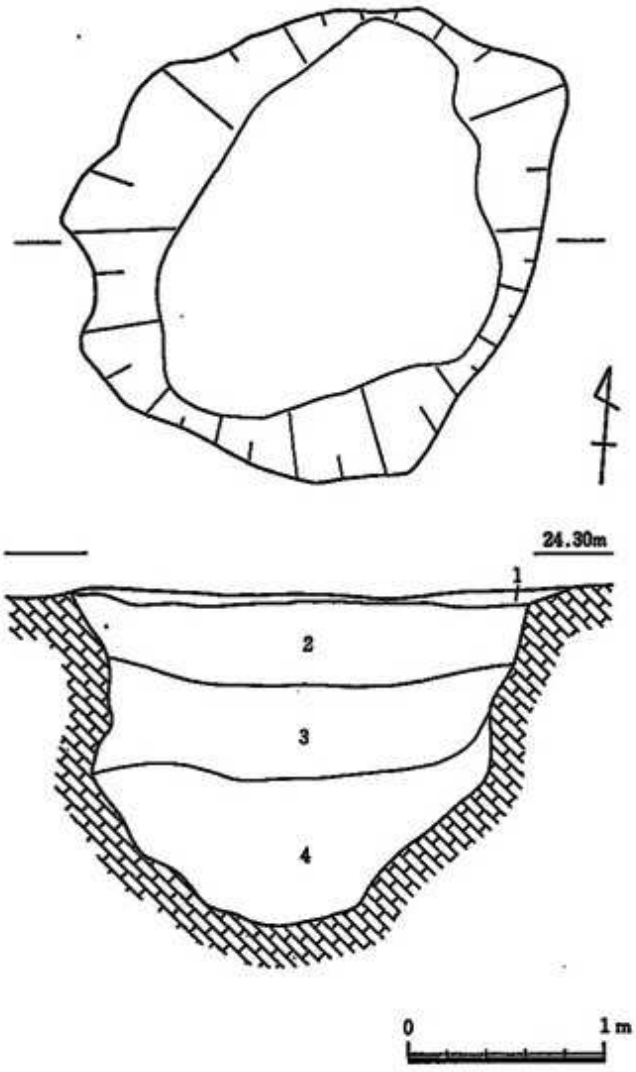
井戸３（第102図；図版61）　ⅡＥ区の屋敷地に属す。井戸内から完形の瓦器が出土した。井





1．耕作土
2．褐色土
3．茶灰色土
4．茶灰色土
5．黄灰色土
6．黄灰色土
7．灰茶色土
8．淡黄色砂土
9．茶灰色土
10．茶灰色土
11．黄灰色土
12．黄灰色土
13．灰褐色土
14．灰黄色土
15．黄灰色土
16．灰色土
17．黄灰色粘質土
18．茶灰色土
19．淡黄灰色粘質土
20．茶灰色土
21．淡灰色粘質土
22．暗灰色粘質土
23．灰色粘質土
24．暗灰色粘質土

第103図　ＳＥ４平面図・土層図



1．赤褐色砂質土　　3．灰茶色砂質土
2．灰茶色土　　4．暗灰色粘質土

第104図　ＳＥ５平面図・土層図

戸祭祠に使用されたものと思われる。これらの瓦器は二群に分かれる。まず下層（10層）が埋没したあと、瓦器椀４個、瓦器小皿６個を投入している（第157図５～14）。これらは中層（９層）から出土した。これらの遺物が完全に埋没した頃、更に瓦器椀４個を上部に投入している。これらの遺物群には時期差があり、中層の１群は12世紀後葉から13世紀初頭、上層の１群は13世紀前半に位置しよう。これはいったん廃棄した井戸で祭祠を行ったが、なかば開口しており、後に埋め戻す際にまた祭祠を行ったものであろうか。

井戸４と井戸５（第103・104図；図版61）　ⅡＥ区の屋敷地内中央にあって互いに近接している。出土遺物もよく似ているが、井戸４の方が同じ14世紀代でもわずかに早く埋没しているようである。ⅡＥ区の屋敷地では井戸３を埋めたあと、長い間井戸４を使用していたようである。土層から埋没状況をみると、井戸４は様々な土が入り組んでブロック状に入り、埋め戻したものと思われる。井戸５は比較的均質な土が水平に入り、自然堆積の状態を示している。井戸４が井戸５よりやや大きいのも、長い期間の崩落によるものかと推測している。

井戸６（第105図；図版62）　大溝28が埋没したあと掘られている。初めその存在に気づかなかった為、図では溝底に依存していた部分を示している。井底に四角い木枠がある。木枠は大きな丸太を縦割りにし、樹皮を残したまま長方形の材をとっている（第201図；図版214）。北と南の２材は内側にくり込みを入れ、４つの材を組み合わせている。

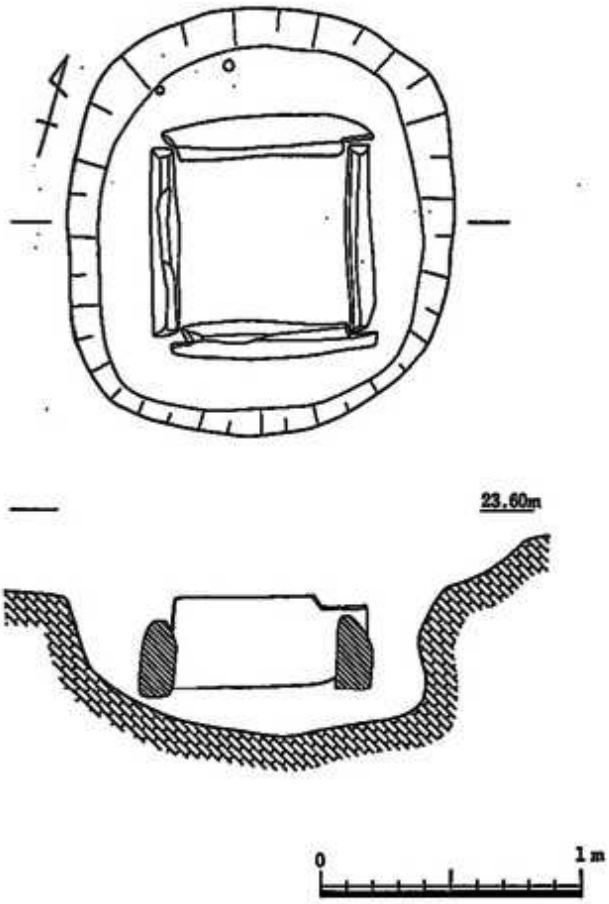
井戸７（第106図）　井底に直径50cmの円形の桶側を置く。板材は平板でなく、内湾しているので桶側としたが、桶をとめるタガや底板はない。それゆえ、底を抜いた桶を置いたのではなく、バラした桶側を円形に打ち込んでいったものである。覆土中層（３層）に瓦や遺物が多量に投棄

されていた。

井戸８　Ⅰ W区高台には５基の中世井戸があるが、その中で最も早く掘られており、唯一12世紀代に埋没している井戸である。井戸９～12が高台の東に集中して切り合っているのに対し、それらからやや離れて高台内側へ寄っている。

井戸10（第107図；図版62）　井底が 2.5mと広い割に、中央に径52cmの桶側を置いている。井戸７と同じく板材だけでタガ、桶底はない。井底の東側に石があり、それに一端をのせて長さ 1.1mの板材が置かれていた。何を意味するか不明である。

井戸11（第107図；図版63）　井底に正方形に横桟を配す。横桟は内側と外側にあり、その間に長方形の板材を打ち込んでいる。

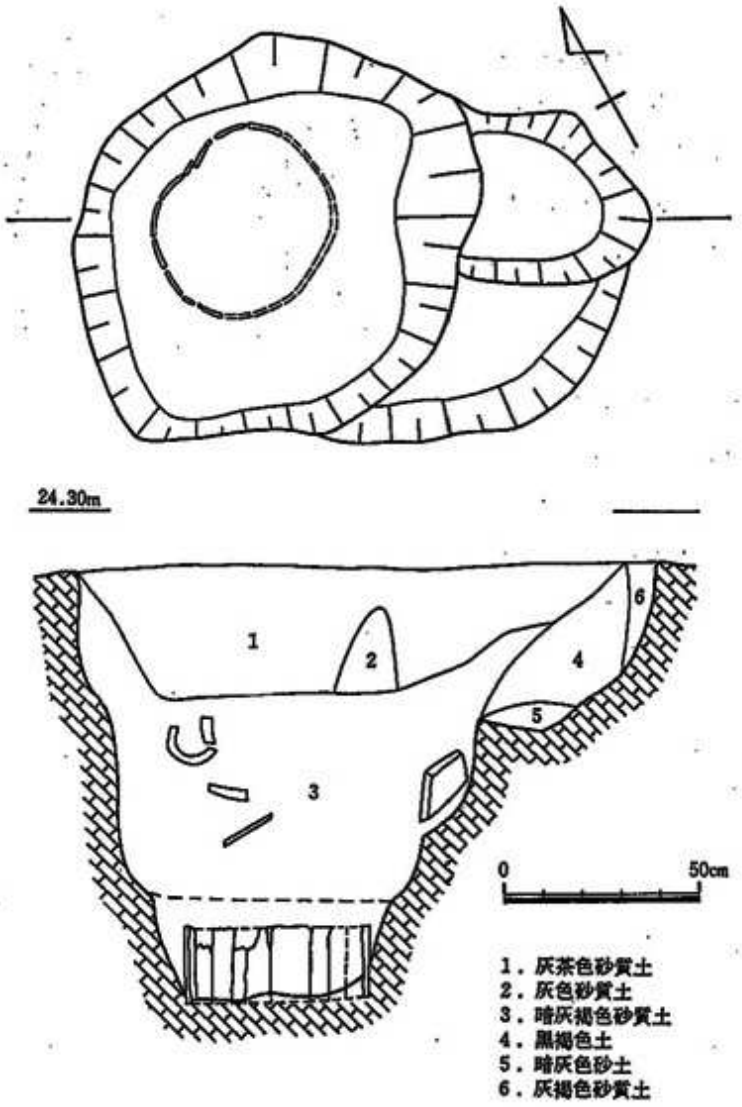


第105図　ＳＥ６平面図・断面図

井戸12（第107図；図版63）　井底に長方形に横桟を配す。横桟は内側だけである。周囲に長方形の板材を打ち込んでいる。井戸11と違って西辺の板材の下に完形の丸瓦が埋め込まれている。また西南隅に支柱のように完形の丸瓦（第186図４・５）を立てていた。

井戸13（第107図；図版63）　検出井戸中、最も立派な井戸である。四隅に長い角柱を打ち込み、枘穴をあけて幅広の厚い横桟を上・中・下の三段にはめ込んでいる。図では下段の横桟がないのもあるが、発掘中に土圧で折れて取り除いたものである。その間を長方形の材で２段に囲っている。下段の板材は下部をＬ字形に切りとり、井底に打ち込み易くしている。下段は１辺２枚、上段は１辺３枚を使用。更に東と西の側に幅７～８cmで、長さ１m以上の細長い板材が打ち込まれ、副木になっている。井戸は使用時には中段の横桟まで埋められて固定され（地山の砂礫土でここまで埋っていた）、その面には、四本の支柱の内側にそれぞれ１個ずつの円礫が置かれていた。支柱・板材は転用材。

井戸14（第108図；図版62）　四隅に丸太を打ち込み、間を厚さ４cmと厚い板材を打ち込んで四角に囲っている。１辺２～３枚使用。支柱には枘穴があるが、横桟は不明。半分ほど板材が抜かれ、土圧で内側に潰されている。南辺に丸太があるが支柱の倒れたもの。



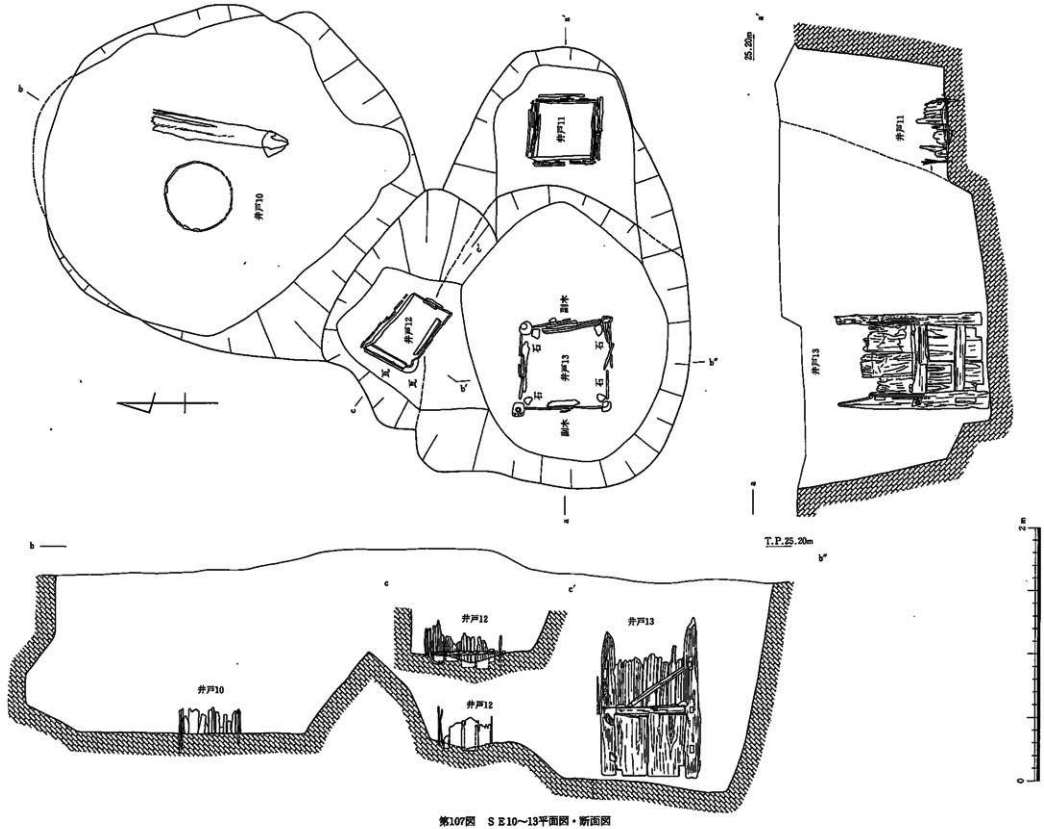
第106図　ＳＥ７平面図・土層図

井戸15　Ⅱ W区西南のグループに属すが、唯一「コ」字形に溝で囲まれた区域内にある。深さ80cmと浅いが、下層は灰青色粘質土で、シダの葉が出土している。これは滞水して湿った井戸内にシダが自生していたことを示している。滞水開口の状況から井戸と判断した。この井戸から火炎宝珠文軒丸瓦が出土した（第184図１）。

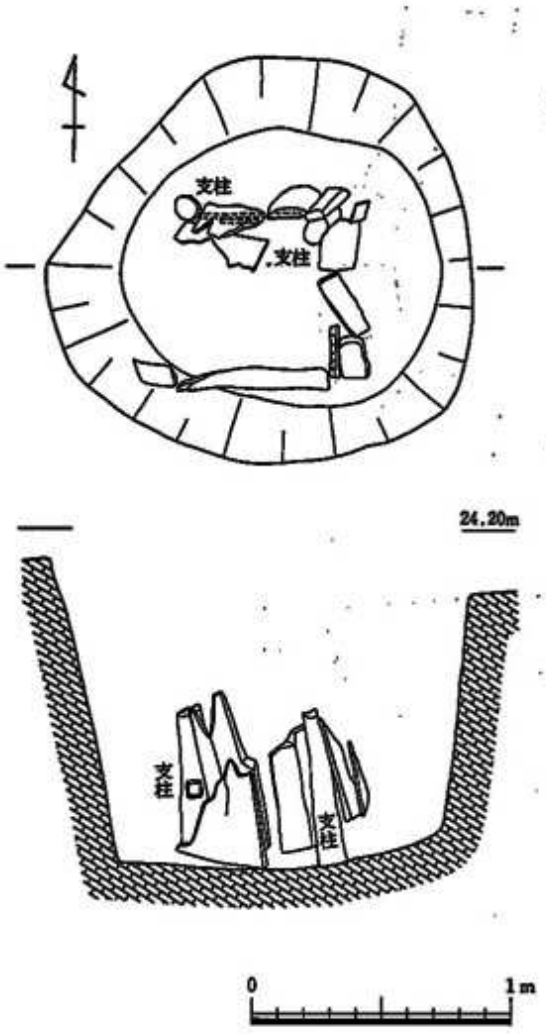
井戸16（第109図）　素掘りの井戸であるが、覆土中から瓦質の井筒の破片が多量に出土した。瓦質井筒（第165図）は下部はほぼ復原できたが上部は２片しかない。底径56.4cm、器高は54cm以上ある。

井戸17（第110図）　深さ92cmと浅い。下層が含礫黒色粘質土（発掘時灰青色）で滞水していた痕跡があるので井戸とした。瓦質土釜を多量に出土した。

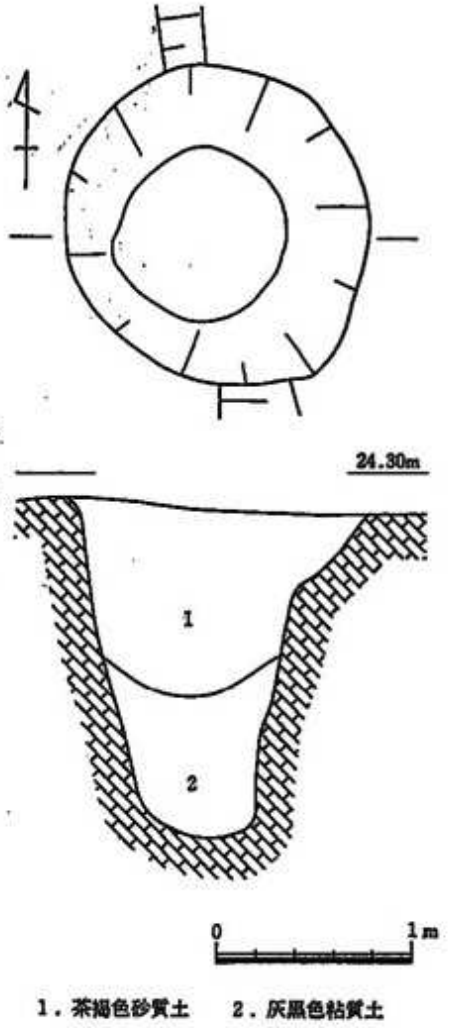
土壙墓・土壙・大落ち込み　（第29表）



第107図　ＳＥ10～13平面図・断面図



第108図　ＳＥ14平面図・断面図



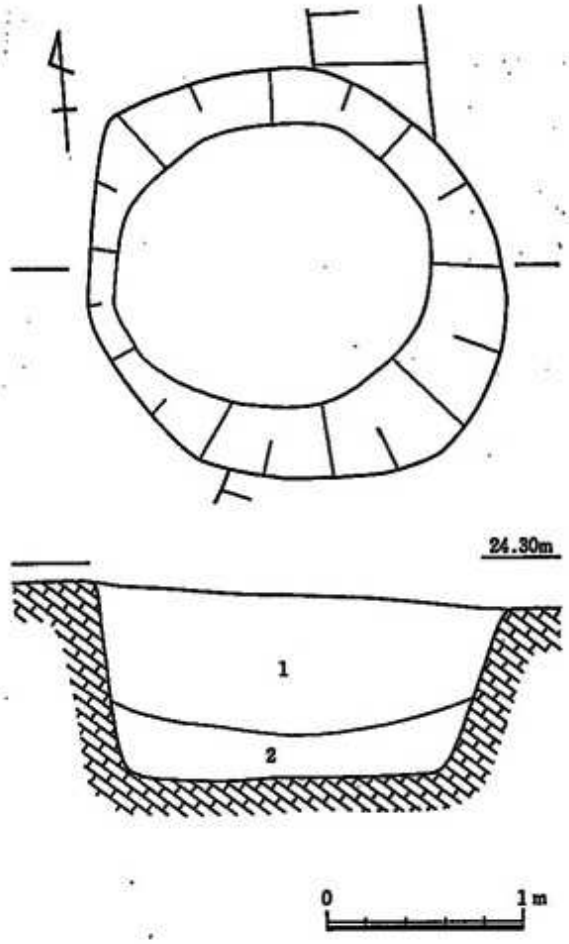
第109図　ＳＥ16平面図・土層図

中世の土壙墓がⅠＥ区に１基、土壙は黒色土器の時期から15世紀まで合計 106基、大落ち込みは２ケ所検出された。第29表には次節で述べる16世紀の大落ち込み８も入れておいた。

土壙には完形の土師皿を多数埋納した土壙43などがあるが、大半はゴミ穴と考えられる。10・11世紀の黒色土器を出土する土壙は、ⅠＷ区に１基の他、ⅠＥ区に集中して６基ある。これらの地区には黒色土器の時期の掘立柱建物もある。瓦器塊出現後の土壙はⅠＷ区が３基と少ないほかは全体に数多くあり、いずれも同時期の建物群の周辺に分布している。

大落ち込みは、６が屋地造成による下段の平坦面で、７が大きなゴミ穴と考えられる。

土壙墓 381（第 111 図；図版67）　ⅠＥ区溝39の南端にある。溝39はⅠＥ区南半区画の東辺を画する溝で、土壙墓 391 は南半区画の東限に位置することになる。土壙墓は南北に長軸のある長楕円形で、南よりの埋土中から割れてはいたが完形の瓦器塊が１点出土した。瓦器塊のある位置の真下にはピットが１ケ所掘られていた。このように、土壙の形態と完形瓦器塊の出土から土



1．灰茶色土　2．混礫黒色粘質土

第110図　ＳＥ17平面図・土層図

壙墓とした。瓦器椀は12世紀でも遅くない時期に比定され、南半区画内建物でも第１段階の時期につくられている。溝39の遺物は土壙墓よりやや下るが、溝が機能していた期間を考えると、土壙墓は溝39の開口している時期に掘られたのではなかろうか。

屋敷地内に土壙墓の存在する例は高槻市宮田遺跡などで知られており、単独か数基程度で構成される。こうした土壙墓の性格の究明は今後の課題である。

土壙48（第112図；図版67）　ⅡＷ区南半区画内にある長楕円形の土壙だが、径60cmの範囲内に50個体以上の完形の土師器小皿を重ね積みにして埋納していた。14世紀に比定できる。

土壙47（第113図；図版67）　完形の瓦器椀２点の他、完形に近い瓦器椀１点、古い時期の土釜などが比較的まとまって出土した。土壙の南に完形の土師器小皿が１点、単独で出土している。14世紀前葉。

土壙59（第114図；図版67）　径60cmほどの小土壙で、完形の瓦器椀１点、瓦器小皿１点、礫２点等が出土した。瓦器椀がきちんとすわっている点で埋納したものであろうか。瓦器椀は無高

第29表　中世土壙墓（ＳＴＫ）・土壙（ＳＫＡ）・大落ち込み（ＳＫＮ）一覧表(1)　（　）は残存値

遺構名	地区	形態	長径cm	短径cm	深さcm	時期	備考	図	図版
土壙墓　381	ⅢＥ	長楕円形	146	93	37			111	67
土　壙　42	ⅡＷ	円　形	148	140	33	10後～11初	黒色土器内黒２、土師器３		
43	〃	長楕円形	130	60	18	14Ｃ	完形土師器小皿多数埋納	112	67
44	〃	円　形	56	44	33	14Ｃ			
45	〃	不整形	110	90	8	14Ｃ			
46	ⅡＥ	楕円形	160	132	23				
47	〃	〃	170	140	66		瓦器椀・土師器土釜廃棄	113	67
48	〃	不整方形	290	223	11				
49	〃	隅丸方形	(75)	(46)	14				
50	〃	不整形	103	63	6				
51	〃	〃	280	205	47				
52	〃	〃	440	400	40				
53	〃	〃	310	(250)	51				
54	〃	〃	230	(170)	15				
55	〃	楕円形	270	(170)	8				
56	〃	不整形	(495)	(322)	54				
57	〃	長楕円形	141	114	20				
58	〃	楕円形	(62)	70	6				
59	〃	隅丸方形	65	58	8		瓦器椀埋納	114	67
60	〃	不整形	150	92	9	15Ｃ	井戸４の東脇、４層上面遺構、平面図になし		
61	〃	不整方形	227	162	13			115	65
62	〃	長楕円形	148	(78)	15				
63	〃	〃	115	75	10				
64	〃	不整形	62	60	23				
65	〃	〃	(75)	(30)	19				
66	〃	楕円形	(65)	75	16				
67	〃	長楕円形	145	83	30				
68	〃	楕円形	66	57	39				
69	〃	不整形	205	(130)	7				
70	ⅢＷ	不　明	202	24	8.5				
71	〃	円　形	197	195	23				
72	〃	楕　円	326	188	77.5	14Ｃ	ⅢＷ区高台上の大土壙	116	
73	〃	〃	56	41	27				

第29表　中世土壙墓（ＳＴＫ）・土壙（ＳＫＡ）・大落ち込み（ＳＫＮ）一覧表(2)

遺構名	地区	形態	長径cm	短径cm	深さcm	時期	備考	図	図版
土壙　74	ⅢW	楕円形	364	306	32				
75	〃	不整方形	214	186	14				
76	〃	不整形	278	(72)	12				
77	〃	楕円形	233	185	30				
78	〃	長楕円形	448	166	18				
79	〃	不整形	66	40	9				
80	〃	不明	184	(38)	13		池３の北側にかかる		
81	〃	長楕円形	654	(136)	25.5				
82	ⅢE	不整形	154	90	7				
83	〃	楕円形	67	52	9				
84	〃	〃	90	35	6				
85	〃	不整形	110	108	30	12～14C	ⅢE区北半の掘立柱建物に集中する		
86	〃	円形	117	110	15	15C			
87	〃	不明	145	46	5		平面図になし		
88	〃	円形	75	75	6	15C	大落ち込み７の底面にある、平面図になし		
89	〃	〃	60	(33)	20	〃	〃		
90	〃	不整形	116	92	9	16C	大落ち込み７の底面にある		
91	〃		(66)	71	5	〃			
92	〃	楕円形	70	65	10	〃			
93	〃	〃	127	75	22				
94	〃	〃	(62)	(62)	24				
95	〃	長楕円形	(47)	47	4		いずれも、池１の北側にあり底が浅い、瓦器片を含む。池１の脇には、松が繁茂しており、木の根の跡かと思われる		
96	〃	楕円形	66	58	10				
97	〃	円形	57	48	3				
98	〃	長楕円形	100	70	4				
99	〃	不整形	170	65	5				
100	〃	〃	(57)	(40)	4				
101	〃	〃	(180)	(38)	5				
102	〃	不整形	150	120	15	12～14C	ⅢE区北半の掘立柱建物群の東に集中する土壙群		
103	〃	楕円形	143	(65)	10	〃			
104	〃	〃	93	(40)	8	〃			
105	〃	不整形	130	85	12	〃			
106	〃	長楕円形	123	61	4	〃			

第29表　中世土壙墓（ＳＴＫ）・土壙（ＳＫＡ）・大落ち込み（ＳＫＮ）一覧表(3)

遺構名	地区	形態	長径cm	短径cm	深さcm	時期	備考	図	図版
土壙　107	ⅢＥ	楕円形	85	(57)	5	12～14Ｃ			
108	〃	円形	67	58	5	〃			
109	〃	楕円形	(65)	70	20				
110	〃	〃	163	105	28				
111	〃	〃	140	84	6				
112	〃	〃	100	(75)	12				
113	〃	〃	107	75	15				
114	〃	〃	84	68	7				
115	〃	〃	(55)	45	20	10～11Ｃ	黒色土器Ａ		
116	〃	〃	120	(65)	9				
117	〃	〃	(60)	100	8	10～11Ｃ	黒色土器Ａ		
118	〃	〃	(90)	125	15	〃	黒色土器Ａ・Ｂ		
119	〃	〃	(98)	(95)	12	〃	〃		
120	〃	不整形	172	115	10	〃	〃		
121	〃	円形	86	84	22				
122	〃	〃	95	78	43				
123	〃	楕円形	85	70	6	10～11Ｃ	黒色土器Ａ		
124	〃	〃	(125)	75	5		遺物なし		
125	〃	不整形	115	(110)	4		〃		
126	〃	楕円形	92	67	6		〃		
127	〃	〃	(75)	61	16		〃		
128	〃	〃	155	135	20		土師器片		
129	〃	〃	120	75	20		〃		
130	〃	〃	195	146	24		遺物なし		
131	〃	隅丸長方形	150	(90)	32				
132	〃	不整形	365	332	20	14Ｃ			
133	〃	楕円形	87	56	17				
134	〃	〃	(77)	60	3	10～11Ｃ			
135	〃	不整形	190	172	7		遺物なし、自然のくぼみか		
136	〃	〃	100	41	4				
137	〃	〃	105	40	3				
138	〃	楕円形	(67)	67	7				
139	〃	不整形	110	36	10				

第29表　中世土壙墓（ＳＴＫ）・土壙（ＳＫＡ）・大落ち込み（ＳＫＮ）一覧表(4)

遺構名	地区	形態	長径cm	短径cm	深さcm	時期	備考	図	図版
土壙　140	ⅢＥ	長楕円形	212	88	18				
141	〃	楕円形	132	102	44				
142	〃	〃	120	105	14				
143	〃	長楕円形	125	37	7				
144	〃	円形	57	55	22				
145	〃	隅丸長方形	103	69	10	12～14Ｃ	ⅢＥ区北半の掘立柱建物の西側に集中する		
146	〃	不整方形	(90)	56	16	〃			
147	〃	楕円形	116	95	40	〃			
大落ち込み 6	ⅡＥ		1,400	1,800	27	14Ｃ	ⅡＥ区屋敷地内の整地による低い段上のくぼみ		
7	ⅢＥ		(1,400)	(800)	55	15Ｃ	大きなゴミ穴か		
8	〃		(2,600)	(1,000)	44	16～19Ｃ	耕作址、16世紀から江戸		

台で14世紀後半。

土壙61（第115図；図版65）　ⅡＥ区の区画内北よりにある不整形のやや大きな土壙。中央に瓦や塼がならぶ。14世紀代の遺構であるが、12世紀代の遺物をやや多く含む。

大土壙72（第116図）　ⅡＷ区高台上に掘られた大土壙である。多量の遺物が出土し、とりわけ瓦質の甕が4分の3以上復原できた（第175図）。14世紀後葉の埋没で、その上を礫群（礫敷）1が覆う。高台上の建物の建て替えの際掘られたゴミ穴である。

大落ち込み6　ⅡＥ区屋敷地内南半は、地山を10数cmほど削平して平坦面にしていたので、南側に小さな段がある。この段から建物8までの間がわずかに低くなっていたので大落ち込みとした。実際は宅地造成の際の平坦部である。14世紀末には包含層が堆積し、段も認められなくなる。

大落ち込み7　ⅡＥ区の北西隅にある深さ約60cmの大きな落ち込みで、ⅡＷ区とⅡＥ区を区画する大溝36を切る。このように寺域内の区画が消失した段階に掘られたものであり、15世紀末葉の遺物と共に極めて多量の瓦を出土することから、釈尊寺廃絶時に掘られたゴミ穴と考えている。

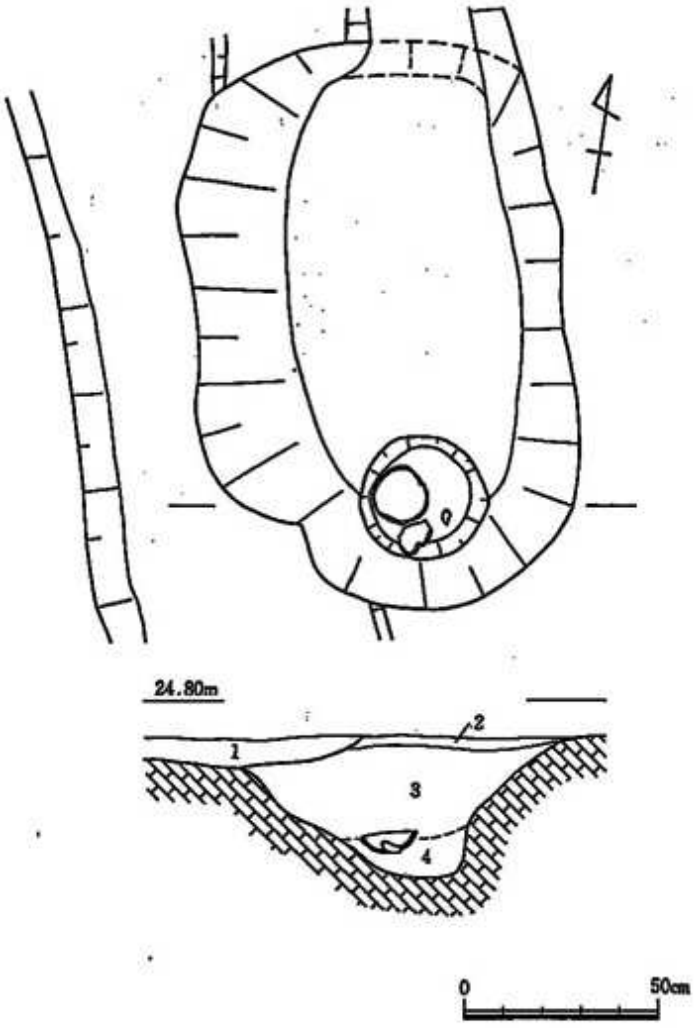
中世菱木下遺跡の盛衰と時期区分――まとめにかえて

菱木下遺跡の中世遺構の変遷は大きく3期に区分することができる（第25表）。

第Ⅰ期　10世紀後葉から11世紀前半　内黒の黒色土器を使用する人々が建物をつくり始める。調査区内では、両黒の黒色土器や初期の瓦器塊の時期に建物がたてられる。ⅡＷ区建物2・3とⅡＥ区建物20である。

第Ⅱ期　11世紀後半から14世紀末葉　11世紀後半に菱木下遺跡に釈尊寺が建立される。ⅡＥ区の建物群がこの時期に建てられ始める。12世紀にはⅡＥ区の屋敷地が形成され、やや遅れて、周辺を区画する溝が整備される。菱木下遺跡の最も繁栄した時期である。

第Ⅲ期　14世紀末葉から15世紀末葉　周辺の屋敷地が衰え、ⅡＥ区の寺域内の建物もなくなる。



1．茶灰色土（溝40覆土）
2．茶灰色土
3．茶灰色土
4　茶灰色土（ピット覆土）

第111図　ＳＴＫ 381 平面図・土層図

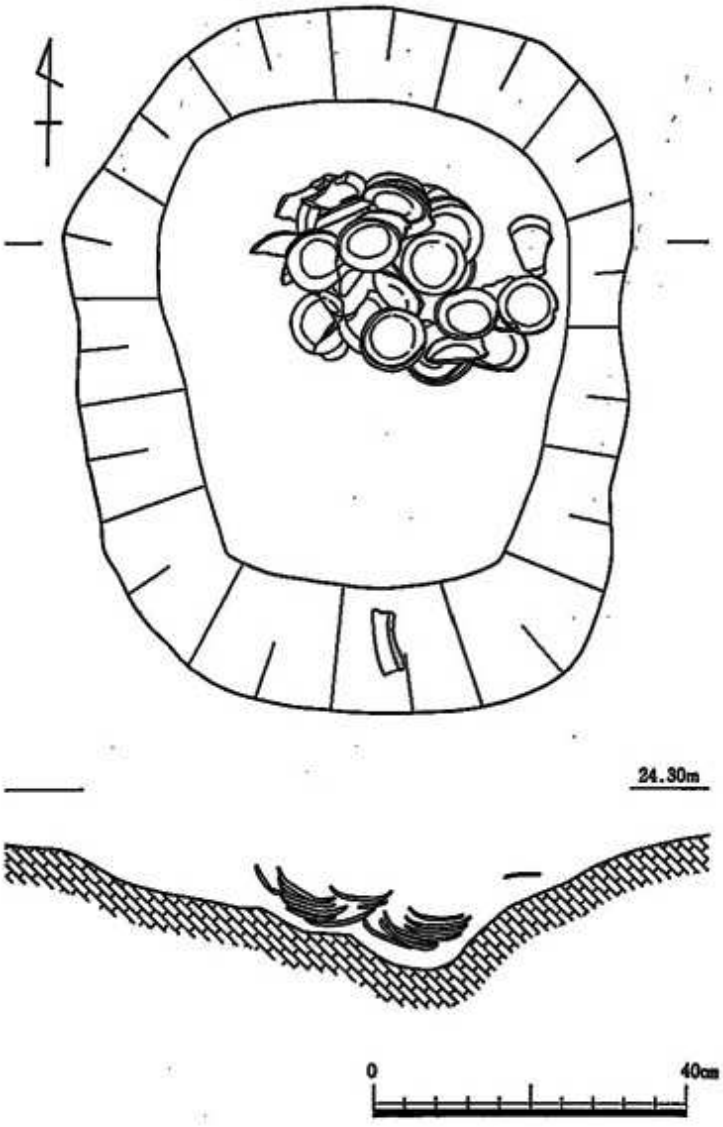
Ⅱ W区だけは、引き続き井戸が掘られ、建物も建て替えられていく。しかし15世紀も末葉になると、建物・大溝・井戸が埋没し、釈尊寺が廃絶する。

5　室町時代後葉から安土桃山時代――16世紀　（第 117 図；図版69）

この時代になると釈尊寺はなくなり、遺跡全体が耕地となっていったようである。耕作址の確認できるのはⅡ E区だけであるが、おそらく他の地区も耕地になっていった部分が多かったと思われる。

Ⅱ E区の耕作址は大きく南部・中部・北部と三分され、北部は50cmほど掘り込んで段をつけているので大落ち込み８とした。その他この時期の遺構として耕作址の西に井戸18、東に池１がある。

すき跡（耕作址）

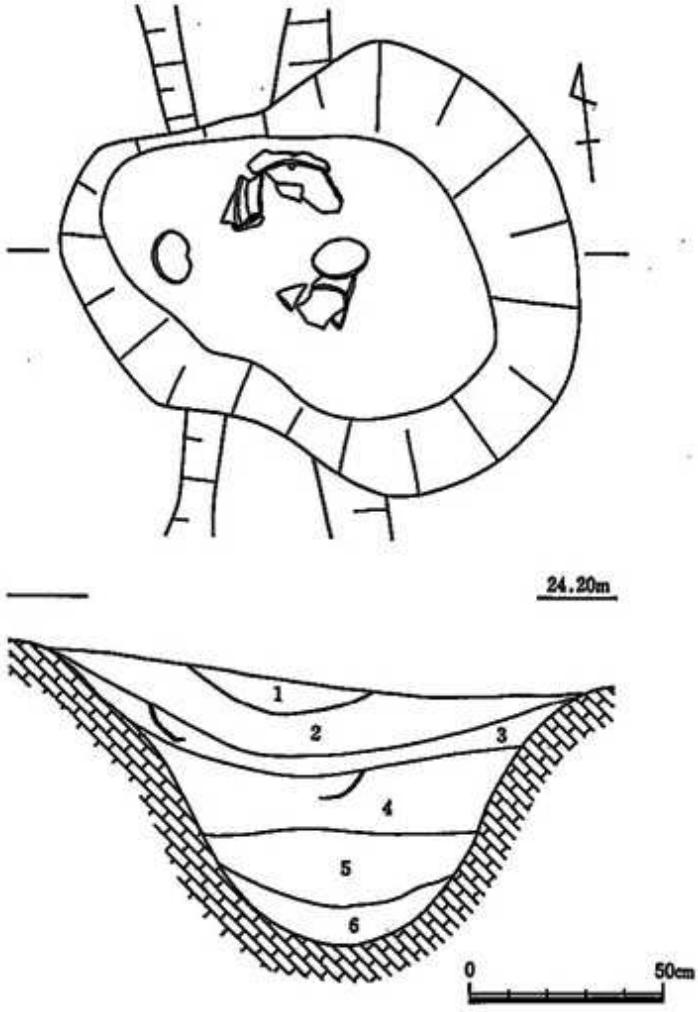


第112図　ＳＫＡ43平面図・断面図

ⅢＥ区では、中世の建物などの遺構を覆っている３層は上層・下層と明瞭に二分される。16世紀の耕作址（すき跡）が検出されたのは、３層下層の上面である。３層上層が当時の耕作土であり、やや深めにすいた跡が何本も平行して検出された。

このすき跡から２枚の耕地を復原できる。南部の耕作址のすき跡は南北方向を向き、中央部の耕作址のすき跡は東西方向に近い。ⅢＥ区は南が高く北が低いので、二つの耕作址の間には比高10～20cmのゆるやかな段がある。この部分には畦畔があったものと思われる。

西のⅢＷ区との境には約20cmの段がある。この段の肩にはすき跡がない。近世以降敷前までこの部分は道となっており、この当時から畦畔ないしは道であったと思われる。なおこの道を北へ延長すると、大島郡条里の里境と合致する。なお南側耕作址の南東隅は、現代の耕作で地山が削



1．灰茶色土（溝24覆土）　3．灰茶色土　5．灰色砂質土
2．灰茶色土　4．灰茶色土　6．灰色砂質土

第113図　ＳＫＡ47平面図・土層図

平されており、すき跡が確認できなかった。

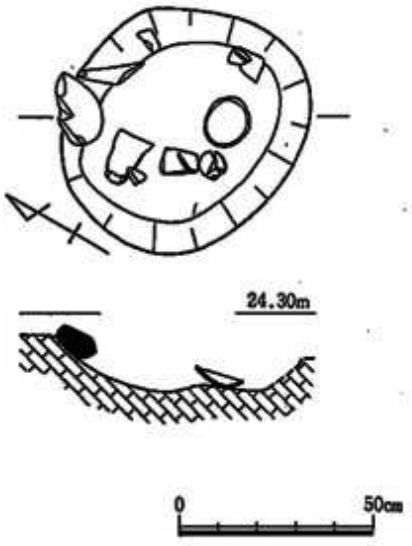
大落ち込み（耕作址）　（第119図；図版69）

大落ち込み８　Ⅱ E区の北側に方形に深さ50cmほど掘り込まれている。壁はほぼ垂直に立ち、壁ぎわに幅50cm、深さ10cmの浅い溝がめぐっている。この溝は耕地への取排水溝ではなかろうか。大落ち込み底面にはすき跡はないが、緩斜面を段上に成形してつくられた耕地と思われる。

大落ち込み８は、全体に４層に分かれ、最上層になると江戸時代伊万里染付磁器を含む。この時期の状況は、それまでとかなり異なるので、江戸時代の項で述べる。

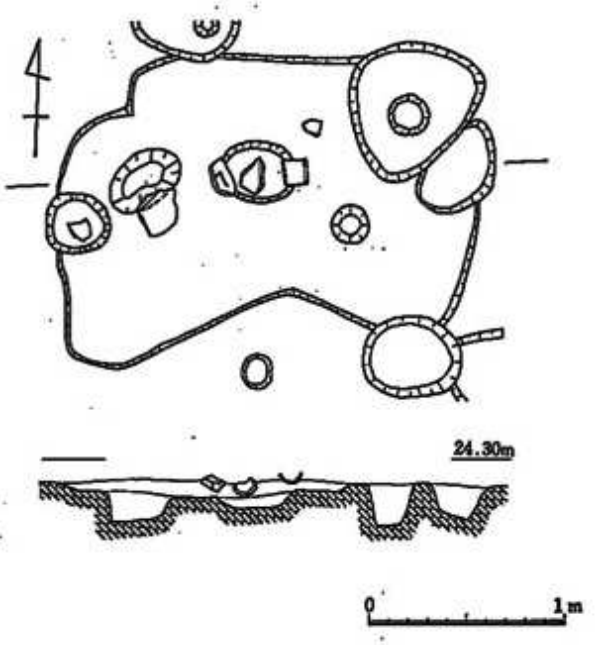
井戸　（第120図；図版68）

井戸18の１基だけである。直径280cm、深さ178cmの円形の掘り込みを持つ。内部は、自然木を四隅に打ち込んで支柱とし、やはり自然木の横桟を上下二段ずつ８本で支えて大枠を作る。四隅

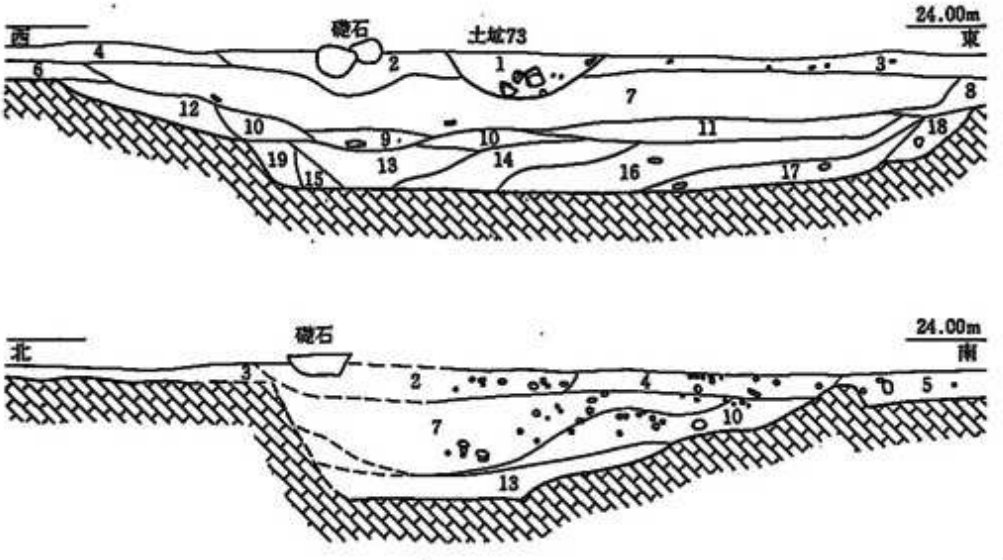


1　灰色粘質土　2．褐灰色粘質土

第114図　ＳＫＡ59平面図・断面図



第115図　ＳＫＡ61平面図・断面図



1．灰茶色砂質土　5．灰黄色土　9．灰茶色砂質土　13．茶灰色砂質土　17．明灰色粘質土
2．灰黄色土　6．灰茶色砂質土　10．茶灰色砂質土　14．灰茶色砂質土　18．茶灰色砂質土
3．明茶褐色砂質土　7．茶色砂質土　11．灰色土　15．暗茶色砂土　19．灰色土
4．明茶褐色砂質土　8．灰色砂質土　12．明灰茶色砂質土　16．茶灰色砂質土

0　4m

第116図　ⅢW区高台ＳＫＡ72土層図

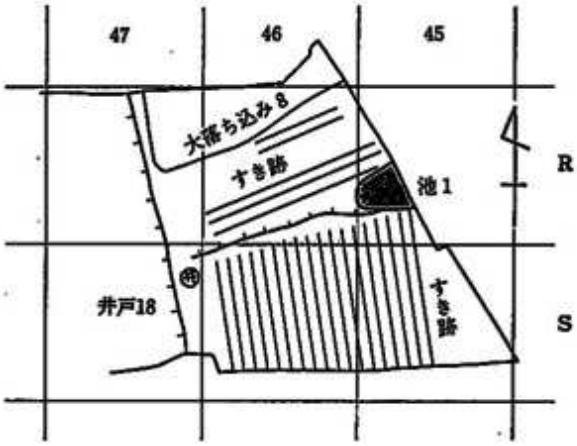
の支柱の周囲には径4～5cmの杭を多数打ち込んで固定している。こうして大体の枠組を行ってから細い竹を密に立て並べて側面を囲っている。

遺物は15世紀代のものだが、他の15世紀代に埋没する井戸群に比べて遺物が極めて少なく、かつ釈尊寺廃絶と共に埋没した溝36を切って構築されていることから16世紀代の遺構とした。

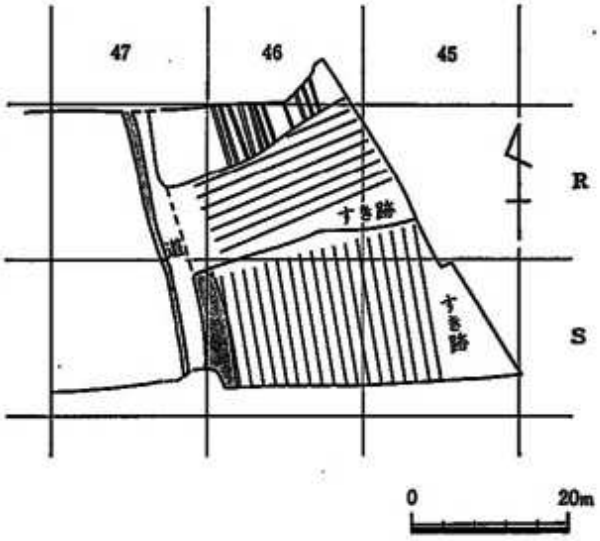
この井戸は近世・近代にかけてこの地方で盛んに掘られる灌漑用の井戸と思われる。

池　（第121図；図版68）

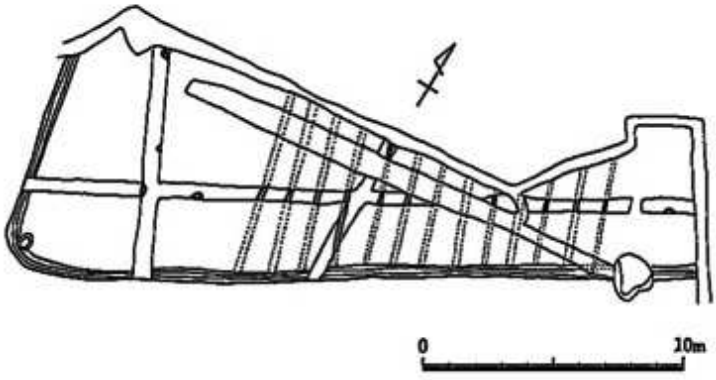
池1の1ヶ所だけである。短径約7m、長径は7m以上、深さ 1.9mの楕円形の小さな池である。下層には灰黒色粘土が厚く堆積し、滞水していたことがわかる。覆土中には松ボックリや松の樹皮が多数出土し、花粉分析でもマツ属が66.4%と極めて多く、池のまわりに松が繁茂していたことを示している。この池も井戸18と同じく灌漑用であろう。



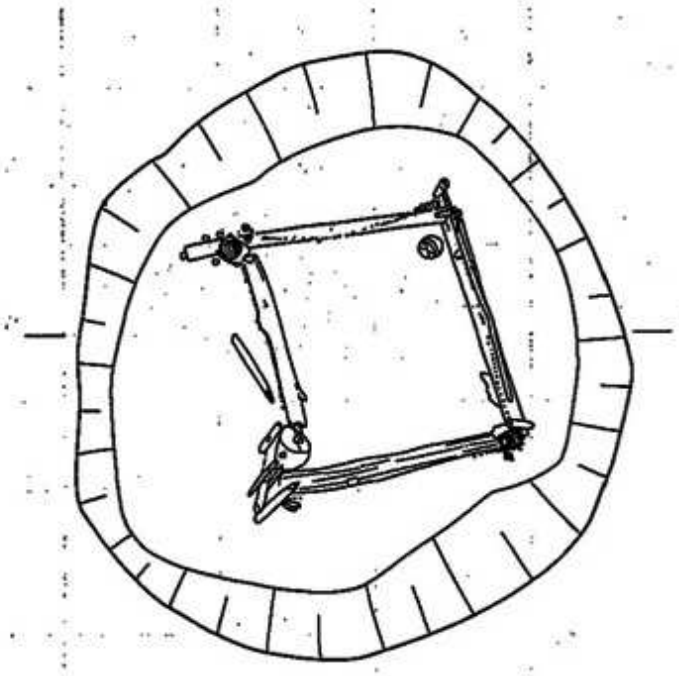
第117図　ⅢE区中世後葉（16世紀）遺構分布図

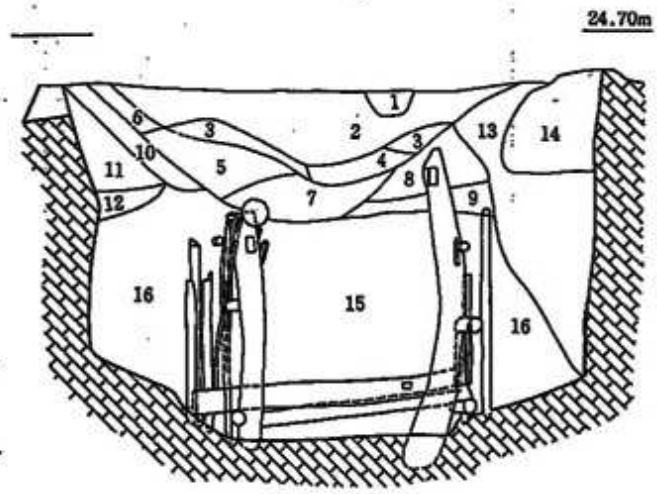


第118図　ⅢE区近世遺構分布図



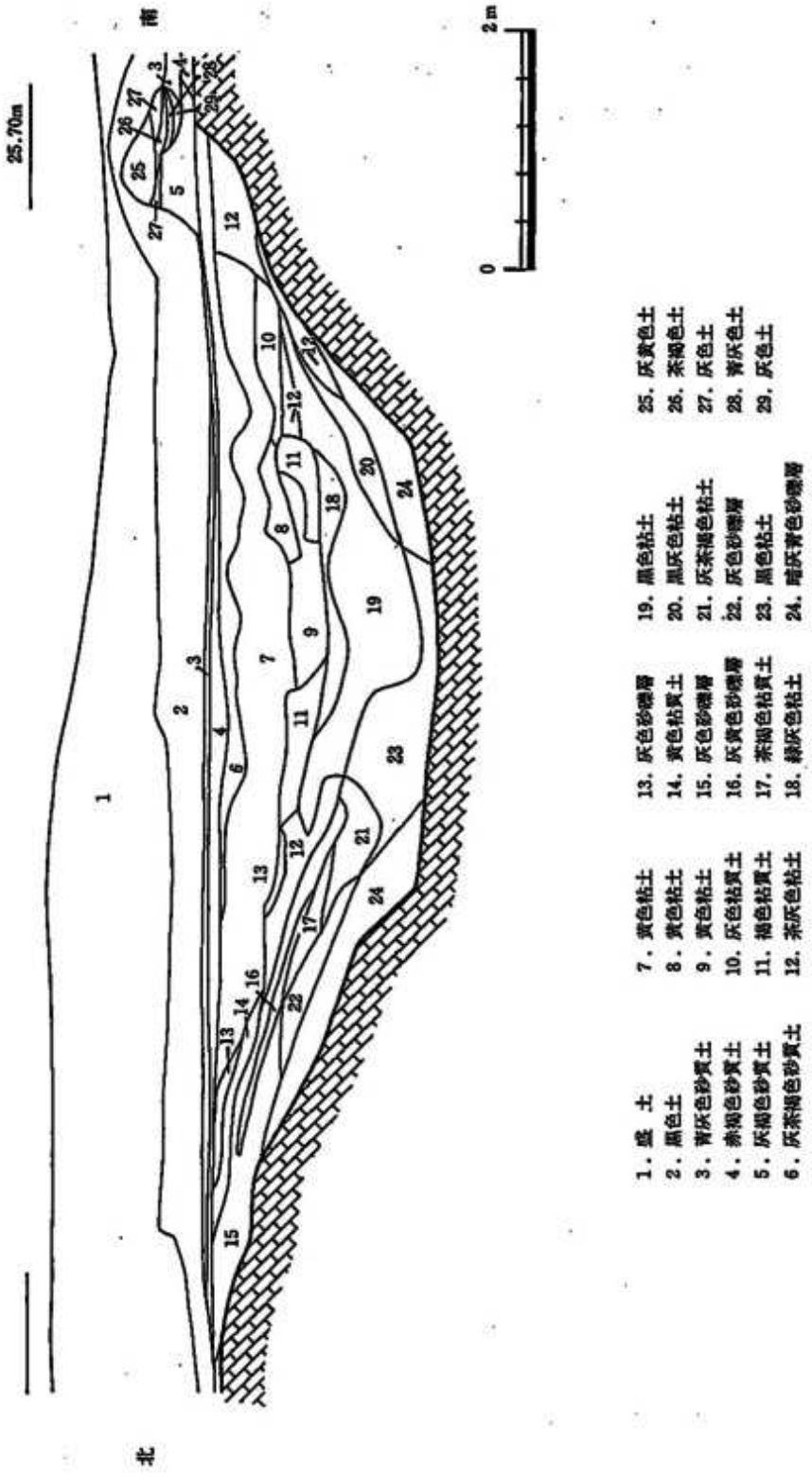
第119図　ⅢE区SKN8平面図





1．灰黄色粘質土
2．灰色砂礫層
3．灰色粘質土
4．灰色砂礫層
5．灰色粘質土
6．灰色粘質土
7．黒色粘質土
8．灰色粘質土
9．灰色粘質土
10．褐灰色粘質土
11．褐灰色粘質土
12．褐灰色粘質土
13．褐灰色粘質土
14．灰茶褐色土
15．灰黒色粘質土
16．灰黒色粘質土

第120図　ＳＥ18平面図・土層図



第121図　ＳＰ１土層図

まとめ

16世紀と考えられる遺構・遺物は全体に極めて少ない。そのほとんどがⅢE区に集中している。他の地区も16世紀に何らかの土地利用が行なわれたであろうが、近世・近代の耕作の影響もあってか、遺構を検出することはできなかった。

16世紀の土地の区割りは近世にも継承され（第118図）、近代・現代には中央部の耕地と大落ち込みの部分が1枚の水田となるほか、基本的にはその後もこの地区割を継承している。このように現代の台地上の地区割りの起源が16世紀にあることを検証した点が大きな成果である。

6　江戸時代

江戸時代になると遺跡の大部分が水田となり、床土と考えられる赤褐色砂質土（2層）が全体に確認できる。水田址以外では畑址と思われる大落ち込みが2ケ所ある。またこうした耕地を区画する畦畔や溝は近代以降の畦畔・溝と重なっているものが多いが、位置がわずかにずれたり、盛土によって地表面が上昇した結果、江戸時代の遺構と確認できる主要な溝が3本、道路が1本ある。また井戸は19基、池が1ケ所ある。これらの溝は水路及び道の側溝であり、井戸・池も灌漑用のものである。

すき跡（耕作址）　（第118図；図版71）

遺跡全体が江戸時代には耕地になったと思われるが、すき跡が確認されたのはⅢE区だけである。16世紀の耕作土（3層上層）の上面に多数の平行するすき跡がある。16世紀のすき跡と同じく2枚の耕地が復原でき、すき跡の方向も同一である。ただ前代にあった池1は既に埋没している。江戸時代の耕作土の花粉分析（第55表試料29）では、イネ科が34.4%と最も多い。

大落ち込み（耕作址）

大落ち込み8（第119図；図版69）　16世紀に掘られ、耕地として利用されたと思われることは前に述べた。江戸時代になると12cmほど埋没した状態で中央から東側にかけて約1m幅の幅広い掘り込みが南北方向にあらわれる。この掘り込みは何条も平行に掘られる結果、その間に幅10cm、高さ8cmほどの凸状の高まりが残る。写真図版では、全体を最後まで掘り下げた状態を示しているので、凸状の高まりは土層観察用の土手の上面に残っている。この上を灰黄色砂層が覆っていた。大落ち込みの西側は灰色砂層で埋っており、ここには中世の瓦・土器類が多量に包含されていてゴミ捨て場の状況を示し、幅広の掘り込みや凸状の高まりは認められない。よって江戸時代には大落ち込みの中央から東側が耕地として利用されたと思われる。なおこの砂層からは江戸時代伊万里染付磁器が出土している。

こうした幅広の掘り込みと凸状の高まりをもつ遺構は太平寺遺跡でも検出されており、ここでは粘土取りの跡と判断されている。菱木下遺跡ではこうした遺構が大落ち込み内だけで認められ、かつ上部を覆う砂層がⅢW区井戸37の覆土を除けばここだけにしかなく、人為的にもたらされたと思われること、幅広の掘り込みと凸状の高まりが畑の畝跡を想起させることなどから畑址とした。

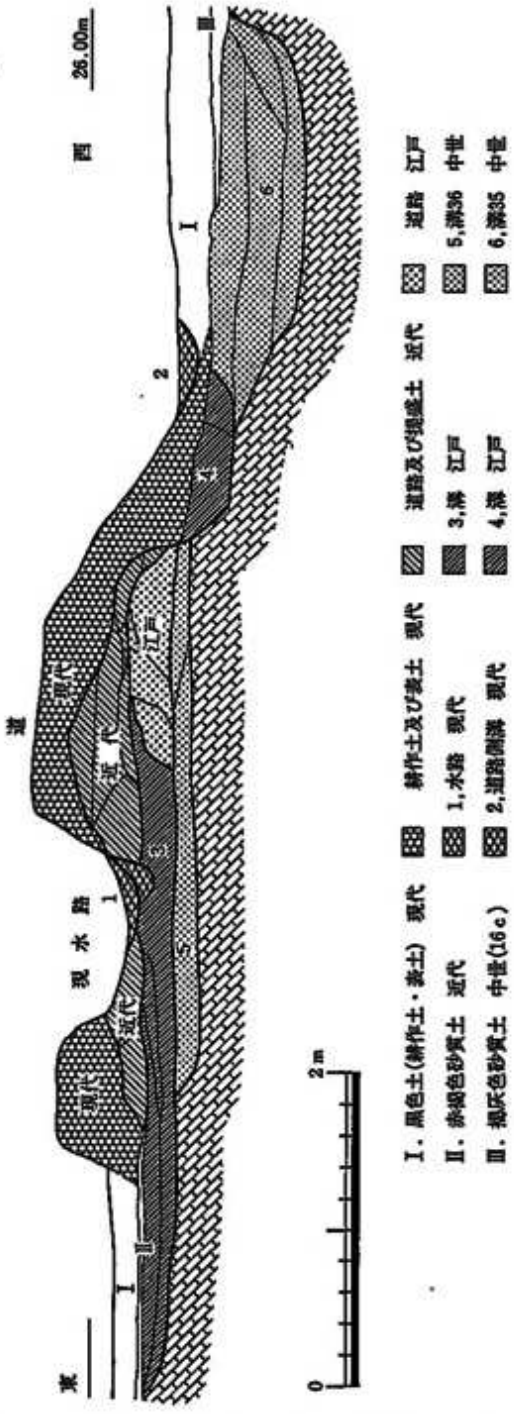
大落ち込み9　第Ⅱ調査区の北西隅から第Ⅰ調査区の北東隅にかけて深さ約50cmの大落ち込みがある。壁はほぼ垂直に掘り込む。覆土は水平に3層に分かれる。花粉分析では下層（第55表試料26）がイネ科16.0%に対し、アブラナ科が58.5%と極めて高く、大根畑であったと思われる。中層（試料27）もイネ科29.2%に対し、アブラナ科38.0%と高い比率を占める。

溝と道路状遺構　（第122図；図版71・72）

江戸時代の溝は水路と道路の側溝であり、主要なものが2本あり、ⅢW区とⅢE区との境の道路跡を挟んで両側に溝が検出された。西側の溝は道路の側溝である（図版72上）。東側の溝は幅が4mとかなり幅広く、深さ20cmある（図版72下）。この溝の北方を削平されていて確認できない。この位置には南の新池から流れ出る用水路が現在に至るまで存在しており、江戸時代においても用水路の機能を果していたと思われる。弥生時代・中世・近世・近～現代の溝が連綿とこの位置に掘られており、その変遷状況は第122図の土層図で示した。

井戸　（図版70・第30表）

井戸はすべてで16基検出された。ⅢW区・ⅢE区・ⅢW区にはかなりの数が掘られているが、ⅢE区では1基も検出されていない。井戸の掘られている位置は、おおむね現代の畦畔や水路の近くに集中している。現代の畦畔が江戸時代の畦畔の位置をほぼ踏襲していることを考慮すれば、当時の井戸も畦畔ぞいに設けられていたと推測できる。中世の井戸が建物に近接して掘られているのに対し、近世以降の井戸は耕地に付属して設けられている点に特徴がある。ⅢE区を除けば、一枚の耕地に一ケ所の井戸があり、場所によっては何回も掘り直されている。常には、灌漑用水路から導水したであろうが、旱魃等の渇水時には、こうした井戸水が利用されたと思われる。



第122図　第Ⅲ調査区水路及び道路の変遷・南壁土層図

井戸はすべて素掘りのままで、井底・井側と

もに特別な施設はない。ただ規模と上部の開き具合には種類がある。第30表の近世井戸一覧表では３種類に別けた。１類は径が１ｍ前後の細い筒形をした井戸、２類は径が 2.5m以上で、多くは径３～４ｍの広い筒形をした井戸、３類は上部がラッパ状に開き、下部が筒形をした井戸である。上部が開く形態は、近代以降の井戸をみると、井口に井戸枠を設ける為に、その部分だけ広く掘ったものである。それから類推すれば、３類の形態の井戸は、かつては井口に井戸枠があった可能性が強い。井戸の平面形はすべて円または円に近い楕円である。深さは中世の井戸と比べると２ｍ以上で、完掘できなかったものが多い。

井戸中の遺物だけでは埋められた時期はわかるが、井戸の築造時期を確定することがむずかしい。ここでは江戸時代の陶磁器を包含し、近代以降の遺物を含まないものを江戸時代の井戸とした。中世の井戸に比べて遺物の量は非常に少ない。中世の井戸は、不用なゴミが多量に投げ入れられて埋められており、遺物がコンテナに何箱も出土するのに対し、江戸時代の井戸から出土する遺物はビニール袋１袋程度である。もっとも完掘していない井戸が多いので、井底に何が放り

第30表　近世井戸（ＳＥ）一覧表　　（　）は残存値

遺構	地区名		長径 cm	短径 cm	深さ cm	形態	構造	備考	図	図版
19	ⅡW	R55	170	160	192以上	細筒形	素掘り			
20	〃	S55	265	250	210以上	上部広口形	〃			
21	ⅡE	R53	115	(100)	2ｍ以上	細筒形	〃			
22	〃	〃	605	485	〃	太筒形	〃			70
23	〃	S53	310	(300)	〃	〃	〃			
24	〃	〃	315	310	〃	〃	〃			
25	〃	〃	235	190	〃	細筒形	〃			
26	〃	〃	170	140	〃	〃	〃			
27	〃	S52	110	90	〃	〃	〃			
28	〃	〃	385	380	〃	上部広口形	〃			70
29	〃	〃	350	340	〃	〃	〃			
30	〃	S51	360	(260)	184以上	〃	〃			
31	ⅢW	〃	192	184	120	細筒形	〃			
32	〃	R50	380	380	2ｍ以上	上部広口形	〃			
33	〃	S49	390	345	〃	太筒形	〃			
34	〃	R47	100	(90)	104	細筒形	〃			
35	〃	〃	260	(210)		太筒形	〃	木製品２		
36	〃	S47	415	370	154以上	〃	〃			
37	〃	〃	460	330		〃	〃	近世の大落ち込み８の上層と同様、硬土が砂層		
45	ⅡE	S52	150	180	2ｍ以上	細筒形	〃			70

込まれているかは不明である。

こうした遺物の出土状況からみて、江戸時代の陶磁器を出土しないのに、江戸時代の井戸としたものにⅡW区井戸20がある。井戸20は黒色土器２片と須恵器１片が出土しただけで時期決定の遺物に欠ける。それゆえ遺物包含量が少ないという点から江戸時代においた。またⅢW区井戸37も15世紀までの遺物しか出土していない。この井戸は15世紀に埋没した溝24を切っているので、15世紀以降は確実である。また埋土が灰色の砂層で、他の井戸の覆土に類例がない。砂層を覆土にもつのはⅢE区大落ち込み８だけで、最上層が江戸時代の砂層である。それゆえ井戸37も江戸時代のものとした。他の井戸はすべて江戸時代の陶磁器を包含している。

池

ⅢW区S50に江戸時代の池２がある。第Ⅱ調査区と第Ⅲ調査区の間を流れる水路と、S49高台の間にあり、幅20mの小さな溜池である。第53図でⅢW区の南の果樹畑と水路の間の水田がほぼ当時の溜池の範囲であろう。この水田は調査時には休耕しており、ジメジメと滞水してアシやガマが群生していた。池の深さは 1.8m、下層の灰黒色粘質土は滞水していたことを示す。池の覆土を切って近代の井戸42や田の水抜きの樋が通っており、これらが作られる以前に埋没している。

まとめにかえて――池・井戸水による灌漑　（第123図）

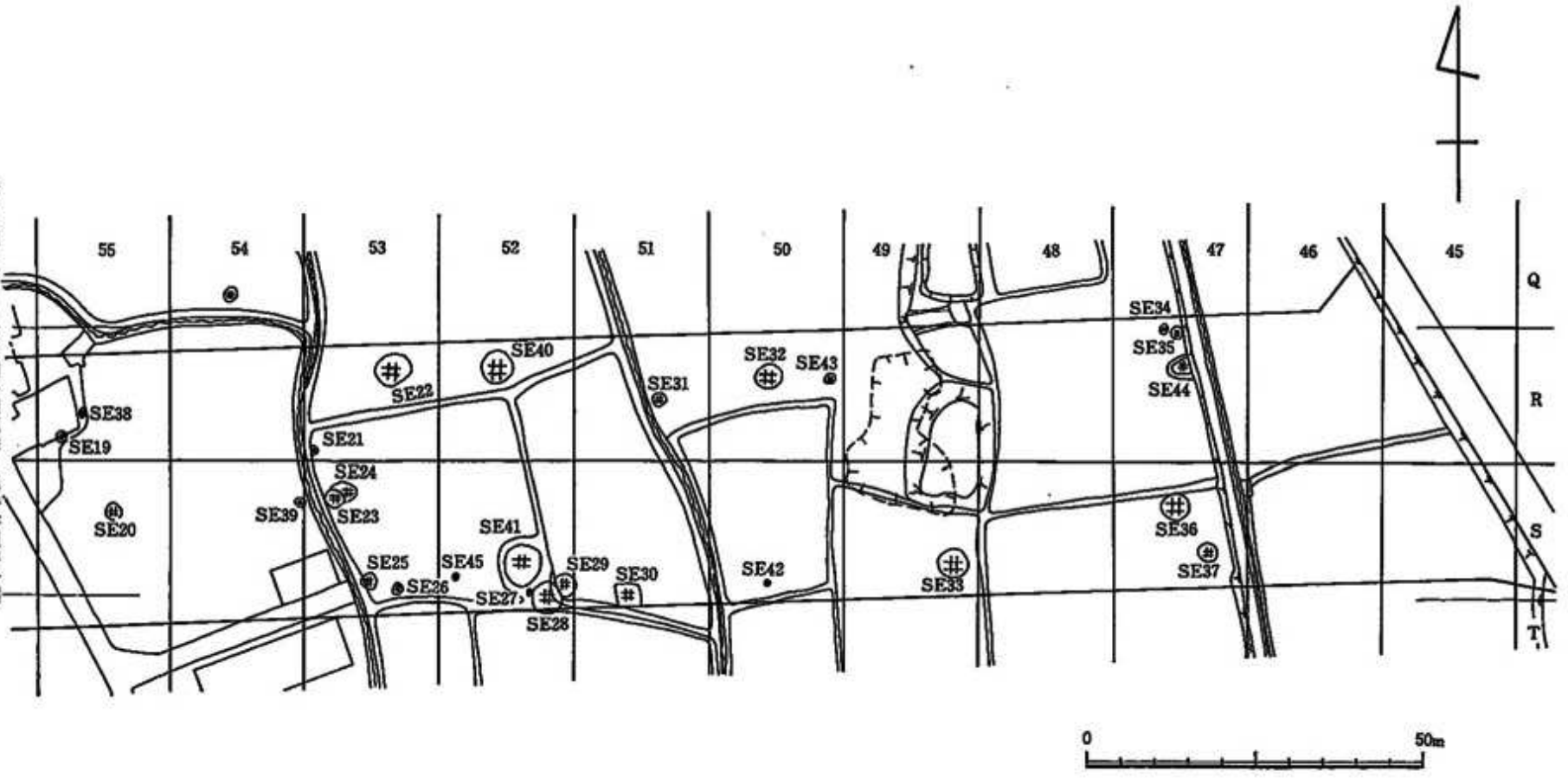
江戸時代の遺構は、この地が16世紀から引き続いて耕地であったことを示している。耕地の区割りも前代から引き継ぎ、多行の変更はあったが、ほぼ近・現代まで続いている。前代と比べて耕地に付設された井戸が多い。こうした灌漑用の井戸は、大阪府下の発掘調査で近年多数発掘されている。大阪府は灌漑用の溜池が多いのが特徴であるが、それと共にこうした井戸水による灌漑も江戸時代に多用されていたことをここに指摘することができる。

こうした井戸水による灌漑がどの時代までさかのぼるか不明だが、調査区内ではⅢE区井戸18にみるように16世紀には確実に認められる。

7　近代から現代　（第124図）

近代・現代の遺構は、土地に刻まれた歴史の現在の到達点という意味で、主要なものをとりあげることにする。近・現代はⅡW区の北西隅が一部宅地になっていた以外、すべて水田と畑である。耕地は江戸時代以来の区割を引き継いで大きな変化はない。第124図にⅢ区の近代遺構図を、第52図に調査前に道路課の作成した地形図を示した。

残された遺構の多くは、江戸時代の遺構と同様に大部分が耕地に伴う各種の遺構である。ⅡW区・ⅡE区・ⅢW区・ⅢE区の各地区を分ける三本の水路、ⅢW区とⅢE区の間にある道と両側に打ち込まれた土留め用の杭列、耕地の畦畔とそれに伴ういくつかの小溝がある。水田内には排水用の竹樋が５ヶ所検出された。灌漑用の井戸が７基、池が１ヶ所検出された。その他ⅡW区に木桶を使用した肥桶が２ヶ所、ⅡE区にしっくいで固めた深さ40cmほどの円形の浅い肥溜めが２ヶ所、ⅢE区でもしっくいで固めた長方形の肥溜めが１ヶ所検出された。肥溜めについては包含層掘り下げの際、とんでしまったものもあるが、残ったものは全体図の中に示した。



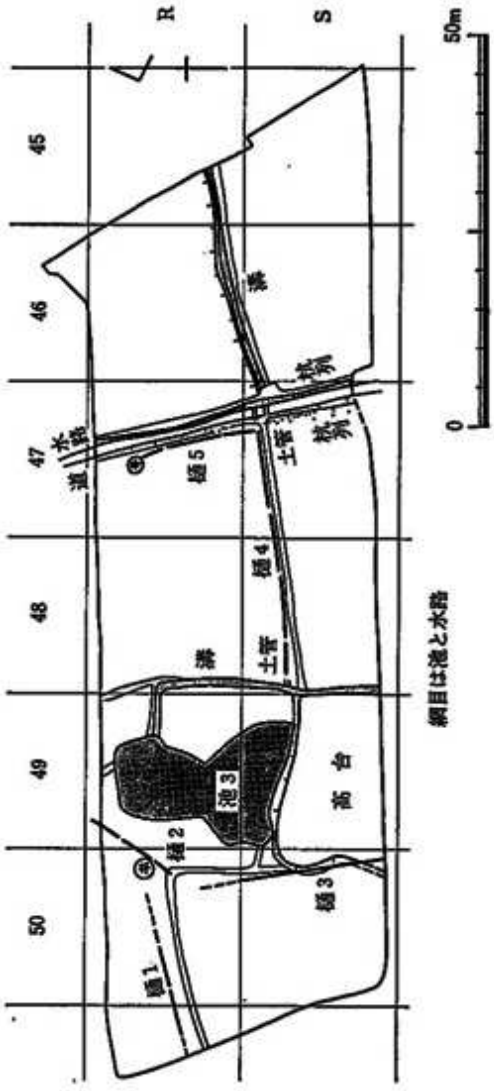
第123図　第II・第III調査区近世・近代井戸分布図

水田と樋　（第124図；図版73・74）

ⅡW区の水田から、樋が5ヶ所検出された。樋は水田の床土を10～15cmほど溝状に掘り下げ、節を抜いた太く長い竹を3～4本つないだものである。竹管は周囲をカヤで巻いていた。貝塚市ではこの施設を「ぬきず」という。「抜き水」の転訛か。樋は水田から水を抜く為に使用する。貝塚市森B遺跡（大阪府教育委員会昭和58年度調査）では、細い竹を束にして埋め込んでおり、地域によってやり方に差異がある。

ⅡW区では北東の水田の樋が完全に残っていた（樋4・5）。樋は畦畔からわずかに離して水田床土下に埋置する。竹の根に近い太い部分と先の細い部分をつなぎ合わす。樋4は4本の竹をつないでいた。東端で樋5と直角に交わる。互いに切り込みを入れて組み合わせていた。樋5は3本の竹でつなぎ、井戸44のところで終わっていた。樋4の先は土管を2本つなぐ。土管の先端は小溝につながり、先端が露出していた。

こうした樋は敗前まで付設していたとのことであるが、その起源はわからない。連結されていた素焼きの土管からすると近代のものと考えられる。最近各地の遺跡で検出されるようになったが、隣接する水田でもこうした施設を設ける水田と、設置しない水田とがある。水田の排水の良し悪しによって設置の要不要があるものと思われる。



第124図　第Ⅲ調査区近代遺構分布図

井戸　（第125図；図版70・73、第31表）

井戸は全部で7基検出された。江戸時代の井戸と同様に井戸38を除けば灌漑用の井戸である。井戸38は旧宅地内にあるので飲料用の井戸の可能性が高い。その他は、それぞれの耕地に付属している。そのうち開口していたのは井戸41・43・44の3基である。

井戸の形態は、江戸時代と同様に3種類に分かれる。1類は細筒形、2類は太筒形、3類は上部がラッパ状に開き、下部が筒形をしている。1類はⅡW区に2基ある。2類はⅡE区の井戸40の1基だけである。広筒形の井戸は近代以降はあまりみられないようである。井戸40も最上層で印判手染付磁器（明治中頃から大正年間）が1片出土したので近代の埋没としたが、その他の遺物は江戸時代以前であり、掘削時期は江戸時代にさかのぼる可能性が強い。3類の井戸は4基あ

第31表　幕末～近・現代井戸（ＳＥ）一覧表

遺構	地区名		長径 cm	短径 cm	深さ cm	形態	構造	備考	図	図版
38	ⅡW	R55	115	100	86	細筒形	素掘り	現代埋設		
39	〃	S54	160	150	129	〃	〃	〃		
40	ⅡE	R52	510	440	2m以上	太筒形	〃　構造は江戸時代に多いタイプ	近代染付出土		
41	〃	S52	635	635	〃	上部広口形	〃　廃棄井戸を掘りひろげたとのこと	調査時開口		
42	ⅢW	S50	210	200	180	〃	井桁の木枠、上部井戸瓦か	井戸瓦出土	125	42
43	〃	R50	388	352	3m以上	〃	桶側3段以上、上部井戸瓦2段にまく	開口、径は掘り方		73
44	〃	R47	220	200	〃	〃	〃	開口、径は桶の径		

る。基本的には井口に井戸枠を設ける。上部を広くラッパ状に掘るのは井戸枠を据えつける為である。ただし、井戸41だけは、一度廃棄した井戸を昭和に入って、水が不足した為掘り直したもので、すり鉢状の小池を呈していた。3類では、井戸42・43・44に井戸枠が遺存していた。

井戸42（第125図；図版70）　角に丸味のある木材を井桁に組んで釘で止める。その上に弧状のくり込みを入れた板材を二方向にのせる。井桁に組んだ材の外側はやや短めの木材で押さえている。これらの木組は筒形部の上部に置く。木組のところから上部が広く開いていく。木組みの上には井戸枠が据えられていたと思われるがその構造は不明である。井戸の覆土中からは井戸瓦が1片出土した。江戸時代の池2が埋没したのちに掘られている。

井戸43（図版73上）　井戸瓦を2段に組んで井戸枠とする。写真は上段をはずしてある。1段に12枚がめぐり、径80cmある。この井戸瓦は第210図；図版217に示したように凸面に契形の文様がある。井戸は開口していて深さ3m以上あり、底にヘドロが溜っていたので、調査は井戸瓦をはずしたにとどまり完掘していない。井筒は桶側を3段以上積み上げている。

井戸44　井戸43と同じ構造だがやや径が大きい。井筒も桶側を3段以上積みあげていたが、これも開口していたので完掘していない。井戸枠の井戸瓦は1段分遺存していたが倒壊していた。井戸瓦は、井戸43のと異なり、薄手で凸面に契形文がない。

最近、井口を井戸瓦で円形に囲った井戸の発見例が増加している。井筒に桶側を何段も積み上げている点が共通している。大和川・今池遺跡では6段も積み上げている。その時代は江戸時代から近代とするのが通例である。この種の井戸は覆土からの遺物の出土量が少ないが、その多くは近・現代の遺物を包含する。また現在でも河内や和泉の田園に開口して使用されているものもある。この種の構造の井戸の起源はまだ明らかではないが、こうした点でその多くは幕末頃に作られたものと解しておきたい。

道路と側溝・杭列　（第122図；図版72）

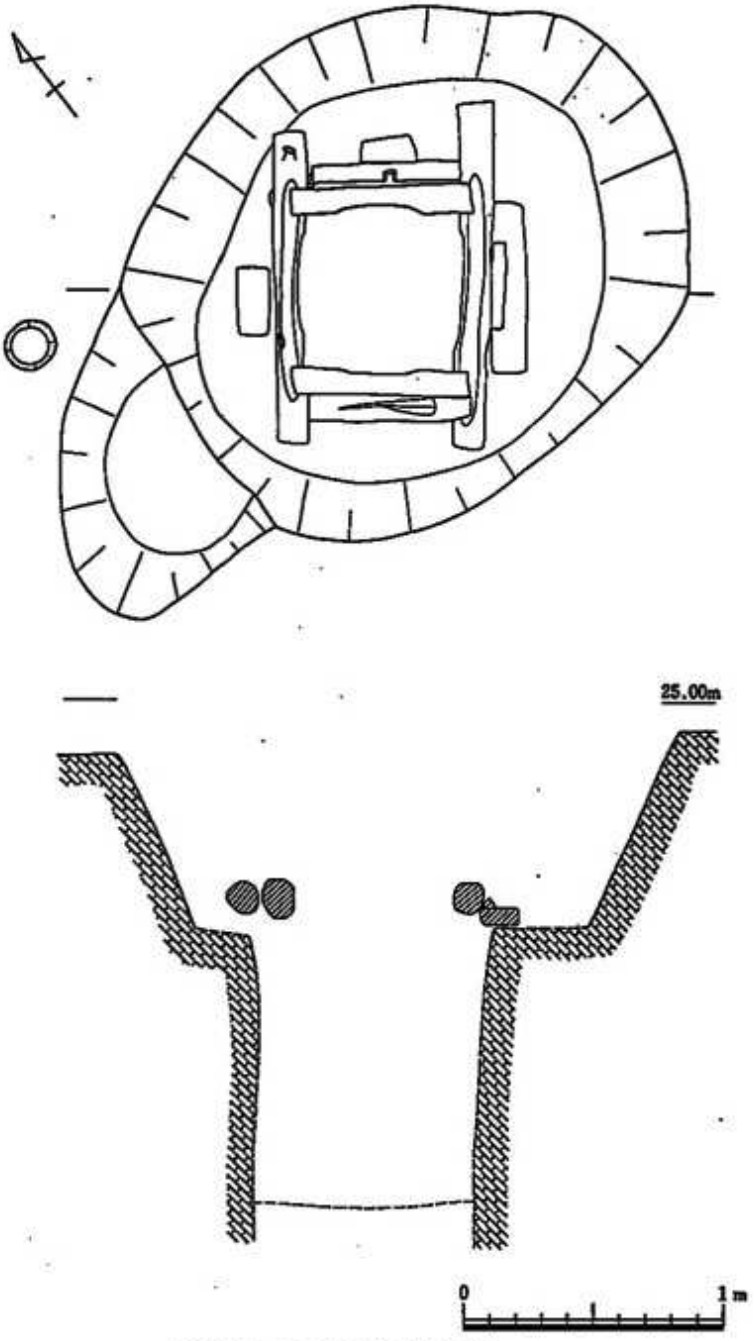
ⅡW区とⅡE区の間に府道別所草部線造成以前の道路があった。ⅡW区とⅡE区の境では、比高50cmほどの段差がある。道路はⅡE区の周に更に盛土をして作られている。

第122図にこの部分の道路と溝の変遷を土層図で示した。図版72上は道を南から見たもので右

側の高まりが道で、土留めの西側杭列がみえる。杭の入っている溝は江戸時代のものである。図版72下は道を北からみたもので白線で引いた水路の右側が道である。やはり土留めの東側杭列がわずかにみえる。道路には近代の小溝が2本入り、大小の土管が埋設されている。手前の太い土管は2本連結してあり、図版72上の道から斜めに突き出ている土管とつながっていた。

池と小丘

Ⅲ W区の中央に池3がある。池3は旧地主の話で50年前に掘ったとのこと。昭和の初年代であろう。掘削した土は東側に積んだので小山のようになった。この小山を小丘と名付けた。果樹園にしたとのこと。池3は調査時には埋没していた。

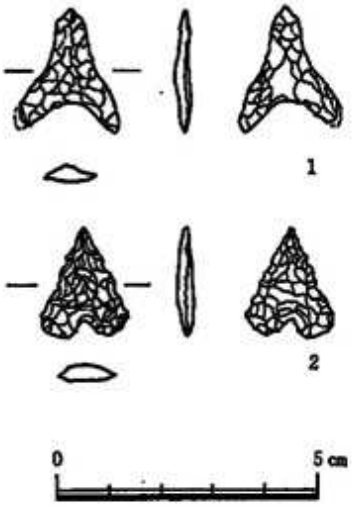


第125図　ＳＥ42平面図・断面図

第４節　遺　　物

1　縄文時代の遺物　（第126図；図版172－1・2）

土器は出土していないが、石鏃が2点出土した（第126図；図版172）。いずれも凹基式の石鏃である。菱木下遺跡では土器を伴わないので所属時期はわからないが、西接する西浦橋遺跡では縄文時代中期から晩期の土器が出土している。



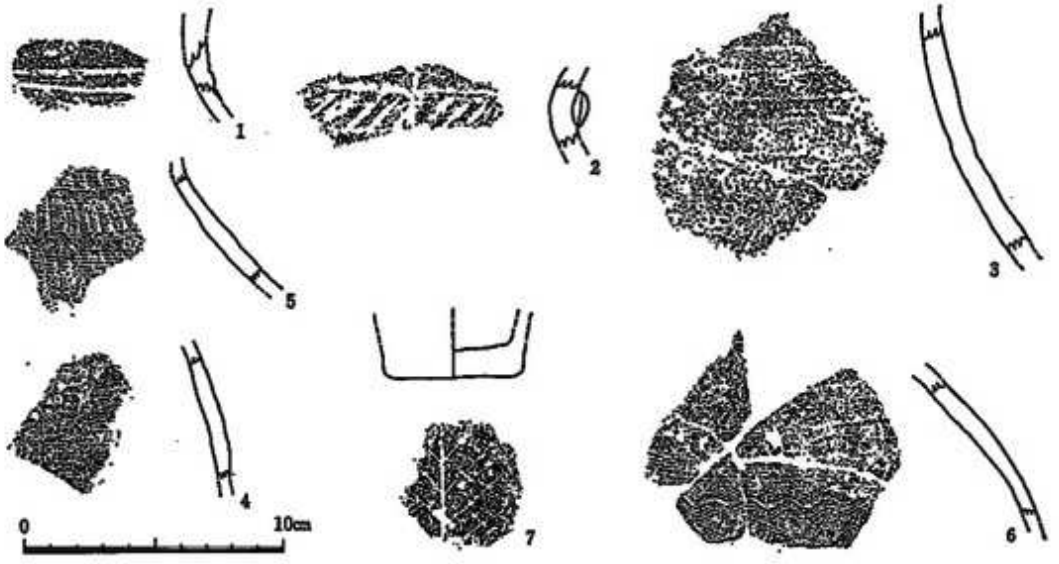
第126図　縄文時代石鏃

第126図1は、左図の面に先端部から基部にかけて逆Y字型に稜線が走り、右図の面に主要剥離面が残っていてやや平坦である。2は先端が鋭利で、側辺が鋸歯状になり、両面とも中央部が平坦である。

2　弥生時代の遺物

A　土器　（第127～134図；図版170・171）

第Ⅱ、第Ⅲ調査区より検出された遺構には、住居址、土壙、溝があり、土壙、溝の特徴は遺構本文の第14・15表の通りである。時期は弥生時代中期でも第Ⅱ－Ⅲ様式に属するものが殆どである。ⅢE区のSDA9は他の遺構と比べ新しい傾向をもつ。遺構内出土遺物では第Ⅰ様式新段階から第Ⅲ様式新段階ないし第Ⅳ様式までのものがある。遺物の残存状況は悪く、器表面の剥落したものが多い。第Ⅰ様式新段階の土器は壺の頸部破片が1片SKA27より出土しており、頸部外面にヘラ描き沈線文が2条残る（第127図1）。これにより近辺に第Ⅰ様式の遺構が存在する可能性も考えられる。



第127図　第Ⅲ調査区SKA27、SDA9出土弥生式土器拓影図

第32・33表は時期の判明した遺構を地区別、遺構の種類別に表化したものである。第Ⅱ様式では甕、甕蓋、壺、鉢、鉢壺、高坏があり、第Ⅲ様式では更に水差し形土器、細頸壺がみられる。1（第129図）の鉢壺は供伴遺物より第Ⅱ様式の中へ入れた。表の個体数は原則として口縁部の残存するものに限った。第35表の円グラフは遺構の枠を外して時期別に出土遺物を一括したものである。供膳形態には鉢、高坏、調理形態には甕、甕蓋、甑、貯蔵形態には壺類を、その他には鉢壺、水差し形土器を入れた。器種不明のものは円グラフでは除いた。壺、甕については、肉眼

で認められた胎土の違いを円グラフに表わした。河内としたものは胎土中に角閃石を、紀伊は結晶片岩を含んだものであり、和泉・その他としたものは前述の角閃石や結晶片岩の砂粒を胎土中に含んでいないものである。和泉・その他は、その殆どが在地のものと思われるが、その他の地域のものも含んでいる可能性も考えられる。ここでは河内、紀伊、和泉・その他を胎土上の違いで区別する為に、便宜上用いている。以下、時期別に簡単に弥生式土器の特徴を述べる。

第Ⅱ様式

器種は少なく、壺、甕が殆どである。他に鉢、高坏、蛸壺がみられるが、全体の１割にも満たない。

甕　口径30cm以上の大形、20cm以上、30cm未満の中形があり、中形が多くみられる。中形には紀伊の胎土のものが多いのが特徴である。第Ⅱ様式の甕全体の中で紀伊の胎土のものは約半数を

第32表　第Ⅱ様式遺構別器種別数量表

地区	遺構	壺	甕	甕壺	蛸壺	鉢	高坏	不明	合計
ⅡW	SKA 5	1 4	 5						1 9
	SKA 3	4 7	1 (紀伊) 4		1 1			1	7 (1紀伊) 12
	SDA 1	1 4	1 (紀伊) 3			1 1			3 (1紀伊) 8
ⅡE	SKA 11		2(1紀伊、1河内) 2						2(1紀伊、1河内) 2
	SKA 10		1 1						1 1
	SKA 19	 1		1 (河内) 1					1 (河内) 2
	SD 6	 2	1 (紀伊) 2						1 (紀伊) 4
ⅢW	SKA 21		1 3					 3	1 6
	SD 7	2 7	1 2					 5	3 14
ⅢE	SKA 31	 1	 2					 6	 9
	SKA 26	3 (1河内) 13	6 (2紀伊) 12					 23	9(2紀伊、1河内) 48
	SKA27	3 17	5(2紀伊、1河内) 10				 1	 45	8(2紀伊、1河内) 73
	SKA 28	3 7	4 (紀伊) 4					 12	7 (4紀伊) 23
		17(1河内) 63	23(12紀伊、2河内) 50	1 (河内) 1	1 1	1 1	 1	1 94	44(12紀伊、4河内) 211

上段：口縁部、下段：器種の判別できたものの各個体数を示す。

占めるが、これは『池上遺跡』（第２分冊・土器編、（財）大阪文化財センター、昭和54年）で報告されているのと共通する。形態は頸部がゆるやかに屈曲し、口縁端部を丸く納めたものが主であるが、中には第129図10の様に端部外面が平面をなすものもある。成形、調整は残存状況が悪く不明のものが多い。第130図６は外面に一部ヘラ削りを留める紀伊の胎土の甕である。

壺　口縁部のみの破片があり、頸が長く口縁部でゆるやかに外反して開く。口縁端部は殆ど拡張せず、端部を丸く納めたものが主であるが、２（第130図）の様に外端部が平面をなすもの、端部を肥厚させ、下端部に刻み目を施したもの（第131図１）もみられる。口径40cm以上の大形がみられ（第132図７）、口縁端部の細片では大形甕と区別のつかないものもある。文様は遺存状態が悪く殆ど図化していないが、破片に櫛描き直線文が残る。成形、調整は内外面剝離の為不明である。壺には河内の胎土のものが少量あり、口縁下端部に刻み目を施すのが特徴である。

鉢　１点あり、小さく外反する口縁部をもつ（第129図２）が、甕の器形の一種か。

高坏　基部の破片が１点だけＳＫＡ27より出土しているのみであり、これは口縁部または脚裾部が残存しないため、個体数の表から除いた。

蛸壺（第129図１）　供伴遺物より第Ⅱ様式に所属させたが断定はできない。形態はやや平な底部に筒状の体部をなし、頸部で少し狭まり口縁部で小さく開く。頸部には焼成前の孔が１つあけられている。内外面は指押えによる成形、調整で、口縁部には横ナデが施されているが、頸部外面に横ナデの筋が残る。

第Ⅲ様式

ＳＤＡ９を除く各遺構出土のものとＳＤＡ９出土のものと区別して第35表の円グラフに示したが、これはＳＤＡ９に新しい傾向がみられる為に分けたものである。第Ⅲ様式の遺構にも第Ⅱ様式の遺物が混じっている場合があるが、第Ⅲ様式の中へ全て組み込んで個体数を出した。第Ⅲ様式としたものの中でもⅡＷ区のＳＫＡ４、６、ＳＫＡ５上面、ⅡＥ区のＳＫＡ16、ⅢＥ区のＳＤＡ９については第Ⅱ様式も混じってみられる。

壺、甕が多いが、他に鉢、高坏などの占める割合が第Ⅱ様式よりも増え、全体の約２割を占める。

甕　頸部を屈曲させ、端部を丸く納めたものと肥厚または拡張したものがある。口径は30cm以上の大形、20cm以上、30cm未満の中形、20cm未満の小形があり、口縁端部を拡張したものは大形に主としてみられ、小形のものには端部を丸く納めたものか肥厚したものが多い。数量的には中、小形の甕が多い。第134図11は口縁端部を上方に拡張し、端部外面にナデによる凹線状の凹みを有する。頸部は他の甕と比較し狭まっている点と口縁端部の特徴から、第Ⅲ様式でも新しい時期に属すると思われる。他に、遺構別器種構成表には載せていないが、Ｓ49西高台Ⅱ層、明茶褐色土層からは紀伊の胎土の中形甕が１点出土している（第128図１）。これは口縁端部を上方に少し拡張し、端部外面に１条の浅い凹線文がめぐる。外面は一部ハケ目を残し、内面はナデているが、頸部内面の稜が鋭く、胴部内面をヘラ削り後ナデたものかとも考えられる。内外面には煤が

第33表　第Ⅲ様式遺構別器種別数量表　　（ＳＤＡ９を除く）

地区	遺構	広口壺	甕	甕 蓋	鉢	高 坏	水差形土器	不 明	合 計
ⅡW	SKA 5	4 (1河内)	1		1	1			7 (1河内)
	上面	7 (1河内)	2 (1紀伊)		1 (河内)	1		14 (4河内)	25(1紀伊、6河内)
	SKA 4	3	1 (紀伊)	1	1				6 (1紀伊)
		8 (1河内)	4 (1紀伊)	1	1			28 (3紀伊)	42(4紀伊、1河内)
	SKA 6		2						2
		5	2					15(2紀伊、3河内)	22(2紀伊、3河内)
ⅡE	SKA 16	1	3 (1紀伊)		1	1	1 (把手)		7 (1紀伊、1把手)
		19(2河内)	8 (1紀伊)		1	1	1	54(4紀伊、13河内)	84(5紀伊、15河内)
	SD 5	1	1						2
		2	2 (1紀伊)					11(1紀伊、4河内)	15(2紀伊、4河内)
	SD 5								
	上面	1	3 (2紀伊)					11 (1河内)	15(2紀伊、1河内)
ⅢE	SK 30				1				1
					1				1
	SK 29								
			1					7	8
		9 (1河内)	8 (2紀伊)	1	4	2	1 (把手)		[illegible]
		42(4河内)	22(6紀伊)	1	4 (1河内)	2	1	140(16紀伊、25河内)	212(16紀伊、30河内)

上段：口縁部、下段：器種の判別できたものの各個体数を示す。

付着している。甕の成形、調整は遺存状態が悪く不明のものが多いが、内外面にハケ目を施したもの、外面にハケ目の後ヘラミガキを施したものがみられる。胎土は紀伊のものが若干みられるが、これは第Ⅱ様式に属するものを含む為であり、確実に第Ⅲ様式に属する紀伊の甕は先述の第128図に示したものだけである。

壺　広口壺、細頸壺、無頸壺があり、広口壺が多く、他は少量しか出土していない。広口壺は口縁端部を上下に拡張し、端面に櫛描きまたは凹線文で文様を施したもの、無文のものがある。頸部、胴部の文様は櫛描による直線文、波状文、簾状文を施したものが主で、他に列点文、貼付凸帯の上から刻み目を施したものもみられる。口縁端部を上方に拡張したものはＳＤＡ９より数点出土し（第133図６・７）、端部外面に簾状文、波状文を、頸部に簾状文または櫛描き直線文を施している。広口壺は河内の胎土のものが少量だが認められる。細頸壺（第133図１）は河内の胎土のものが１点だけＳＤＡ９より出土している。無頸壺は３点だけＳＤＡ９より出土し（第132図３・４）、口縁端部の肥厚するものと丸く納めたものの２種類がある。壺の成形、調整は不明のものが多いが、外面ヘラミガキ・内面ハケ、内外面ハケ目、外面ナデ・内面ハケ目、内外面ヘラミガキ、外面ナデ及びヘラ削り・内面ナデなどがみられる。

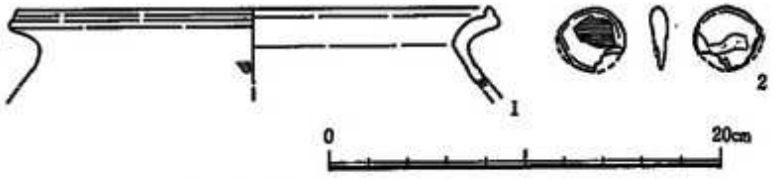
水差し形土器　口縁部破片は１点のみ出土し（第132図５）、他に胴部破片や把手も数片みられる。文様は簾状文および列点文を施しており、把手のつけ根に把手を貼りつけた後の櫛描きが巡る。

鉢　口縁部がほぼ直立するもの、口縁端部外面に粘土帯を貼りつけ段状をなすものの2種類がある。ＳＫＡ16、ＳＤＡ９出土の鉢口縁部外面には凹線文が巡り、新しい傾向をもつ（第129図12、第133図10）。12（第129図）では外面にヘラミガキが残る。胎土は河内のものが少量みられる。

高坏　口縁部がほぼ直立するもの、口縁端部が下方に垂下し端部寄り内面に凸帯が１条巡るものがあり、後者はＳＤＡ９に細片で３個体分認められたが、前者の形態をなすものが多い。坏部底は円板充填法により成形されている。脚部は高坏か鉢か区別をし難いが、内面をヘラ削り成形しているものがＳＤＡ９より４点出土しており、鉢、高坏口縁部の凹線文と共にＳＤＡ９の新しい特徴を示す。

甕蓋　口縁部破片が１点、つまみと思われる破片が３点ある。７（第134図）は小形甕の蓋か。成形、調整は遺存状態が悪く不明である。

土製円板　１点ある（第128図２）。壺胴部破片を加工したもので、外面に梯描き直線文が残る。



第128図　第Ⅱ・第Ⅲ調査区出土弥生式土器・土製円板

以上、第Ⅱ、第Ⅲ様式別に述べたが、これらは遺物が出土し時期の判明した代表的な遺構のものを取り上げ、遺構の枠を外して各時期毎に簡単に述べた。次に、代表的な遺構出土の土器について述べる。

遺構内出土弥生式土器

ＳＫＡ３　第Ⅱ様式の壺、甕、鉢壺（第129図１）、不明口縁部が出土している。但し、鉢壺は当遺跡第Ⅱ、第Ⅲ調査区を通じて１点しか出土していず、万崎池遺跡第Ⅲ調査区出土の鉢壺とは口縁部の形態等若干異なり、類例に乏しい事から、第Ⅱ様式には断定しかねるものである。

ＳＫＡ11　第Ⅱ様式の甕（第129図10、11）が出土しており、胎土は紀伊、河内である。

ＳＫＡ19　第Ⅱ様式と思われる河内の胎土の甕蓋（第129図８）と壺の底部（第129図９）、器種不明の頸部破片がある。

ＳＫＡ21　第Ⅱ様式の甕（第130図８）が出土している。甕の底部破片に胎土が紀伊のものもみられる。

ＳＫＡ26　第Ⅱ様式の壺（第131図１）、甕（第131図２）があり、壺には河内、甕には紀伊の胎土のものがみられる。

ＳＫＡ27　第Ⅱ様式の壺、甕（第131図３～６）、高坏があり、高坏は基部破片である。甕の胎土に紀伊、河内のものがある。他に１片だけだが、第Ⅰ様式新段階の壺頸部破片（第127図

1）が出土している。

ＳＫＡ28　第Ⅱ様式の壺（第130図２・３）、甕（第130図４～６）があり、甕は紀伊の胎土のものばかりである。

ＳＤＡ１　第Ⅱ様式の壺、甕、鉢（第129図２）がある。

ＳＤＡ６　第Ⅱ様式の壺、甕（第129図７）があり、甕は紀伊の胎土のものである。

ＳＤＡ７　第Ⅱ様式の壺（第130図１）、甕がある。

ＳＢＫ１　第Ⅱ様式の甕（第132図１）、第Ⅱまたは Ⅲ様式の底部破片（第132図２）が出土している。底部破片（第132図２）は器表面の剝落も手伝ってか器壁が薄く、第Ⅲ様式の可能性も考えられるものである。他に第Ⅱ様式と思われる壺頸部片、不明胴部細片があり、細片の中には河内、紀伊の胎土のものもみられる。

ＳＫＡ16　第Ⅲ様式の壺（第129図13）、甕、鉢（第129図12）、高坏脚部、水差形土器の把手がある。鉢は口縁部外面に凹線文が巡る。他に第Ⅱ様式の紀伊の胎土の甕も１点みられる。

ＳＫＡ30　第Ⅲ様式の鉢（第130図７）がある。口縁端部は外面に粘土帯を貼付け段状をなす。文様は器壁が剝落し、残存状態は悪いが、口縁、体部に櫛状文の痕跡を留める。

ＳＫＡ25　甑が２点出土している（第129図14・15）。器壁が薄い事から第Ⅲ様式の可能性が高い。底部は焼成後に内外面より回転穿孔されている。14は河内の胎土である。

ＳＤＡ５　第Ⅲ様式の壺、甕が出土している（第129図３～６）。他に紀伊の胎土の甕胴部、底部片、河内の胎土の不明胴部、底部片もみられる。

ＳＤＡ９（第127図２～７、第132図３～13、第133・134図）　菱木下遺跡第Ⅱ、第Ⅲ調査区の遺構内出土遺物の中で最も出土量が多い。第Ⅱ様式から第Ⅲ様式の新段階ないし第Ⅳ様式に属する壺、甕、甕蓋、高坏、鉢、水差し形土器が出土している。他に１点だけだが器種不明の底部破片に木の葉の圧痕が明瞭に認められた（第127図７）。器種別数量表は第34表に示した。第Ⅱ様式の壺（第132図７）、甕（第134図１）は少量だがみられる。紀伊の胎土の甕は第Ⅱ様式に属するものである。河内の胎土の壺は第Ⅱ様式（第133図４）よりも第Ⅲ様式（第133図３・５）に属するものの方が多い。ＳＤＡ９出土の土器は壺、甕、鉢の口縁部外面に凹線文ないし凹線状のものが巡るものがみられる事、高坏ないし鉢の脚部内面にヘラ削りを施したものがみられる事などから、第Ⅲ様式新段階か第Ⅳ様式に属し、他の遺構出土の遺物と比較し、新しい特徴を示す。もし、第Ⅳ様式の定義が凹線文の多用と器台の出現に求められるならば、ＳＤＡ９出土の土器は、凹線文はそれ程多用されていず、器台も出土していない点から、第Ⅲ様式新段階に属するとした方が良いかと考えられる。

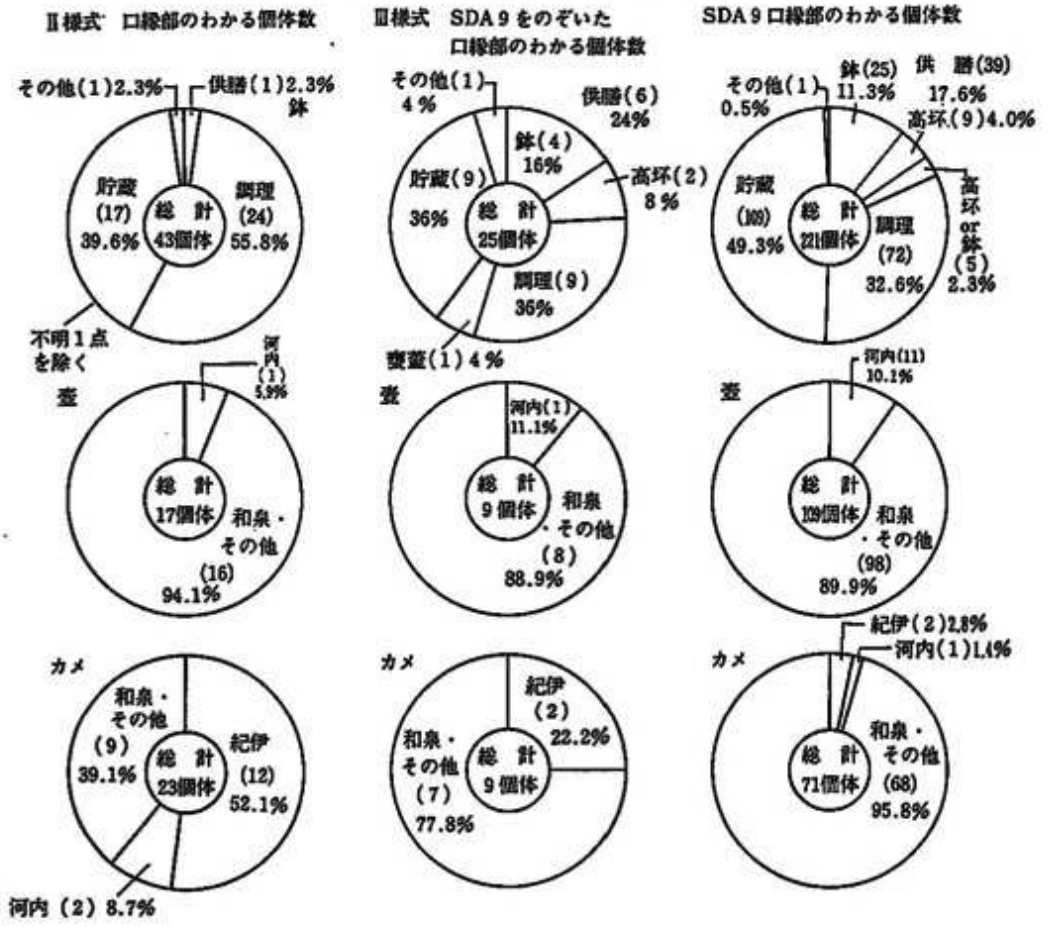
以上、遺構別に簡単にその出土遺物について述べたが、これらの特徴をまとめると、以下の通りである。先ず、第Ⅱ様式の甕には紀伊の胎土であるものが多いが、第Ⅲ様式になると紀伊の胎土のものが殆どみられなくなる事である。河内の胎土のものは第Ⅱ様式では甕、壺に少量だがみられ、第Ⅲ様式では、壺、鉢に少量だがみられる。全体に河内の土器の占める割合は低いのが特

第34表　ＳＤＡ９出土遺物数量表　　（第Ⅱ～第Ⅲ様式）

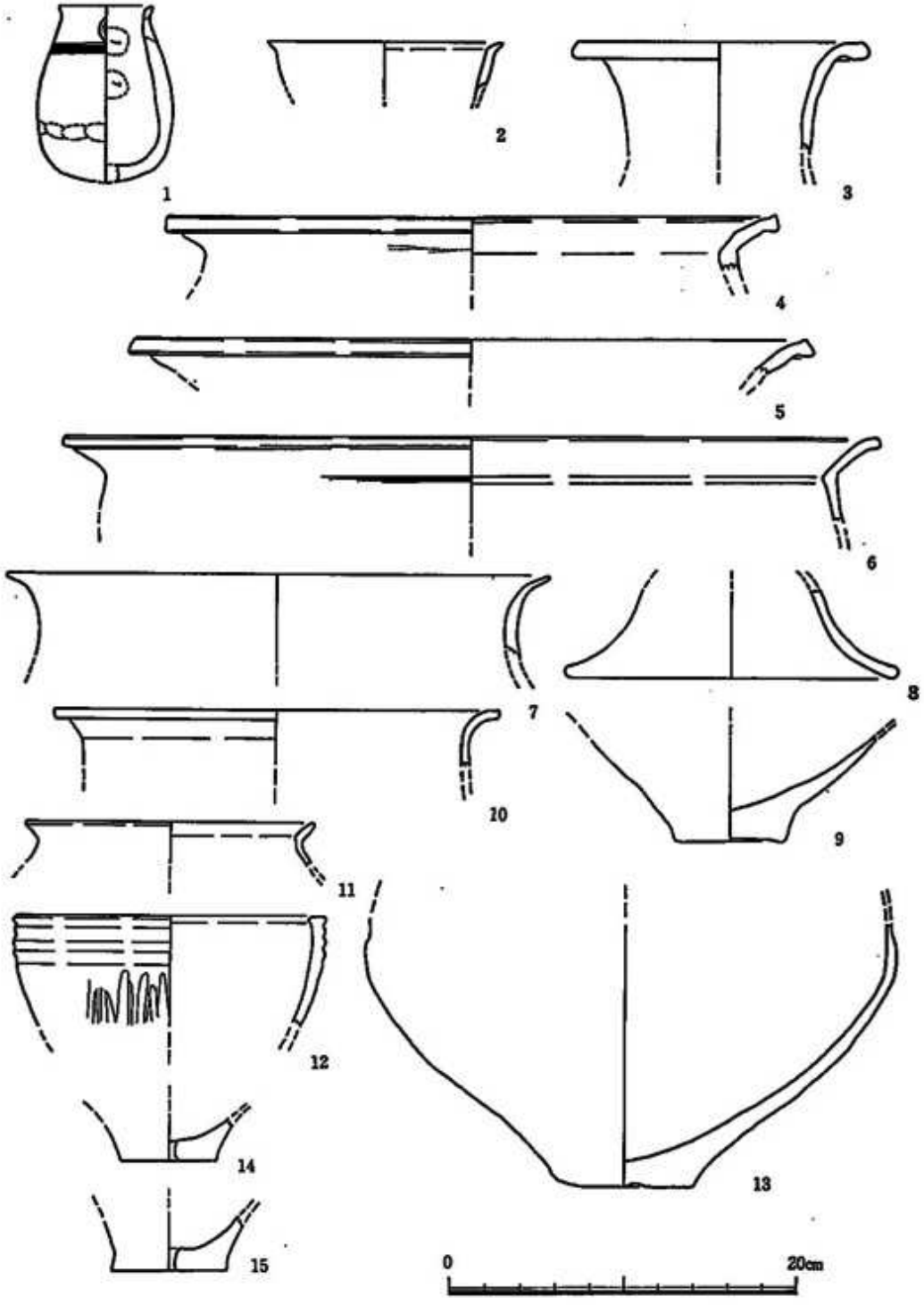
	広口壺	細頸壺	無頸壺	甕	甕か壺	甕蓋	鉢	高坏	鉢か高坏	水差形土器	不明	合　計
フク土上層	27			44(1紀伊、1河内)			9(2河内)	2		2(1把手)	5(把手)	89(1紀伊、3河内、6把手)
	64			37(2紀伊)			1	1(河内)		2	356(3紀伊、35河内)	461(5紀伊、36河内)
	16			14(1紀伊)		1		8	5		50(1紀伊、4河内)	94(2紀伊、4河内)
フク土下層	53(8河内)		3	23(1紀伊)	1		17(5河内、1把手)	6(1河内)		1(把手)	2(把手)	106(1紀伊、14河内、4把手)
	80(1河内)			36(2紀伊)			2	5		1	342(19河内)	466(2紀伊、20河内)
	27			25(3河内)		1	2	6	3		59(5河内)	124(8河内)
フク土最下層	17(1河内)	1(河内)		4		1			3			26(2河内)
	27(1河内)			3(1紀伊)							132(1紀伊、9河内)	162(2紀伊、10河内)
	5			4			1	2			8(1河内)	20(1河内)
層位不明	8(1河内)							1	2			11(1河内)
	22(1河内)			6(1紀伊)			1				62(1紀伊、6河内)	91(5紀伊、7河内)
	4(1河内)			1				2	2		10(1河内)	19(2河内)
合　計	105(10河内)	1(河内)	3	71(2紀伊、1河内)	1	1	26(7河内、1把手)	9(1河内)	5	3(2把手)	7(把手)	232(2紀伊、20河内、10把手)
	193(3河内)			82(6紀伊)			4	6(1河内)		3	892(5紀伊、69河内)	1180(14紀伊、73河内)
	52(1河内)			45(1紀伊、3河内)		2	3	18	10		127(1紀伊、11河内)	257(2紀伊、15河内)

上段：口縁部、中段：頸、胴部、下段：底部または脚部の各個体数を示す。

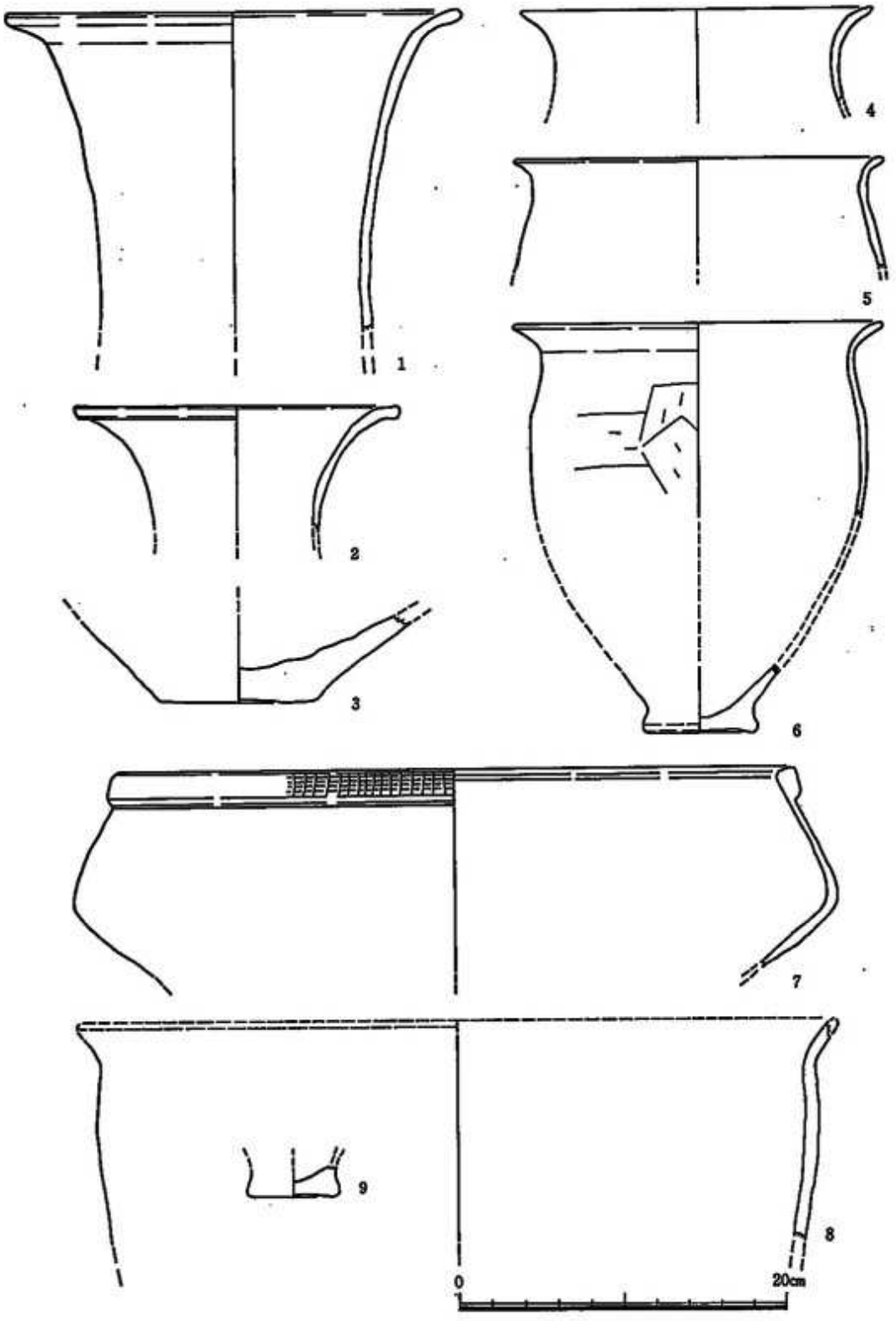
第35表　弥生式土器の器種組成および胎土組成の比率



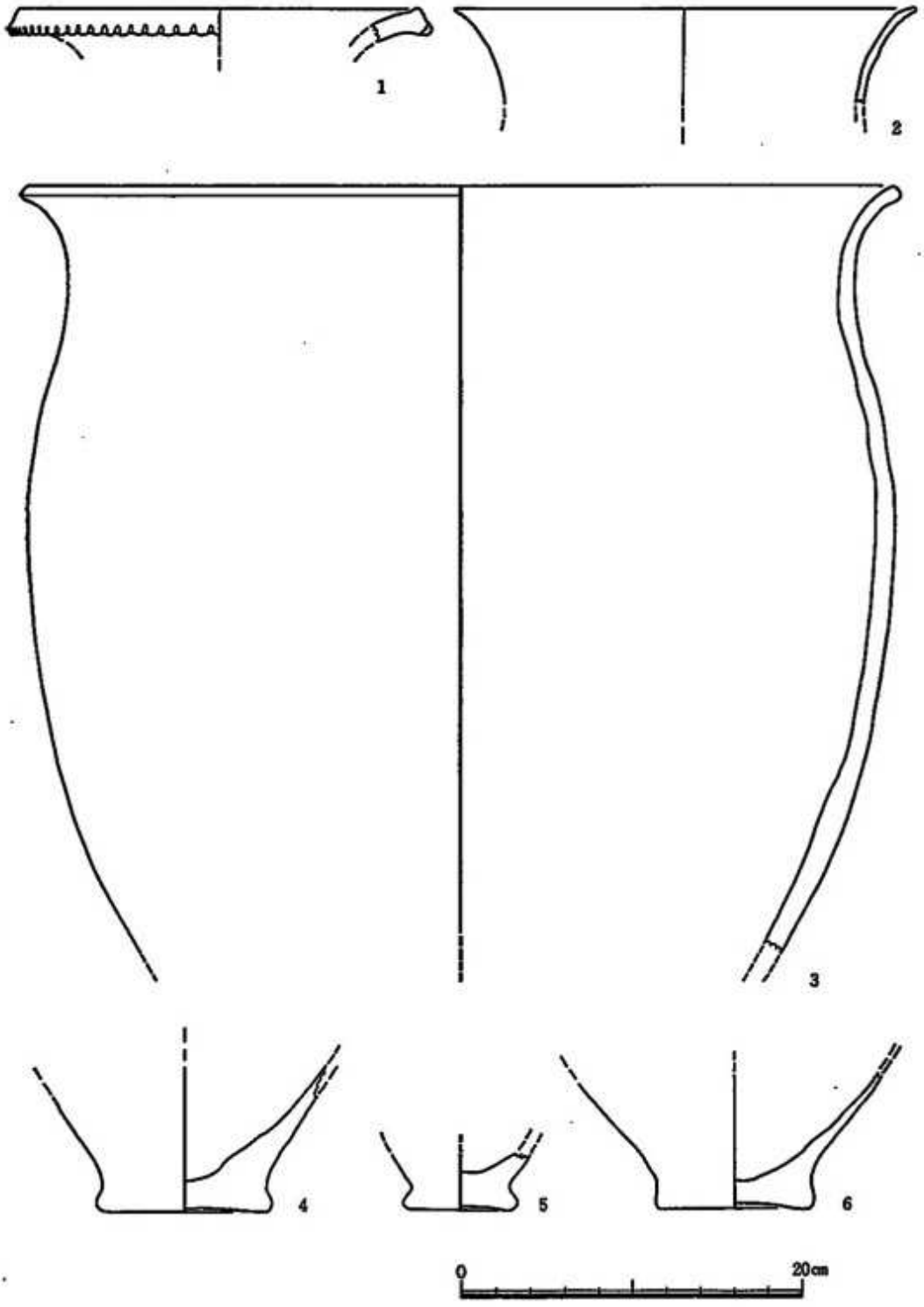
徴である。ＳＤＡ９出土の遺物には、ＳＫＡ16を除いて、他の遺構出土の遺物と比べ新しい特徴を示すものが認められ、これは遺構の切り合い関係の上からも説明がなされている通りである。



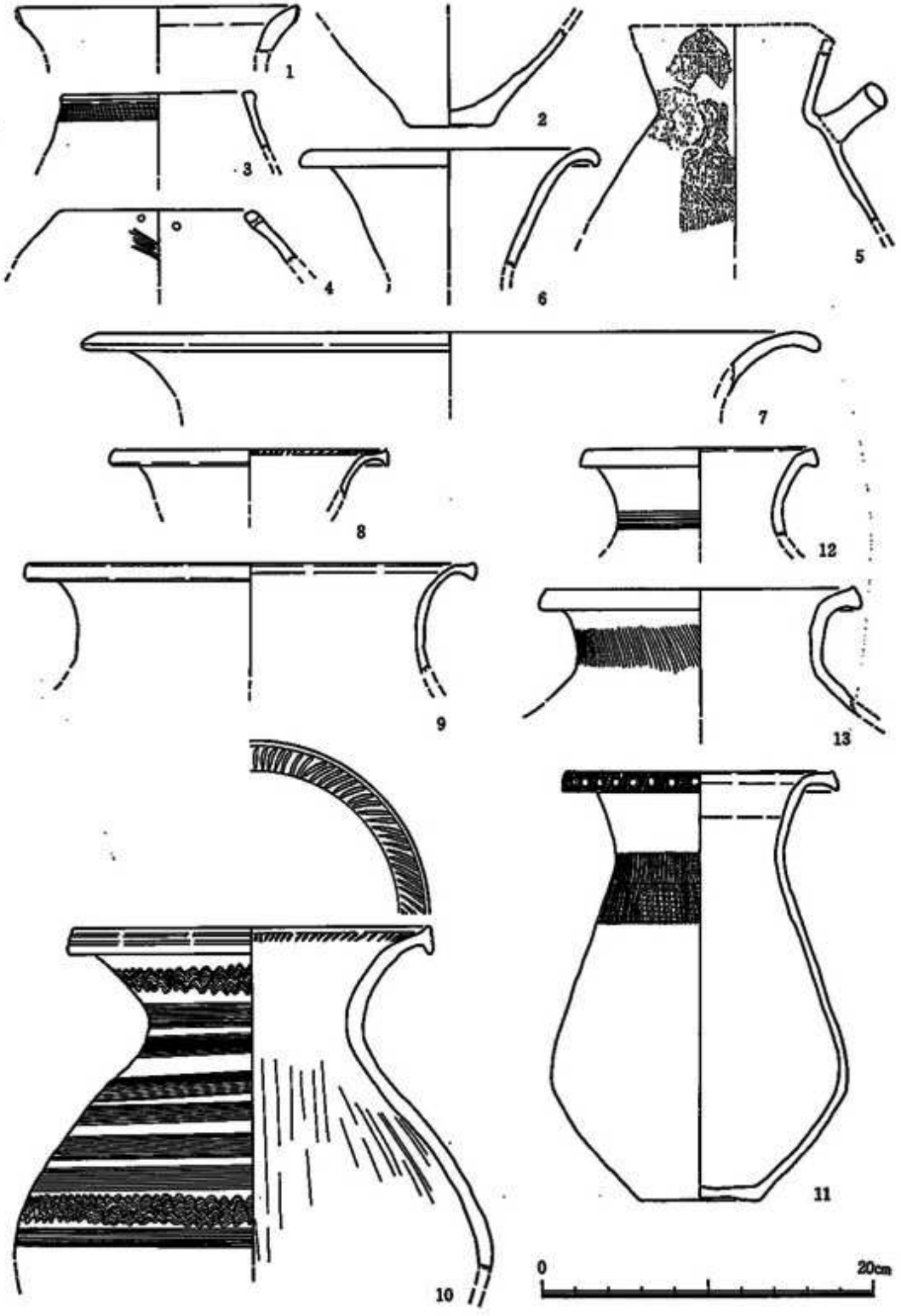
第129図　第Ⅱ調査区出土弥生式土器



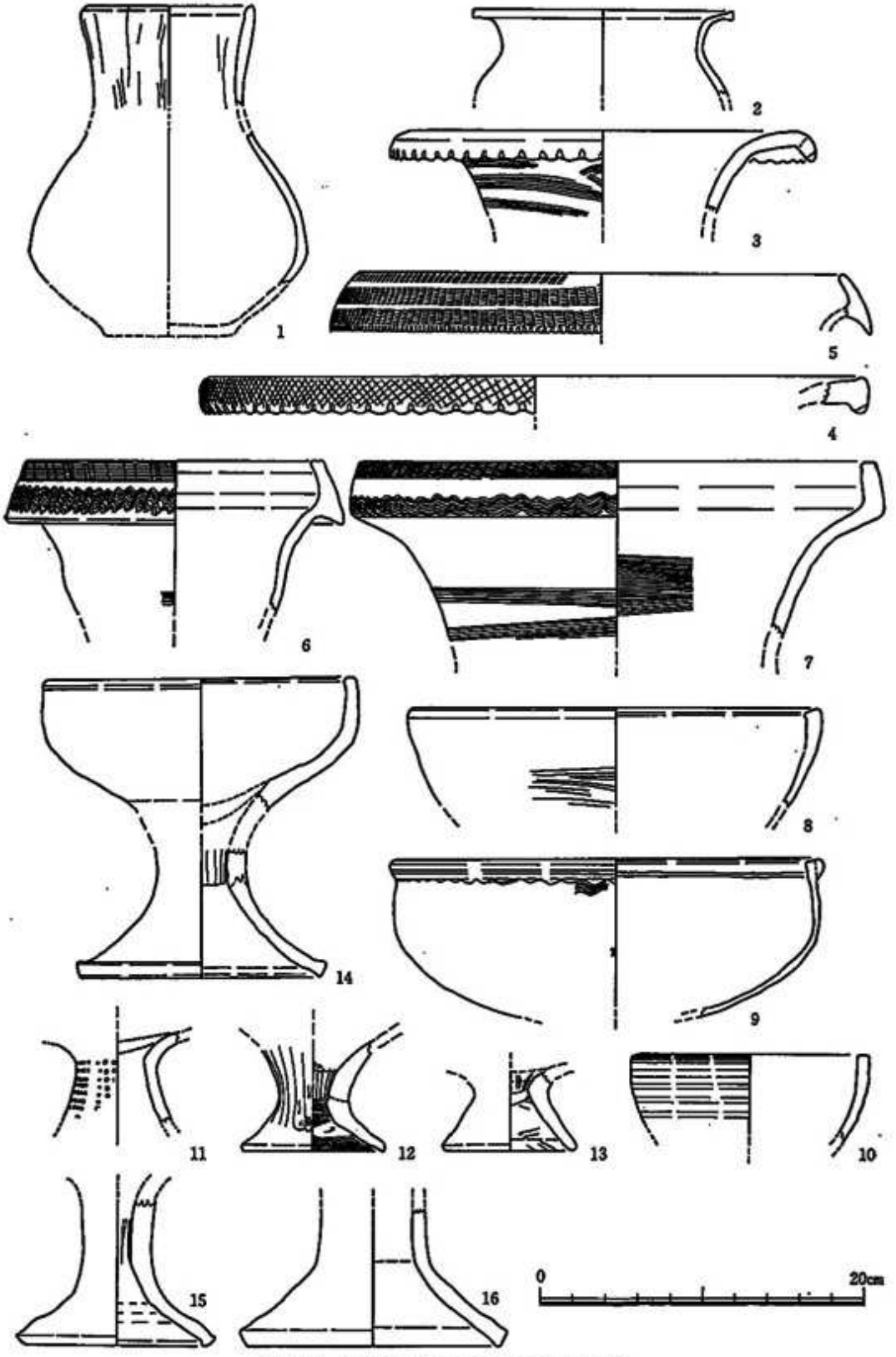
第130図　第Ⅲ調査区出土弥生式土器



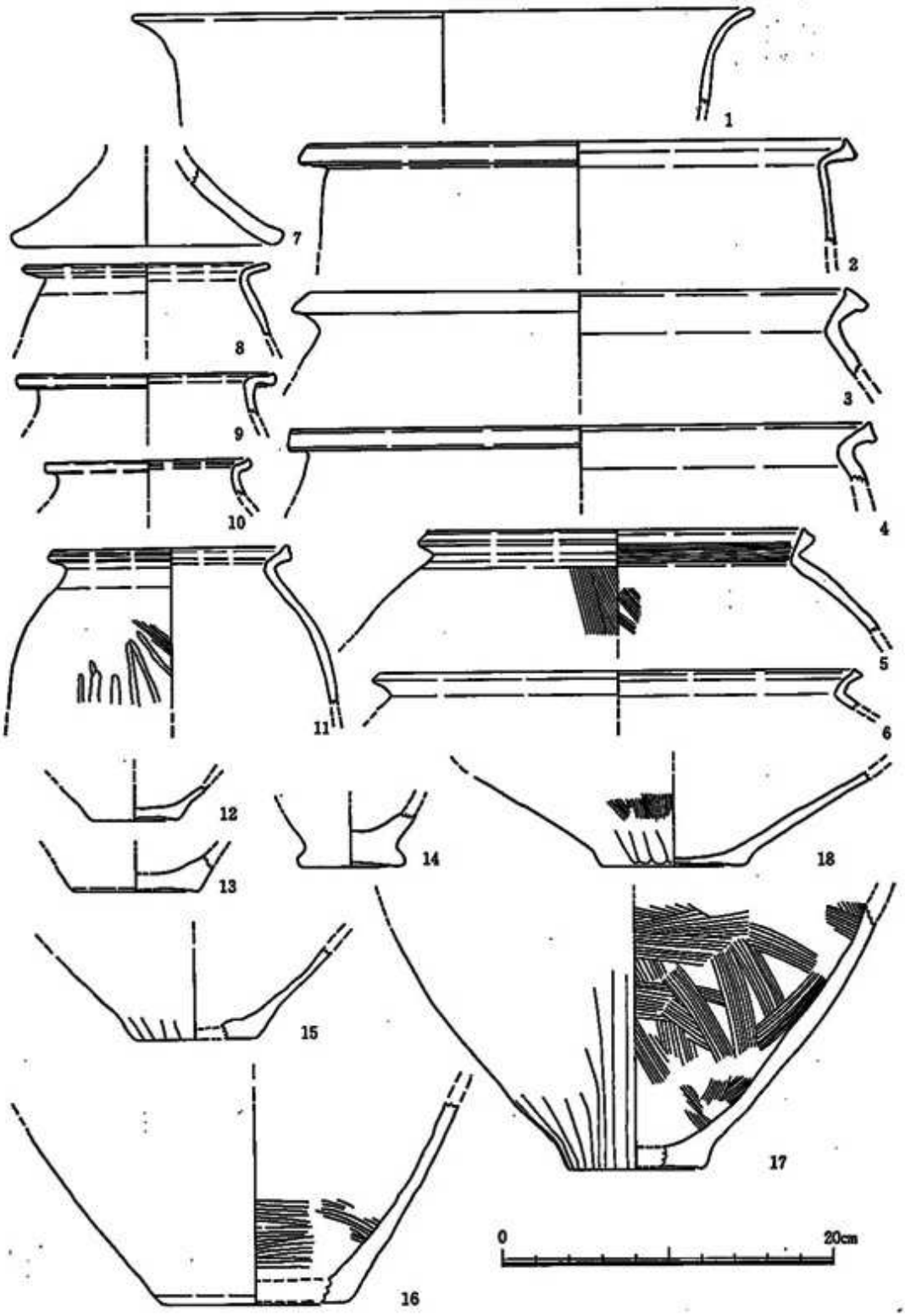
第131図　第Ⅲ調査区ＳＫＡ26・27出土弥生式土器



第132図　第Ⅲ調査区ＳＢＫ１、ＳＤＡ９出土弥生式土器



第133図　第Ⅲ調査区ＳＤＡ９出土弥生式土器



第134図　第Ⅲ調査区ＳＤＡ９出土弥生式土器

B 石器 （第135～140図；図版172～175・第36表）

弥生時代の石器の種類と数量は第36表に示した。石庖丁から打製石錐まで定形化した石器は83点、不定形石器、不定形刃器、使用・加工痕のある剝片を石器に含めると 162点となる。第62・63図の石器分布図には 176点と表示した。その差が14点あるが、後3者のいずれかに属するもので、第36表には表示しなかった。その他石器未成品が41点、フレイク・チップ・石核が826点である。

第36表 弥生時代石器数量表

種類	成品	未成品
石庖丁	3	1
磨製石斧	1	1
ハンマーストーン	2	—
叩き石	1	—
磨石	6	—
軽石	2	—
磨製石剣	—	1
打製石剣	3	2
打製石槍	3	—
打製石鏃	54	32
打製石錐	8	4
不定形刃器	48	—
不定形石器	8	—
使用・加工痕のある剝片	23	—
合計	162	41

石庖丁（第135図1～4；図版173－5～7） 石庖丁は3点で、未成品が1点出土した。形態は杏仁形態1点（1）、直線刃半月形態2点（2・4）である。未成品（3）は背部の稜線に直交して短い沈線状の打撃痕が多数ある。刃部は磨きだされていないが、なかばまで直線をなすように割られ、ここにも同様の打撃痕がある。よってこの未成品も直線刃半月形態となる。

磨製石斧（第135図6；図版173－4） 太形蛤刃石斧が1点出土。刃部方向からの打撃によって片面が剝離している。基端の1部に自然面が残っている。基端周縁には多数の敲打痕がある。

ハンマーストーン（第136図3・6） 3は細長い自然石の先端と両側面に敲打痕がある。6は両端にあるが、側面は使用していない。

叩き石（第136図1） 厚手で細長い石の一方の側面に敲打痕がある。先端に割れ口があるが、これは使用痕ではなく、後世の損壊である。

磨石（第136図2・7；図版173－3） 偏平な石の両面ないしは片面に磨痕がある。2・7ともかなり磨られており、2は両面に赤色顔料が付着していた。

軽石（第136図4・5） 軽石は2点出土したが、中世以降の土層に含まれており、弥生時代のものとの確証はない。いずれも自然石のままで加工痕はない。

磨製石剣（第135図5；図版173－1） 未成品である。研磨による線条痕が明瞭に残る。断面が凸レンズ状をなし、中央に鈍い稜線がある。両刃の石剣状を呈するが、先端にわずかに平坦な面を残している。表裏共に形を整える際の剝離痕がかなり残っている。

打製石剣（第137図1～3；図版174－1～3） いずれも基部が残っているだけである。1は幅広の基部、2は狭い基部、3は両側が扇状に拡がる。

打製石槍（第137図4・5；図版174－4・5） 3点出土したが、1点は先端部だけで、図示した2点は完形品である。打製石剣に比べて短く、4は基部に自然面を残す。

打製石鏃（第138・139図；図版172－3～29） 打製石鏃は完形ないしはそれに近いものは

第37表　縄文・弥生時代石器一覧表(1)

図番号	図版番号	種　類	地区	遺　構	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	備　考
126— 1	172— 1	石　鏃	ⅡE	土壙墓262	2.3	1.9	0.3	0.86	縄文時代
2	〃— 2	〃	ⅢE	3層	2.1	1.7	0.3	0.77	〃
135— 1	173— 6	石庖丁	ⅢW	礫群1下	(9.9)	6.5	0.7	63.0	以下弥生時代
2	〃— 5	〃	ⅡE	土壙墓75	(7.6)	3.7	0.8	35.4	
3		打製石斧	〃	5層	(10.8)	(4.8)	1.4	89.5	
4	173— 7	石庖丁	〃	〃	(7.0)	4.7	0.6	26.7	
5	〃— 1	磨製石剣(未成品)	ⅡW	溝1	6.8	4.3	1.6	51.7	
6	〃— 4	磨製石斧	ⅢW	小丘	(11.0)	(5.9)	(3.8)	380.0	
136— 1		叩き石	ⅢE	大落ち込み7	16.7	6.5	3.9	570.0	
2	173— 3	磨　石	ⅡW	5層	10.5	7.3	2.5	306.9	
3		ハンマーストーン	〃	4層	15.4	5.9	4.0	472.8	
4		軽　石	ⅢW	小丘	5.5	3.8	3.1	17.0	
5		〃	ⅡE	3層	4.9	3.2	2.9	12.5	
6		ハンマーストーン	〃	溝25	11.0	3.6	3.2	179.3	
7	173— 2	磨　石	〃	井戸4	5.1	3.7	1.6	53.9	
137— 1	174— 1	打製石剣	〃	4層	(6.3)	6.0	1.7	70.0	
2	〃— 2	〃	ⅢW	3層	(9.1)	3.5	1.3	53.0	
3	〃— 1	〃	〃	溝7	(5.0)	3.6	1.0	20.0	
4	〃— 4	石　槍	ⅡE	5層	(8.3)	2.2	1.2	22.7	
5	〃— 5	〃	ⅢE	溝9	7.2	2.7	0.9	19.93	
138— 1	172— 3	石　鏃	ⅡE	溝24	2.5	1.6	0.3	1.25	
2	〃— 6	〃	ⅢE	3層	3.0	1.8	0.4	2.0	
3	〃— 4	〃	ⅡE	5層	(2.2)	1.1	0.3	1.0	
4	〃— 5	〃	〃	土壙17	(2.6)	1.9	0.4	2.34	
5	〃— 7	〃	〃	土壙墓262	(1.8)	1.2	0.2	0.56	
6	〃— 8	〃	ⅢE	竪穴住居址1	2.11	0.96	0.3	0.83	
7	〃— 9	〃	〃	土壙27	(2.5)	1.6	0.3	1.72	
8	〃—10	〃	ⅡE	Pit19	2.6	1.5	0.3	1.34	
9	〃—12	〃	ⅡW	土壙5	3.53	0.69	0.36	1.83	
10	〃—11	〃	ⅡE	土壙60	3.5	1.7	0.3	1.79	
11	〃—16	〃	〃	土壙墓252	3.2	1.1	0.4	1.21	
12	〃—15	〃	〃	土壙墓34	2.9	1.3	0.3	1.34	
13	〃—13	〃	ⅡW	土壙5	4.1	1.9	0.5	3.58	

第37表 縄文・弥生時代石器一覧表(2)

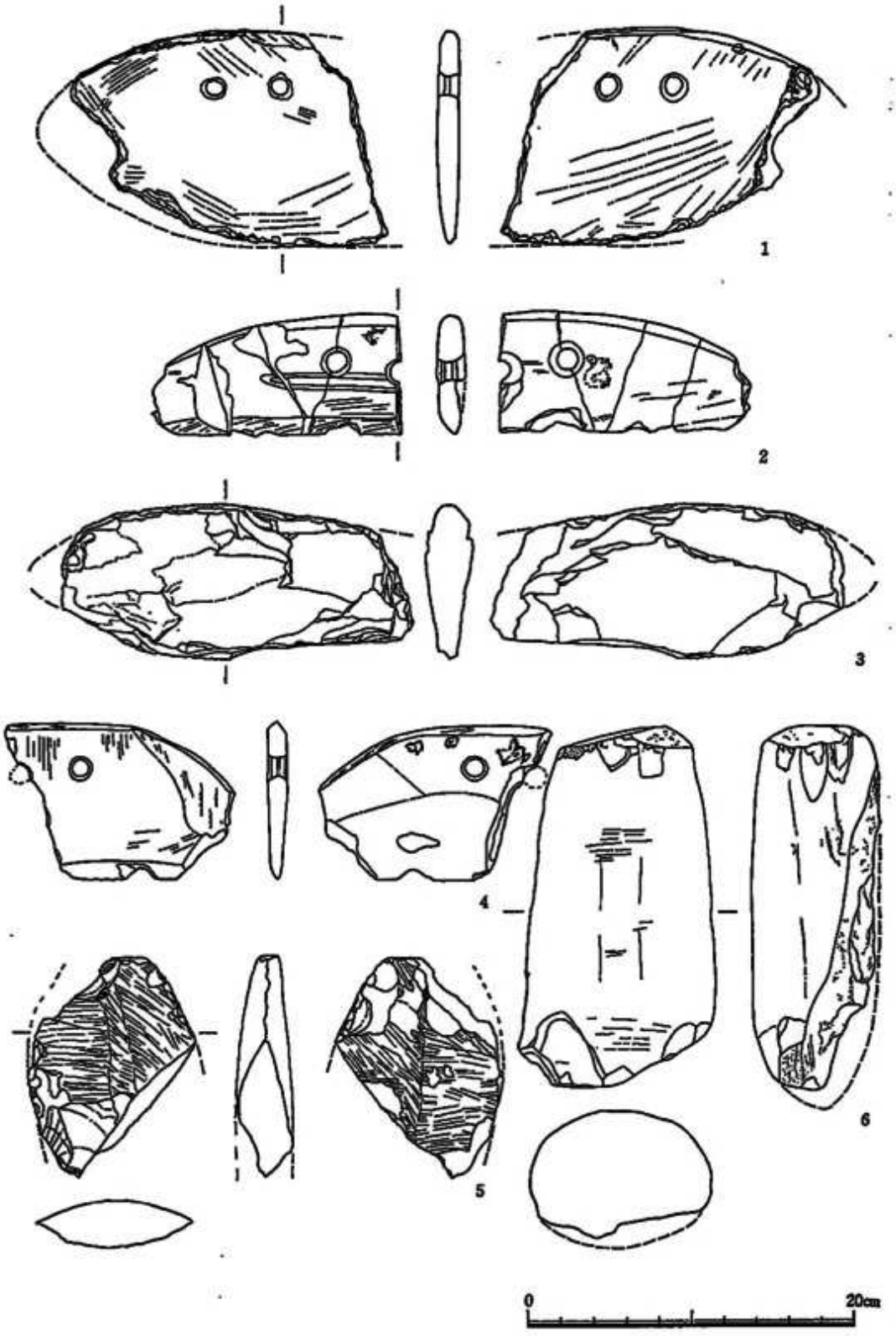
図番号	図版番号	種類	地区	遺構	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	備考
138－14	172－14	石鏃	ⅡW	5層	(4.0)	1.9	0.6	3.6	
15	〃－17	〃	ⅡE	Pit84	(3.6)	1.4	0.6	3.5	
16	〃－18	〃	ⅢE	土壙27	2.6	1.2	0.4	1.1	
17	〃－19	〃	〃	大落ち込み8	(3.1)	1.3	0.3	0.86	
139－1	〃－20	〃	ⅡE	溝24	2.9	1.2	0.8	1.43	
2	〃－21	〃	ⅢW	土壙352	2.6	1.4	0.4	1.5	
3	〃－23	〃	ⅡE	土壙墓249	3.6	1.3	0.4	2.19	
4	〃－22	〃	ⅢE	大落ち込み8	(4.7)	2.6	0.8	9.46	
5	〃－24	〃	ⅡE	1層	4.9	2.3	0.6	5.4	
6	〃－25	〃	〃	4層	5.3	2.6	0.7	6.5	
7	〃－27	〃	〃	土壙墓67	5.2	2.7	1.0	12.6	
8	〃－29	〃	ⅢE	大落ち込み8	4.7	2.6	0.8	9.46	
9	〃－28	〃	ⅡE	土壙60	4.8	2.5	0.9	11.0	
10	〃－26	〃	〃	土壙墓242	5.5	3.2	1.2	23.0	
140－1	175－1	石錐	〃	土壙墓240	5.0	1.3	1.0	6.4	
2	〃－5	〃	〃	土壙墓169	3.64	2.88	0.96	6.2	
3	〃－3	〃	〃	土壙墓34	(4.6)	2.1	0.8	5.6	
4	〃－2	〃	ⅢE	Pit231	5.5	2.0	0.7	6.1	
5	〃－4	〃	〃	土壙27	(5.6)	2.5	0.6	8.3	
6	〃－6	〃	〃	3層	2.3	1.6	0.5	2.6	
7	〃－8	不定形石刃	ⅡE	2層	6.1	2.8	1.1	13.6	石匕
8	〃－12	不定形石器	ⅡW	井戸1	6.0	4.2	1.3	38.58	契形石器

大部分図示した。基部の形態で分けると、凹基式（第138図1）、平基式（2～4）、円基式（5～14）、凸基式（第138図15～17、第139図1～6）に分かれる。全体の形状から更に細分が可能である。

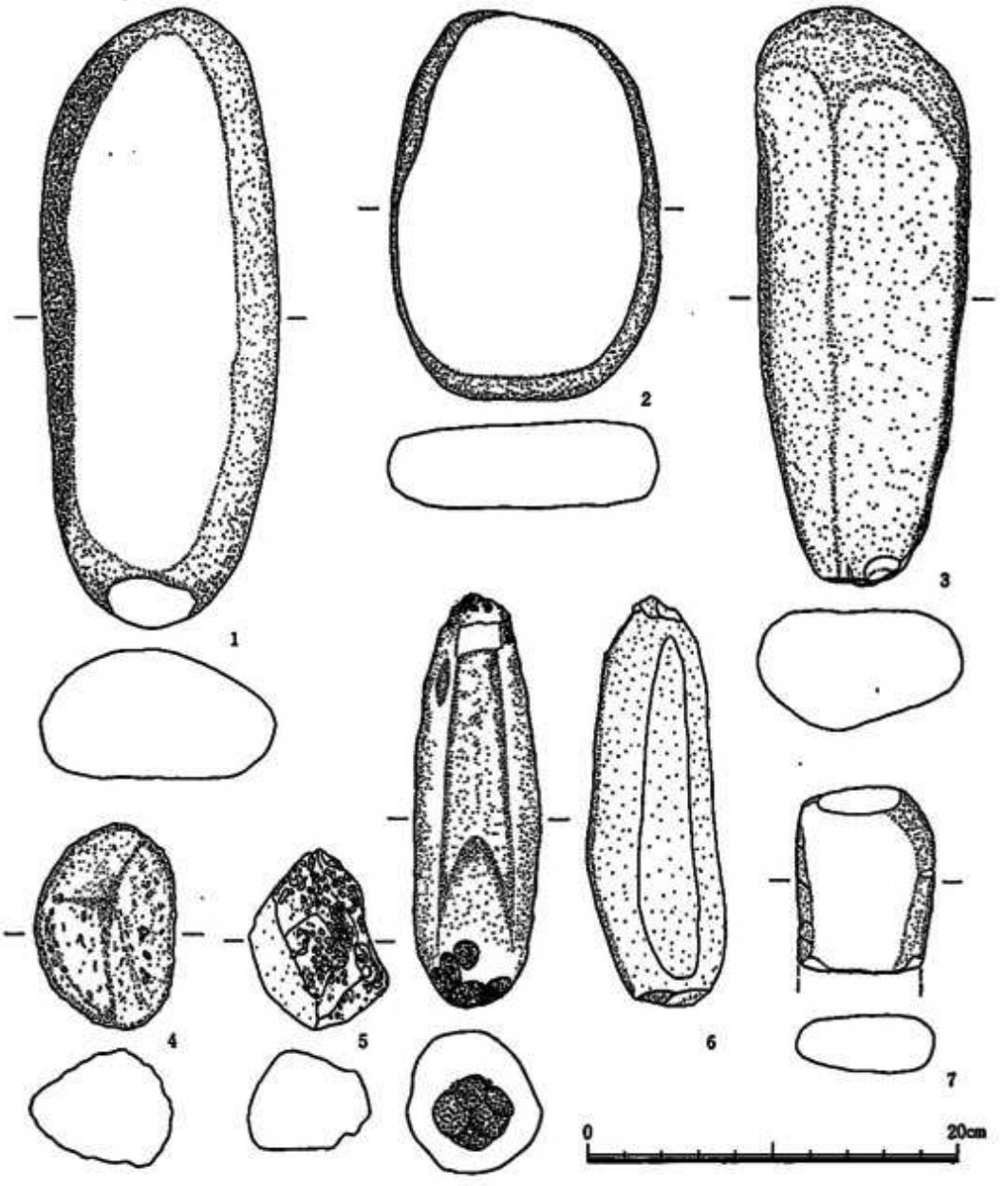
凹基式、平基式は少なく、主流は円基式のいわゆるしずく形の石鏃である。ついで凸基式のものがつづくが、鏃身と茎の境を明瞭につくり出したものは少ない。大きさは3cm前後が多く、2cm以下の小型品、4cm以上の大型品は少ない。

打製石錐（第140図1～6；図版175－1～6）　8点出土中6点を図示した。すべて形態が異なる。

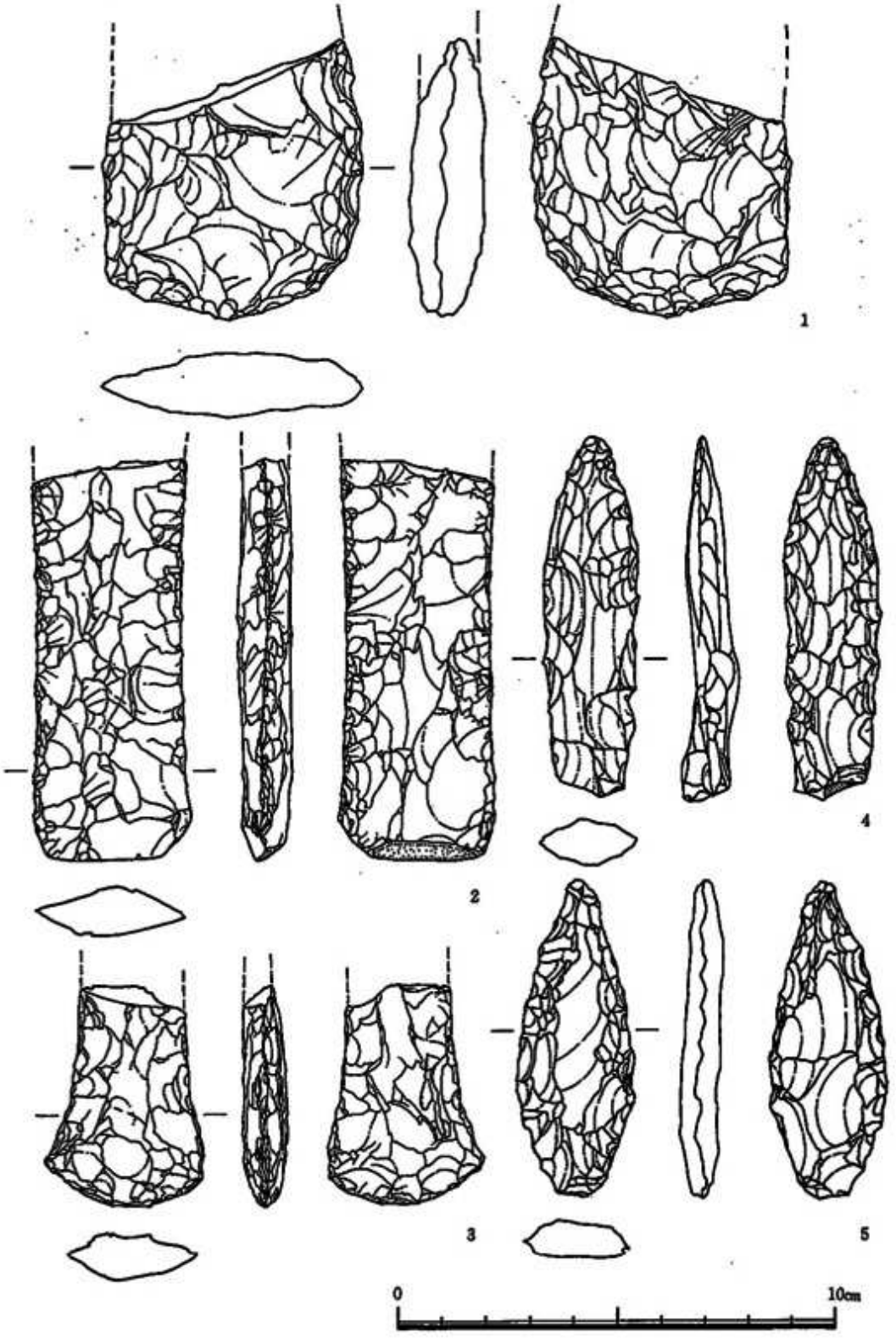
不定形刃器（第140図7；図版175－7～11）　刃部のつくり出されている不定形の剥片をここに含めた。その中のいくつかは7のように三角形を呈し、最長辺に刃部があって定形化してい



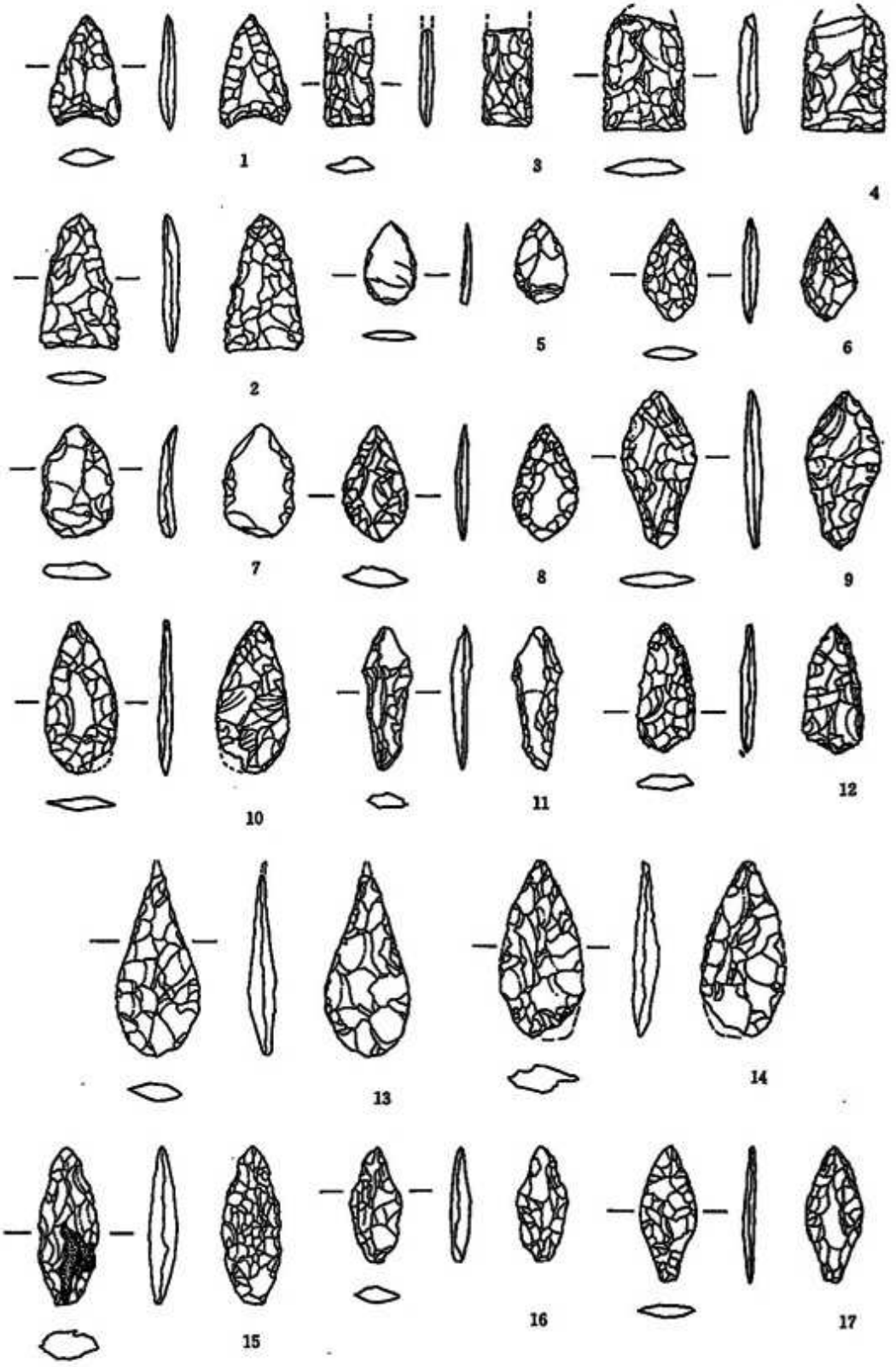
第135図 弥 生 時 代 石 器



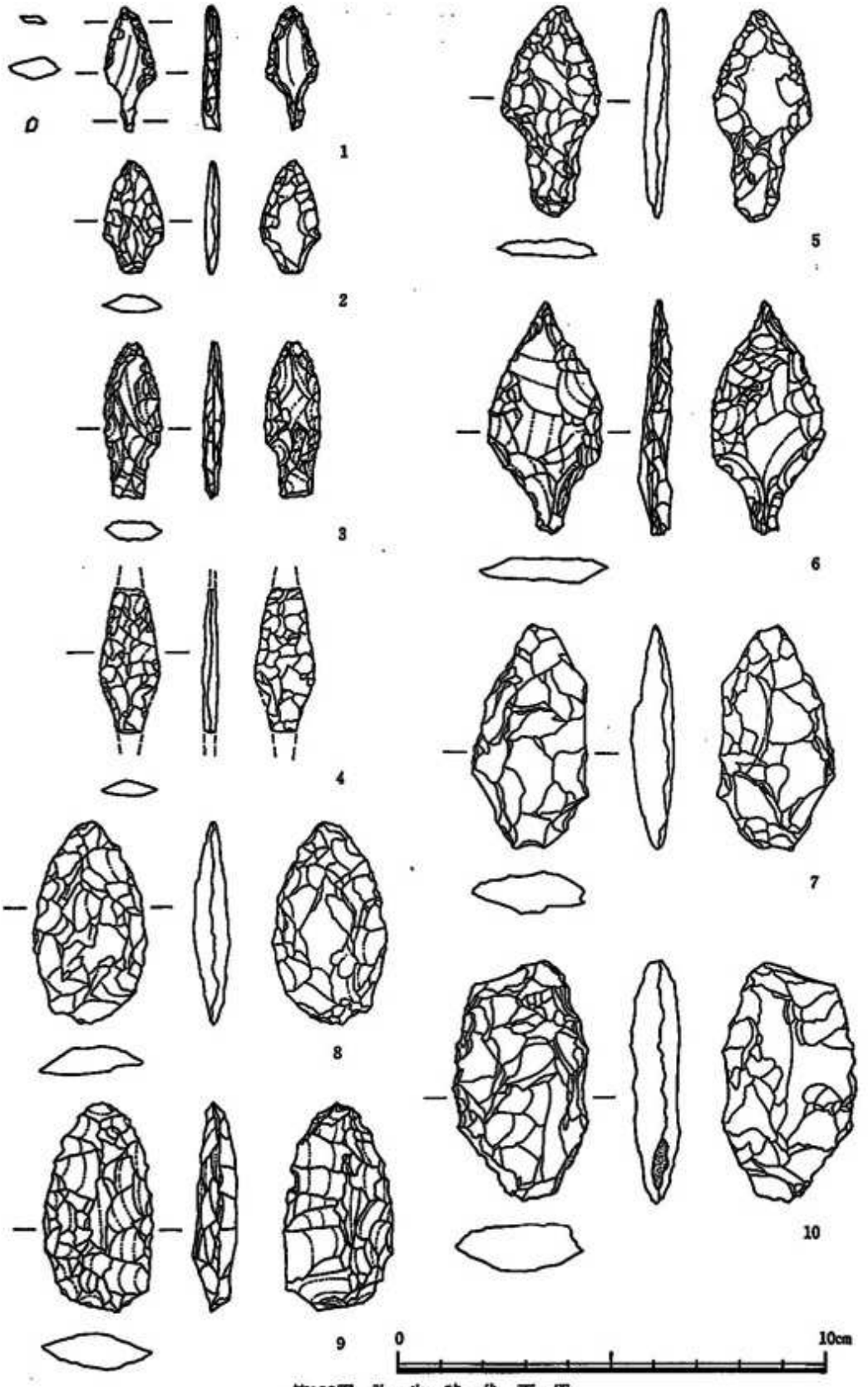
第136図 弥生時代石器



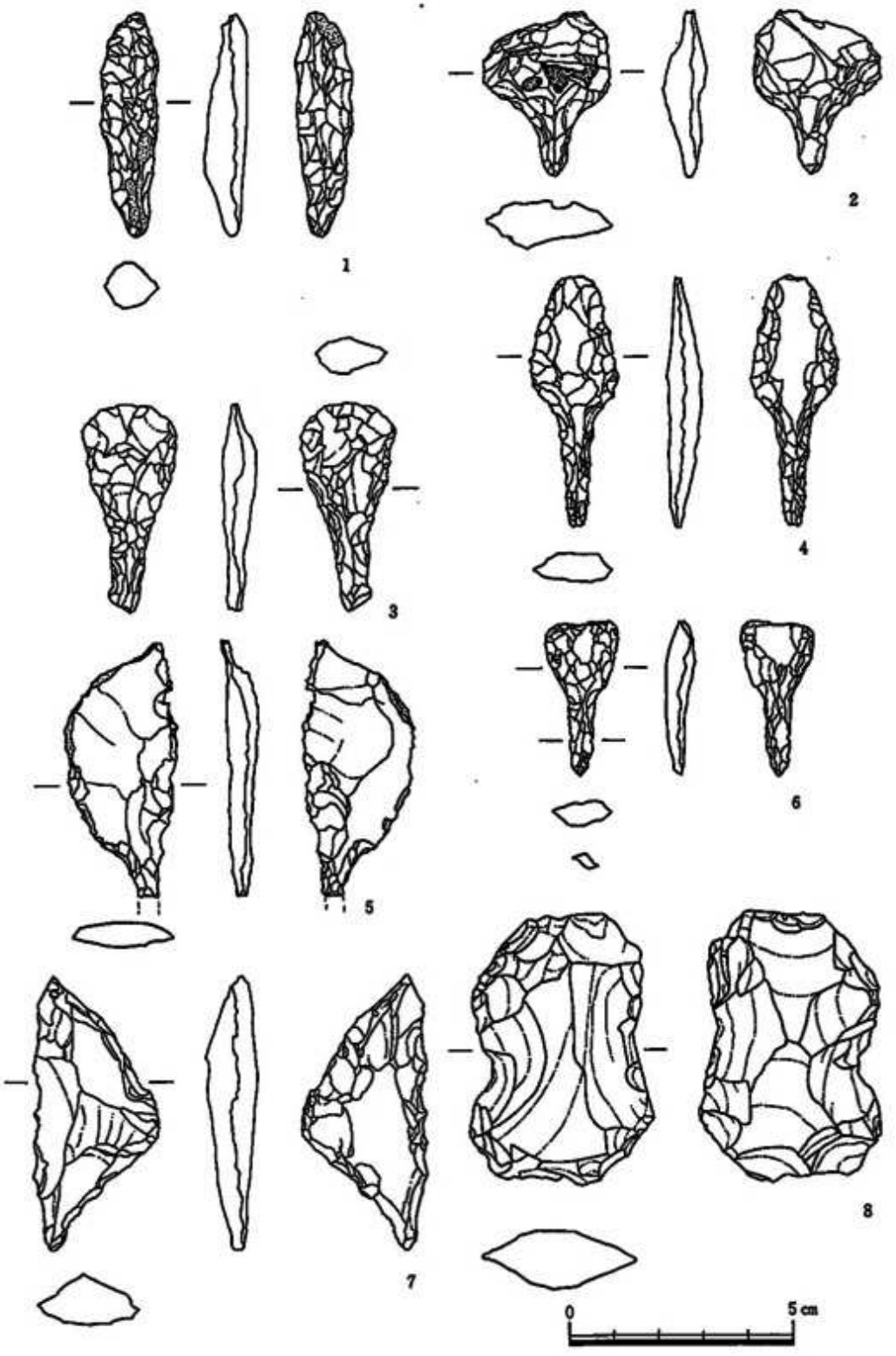
第137図 弥生時代石器



第138図 弥 生 時 代 石 器



第139図 弥 生 時 代 石 器



第140図 弥 生 時 代 石 器